

森南町遺跡発掘調査報告書

－第1・2次調査－

－神戸国際港都建設事業 森南第三地区震災復興土地区画整理事業に伴う－

2005

神戸市教育委員会

森南町遺跡発掘調査報告書

－第1・2次調査－

－神戸国際港都建設事業 森南第三地区震災復興土地区画整理事業に伴う－

2005

神戸市教育委員会

序

森南町遺跡は神戸市東灘区森南町2丁目を中心に広がる縄紋時代から江戸時代に及ぶ複合遺跡です。

今から約1800年前の弥生時代の終わりから古墳時代の初めころの水路と、多数の木杭を打ち込んで構築した堰が見つかり、当時の人々が土地を切り開き耕地として開発していった様子的一端を、この発掘調査で垣間見ることができました。

この遺跡は、当地区の震災復興土地区画整理事業に伴って初めて確認されたものです。あの忘れることのできない震災からちょうど10年となる時に、震災復興に伴う発掘調査の報告書を公刊できることは感慨深いものがあります。

この報告書が神戸の歴史を考える上で何らかの役に立つならば望外の喜びです。

平成17年3月

教育長 小山雄三

例言

1. 本書は平成14年から同15年にかけて、神戸市東灘区森南町2丁目において実施した、森南町遺跡第1・2次埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 当調査は森南第三地区震災復興土地区画整理事業に伴うもので、神戸市教育委員会が神戸市都市計画局からの委託を受けて実施した。また平成16年度には財団法人神戸市体育協会が当教育委員会の委託を受け整理作業を行った。
3. 発掘調査の組織は本文に記した。
4. 本書に示した方位・座標は国十方眼第V系座標で、標高は東京湾中等潮位（T、P）である。また遺構図に表す方位は座標北を示している。
5. 遺構の実測、写真撮影は黒田基正が行った。遺構・遺物の実測・トレースは基本的に黒田が行ったが、遺物番号25～51、261、278・279、315に関する実測と記述及びその他の木製品、262の鉄器の実測は中村大介によるものである。編集は黒田が行った。
6. 遺物写真は独立行政法人奈良文化財研究所牛嶋茂氏の指導のもと、西大寺フォト杉本和樹氏が撮影した。
7. 自然科学的分析については株式会社パレオ・ラボ、パリオ・サーヴェイ株式会社に委託した。
8. 本書で使用した地図は国土地理院発行の25,000分の1地形図「西宮」、神戸市発行の2,500分の1地形図「本山」を使用した。
9. 発掘調査に当たっては神戸市都市計画局の協力を得た。
10. 発掘調査で出土した遺物並びに図面・写真類は神戸市教育委員会が管理・保管している。

本文目次

第1章 はじめに

- 第1節 調査に至る経過と調査組織 1
- 第2節 遺跡の位置と歴史的環境 3

第2章 発掘調査の成果

- 第1節 調査地区の基本層序 9
- 第2節 縄紋時代 10
- 第3節 弥生時代から古墳時代 13
- 第4節 室町時代 49
- 第5節 江戸時代 72

第3章 自然科学的調査

- 第1節 森南町遺跡第1次調査出土の木材の樹種 85
- 第2節 森南町遺跡の花粉化石群集 99
- 第3節 森南町遺跡から出土した大型植物化石 104
- 第4節 森南町遺跡の珪藻化石群集 107
- 第5節 森南町遺跡第2次発掘調査の花粉分析 109
- 第6節 森南町遺跡第2次発掘調査出土木製品の樹種 113

第4章 考察

- 第1節 神戸市域（六甲山南麓地域）における弥生時代第V様式～布留式併行期の土器様相 119
- 第2節 森南町遺跡S D02出土土器の編年的位置 127

第5章 まとめ 144

本文目次

第1图	遺跡位置図第1図 遺跡位置図	3
第2图	周辺遺跡位置図	4
第3图	調査地位位置図	9
第4图	調査地区区割り図	10
第5图	縄紋時代～古墳時代初頭遺構平面図	11
第6图	縄紋時代自然流路平面図・調査区壁面上層断面図	12
第7图	縄紋土器・弥生土器実測図	13
第8图	S D01・02・弥生時代P i t 群遺構平面図	14
第9图	弥生土器出土状態平面図・断面図	14
第10图	S D01土器出土状態平面図・断面図	15
第11图	S D01出土土器実測図	16
第12图	弥生時代中期土器実測図	17
第13图	S D02 (I区中央部) 内堀検出状態平面図・立面図	18
第14图	S D02 (I区中央部) 内堀、北側杭列平面図・断面図	19
第15图	S D02 (I区中央部) 内堀、南側杭列平面図・断面図	20
第16图	S D02内堀、杭実測図 (1)	22
第17图	S D02内堀、杭実測図 (2)	23
第18图	S D02内堀、板材実測図	24
第19图	S D02 (III区西端) 内堀状遺構検出状態平面図・断面図	25
第20图	S D02内堀状遺構、板材・杭実測図	26
第21图	S D02 (II区) 上層断面図	27
第22图	S D02 (III区) 土層断面図	28
第23图	S D02 F層砂層出土土器実測図	29
第24图	S D02黑色粘砂層出土土器実測図 (1)	31
第25图	S D02黑色粘砂層出土土器実測図 (2)	32
第26图	S D02黑色粘砂層出土土器実測図 (3)	34
第27图	S D02黑色粘砂層出土土器実測図 (4)	35
第28图	S D02黑色粘砂層出土土器実測図 (5)	36
第29图	S D02黑色粘砂層出土土器実測図 (6)	38
第30图	S D02黑色粘砂層出土土器実測図 (7)	39
第31图	S D02黑色粘砂層出土土器実測図 (8)	41
第32图	S D02黑色粘砂層出土土器実測図 (9)	42
第33图	S D02上層砂層出土土器実測図 (1)	44
第34图	S D02上層砂層出土土器実測図 (2)	45

第35图	S K 01平面图·上層断面图	46
第36图	S K 01出土土器実測图	46
第37图	中世～近世遺構平面图	48
第38图	S B 01平面图·断面图	49
第39图	S E 01平面图·断面图	50
第40图	S E 02平面图·断面图	51
第41图	S E 02出土遺物実測图	52
第42图	S E 03平面图·断面图	54
第43图	S E 03掘形内出土鉄器実測图	55
第44图	S E 03出土遺物実測图	55
第45图	S E 03出土鉄製品実測图	56
第46图	S E 03出土石製品実測图	58
第47图	S E 03出土木製品実測图	59
第48图	S E 04平面图·断面图	60
第49图	S E 04出土曲物実測图	61
第50图	S X 01、S K 02平面图·断面图	61
第51图	S K 02集石除去後平面图、S X 01西辺部石組立面图	62
第52图	S X 01出土遺物実測图	63
第53图	S K 02出土土器実測图	63
第54图	S K 03平面图·断面图	64
第55图	S K 03出土軒平瓦実測图	64
第56图	S K 04、S K 10～12平面图、S K 04遺物出土状態平面图	65
第57图	S K 04出土遺物実測图	66
第58图	S K 05、S K 06平面图·土層断面图	67
第59图	S K 07出土遺物実測图	67
第60图	遺構外出土遺物実測图	68
第61图	S X 02平面图·石組立面图·上層断面图	72
第62图	S K 08平面图·断面图	73
第63图	S K 09平面图·断面图	73
第64图	S K 09出土瓦葺火舎実測图	73
第65图	S K 10平面图·土層断面图	74
第66图	S K 11平面图·土層断面图	74
第67图	S K 11出土桶実測图	74
第68图	S K 12平面图·土層断面图	74
第69图	S K 13平面图·断面图	75
第70图	S K 14平面图·土層断面图	75
第71图	S K 14出土遺物実測图	76

第72図	S K 15平面図・土層断面図	76
第73図	S K 16平面図・土層断面図	77
第74図	S K 17平面図・土層断面図	78
第75図	S K 18平面図・土層断面図	79
第76図	S K 19平面図・土層断面図	80
第77図	S K 19出土遺物実測図	80
第78図	S K 20平面図・土層断面図	81
第79図	S K 21平面図・土層断面図	81
第80図	S K 22平面図・土層断面図	82
第81図	遺構外出土銭貨拓影	82
第82図	出土木材切片の光学顕微鏡写真(1)	95
第83図	出土木材切片の光学顕微鏡写真(2)	96
第84図	出土木材切片の光学顕微鏡写真(3)	97
第85図	出土木材切片の光学顕微鏡写真(4)	98
第86図	S D 02(最下層)の花粉化石分布図	101
第87図	産出した花粉化石	102
第88図	産出した花粉化石	103
第89図	出土した大型植物化石	106
第90図	花粉化石群集の層位分布	110
第91図	花粉化石	112
第92図	出土木製品・木材組織光学顕微鏡写真	118
第93図	森北町遺跡・S B 03	127
第94図	高環型式分類図	131
第95図	弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年図(1)	133
第96図	弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年図(2)	134
第97図	弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年図(3)	135
第98図	弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年図(4)	136
第99図	弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年図(5)	137
第100図	弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年図(6)	138
第101図	弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年図(7)	139
第102図	弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年図(8)	140
第103図	弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年図(9)	141
第104図	弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年図(10)	142
第105図	他地域産・系土器図	143
第106図	主要遺跡分布図(1)	147
第107図	主要遺跡分布図(2)	148

表目次

表1	S D02出土杭分類表	24
表2	南北杭列の杭種構成	24
表3	森南町遺跡第1次調査の樹種同定リスト	90
表4	S D02出土杭材の樹種	93
表5	時代別・形状別にみた樹種	94
表6	S D02(最下層)の花粉化石産出一覧表	100
表7	大型植物化石一覧表	104
表8	珪藻化石産出表	108
表9	花粉分析結果	110
表10	樹種同定結果	113
表11	器種別の用材	116
表12	六甲山南麓地域における集落の動向	149
表13	遺物観察表	151~161

写真図版目次

図版1	縄紋時代自然流路(東から)、遺構ベース出土縄紋土器片(東から)
図版2	S D02、P i t群(東から)、S D01内弥生土器(東から)
図版3	I区S D02(東から)、II区S D02(東から)
図版4	III区S D02(東から)、III区S D02(西から)
図版5	I区S D02内堰(西から)、I区S D02内堰、板材(西から)
図版6	III区S D02内堰状遺構(東から)、III区S D02土器出土状態(南から)、III区S D02土器出土状態(北から)
図版7	I区北半中世~近世遺構面(西から)、I区南半検出遺構面(西から)
図版8	II~III区中世~近世遺構面(東から)、I区南半S D02・S K02等検出状態(東から)
図版9	I区S E01(北から)、III区S E02(東から)、III区S E03(東から)
図版10	III区S E04(南から)、III区S E04(東から)、I区S K02(東から)
図版11	II区中世~近世遺構面(西から)、IV区中世~近世遺構面(東から)
図版12	II区S K09(東から)、II区S K09(東から)、II区S K13(南から)、II区S K14(北から)
図版13	縄紋土器・弥生前期土器・S D01出土土器
図版14	S D02出土弥生中期土器・牛駒西麓産土器・S D02出土板材
図版15	S D02出土杭
図版16	S D02出土板材・杭・土器(下層砂層)
図版17	S D02出土土器(黒色粘砂層)

- 図版18 S D02出土土器 (黒色粘砂層)
図版19 S D02出土土器 (黒色粘砂層)
図版20 S D02出土土器 (黒色粘砂層)
図版21 S D02出土土器 (黒色粘砂層)
図版22 S D02出土土器 (黒色粘砂層) ・体部内面ヘラケズリ甕
図版23 S D02出土土器 (黒色粘砂層) ・体部内面ヘラケズリ甕
図版24 S D02出土土器 (黒色粘砂層)
図版25 S D02出土土器 (黒色粘砂層)
図版26 S D02・S K01出土土器
図版27 S E02出土遺物
図版28 S E02・S E03出土遺物
図版29 S E03出土瓦
図版30 S E03出土鉄鍋・壺先
図版31 S E03出土石製品・木製品
図版32 S E04出土曲物・S K02出土石臼
図版33 S K03・S K04・遺構外・S K09・S K11出土遺物
図版34 S K14・S K19・遺構外出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過と調査組織

調査に至る経過 この発掘調査は当該地に計画された土地区画整理事業に伴うもので、従来遺跡の有無が不明であったが、平成14年7月12日に試掘調査を実施した結果、遺跡の存在が初めて確認された。これを受け、神戸市都市計画局と協議を重ね、平成14年10月2日から同12月13日まで第1次発掘調査を教育委員会が、平成15年7月14日から同11月10日まで第2次発掘調査を(財)神戸市体育協会が行った。調査面積は計705㎡である。また、平成16年度には遺物整理作業と発掘調査報告書の作成を行った。

調査組織 発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導の下、下記の組織で実施した。

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古担当

檀上 重光 前神戸女子短期大学教授

工築 普通 ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
(平成14年度) 大阪府立狭山池博物館館長(平成14～16年度)

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局 平成14年度

教育長 西川 和機

社会教育部長 岩畦 法夫

文化財課長 桑原 泰豊

社会教育部主幹 宮本 郁夫(埋蔵文化財センター所長事務取り扱い)
渡辺 伸行

埋蔵文化財調査係長 丹治 康明

文化財課主査 丸山 潔 菅本 宏明 千種 浩

事務担当学芸員 内藤 俊哉

調査担当学芸員 黒田 恭正

遺物整理担当学芸員 谷 正俊(平成16年度)

保存科学担当学芸員 千種 浩(平成14・15年度)

中村 大介(平成14年度～同16年度)

(財)神戸市体育協会 平成15年度

会長 矢山 立郎

副会長 矢野栄一郎

(専務理事事務取扱)

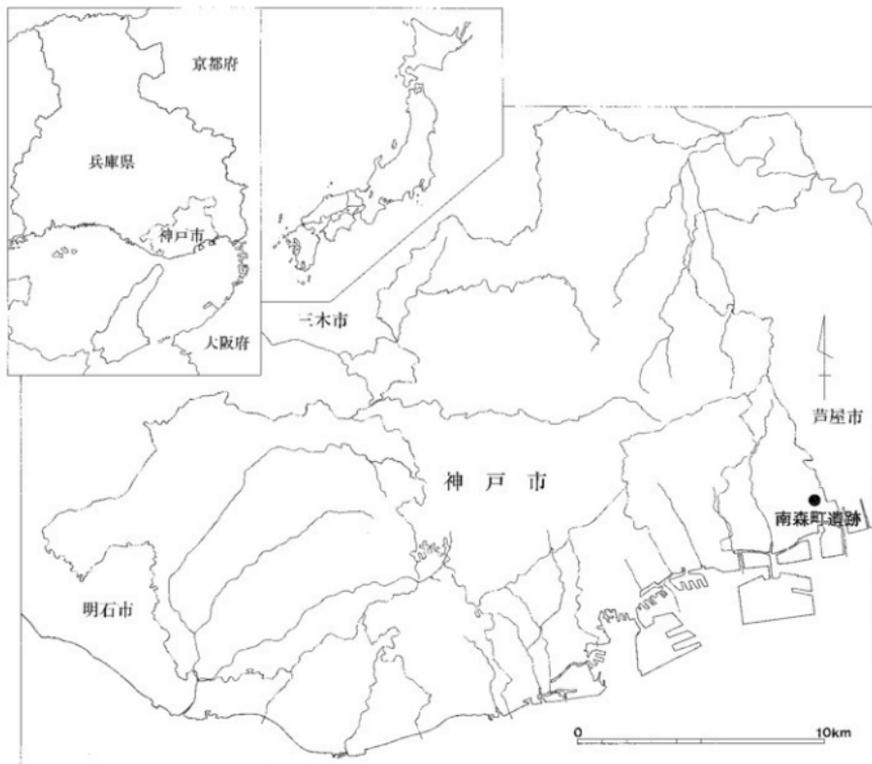
常務理事 野浪 建作

総務課長 谷川 博志

総務課主査(兼務) 菅本 宏明

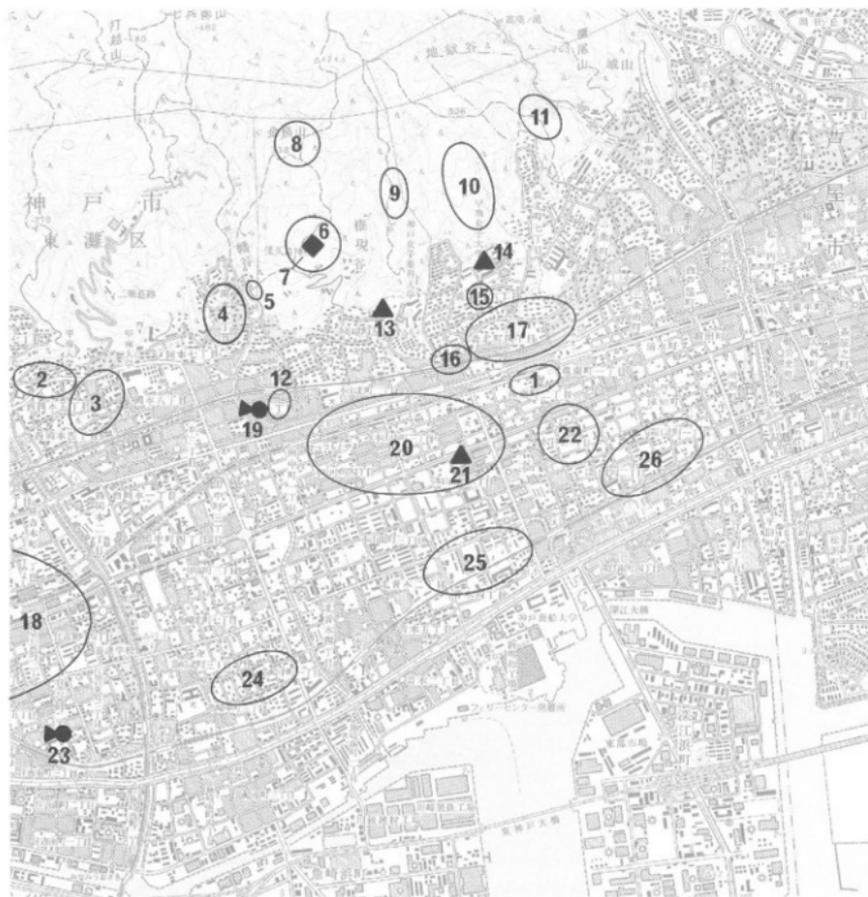
事務担当学芸員	中谷 正
調査担当学芸員	黒田 恭正
(財)神戸市体育協会	平成16年度
会長	矢田 立郎
副会長	矢野栄一郎
(専務理事事務取扱)	
常務理事	野浪 建作
総務課長	横関 勇
総務課主査(兼務)	菅本 宏明
調査担当学芸員	黒田 恭正

第2節 遺跡の位置と歴史的環境



第1図 遺跡位置図

森南町遺跡は、神戸市東灘区の東端部に近い森南町2丁目に所在する縄紋時代から江戸時代に及ぶ遺跡である。JR東海道本線の甲南山手駅の南西に位置し、古くから集落が営まれている地域である。遺跡は六甲山南麓に広がる扇状地上に立地しており、標高約13.5mである。調査区西端には南流する宮川があり、現状では西に向かって下がる地形を示している。遺跡の範囲については、遺構・遺物の状態から調査区の西端が遺跡の西端となる可能性も考えられる。しかし、調査区西端で検出した弥生時代中期の溝S D 01のすぐ西側が、後世に大きく削平されている状況が見られることから、遺跡の端は更に西へ伸びることも十分考えられる¹⁾。また、今回検出した庄内期の流路には堰が設けられており、これが南側に広がる耕地に水を供給する目的のものと見れば、南に遺跡が広がっていることは予測されるところである。



- | | | | |
|------------|-----------------|------------|------------|
| 1. 森南町遺跡 | 8. 金鳥山遺跡 | 15. 坂下山遺跡 | 22. 本庄町遺跡 |
| 2. 西岡本遺跡 | 9. 森奥遺跡 | 16. 出口遺跡 | 23. 東求女塚古墳 |
| 3. 岡本北遺跡 | 10. 東山遺跡 | 17. 森北町遺跡 | 24. 魚崎中町遺跡 |
| 4. 岡本梅林古墳群 | 11. 会下山遺跡 (芦屋市) | 18. 住吉宮町遺跡 | 25. 北青木遺跡 |
| 5. 八幡谷古墳 | 12. 木山北遺跡 | 19. ヘボソ塚古墳 | 26. 深江北町遺跡 |
| 6. 保久良神社遺跡 | 13. 生駒銅鐸 | 20. 本山遺跡 | |
| 7. 保久良神社副戈 | 14. 森銅鐸 | 21. 本山銅鐸 | |

S=1:25,000

第2図 周辺遺跡位置図

- 旧石器時代 周辺で最古の遺物は西岡本遺跡⁽⁷⁾で出土したナイフ形石器である。また当遺跡から北西方約5kmの丘陵上にある滝ノ奥遺跡⁽⁸⁾でも横割きのサスカイト剥片を利用したナイフ形石器が検出されている。
- 縄紋時代中 縄紋時代早期の遺跡では同じく西岡本遺跡で直径約2mの堅穴住居址が検出されている。また本山遺跡でも縄紋時代早期の土器が出土している⁽⁴⁾。
- 縄紋時代中・後期 本山遺跡、本庄町遺跡⁽⁵⁾は縄紋時代中期の遺跡で、船元I式以降の遺物が検出されている。また本庄町遺跡では後期初頭の貯蔵穴が調査されており、クスギ、アカガシ、シラカシ、イチイガシやスダジイなどの堅果類が検出されている⁽⁴⁾。
- 縄紋時代晩期～弥生時代前期 縄紋時代晩期には北青木、本山遺跡で土器片が出土しており、この2遺跡は次の弥生時代前期にも集落が営まれている。特に本山遺跡⁽⁷⁾では弥生時代前期の環濠集落として著名な兵庫区大瀬遺跡出土土器⁽⁶⁾よりも1段階古い土器が検出され、木製農具類も出土している。
- 弥生時代中期 本山遺跡は弥生時代中期に継続し同後半までの遺物が見られる。特に石器の未製品があり石器製作集落の性格も有していたことが判明している。また六甲山南麓の丘陵上に高地性集落が出現するのがこの中期で、金島山遺跡⁽⁹⁾、保久良神社遺跡⁽¹⁰⁾、坂下山遺跡⁽¹¹⁾などが知られている。この森南町遺跡の周辺は多くの青銅器を保有する特異な地域で外縁付紐式の森銅鐸⁽¹²⁾、扁平紐式の本山銅鐸⁽¹³⁾、生駒銅鐸⁽¹⁴⁾そして保久良神社遺跡からは大阪湾型銅戈が出土している⁽¹⁵⁾。当遺跡から北西方5kmには桜ヶ丘銅鐸・銅戈出土地⁽¹⁶⁾もありここが弥生時代中期における重要な地域であった事を伺わせる。
- 弥生時代後期～古墳時代 六甲山南麓地域全体に通じることはあるが、弥生時代後期になると集落の様相を把握することが困難となる。周辺地域では西岡本遺跡⁽⁷⁾、芦屋市会下山遺跡⁽¹⁷⁾でV様式前半の遺構・遺物が調査されているのみで、東山遺跡⁽¹⁸⁾もこの時期と思われるがトレンチ調査のみで実態が明らかではない。一方弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけては森北町遺跡⁽¹⁹⁾、深江北町遺跡⁽²⁰⁾、魚崎中町遺跡⁽²¹⁾、住吉宮町遺跡⁽²²⁾などの集落が出現し、発掘調査によって具体的な様相が明らかとなりつつある。住吉宮町遺跡では多角形住居址が、森北町遺跡では河内、山陰、山陽、東海系の土器や前漢鏡片が出土し、深江北町遺跡、魚崎中町遺跡では周溝墓が検出されている。
- ヘボン塚古墳と東求女塚古墳は共に前期の前方後円墳でいずれも前方を西に向けて築造されている。2墳とも古くに破壊を蒙り現在墳丘の一部を残すのみとなっている。
- ヘボン塚古墳⁽²⁴⁾は全長約60mで段築、葺石、埴輪があったとされる。ただ周濠の有無については明確ではない。内部主体は朱が附着した扁平な割石や礫石があったことから堅穴式石室と推定されている。1896年の宅地造成に伴って出土した遺物はキ風鏡、函文帯環状乳神獸鏡、三角縁唐草文帯二神二獸鏡、三角縁唐草文帯三神三獸鏡、斜縁二神二獸鏡、獸帯鏡の銅鏡各1面と石銅2、硬玉勾玉1、琥珀勾玉1、琥珀棗玉1、碧天管玉13、ガラス小玉120が知られており、その他鏡面に附着した鉄錯から鉄製品が副葬されていた事が推定されている。
- 東求女塚古墳⁽²⁵⁾は全長約80mで葺石、埴輪、周濠を備えている。内部主体は礫石の

存在から竪穴式石室と考えられている。1882年頃の国道建設時に後円部が破壊され、三角縁唐草文帯並列式四神四獣鏡、三角縁獸文帯三神三獸鏡、三角縁獸文帯四神四獣鏡、三角縁二神一虫三獸鏡、内行九花文鏡、絵文様帯神獸鏡の銅鏡計6面と車輪石1のほか、勾玉、刀剣類、下顎骨と棺材と推定されるヒノキの木片などが出土している。1904年には前方部が電車道建設で破壊され、多量の朱が付着した扁平な自然石があったとされるが、詳細については知ることができない。

住吉宮町遺跡では前方後円墳の坊々塚古墳、帆立貝式古墳の住吉東古墳の周辺に小方墳が群集する状況が明らかになりつつある。坊々塚古墳⁽⁹⁾は97年に後円部の一部が調査され、後円径35m、全長推定約57mの規模であったことが確認されている。住吉東古墳⁽¹⁰⁾は全長約23mで木棺直葬の主体部から鉄刀・鎌と滑石製有孔円蓋・白玉などが出土した。周辺に築造された小方墳群は一辺約10～20mの規模を有するものが多く、現在までに計約70基が確認されており、葺石、埴輪、段築を完備するものも存在している。5世紀中頃～6世紀中頃にかけて築造された古墳群である。

西岡本遺跡⁽¹¹⁾では前方後円墳の可能性のある古墳の一部が検出され、円筒埴輪・朝顔形埴輪や器材埴輪・人物埴輪や5世紀後半の須恵器が出土している。またこの遺跡では、直径10m弱の形象埴輪を持つ横穴式石室を主体部とする小円墳も計11基検出されている。6世紀初頭～7世紀初頭の古墳群である。このほか岡本梅林古墳群⁽¹²⁾や八幡谷古墳⁽¹³⁾などが知られている。いずれも古くに破壊を蒙ったが前者では剣拔式家形石棺が、後者では石片袖の横穴式石室から出土した須恵器、馬具などが知られている。

奈良～平安時代

奈良～平安時代の遺構・遺物は住吉宮町遺跡や深江北町遺跡で検出されており、住吉宮町遺跡⁽¹⁴⁾では奈良時代の掘立柱建物、深江北町遺跡⁽¹⁵⁾では海獣葡萄鏡や帯金具のほか、「駅」などの墨書がある須恵器など、山陽道の「葦屋駅」関係遺物が出土し注目される。出口遺跡⁽¹⁶⁾では黒色石製の石帯（廻方）が検出されている。

鎌倉時代以降

周辺地域で中近世の遺構・遺物が纏まって検出された遺跡は稀で、いまだその実態が明らかではないが、出口遺跡では龍泉窯系青磁碗や鉄刀を副葬した木棺墓が調査されている。

注

(1) 『本庄村史』P31図-12の微地形区分分類図を参照すれば、調査区西端から西へ約100mのところには古流路があり、ここまで遺跡が広がる可能性も考えられる。

田中眞吾「第1章大地の成り立ち」『本庄村史』地理編・民俗編 本庄村史編纂委員会 2004年7月31日

(2) 浅岡俊夫編『神戸市東灘区 西岡本遺跡』六甲山麓遺跡調査会 2001年3月31日

(3) 黒田恭正「滝ノ奥遺跡」『平成3年度 神戸市理蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994年3月

(4) 安田滋・藤井整「本山遺跡第20次調査」『平成8年度 神戸市理蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000年3月

(5) 中居さやか「本庄町遺跡第9次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2003年12月31日

(6) 別府洋二編『本庄町遺跡』兵庫県文化財調査報告第92冊 兵庫県教育委員会 1991年3月31日

最近の兵庫県下における縄紋遺跡の動向をまとめたもの下記に文献がある。

- 平田朋子「縄文遺跡の動向—遺跡立地からみた兵庫県の縄文遺跡」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』
関西縄文論集1 関西縄文文化研究会編 2003年12月6日
- (7) 安川滋「本山遺跡第17次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1998年3月
- (8) 前田佳久編『神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書』 神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社 1993年3月31日
- (9) 石野博信「神戸市金島山遺跡—保久良神社、銅戈出土地点の裏山」『古代学研究』第48号 古代学研究所 1967年6月1日
- (10) 樋口清之「攝津保久良神社遺跡の研究」験杉会紀要第四輯 国学院大学験杉会 1942年3月1日
- (11) 村川行弘・森岡秀人他「坂下山遺跡」『新修芦屋市史』資料編1 武蔵誠編 芦屋市役所 1976年3月26日
- (12) 村川行弘・三木文雄「神戸市東灘区本山町森字坂下町出土銅鐸(森銅鐸)」『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書』 兵庫県文化財調査報告第1冊 兵庫県教育委員会 1969年3月30日
- (13) 神戸市教育委員会「本山遺跡第12次調査の概要」 1991年3月31日
- (14) 村川行弘「神戸市東灘区本山町中野字牛駒出上の銅鐸」『考古学雑誌』第51巻第2号 日本考古学会 1965年10月25日
- (15) 保久良神社遺跡 (10)に同じ
三木文雄「大阪湾型銅戈について」『MUSEUM』第223号 東京国立博物館 1969年10月1日
- (16) 武蔵誠・村川行弘「神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書」 兵庫県教育委員会 前掲書
- (17) 西岡本遺跡 (2)に同じ
- (18) 村川行弘・石野博信「会下山遺跡」 兵庫県芦屋市教育委員会 1964年3月31日
- (19) 宮本郁雄「本山町東山遺跡」『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1987年3月31日
宮本郁雄「本山町東山遺跡—第3次調査—」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1988年3月31日
- (20) 丹治康明・須藤宏「森北町遺跡」『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1992年3月
- (21) 山下史朗他「神戸市東灘区深江北町遺跡 県営神戸深江団地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第54冊 兵庫県教育委員会 1988年3月31日
村上賢治他「神戸市東灘区深江北町遺跡(Ⅱ) 県公営住宅深江札幌岡地立替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第88冊 兵庫県教育委員会 1991年3月30日
- (22) 岩田明広「神戸市東灘区魚崎中町遺跡(第3次調査) 榊原氏所有共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査」 神戸市教育委員会 1997年3月31日
- (23) 丸山潔編「住吉町遺跡第11次調査」 神戸市教育委員会 1990年3月31日
渡辺界・高瀬一嘉「坊ヶ塚遺跡(住吉町遺跡群Ⅱ)」兵庫県文化財調査報告第81冊 兵庫県教育委員会 1990年3月31日
- (24) 吉井良秀「岡本村扁塚曾塚考」『考古学雑誌』第10巻第7号 考古学会 1920年3月5日
梅原末治「摂津武庫郡に於ける二二三の古式古墳(一)」『考古学雑誌』第12巻第12号 考古学会 1922年8月5日
梅原末治「武庫郡本山村マンバイのヘボン塚古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯 兵庫県 1925年5月

- 浅岡俊夫編「神戸市東灘区本山北遺跡（付「ヘボン塚古墳」図面について）」六甲山麓遺跡調査会
1995年3月31日
- (25) 奥村探古「摂津國武庫郡おとめ塚」『考古学会雑誌』第1編第6号 考古学会 1897年5月25日
福原潜次郎「摂津御田村の東乙女塚」『考古界』第3篇第9号 考古学会 1904年2月20日
梅原末治「武庫郡住吉町吳田の求女塚古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯 兵庫県
1925年5月
渡辺多伸「菟原ノ處女塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第4輯 兵庫県 1927年3月
福原潜次郎「求女塚と菟原郷土誌」『考古学雑誌』第30巻第10号 考古学会 1940年10月1日
- (26) 菅本宏明「坊ヶ塚古墳 試掘調査」『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 2000年3月
- (27) 丹治康明他「住吉宮町遺跡第9次調査」『昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1989年3月
- (28) 富山直人「西岡本遺跡 第3次調査」『平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会 1996年3月
- 浅岡俊夫編「神戸市東灘区 西岡本遺跡」前掲書
- (29) 佐藤勇太郎「塚穴堂報〇神戸近傍塚穴」『東京人類学会雑誌』第1巻第7号 東京人類学会 1886年9月23日
吉井良秀「摂津國武庫郡岡本村の小石棺に就いて」『考古学雑誌』第3巻第11号 考古学会 1913年7月5日
- (30) 紅野芳雄「大正五年四月二十五日、四月二十七日」『考古小録』 西宮史談会編 1940年4月25日 (31)
- (27) に同じ
- (32) 山下史朗他「神戸市東灘区深江北町遺跡 県営神戸深江岡地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告第54冊 兵庫県教育委員会 1988年3月31日
山本雅和編「深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書—葦原驛家関連遺跡の調査—」 神戸市教育委員会 2002年3月31日
- (33) 黒田恭正「出口遺跡 第6次発掘調査」『平成14年度 神戸市埋蔵文化財調査年報』 神戸市教育委員会 2005年3月

第2章 発掘調査の成果

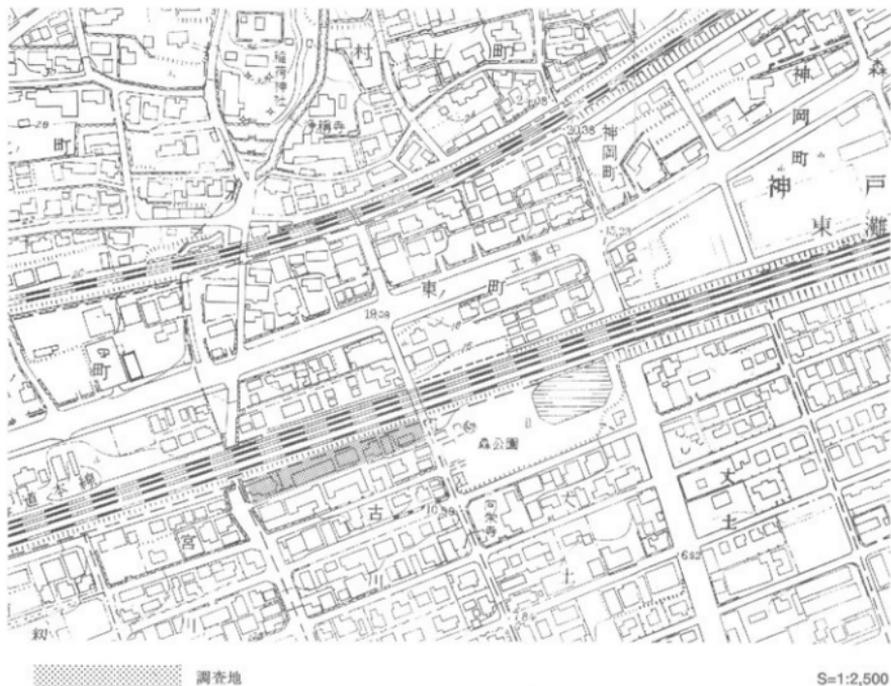
第1節 調査地区と基本層序

調査地区

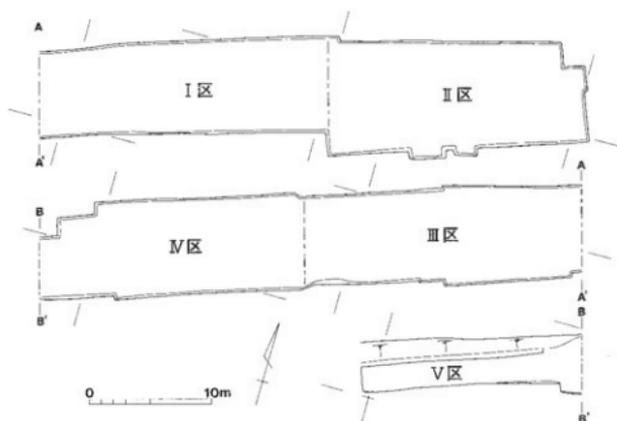
発掘調査は平成14年と同15年の2ヵ年に亘って行った。既存建物の撤去を待って実施したことや残土置き場等の関係もあって、調査地区を5分割して行うこととなった。それに伴い調査区の地区名も実施順につけ、遺構番号も調査年度ごとに付けたが当報告書では説明の都合上、調査区は東からⅠ～Ⅴ区とし、遺構についても調査年度を無視して通番を新たに付した。

基本層序

調査対象地区は現代の盛土直下に近・現代の耕土があり、それを除去すると遺構面に達する。遺物包含層はⅣ区の中央部で弥生時代中期と考えられる土層を確認したが、他の地区では全く検出されず、遺構面は削平を受けているものと想像される。遺構・遺物の主要な時期は弥生時代後期末から古墳時代初頭と、室町時代から江戸時代の2時期であるが検出面は基本的に1面である。



第3図 調査地位置図



第4図 調査地区割り図

第2節 縄紋時代

遺物の出土状態

IV区の遺構面のベース上に少量の縄紋土器の細片が含まれていることを、弥生時代以降のピットの断ち割り作業中に確認した。そのため縄紋時代の遺構の有無やその状態を確認するため、後世の攪乱土坑の壁面に縄紋土器の破片がやや多く見られたIV区のベース土の一部を、1m×1.7mの範囲で面的に掘り下げた。その結果、遺構面より約30cm下の標高約12.9m付近で縄紋土器片を検出した。40～50点の土器細片を得た事から、IV区の北辺と南辺に幅約1m、長さ約10m、深さ約50cmの東西方向トレンチを設定し調査を行ったが、遺物は全く出土しなかった。面的に調査した箇所についても個々の土器片はレベル差があり、かつ表面が摩滅していて遺構内にあるものとは考えられなかったため、弥生時代以降の遺構ベース上が形成される過程で含まれたものと判断した。また遺構ベース上から出土した土器に就いては大半が細片で時期等を明確にしえなかった。

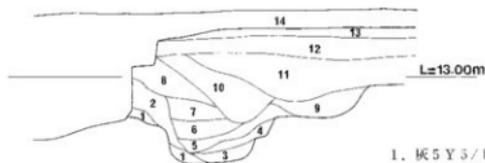
自然流路

V区東端で南北方向の自然流路が検出され、縄紋土器の細片が出土した(第6図)。現存の幅約1.2m、深さは約30cmであるが、調査区のこの部分は後世に大きく削平されているため、本来の規模は不明である。流路からの遺物は極めて少なく、所属時期を確定するには資料不足ではあるが、縄紋時代に遡る可能性もあるのでここで報告する。流路内の土器も摩滅が激しく、条痕がわずかに観察されるのみで図示できるものがなく、時期についても明らかではない。

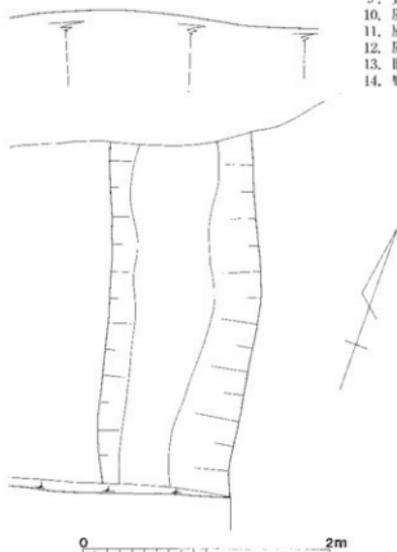
このほか後述するS D02からも弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器に混じって、縄紋時代後期・晩期の土器片がごく少量出土している(第7図一1～6)。



第5図 縄紋時代～古墳時代初頭遺構平面図

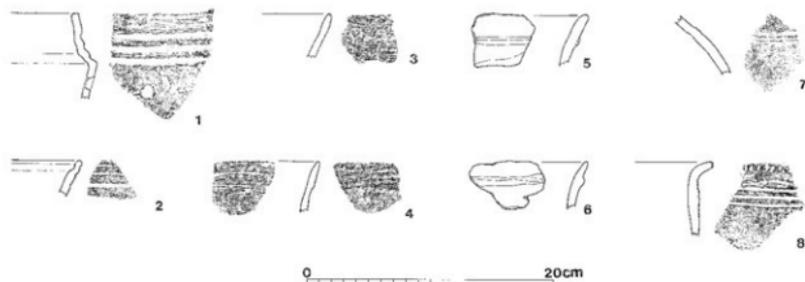


1. 灰5Y5/1粘土(地山崩壊土)
2. 灰白5Y7/1細砂
3. 明黄橙10Y R 6/6中砂と灰2.5Y 7/2中砂の互層
4. 灰5Y5/1粘土
5. 黄灰2.5Y 5/1中砂
6. 灰黄2.5Y 7/2砂礫
7. 灰白2.5Y 7/1中砂と暗黄褐10Y R 6/6中砂の互層
8. 灰白2.5Y 7/1～灰黄2.5Y 7/2中砂～粗砂
9. 黄灰2.5Y 5/1中砂～粗砂
10. 灰白2.5Y 8/1砂礫
11. 灰白2.5Y 7/1砂礫
12. 灰黄2.5Y 6/2中礫混じり細砂
13. 旧粘土
14. 盛土



第6図 縄紋時代自然流路平面図・調査区壁面土層断面図

1・2は浅鉢で1の口縁部外面には3条の凹線、体部に直径約1cmの補修孔が1箇所残存する。体部内面の下半はよこ方向のミガキであるが、上半はナデで仕上げている。胎土に角閃石を多く含む生駒西麓産と考えられる。2の外面には3条の凹線、内面に1条の凹線がある。内面はミガキと思われるが、外面の調整は明らかではない。1と同様の胎土で生駒西麓産と考えられる。1・2はいずれも縄紋時代後期末頃と思われる。3の外面は条痕、内面はナデである。4の内面と外面の上半肥厚面にはよこ方向の条痕がある。4も胎土に角閃石を含む生駒西麓産のものである。5・6は晩期の凸帯文土器で外面の口縁端部から下がった所に低い断面三角形の凸帯を1条巡らしている。残存部分に刻み目等は見られない。



第7図 縄紋土器・弥生土器実測図

第3節 弥生時代から古墳時代

遺構と遺物

今回の調査地点では、弥生時代後期末から古墳時代初頭（庄内期）の遺構・遺物が多量に出土し、この時期が遺跡の1つの中心と考えられるが、弥生時代に関してはこれ以外にも少量ながら弥生時代前期の土器片や中期の遺構・遺物が検出されている。

Ⅱ・Ⅲ区の庄内期の溝S D02からは弥生時代前期の土器片がごく少量出土している（第7図—7・8）。

またⅣ区の遺物包含層からは弥生時代前期の木の葉紋を持つ壺体部の小片が出土したが、極めて残存状態が悪く、図を提示することができない。

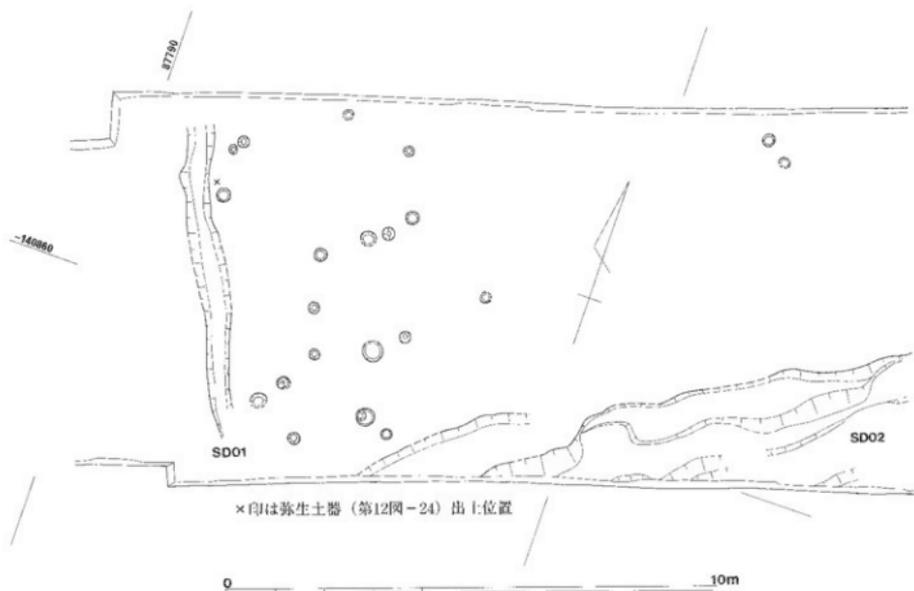
7は壺体部の小片で、1条の沈線を持つ削り出し内帯が1条見られる。外面はミガキで調整されるが、内面の調整は明らかではない。

8は甕で口縁端部にヘラによるキザミ目、体部外面にヘラ描きの直線文を3条巡らしている。弥生時代前期でも中頃のものと思われる。

Pit群

Ⅳ区中央部には厚さ約10cmの黒色の遺物包含層があり、それを除去すると20基弱のピットが検出された。ピット内からの遺物はなく時期を決定し難いが、中期と考えられる壺体部などが包含層から出土しており、弥生時代中期に属す可能性がある（第8図・第9図・第12図—24）。

ピットは直径約20cm～40cmで、深さは10cm程度のものが多い。調査区内で建物として纏まるものはない。ピットはS D01の東側で集中して検出されたが、S D01の西側は後世の削平を受けていることや、ピット群の東側は地形がやや高くなっており、包含層もほとんど残存していなかった状態から、この部分も後世の削平を蒙ったと考えられるため、本来は少なくとも東側にもう少し遺構が広がっていたものと推定される。

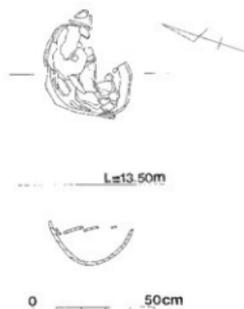


第8図 SD01・02、弥生時代P i t群遺構平面図

SD01

Ⅳ区中央部で検出された南北方向の溝状遺構である。南北約6m、幅は現状で約50～60cmを測るが、長頸壺形土器・無頸壺の出上状態からみて西辺は削平を受けているものと考えられ、1m前後が本来の幅と思われる。溝埋土は1層で褐灰色～灰黄褐色の細砂が堆積していた。

遺物は北半部に集中しており、南半部からはほとんど遺物が検出されなかった。土器は第11図-9の壺口縁部片が溝の底部近くから出土した以外は、ほぼ同一面で纏まって検出された。第11図-10の長頸壺形土器と12の無頸壺は11縁部を合わせるようにして、ほぼ南北方向に主軸をおいて出土した。11の壺は前2者から南東にやや離れてあったが、出土したレベルは異なる。

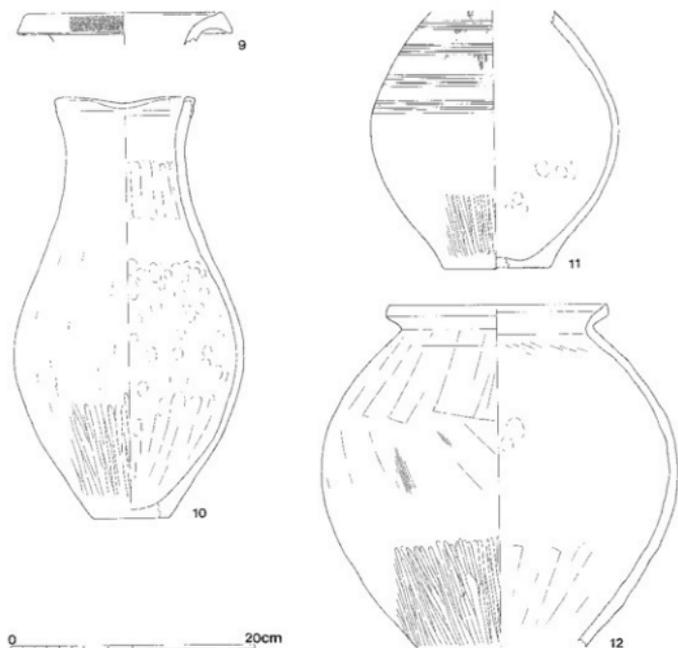


第9図 弥生土器出土状態平面図・断面図



第10図 SD01土器出土状態平面図・断面図

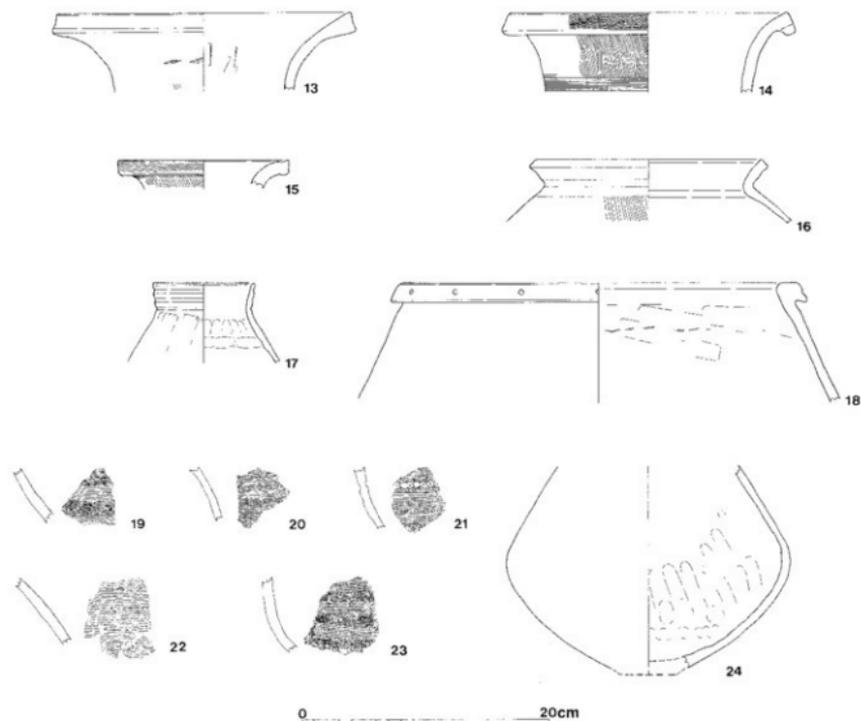
9は広口壺で口縁端部の拡張部外面には11本の櫛描き波状文、同じく広口壺の体部と思われる11の外面には6本の櫛描き直線文が4帯巡る。9の胎土には赤色酸化粒（所謂クサリレキ）が多く含まれ在地のものとはやや異なる。10は無文の長頸壺形土器で浅い片口が付く⁽¹⁾。体部下半にヘラミガキが見られるが、上半は板ナデによる調整と思われる。胴部内面には指オサエ・指ナデが見られる。12は播磨系の無須壺で無文のものである。体部外面の下半はヘラミガキ、上半は板ナデで調整されている。胎土は肉眼では在地のものと同変わらない。いずれも弥生時代中期の中頃と思われる。



第11図 SD01出土土器実測図

このほか、SD02からも弥生時代中期と考えられる上器が検出されている（第12-13～23）。13～16・19～23はI区のSD02から、17・18はⅢ区のSD02から出土した。24はⅣ区の遺物包含層から出土したものである。13～15は広口壺で13は口縁端部を上下に肥厚するが、端部外面はヨコナデを施したまま無文としている。頸部外面に板の小口の圧痕が見られる。14は口縁端部を下方に拡張し外面に11本の櫛描き波状文を、頸部外面には13本の櫛描き直線文を施文している。15の口縁部には4本の櫛描き波状文がある。16は堯乃至12と同様の播磨系の無須壺と思われるが、体部下半を欠くため断定できない。ただ、口縁端部の形状は両者でやや異なっている。17はSD02の下層砂層出土のものだが、庄内期のものとやや胎土が異なるため、この時期のものとしたが断定はできない。口縁部外面に3条の凹線が見られる小型の壺である。18は胎土に角閃石・雲母を多量に含む生駒西麓産の無須壺である。口径40cm弱の大型のものである。19～23は壺体部の折影で櫛描き直線文・波状文・流水文や竹管文などが見られる。17を除けばいずれも弥生時代中期の中頃のものと考えられる。

24は壺の体部で、外面は無文である。内面に指ナデの痕跡が見られる。



第12図 弥生時代中期土器実測図

S D02

調査地のI区東端からIV区まで東西方向に幅約3mの溝状遺構が検出された。溝は蛇行しており中央部と東西両端が調査区外となるが、検出長は約76mである。深さは最も深いところで約1mを測るが、浅い箇所では約10cmを残すのみである。S D02内には水流・水量を制御するための堰が設けられていることから、水の流れがあった事は確実でおそらく南方に広がる耕地への導水のために掘削されたものと考えられる。溝東端の標高が約13.40m、西端でのそれが約12.30mで約1mの比高差があり、水は東から西に緩やかに流下していたものと考えられる。

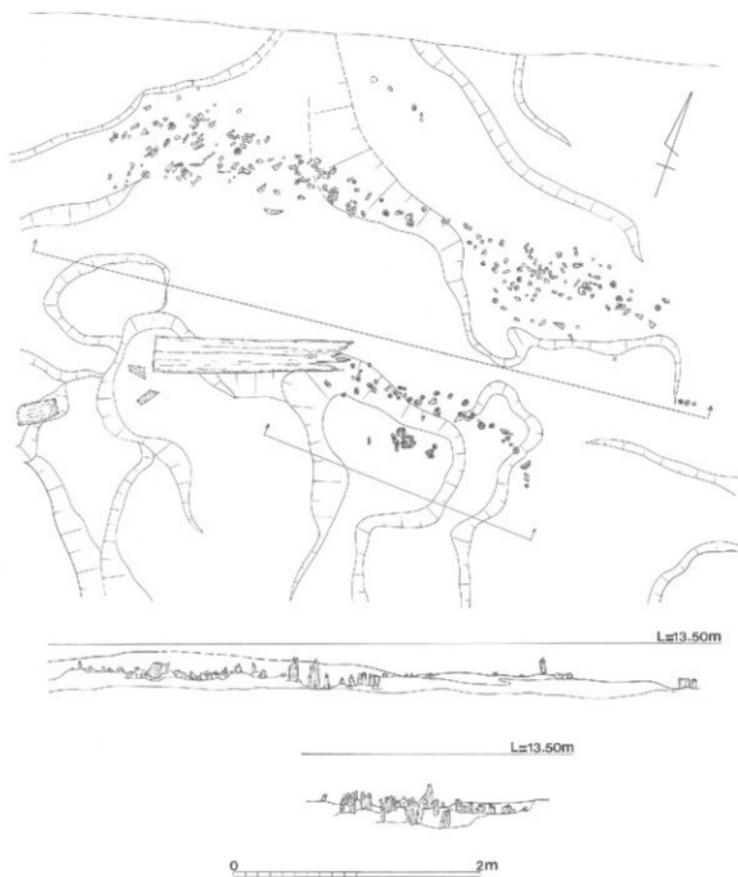
堰遺構

I区中央部では東西方向と南北方向の2条の溝が交差した状態で検出されている。南北方向の溝の北端と南端での高低差は約55cmである。堰はこの交差点にあり、東西方向の杭列が南北2列に構築されていた(第5図、第13~15図)。

北側杭列は東西約5m、最大幅70cmで、南側杭列は東西約1.9m、幅50cm~60cmである。南側杭列が北側杭列に比較しやや南に振れるが両者は約1mの間隔を置いて、ほぼ

平行して設置されている。杭列の設置面は溝底が南に下がることから、最大比高差約40cmを測る。

溝底面から上に出ていた部分の杭の残存状態は良好とは言えず、20cm以下が大半で、地中部分のみを残すものが多かった。このため、横材等の有無など堰の具体的な上部構造は不明である。南側杭列の西で検出した長さ約1.7m、幅約40cm、厚さ約3cmの板材も杭上面で出土しており、杭列との構造面での有機的関連は不明である。



第13図 SD02 (I区中央部) 内堰検出状態平面図・立面図

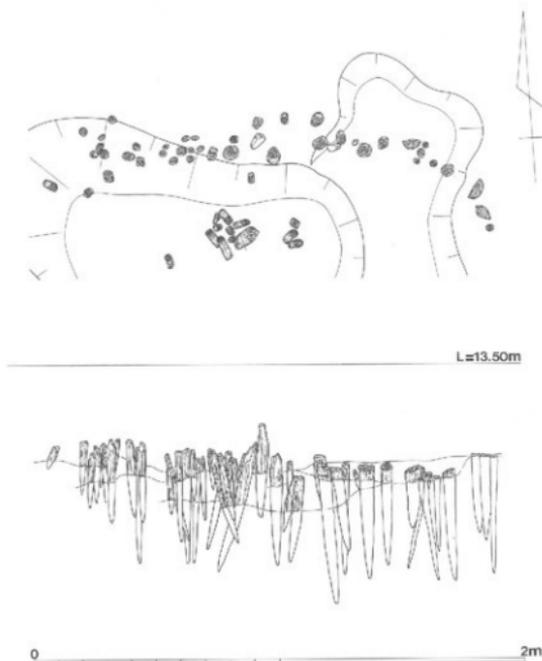


L=13.50m



0 2m

第14图 SD02 (I区中央部) 内壕、北侧抗列平面图·断面图



第15図 SD02（I区中央部）内堰、南側杭列平面図・断面図

堰遺構出土木製品 第1次調査において出土し、神戸市埋蔵文化財センターに搬入されたSD02内堰遺構の木製遺物は、杭が88点、板材が2点ある。

杭の出土地点は、調査区全体にわたって検出されたSD02の東西方向と南北方向の溝の交点にあたる。杭列は東西溝の北岸と南岸に、南北溝の流れ込み、流れ出しを遮るよう検出された。これに使用された杭は北側が約225本、南側が約60本である。また南側杭列の西側には現存長約170cm、幅約38cm、厚さ約3cmを測るヒノキ製の柵目板（第18図-46、P93-8965）が長辺を東西方向に、平面を水平にして出土している。更にその西約80cmの地点には、現存長約34cm、幅約20cm、厚さ2cmを測るアカガシ亜属製の柵目板（第18図-45、P93-8966）が出土している。

杭列を構成する杭は、その形状から大きく4形式に分類できる(第16・17図)。

A類…適度な太さの丸太を使用した丸杭

A1類…樹皮を残したままのもの(25~28)

A2類…樹皮を剥いだもの(29~32)

A3類…樹皮を剥ぎ、表面を工具で調整したもの(33、34)

B類…太い丸太材を放射方向でみかん割りした割杭(35~39)

C類…厚みに対して幅広の割杭で、平坦面を意識して成形した矢板状の杭(40~43)

D類…身部全面に加工を施した角杭である(44)。

各形式の杭が南北杭列においてどのように使用されたかを表2に示した。北杭列ではA類(20%)に対し、B・C・D類(計80%)の使用、特にB・C類(計70%)が目立つ。一方南杭列では、A類の使用が顕著(計80%)である。これは北列には製材された杭、南列には丸杭が優先されたことを表している。

杭に使われた樹種については第3章第1節に詳しいので割愛するが、杭の形式によって樹種を選択していた形跡はあまり見られないとの分析結果である。それでは南北杭列に使用された杭形式の違いは何を反映しているのであろうか。まず考えられるのは杭列が持つ機能的な違いである。北杭列には割杭が多く、特に西半部分ではB類が多い中で、幅広矢板状のC類杭が目立つ。特に打ち込み方が、南への流れに対し、平面を正対するように設置する傾向にある。これはより効果的に水流をコントロールするための配置であったと考えられよう。北杭列は上流にあるので、水流をコントロールする機能をより持たされていたのかも知れない。

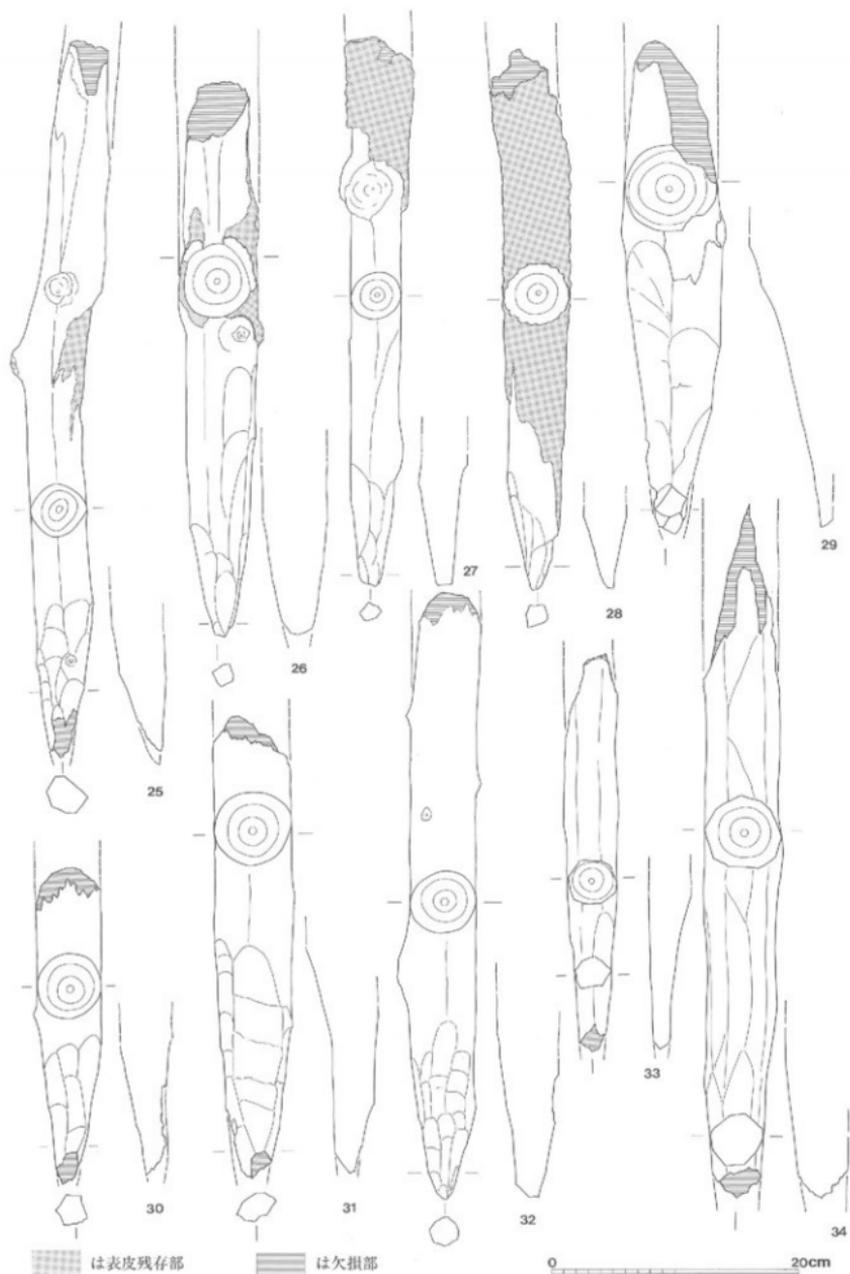
時間的な差異はなかったものであろうか。上流からは水だけでなく土砂・流木・転石等々、様々なものが流れてきたのであろうから、北杭列の方が補修の頻度・必要性が高かったと考えられる。南杭列はほとんどが丸杭である一方、北杭列は製材杭が多い中で、丸杭も使用されている。これは丸杭が初期の構築材であり、補修に製材杭が使用された可能性が想像されよう。

堰状遺構

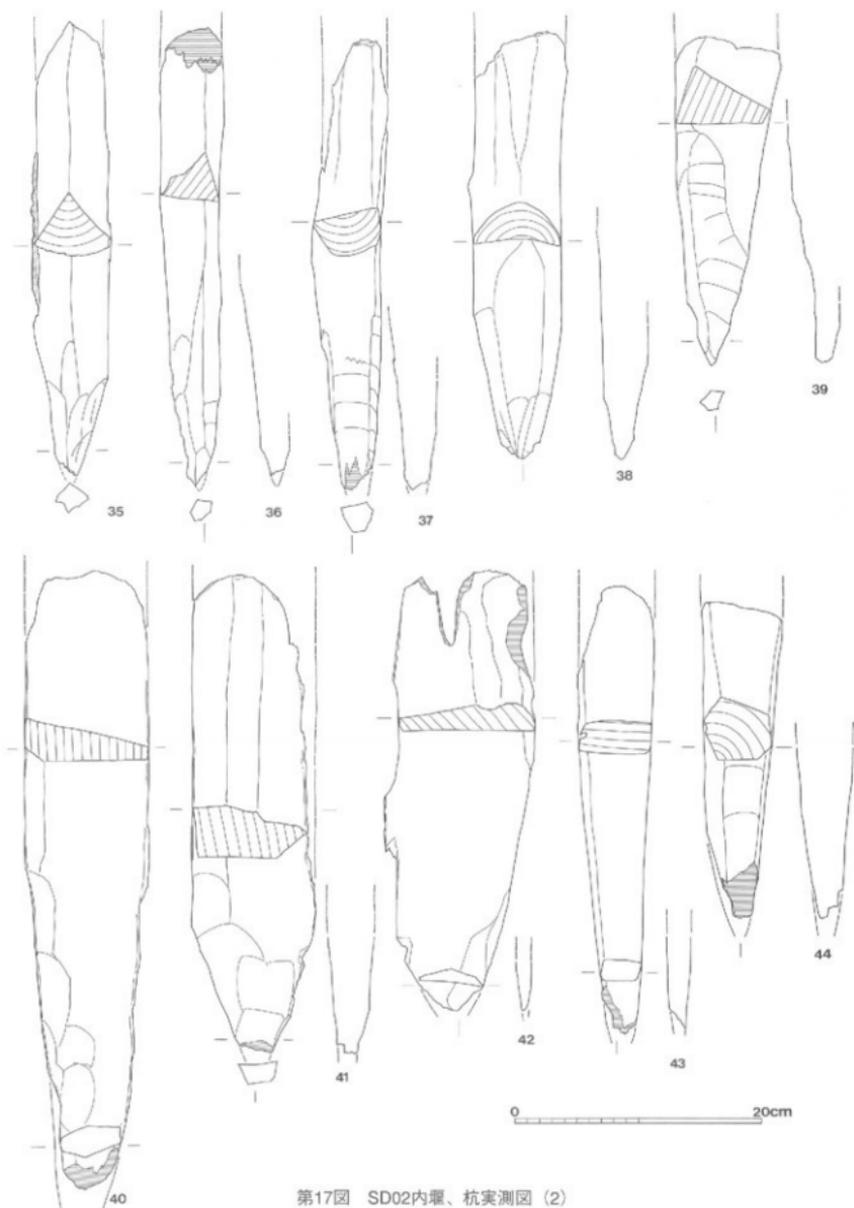
次に板材であるが、杭の上面から出土しており一見すると、杭上に渡された木道か何かの堰構築材のように見受けられる。ただし堰の構造体本体が削平、流失しているため、この板材が原位置にあるものかは判断が困難である。

Ⅲ区西端付近には2条の溝が合流する箇所があり、その付近の溝底で厚さ2.2cm、幅8cm、長さ1.3mの板材が水路を横切るような状態で出土し、周辺で3本の杭が検出された。これもⅠ区で検出した堰と同様、水流調整のために敷設されたものと考えられる(第5図、第19図、第20図—47~51)。

またここから北東へ約6m離れたところから杭が1本検出されているが(第20図—48)、溝埋土の下層内で杭下端が検出された事からみて、Ⅰ区やⅢ区で出土したものはやや時間的に降る可能性がある。



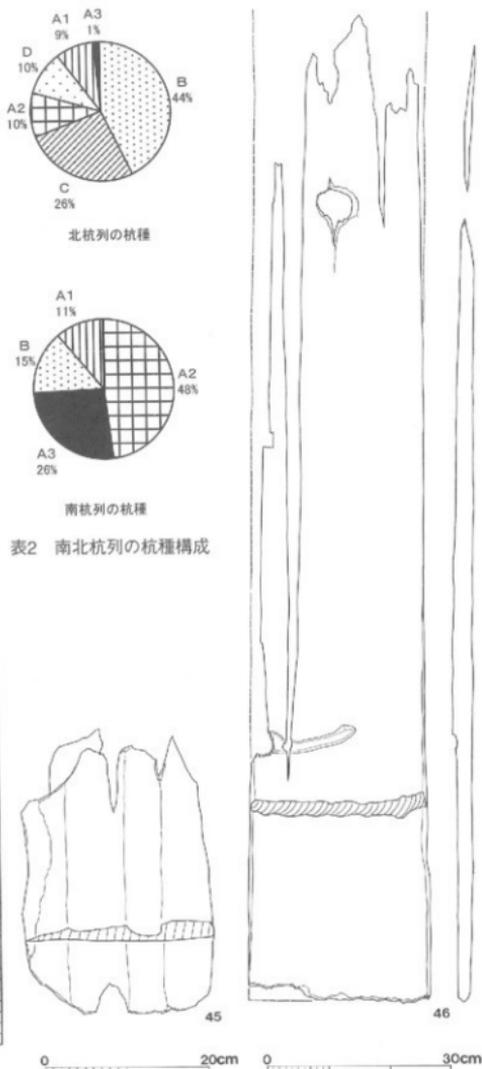
第16図 SD02内塚、杭実測図(1)



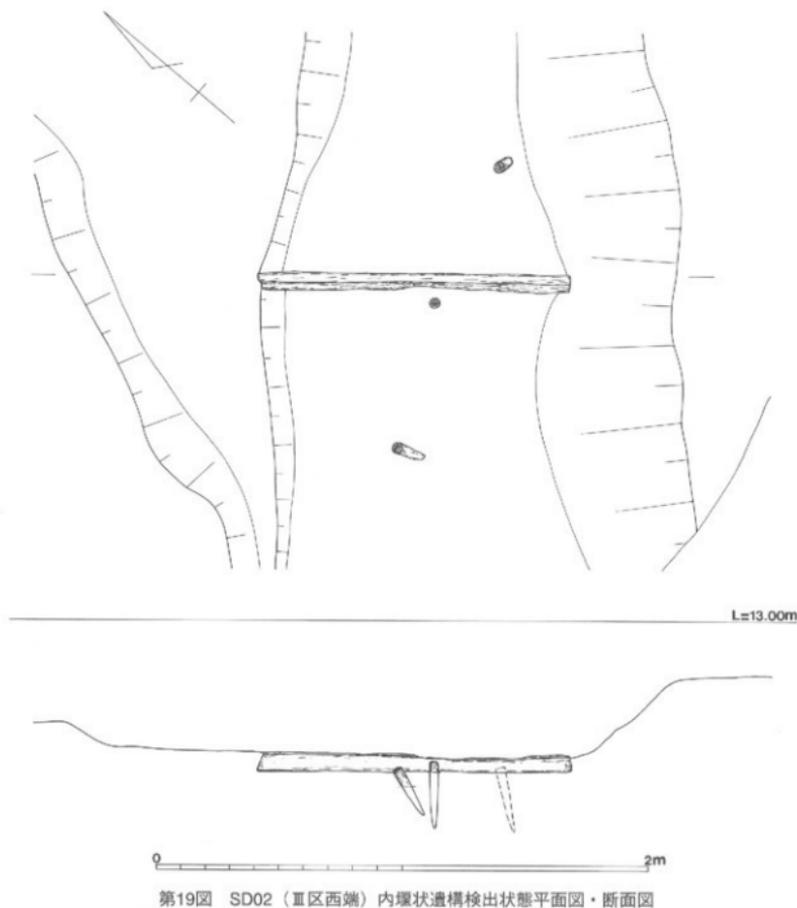
第17图 SD02内堰、杭实测图(2)

番号	分類	出土層	横径(φ)	長さ	産地	標本番号
8868	B	18.5	7.1	3.3	クヌギ	
8869	A.1	19	5	4.2	クヌギ	
8870	B	26.5	5.4	3.2	クヌギ	
8871	A	45	5.2	4.3	クヌギ	25
8872	A	11.4	4.5	3.1	クヌギ	
8873	A.3	34.5	4.9	4.8	クヌギ	
8874	A.3	24	3.8	3.5	クヌギ	
8875	A	27	4.8	4.4	クヌギ	
8876	A.1	59	5.3	5.9	クヌギ	34
8877	B	35.2	7.3	3.7	クヌギ	35
8878	A.3	39.7	4.3	3.4	クヌギ	33
8879	D	17	4.9	2.8	クヌギ	
8880	C	14.4	5.5	5.1	ツブクサ	
8881	A.3	11.8	4.8	4.3	クヌギ	
8882	A.3	30.8	4.4	3.8	クヌギ	
8883	D	25.0	3.5	5.1	ツブクサ	44
8884	B	30	3.6	3.4	クヌギ	
8885	A.3	42.0	4.6	4.1	クヌギ	
8886	A.2	20	3.5	-	クヌギ	
8887	A.3	42.8	3.8	-	クヌギ	
8888	C	22	3.2	4.5	ツバネ	
8889	B	48.2	4.6	4	クヌギ	
8890	B	47	3.8	4.1	クヌギ	
8891	B	40.3	3.8	4.8	ヒノキ	
8892	B	19	5.4	3.5	クヌギ	
8893	D	32.4	7.2	2.4	クヌギ	
8894	D	25.4	4.8	3.2	クヌギ	
8895	B	19	5.5	3.4	クヌギ	
8896	B	28	5.4	3.4	クヌギ	
8897	B	25	4.6	4.1	クヌギ	
8898	B	25.8	4.9	4	クヌギ	
8899	B	32.8	8	4.9	クヌギ	
8900	B	49	7.7	6.3	クヌギ	
8901	C	28.2	6.7	3.8	ツブクサ	
8902	A.1	45.7	6.4	-	クヌギ	26
8903	C	28	7.6	2.7	クヌギ	
8904	C	21	5.7	1.5	ツブクサ	
8905	C	20.2	6.2	1.8	ツブクサ	
8906	B	47.4	7.6	4	ヒノキ	
8907	A.2	18	4	3.4	ツバネ	37
8908	A.2	47.0	3.6	3.5	クヌギ	
8909	A.2	29	3.2	3	クヌギ	
8910	A.2	20.1	5.6	3	クヌギ	
8911	B	39.4	6.0	3.5	ツバネ	
8912	B	33.4	7.5	4.1	ヒノキ	
8913	A.2	21.4	4.8	4.6	ツバネ	
8914	A.2	32.5	4.3	3.6	クヌギ	
8915	A.2	17	5.2	4.2	クヌギ	
8916	A.2	23	3.4	3.4	クヌギ	
8917	C	20.3	7.5	3.4	クヌギ	
8918	A.2	19	8	4.6	ツバネ	
8919	C	27.6	7.8	2.3	クヌギ	
8920	B	19	3.2	2.4	クヌギ	
8921	D	13.5	4.6	3.3	クヌギ	
8922	C	17.2	6	3.1	クヌギ	
8923	B	37	6.6	6.2	ヒノキ	
8924	A.2	24.9	3.6	3	クヌギ	
8925	A.1	58.8	4.6	4.2	クヌギ	29
8926	A.2	34	3.9	3.3	クヌギ	
8927	A.1	45.2	6.4	3.7	クヌギ	27
8928	B	29.2	6.6	3.3	ツバネ	
8929	B	29.2	6	4.4	ツバネ	
8930	A.2	25.6	6.2	-	クヌギ	30
8931	B	24.8	7.7	3.4	クヌギ	
8932	D	36.9	3.4	6.2	クヌギ	43
8933	A.2	20.9	4.6	4.5	クヌギ	
8934	C	35	11.6	3.2	クヌギ	40
8935	C	39	10	4.2	ツブクサ	41
8936	C	22.4	6.9	2.7	クヌギ	
8937	A.2	49.4	6.4	5	クヌギ	32
8938	B	26	9	3.1	クヌギ	
8939	C	44.3	9	3.1	ツバネ	
8940	C	56.2	10	3	クヌギ	46
8941	C	17.4	6.6	6.2	クヌギ	
8942	B	53.9	2.4	3.7	クヌギ	
8943	A.1	33.7	4.6	-	クヌギ	
8944	D	37.8	5.2	4	ツバネ	56
8945	C	25	10.3	2.9	クヌギ	
8946	B	23.6	8.2	5.3	クヌギ	
8947	B	30.6	6.6	2.5	クヌギ	
8948	B	37.3	6.6	4.2	クヌギ	36
8949	B	27.3	4.4	4.2	ヒノキ	
8950	A.1	46.7	8.4	7.1	ツバネ	29
8951	A.2	36.5	3.6	-	クヌギ	
8952	C	30.4	9	3.1	クヌギ	
8953	D	24.4	4.4	4.4	クヌギ	
8954	A.1	47.6	6	4.8	クヌギ	
8955	A.2	37.7	6.2	6	ツバネ	31
8956	A.1	20	4.6	4	クヌギ	
8957	B	27.2	6	4.6	クヌギ	39
8958	A.3	21.4	4.3	3.7	クヌギ	
8959	A.2	39.4	5.2	5	ツバネ	
8960	B	43.8	4.6	4.6	クヌギ	
8961	D	45.2	4.6	5.4	クヌギ	
8962	D	13.8	6.0	2.8	ヒノキ	

表1 SD02出土杭分類表



第18図 SD02内堀、板材実測図



環状遺構出土木製品 ここから出土した4本の杭は全て丸杭であった。47は水路を横切るような状態で出土したモミ属の柁日取りの材で、表面調整は摩滅しており判然としなない。

杭(48)は板材の上流約6mで検出された丸杭で先端部の約13cmが残存している。太さは2.5cm、材にはアカマツが使用されている。先端から約6.5cmを切削加工している。

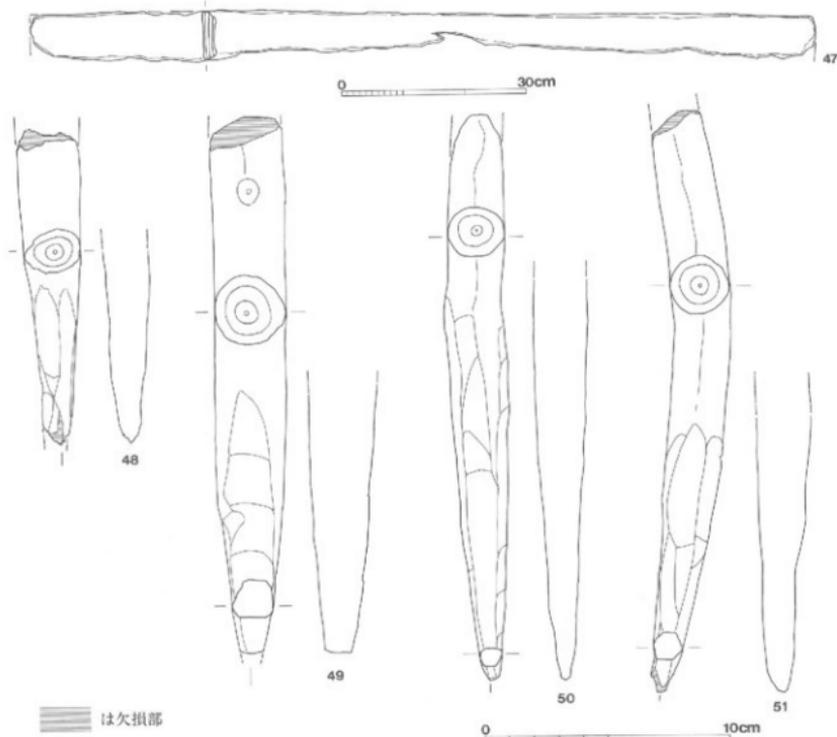
杭(49)は板材の上流0.5cmの地点に打ち込まれていた。樹皮を剥いだ丸杭で、先端部約22cmが残存している。太さは2.8cm、材にはサクラ属が使用されている。先端が少々欠損するが、約10.5cmを加工している。

杭 (50) は板材下流側に接近して打設されていた。樹皮を剥いだ丸杭の先端部の約23cmが残存している。太さは約2.5cm、材にはサクラ属が使用されている。先端から約16cmを切削している。

杭 (51) は板材の下流約70cmの地点に打ち込まれていた。樹皮を剥いだ丸杭で、先端部の約23.7cmが残存している。太さは約2.5cm、材にはエノキ属が使用されている。先端から約11cmを切削加工している。これらの杭先には、エッジの立った加工痕が認められ、金属性工具によって加工されたと考えられる。

基本土層

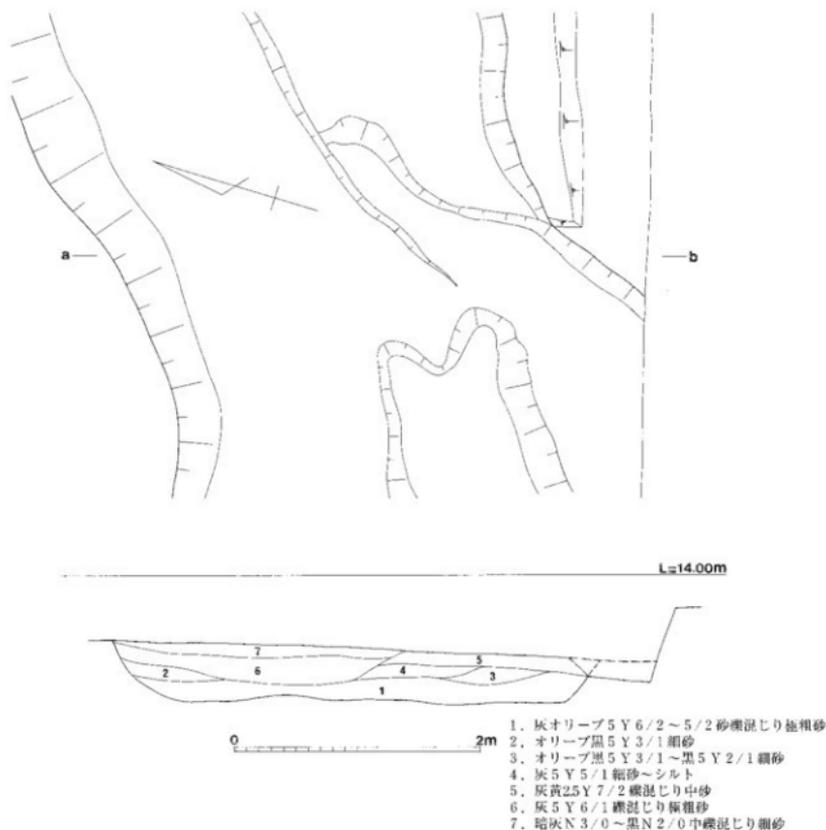
SD02の埋土は基本的に3層に大別される。上から上層砂層、黑色粘砂層、下層砂層(それぞれ第22図の土層4、3および1・2に当たる)で、遺物の大半は約30cmの厚さを持つ中層の黑色粘砂層から出土した。土層の堆積はⅢ区中央付近では良好な状況を留めていたが、Ⅲ区西端の堰状遺構付近や東端部およびⅢ区以外の地区では土層堆積に乱れが見られ、単純に出土遺物を3分割できる状況ではなかった。弥生時代後期末から古墳時代初頭(庄内期)の遺物のほとんどはこのⅢ区から出土している。ごく少量の縄紋



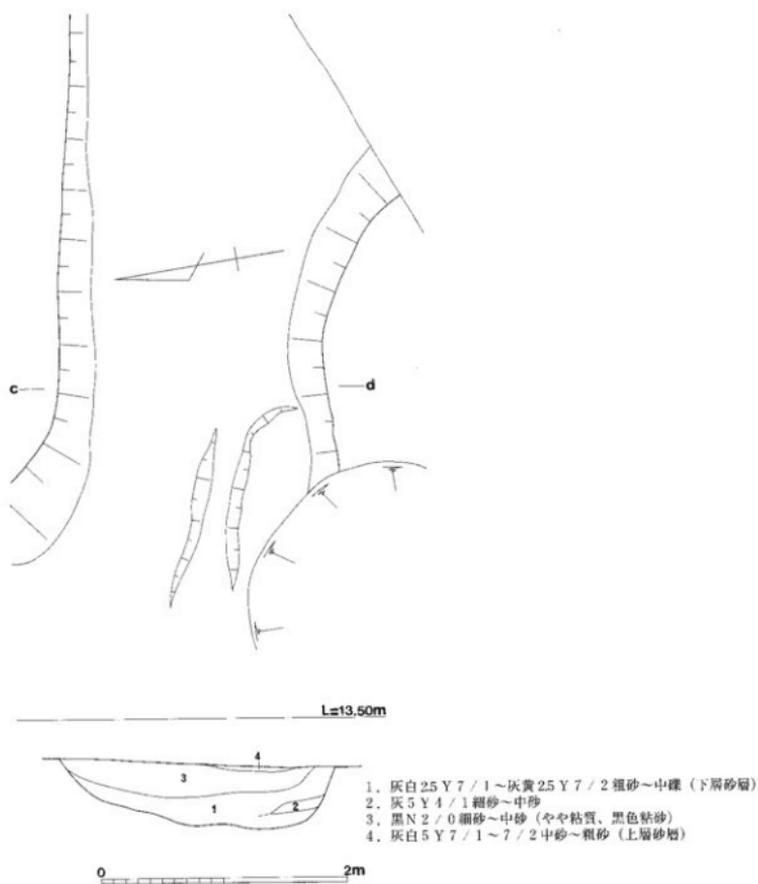
第20図 SD02内堰状遺構、板材・杭実測図

土器、弥生前期・中期土器がこれに混ざる。

SD02からは28ℓコンテナで50箱近くの土器が出土している。そのうち良好な土層の堆積状況が見られたⅢ区出土のものを中心に以下報告する。土器は相接する2層間で接合したのものもあるが(大部分の破片が黒色粘砂で少量の下層、上層砂層出土土器片と接合した例もある)、それは各上層が接する面での両遺物の自然的混入、または遺物取上げ時における人為的混乱と理解し、破片の大半が帰属する土層のものとした。1点のみ上層砂層と下層砂層間で接合した小型器台の受部があり(第34図-237)、两层から各1片出土したものが接合した事もあってその帰属土層を確定しがたいが、ここではより新しいものと仮定して上層砂層出土のものとした。同一個体の土器の破片が複数土層から出土しているものについては、「遺物観察表」の備考欄に記載している。



第21図 SD02 (Ⅱ区) 土層断面図



第22図 SD02 (Ⅲ区) 土層断面図

下層出土土器

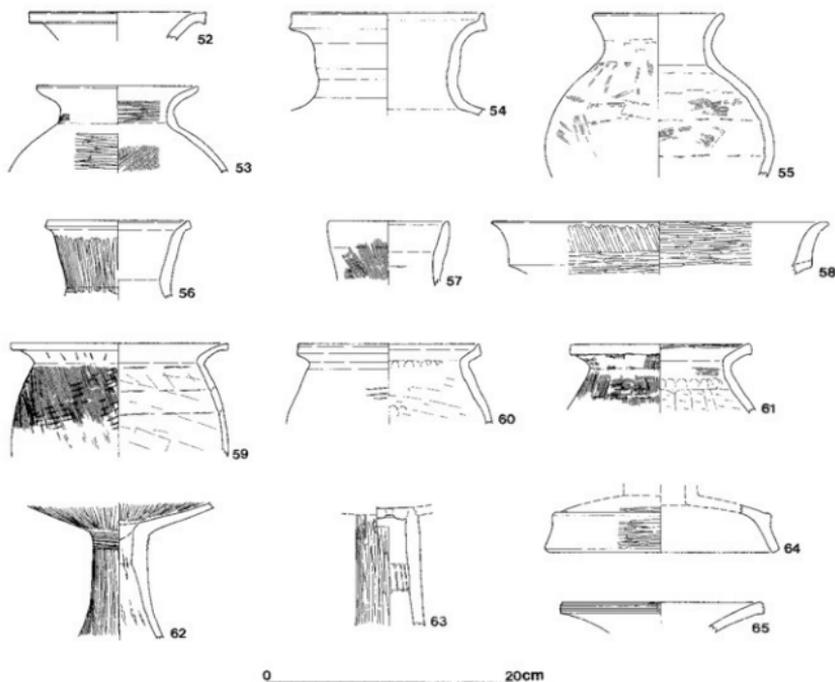
52~65は下層砂層出土の土器である。52~55は広口壺である。53~55は短い筒状の頸部から斜め上方に広がる口縁部を有するが52は頸部の形状が不明である。54はⅢ区のSD02下層砂層出土土器片とⅡ区のSD02上層黒色砂(第21図第7層)出土土器片が接合したものである。56・57は直口壺である。56は口縁端部が外方に折れる。57は胎上に大粒の赤色酸化粒が含まれ非在地産と思われる。

58は二重口縁壺である。高坏坏部の可能性もあるが、高坏に比して口縁部の器壁がやや厚いことから壺と判断した。

59～61は甕である。59は口縁端部に面を持つものであるが、口縁部外面に焼成時の収縮によると思われるたて方向の亀裂が見られる。胎上に大粒の赤色酸化粒が含まれ非在地産と思われる。60・61は体部内面をヘラケズリするものであるが、口縁端部の形態が両者で異なる。61は体部外面のタキを細かいハケで調整し、後述の搬入品と思われる甕142～154と共通の特徴が認められる。

62～63は高坏脚部である。63は筒状の脚柱部で現存部分には円孔などはない。上端には粘土円盤が充填されている。円盤中央には小孔が最終的に塞がれた痕跡がある。小孔は脚柱部製作時の心棒痕と考えられる。64は有段高坏の脚部部と考えられる。二重口縁壺の口縁部とも見られるが、内面の湾曲などから高坏とした。

65はやや小型の器台と思われる。口縁端部外面に3条の凹線と竹管文がある。



第23図 SD02下層砂層出土土器実測図

66から99までがS D02中層の黒色粘砂層出土土器である。

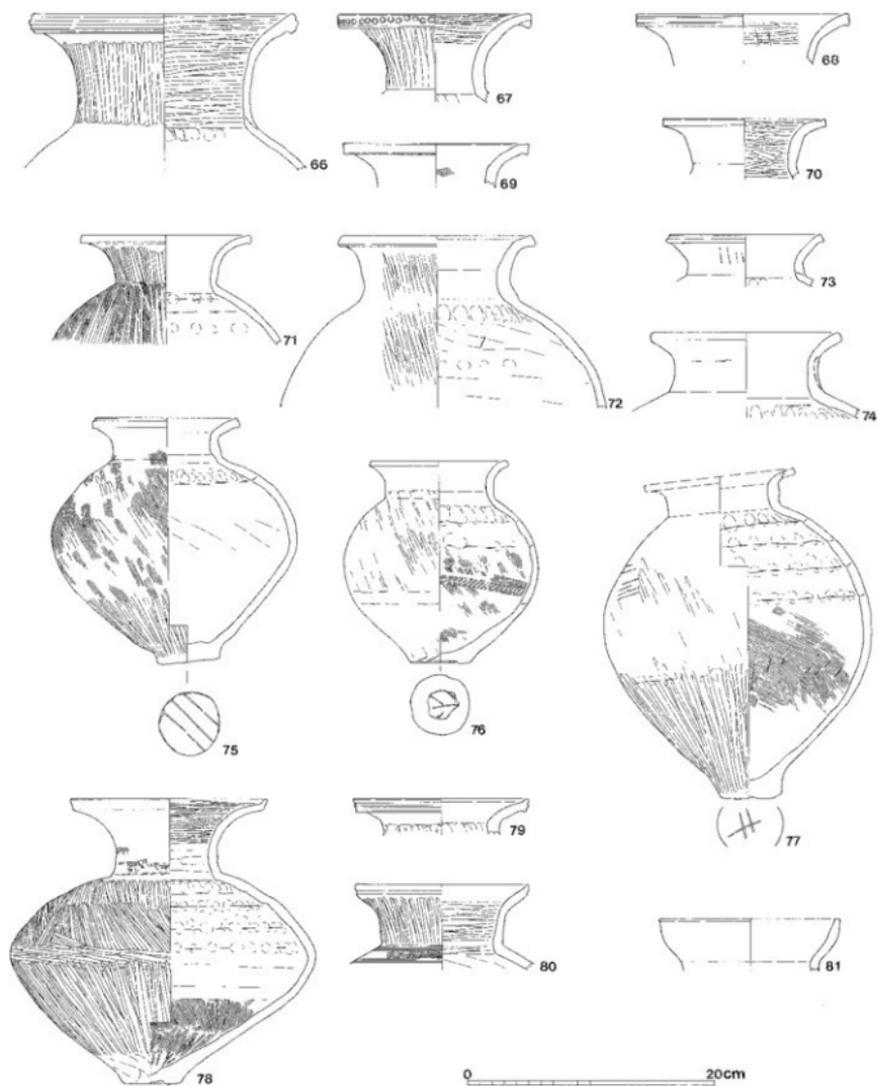
66～80は広口壺で、筒状の頸部から斜め上方に広がる口縁部を持つものである。口縁端部に面を持つものが多く、凹線文、竹管文を施すものもあるが大半は無文である。66は口縁端部を肥厚させ、外面に3条の凹線を施文するもので、胎土に赤色酸化粒が多く含まれ、色調も橙色系で非在地産と思われる。67は口縁端部外面に竹管文を密に施すものである。68は口縁端面に2条の凹線を巡らす。71は頸部と口縁部との境界がやや不明瞭で82以降の壺に近い形態を示す。73の口縁部外面には焼成時の取輪によるものと思われる数条の亀裂が認められる。74は赤色酸化粒が多く含まれ非在地産と思われる。口縁端部は丸く収めており、S D02出土のこのタイプの壺では少数派に属している。75は全形を伺えるもので、短く太い頸部と中位に最大径がある体部を持つものである。器高約20cmで、底部は直径5cm前後の平底である。外面調整はハケの後にヘラミガキを施すがやや雑なものである。底部裏面にヘラ記号が見られる。76も全形が判明するもので、球形に近い体部と直径約5cmの底部を持つ。体部外面は板ナデの後、粗いヘラミガキを加え、内面はハケ・ナデで調整している。底部外面中央の凹部のみに木の葉圧痕が残り、外面の周囲に薄い粘土帯を付加したものと推定される。77は口縁端部を欠くが、推定の器高27cmを測るものである。体部外面にタタキを残す。タタキ後ヘラミガキ調整と思われるが磨減のため明確ではない。底部外面にヘラ記号がある。

78～80は口縁端部を上方に拡張するタイプである。78は頸部中位で図上接合しているが、全形が知れるものである。やや長めの頸部から大きく広がる口縁部を持ち、口縁端部外面は無文としている。扁球形の体部は丁寧なヘラミガキで調整されている。底部外面は中央部分が窪み76と外見上は同じであるが、凹部以外の周辺部に木の葉圧痕が見られる。79は拡張部外面に凹線文を巡らす。80は口縁端部外面に1条の凹線を巡らす。体部外面に6本の櫛描き直線文と波状文を交互に施文している。胎土に角閃石、雲母を多量に含む生駒西麓産の壺である。

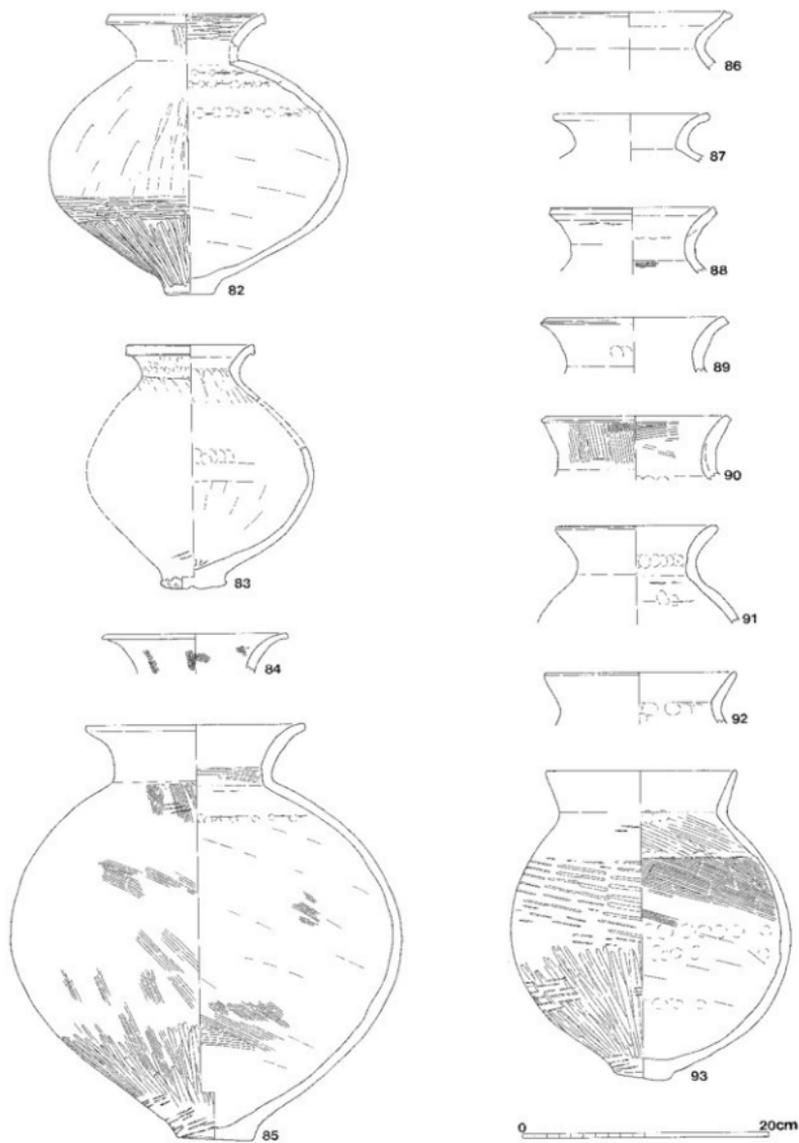
81は受皿状口縁部を持つものである。頸部のほとんどが欠失しており形状が不明だが、第26図 99のようにやや長めの頸部である可能性も考えられる。須磨区大手町遺跡S B 01出土の土器に類例がある⁽¹⁾。

82～93はくの字状の頸部から斜め上方に広がる口縁部を持つ広口壺である。口縁端部に面を持つものが多いが、丸くおさめるものも認められる。筒状の頸部を持つ前者タイプの壺に比較しその数は少ないが、この中には短い筒状の頸部を持つものと明確に区別できないものも含まれている。

82～90は口縁端部に面を持つものである。82は頸部が欠損するがこのタイプの壺と推定される。推定の器高23cmを測る。扁球形に近い体部と突出気味の底部を持つ。体部外面の上半はたて方向のヘラミガキと見られるが磨減のため明確ではない。83は体部付近を大きく欠失するが、推定器高20cmの壺である。体部外面を板ナデ・ナデのみで調整し、器体のゆがみも大きいやや雑な作りを示す。底部外面には葉状の圧痕が見られる。84は頸部を欠き不確定ではあるが、このタイプと考えておく。85は体部が球形に近いもので、



第24图 SD02黑色粘砂磨出土土器实测图(1)



第25图 SD02黑色粘砂层出土土器实测图(2)

体部外面の一部にタタキが残る。器高34cmを測る大型品である。口縁部はゆがみのため
太く短い筒状の頸部を持つタイプか、くの字状の口縁部となるかを明確に分類する事は
困難であるが、一応ここに分類しておく。体部下半の外面にヘラミガキが残り、同上半
～中位もハケの後、ヘラミガキと思われるが粗いものである。口頸部の内外面もヨコナ
デのみで調整している。89は胎土に角閃石を含む生駒西麓産の壺である。

91～93は口縁端部を丸く収めるものである。93は体部外面にタタキを残しており、頸
部径もやや大きく壺との中間形態を有する。体部外面上半のタタキは左上がりであり一般
的なものとは異なっている。約40%残存しているが外面に煤の附着は見られない。

94～97は長頸壺である。94は口縁端部を欠くがほぼ完存する。推定の器高27cmである。
口頸部高は体部高とほぼ等しく頸部と扁球形の体部との境は緩やかに移行する。内外面
ともにハケ乃至板ナデで調整され、体部下半から底部にかけタタキが残る。頸部外面下
端近くに直径1cmの竹管文が2箇所ある。94のように体部を完存するものが少なく、全
形を何うことができないが、96・97は口縁部の退化が著しく口縁部高は体部高より低い
ものと想像される。95は赤色酸化粒が多く含まれ非在地産と思われる。S D02から検出
された長頸壺は少なく、上層・中層・下層を合わせても9個体程度で、主要な壺形式で
はないが94のような前代的な形態と文様を固持するものが残存することは注目される。

98は直口壺である。短い口縁部はほぼ直立し、端部がわずかに外方に肥厚する。球形
に近い体部は外面をハケの後ヘラミガキで調整される。(森田克行氏の摂津Ⅵ-3様式
に編年される、大蔵司遺跡大溝上層出土土器に類例がある⁽⁴⁾)

99は大型の広口長頸壺で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部外面に2条の凹線
と、頸部外面に断面三角形の凸帯が巡る。大粒の赤色酸化粒を僅かながら含み、橙色系
の胎土で非在地産のものと思われる。

100～104は壺の底部である。胴部最大径が体部上半にあると推定されるものや、球形
に近いもの、扁球形のものなどが見られる。103はやや特異な底部で外面縁辺に凸帯が
巡る。104は底部外面に三角形のヘラ記号が見られる。

105～123は体部外面をタタキで、内面を板ナデやナデで調整する壺である。

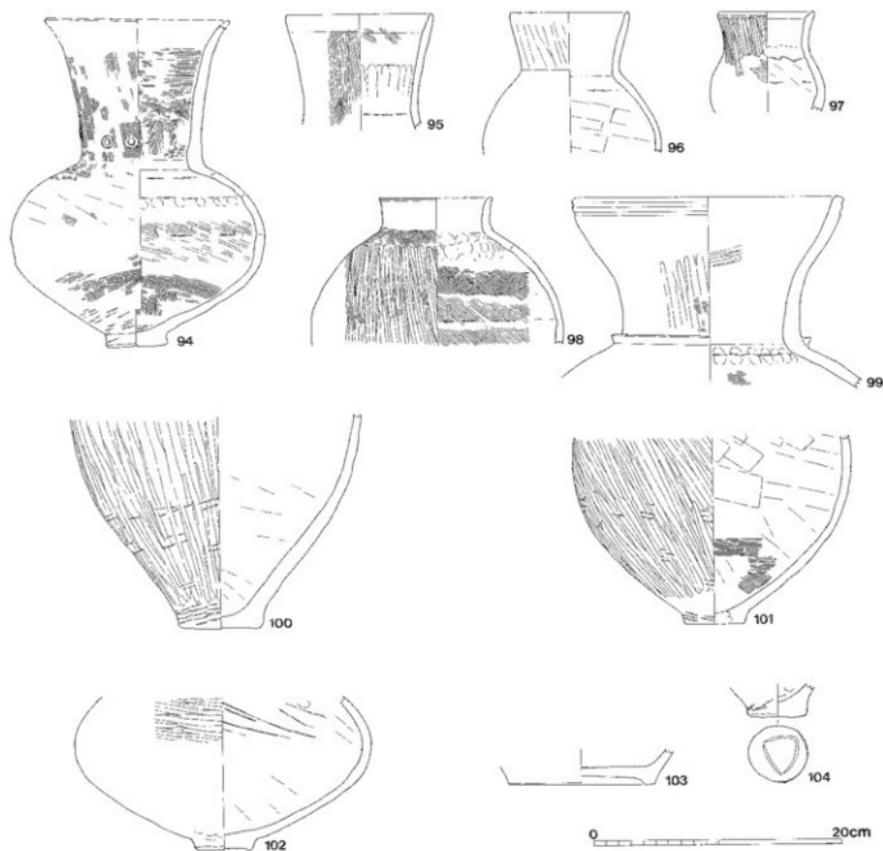
105～108は口縁端部に面を持つ壺で106の口縁端部には浅い1条の凹線が見られる。
109～111も同様、口縁端部に面を作るが若干下に拡張している。112～114は逆に上に若
干拡張するものであるが、後述の120～123ほど顕著なものではない。112は口縁部外面
の中位に粘土接合痕を残す。体部のタタキも水平に近く、かつ他に比較し粗く2本/cm
である。ただし胎土、色調などは在地のものとは異なる。

115・116は口縁部内面に強いヨコナデを加えることで、浅い凹部が巡るものである。
117は口縁部外面の上半のナデによって、二重口縁状となるものである。口縁部の立ち
上がりも大きくやや特異な形態を示している。

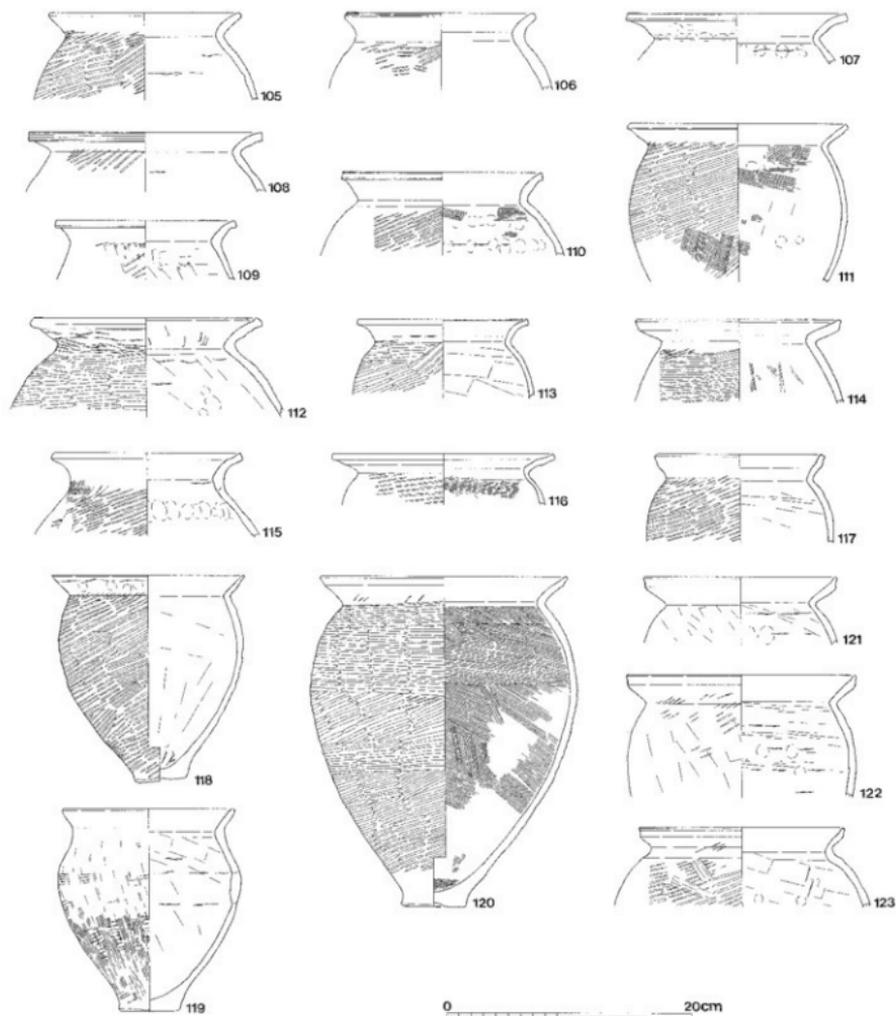
118・119は口縁端部を丸くおさめるものである。体部の最大径は上半～中位にあり、
底部もしっかりとした平底である。119は体部外面を板ナデやハケによってタタキを消
しているがやや雑で、後述の130～134ほど丁寧な調整ではない。

120～123は口縁端部を上方に拡張するものである。全形の判明する120の体部の最大径は上半にあり、底部も前者同様しっかりとした平底である。底部外面に弱いヘラケズリを加えている。体部外面のタタキは太く2本/cmである。体部は大きく3分割で成形されており、上位と中位のタタキの変換点と内面のハケのそれとはほぼ一致する。

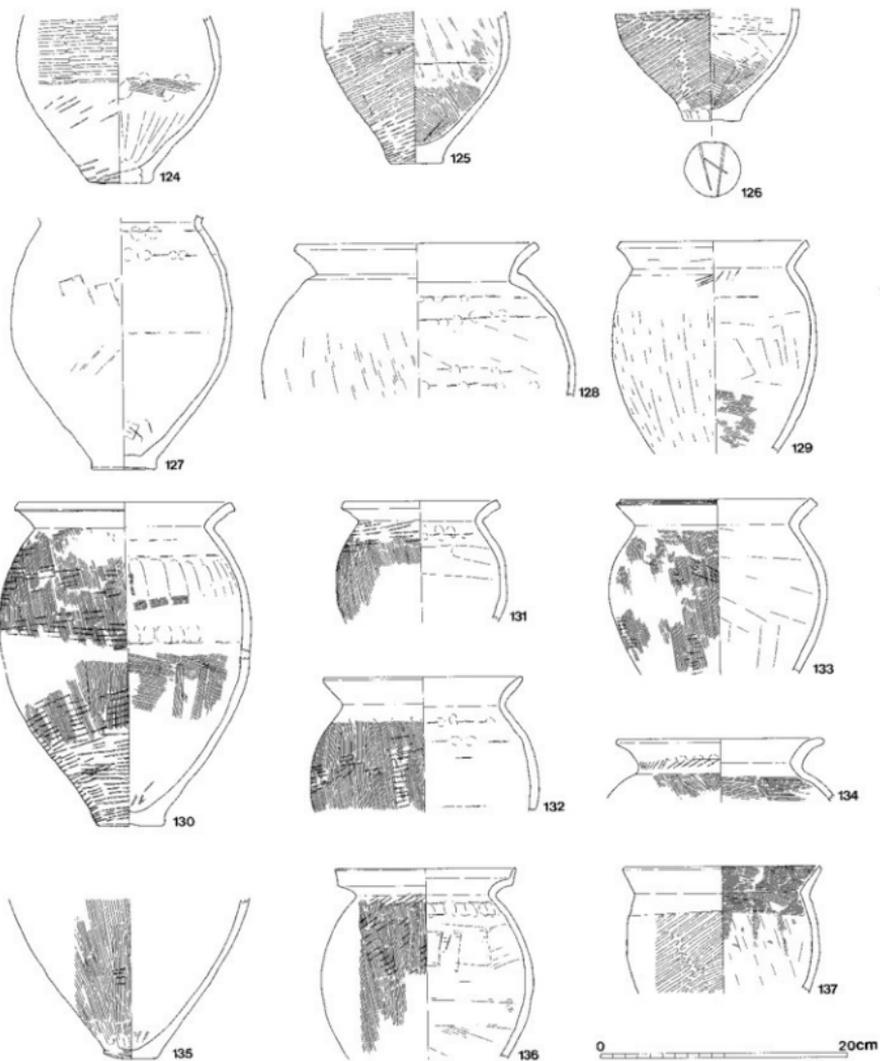
124～126は第27図に掲げた甕の底部と思われるものである。126は体部の張りが大きいもので、底部外面に垂77と似たヘラ記号が見られる。



第26図 SD02黒色粘砂層出土土器実測図(3)



第27图 SD02黑色粘砂层出土土器实测图(4)



第28图 SD02黑色粘砂層出土土器実測图 (5)

127は体部外面を板ナデ・ナデで調整するものでタタキの痕跡は明らかではなく、丁寧に消し去ったものと思われる。18は球形に近い体部をもつもので、外面を下から上にやや強めの板ナデを施している。胎土中の赤色酸化粒が在地のものより多く含まれ、色調も橙色系で非在地産の可能性もある。129は体部外面をヘラケズリするものである。体部上半には3本/cmのタタキの後ナデを施す。外面のヘラケズリは体部上半に及び、上から下に向かって強く削っているが、器壁自体は5～6mmの厚みを残しており薄くはなっていない。外面を削るタイプの甕はこの個体に限られる。

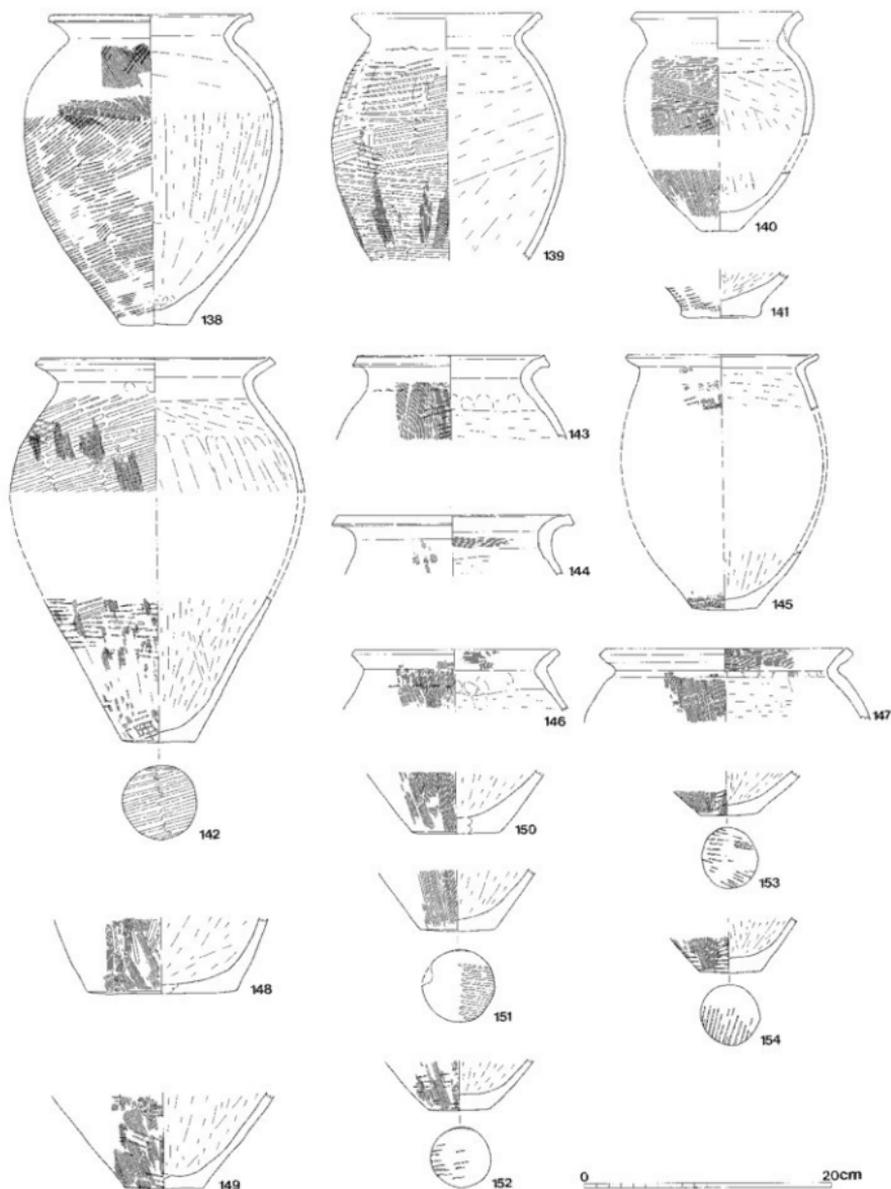
130～134の甕は体部外面のタタキを細かいハケで丁寧に消すものである。口縁端部は面を持つものと丸く収めるタイプがあるが、いずれも体部内面はナデ乃至板ナデでヘラケズリを加えない。体部最大径は中位よりやや上に位置する。132・134は大粒の赤色酸化粒を含み非在地産と考えられる。133は口縁端部外面に2条の不明瞭な凹線を巡らすものである。色調は灰褐色系で在地のものとは考えにくい。体部外面上半のタタキは左上がりであり在地のものとは異なっている。135はこのタイプの甕の底部と見られるものである。

136は口縁端部を大きく上方に拡張し複合口縁とする甕である。拡張部の内外面はヨコナデのみで無文である。体部外面の右上がりの3本/cmのタタキを10本/cmの細かいハケで消している。体部内面は板ナデでケズリではない。胎土はやや粗めではあるが大粒の砂粒を含まず、色調も灰色系で在地の胎土とは異なる。他の甕では外面の煤は頸部を除いた部分に附着するのが一般的だが、この甕は頸部外面にも附着しており煮沸形態も他と異なっていた可能性がある⁽⁵⁾。

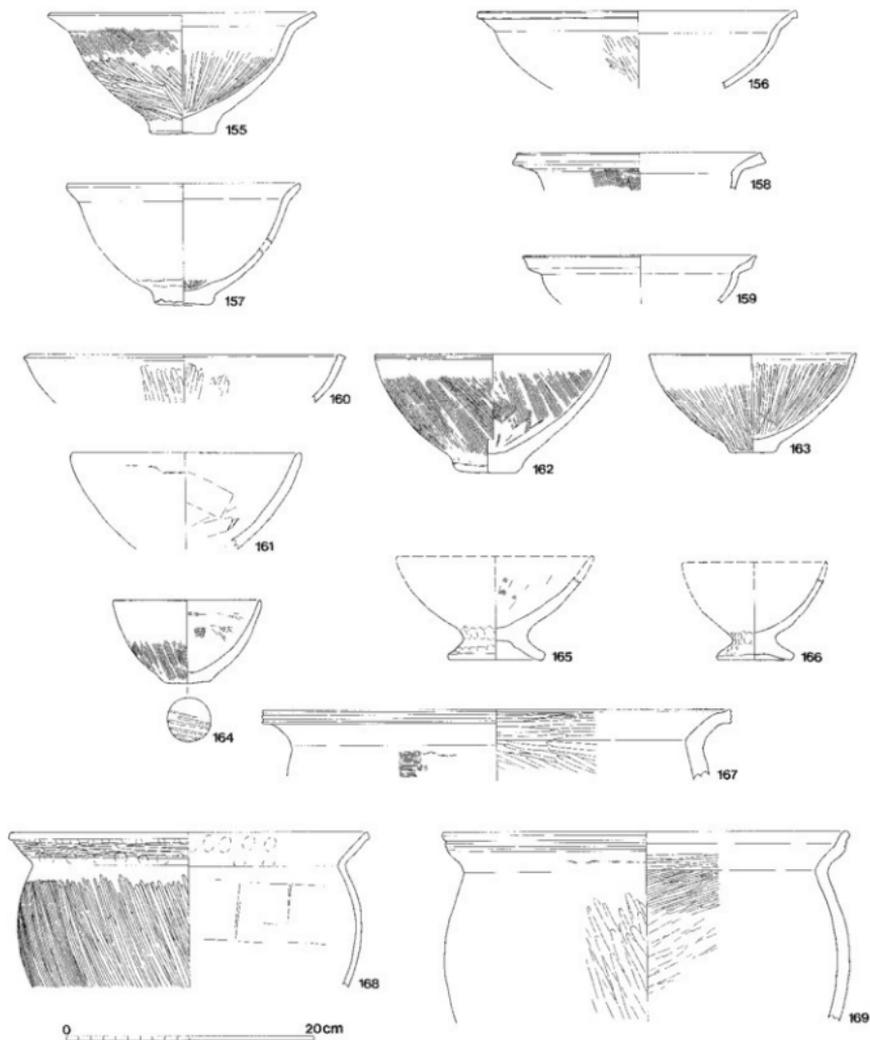
137は体部の張りが少ないもので、口縁部内面が板ナデによって平坦となるのが大きな特徴である。胎土に大粒の赤色酸化粒を含み在地のものとは異なる。口縁部の特徴は淡路系⁽⁶⁾や、瀬戸内系の甕⁽⁷⁾に見られこれらの地域との関連が考えられる。

138～141は体部内面をヘラケズリする甕である。体部外面の一部にハケを施す。138は後述の142～154の甕に近似するが、体部内面のヘラケズリは中位に限られ、外面のたてハケが胴部下半に及ばない。また口縁部から体部上半にかけての形状も142～147とは異なっている。底部外面はナデで調整され、若干上げ底となっている。139は張りの少ない長胴系の体部を持つもので、内面のヘラケズリは弱く施される。140は小型の甕で142～154にも似るが、体部外面上半のハケはよこ方向となっており、同内面のヘラケズリも強いものではない。

142～154は体部内面をヘラケズリし、同外面のタタキを10～12本/cmの細かいハケで調整するものである。体部内面のヘラケズリは頸部からやや下がった位置から施すものが多いが(142～144・146)、頸部から削るものも存在する(145・147)。ただその場合は口縁部の形状が異なるようである。底部外面の中央はわずかに凸面となっており、安定が悪いものが多い。また底部外面にタタキを残すものが多いのもこの甕の特徴の一つである。148は底部の直径が広く、体部の立ち上がり角度も他に比して大きいので、壺の底部の可能性も考えられる。胎土は肉眼観察の限りでは在地のものとは大きな差はないが、含まれる砂粒がやや大きく、粗い胎土の印象を受けるものが多い。



第29图 SD02黑色粘砂层出土器实测图(6)



第30图 SD02黑色粘砂层出土土器实测图(7)

155～169は鉢である。大別して小型～中型のもの（155～166）と大型のもの（167～169）とに分類される。小型・中型にはくの字状の頸部を持つものと、碗状の単純口縁のものがある。前者はさらに口縁端部に面を持つもの、丸く取めるもの、上方に拡張するものが見られる。上方に拡張する159は甕120～123の口縁端部と近似する。162は口縁端部外面に1条の凹線を巡らし、体部の内外面をハケのみで調整する。底部外面は崩いへラケズリの後ナデを加えている。胎土に大粒の赤色酸化粒を含み非在地産と思われる。164は底部外面にタタキを残している。単純口縁の鉢は基本的に平底であるが、低い脚台を付する165・166が見られる。

大型の鉢のうち169は口縁部を上方に拡張し二重口縁となっており、外面に2条の凹線を施文する。胎土の色調もやや白っぽく在地のものとは異なっている。

170～186は高坏で、屈曲部を持ち坏部が体部と口縁部に分かれるタイプのものと、浅い碗状の坏部を有するものがある。170～179は前者に属するもので、口縁部が短くやや外反するものや、口縁部が強く屈曲するものまで変化が多い。170はほぼ全形が知れる例である。坏口縁部径27cm、器高推定18cmである。坏体部と口縁部は接合せず、网上での復元である。坏口縁部外面には間隔をあけた、たて方向のヘラミガキがある。脚柱内面にシボリ目があり、上端付近に粘土塊をつめた痕跡がある。坏部と脚部の接合は挿入付加法による。脚裾の穿孔は4箇所と思われるが、3孔の可能性もある。171は口縁部外面に4本/cmのタタキを施した後、たて方向のヘラミガキで調整する。口縁部内面には放射状のミガキが見られる。

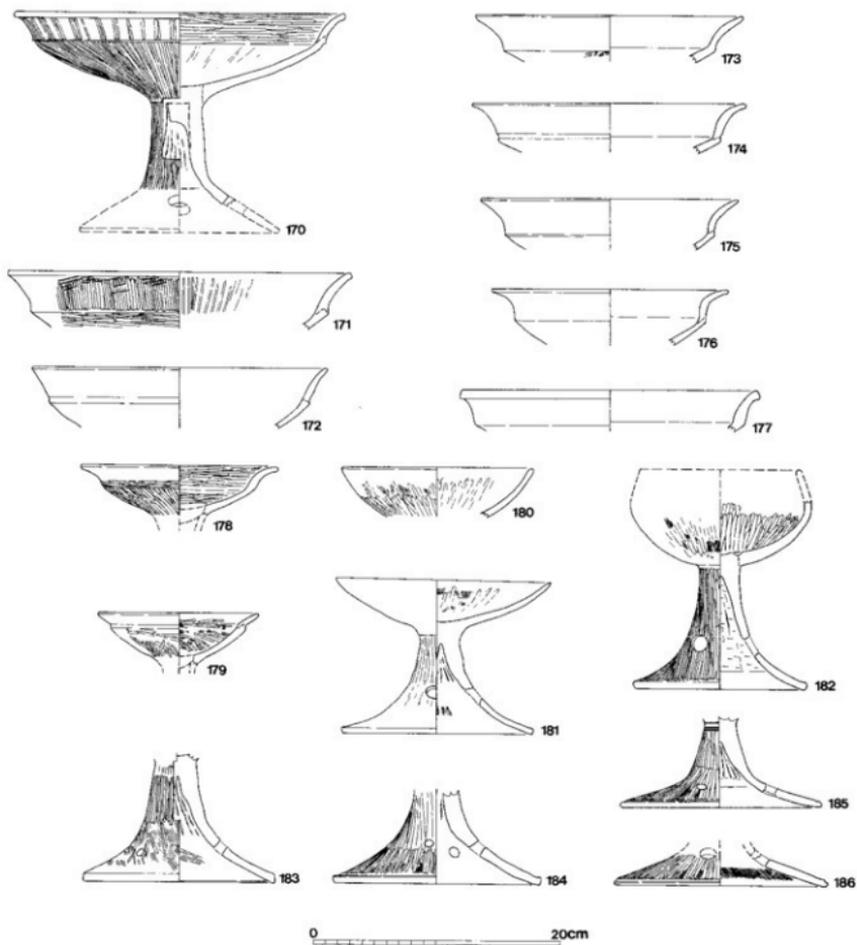
口縁部の外反、屈曲度にはそれぞれ程度の差があるが、口縁部が体部に比較して大きく広がる形態は見られない。口縁端部は丸く取めるものが多いが、177のように端部に明瞭な面を作り、短く立ち上がる口縁部を持つものも存在する。ただしこの形態は少数派である。

178・179は小型で胎土も良好なものである。坏体部と口縁部とはなだらかに移行するが、その境に段を持つもので170～177とはやや異なっている。

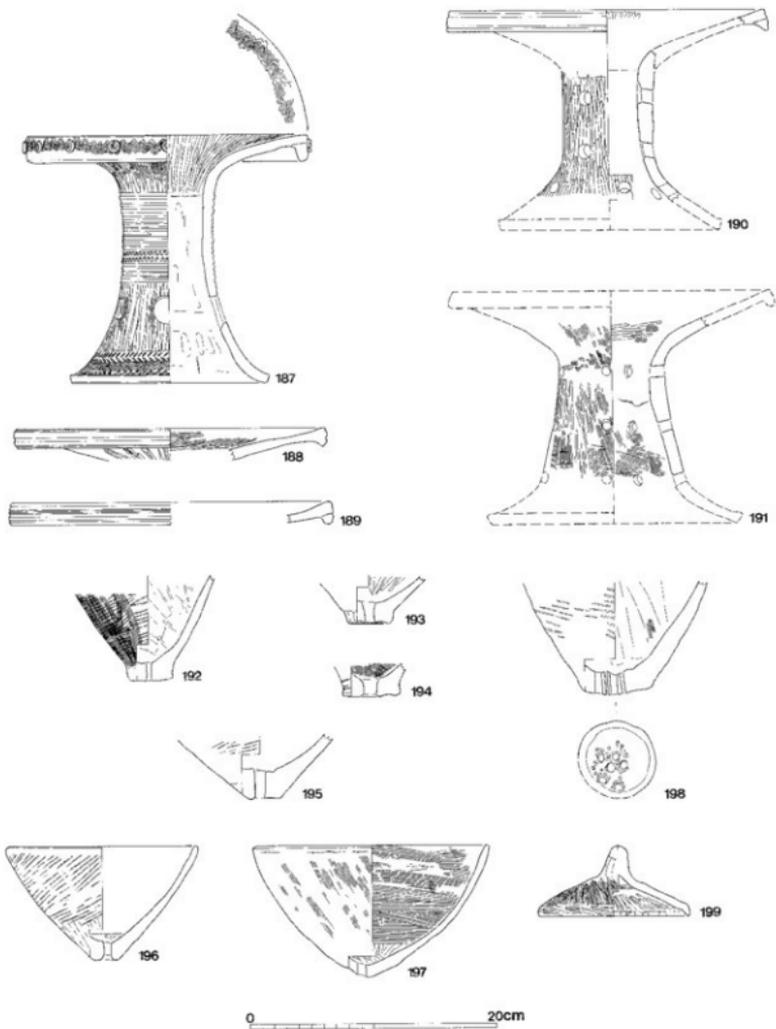
180～182は碗状の坏部を持つものである。181は完形に復元できるもので、坏部径17.4cm、器高12.7cm、脚裾部径15.4cmである。浅い皿に近い坏部を持つ。坏部外面は摩滅のため調整不明であるが、内面はハケの後ヘラミガキを加えている。脚柱部内面シボリ目を残す。脚裾部の穿孔は3箇所である。182は口縁部の上半を欠くが、ワイングラス状の坏部を持つものと思われる。坏部の内外面と脚部外面をヘラミガキし脚部の内面にヘラケズリを加えるが、シボリ目がわずかに残る。脚裾の穿孔はやや大きめで3方向にある。脚部内面のヘラケズリや全体の形状は在地のものとは考えられない。胎土に赤色酸化粒を多く含み、色調も褐色系である。

183～186は高坏脚部である。坏部と接合するものが極めて少ないため、坏部の形状を断定できないものが多いが、185・186は脚裾部が低く、大きく広がっており、碗状の坏部がつくものと想像される。

187～191は大型の器台である。口縁端面を除き無文のものが多いと推定されるが、



第31图 SD02黑色粘砂層出土土器実測図(8)



第32图 SD02黑色粘砂層出土土器実測圖(9)

187は例外で、口縁端部に粘土帯を付加し外面に櫛描き波状文+竹管文付円形浮文、口縁部内面にも櫛描き波状文を加える。脚柱部~胴部外面には上から11条の沈線文(螺旋状に施文)、竹管状工具による刺突文、5条の沈線文(螺旋状に施文)、板小口部による刺突文、7本の櫛描き波状文そして最下に板小口による刺突文を飾る。外面と口縁部内面はヘラミガキされる。脚部には大きめの円孔が推定4箇所あり、1つの円孔の脇には孔の位置を割り付けたかのような浅い円形の圧痕が残る。190は口縁部と脚柱部~脚胴部の破片から復元実測したものである。脚柱部には上下3段に円孔が穿たれる。上・中段は3方向、下段は5方向に穿孔されている。191は口縁部下半~脚柱部にかけての破片で脚柱部に上下3段、各5方向の円孔がある。188~190には大粒の赤色酸化粒を含み在地産の土器とは異なる。

192~198は有孔鉢である。孔はいずれも焼成前の穿孔で、1孔を穿つ鉢には平底のもの(192~194)、小平底のもの(195・196)と共に丸底のもの(197)が出現している。量的には平底タイプが多い。198は多孔のもので、直径約3mmの孔を先に開け、その後直径約6mmの孔を開けている。平底をもつ192~196が在地産の胎土であるに対し、底部形態や孔の状態が異なる197と198には胎土に大粒の赤色酸化粒を多く含み、非在地産と思われる。

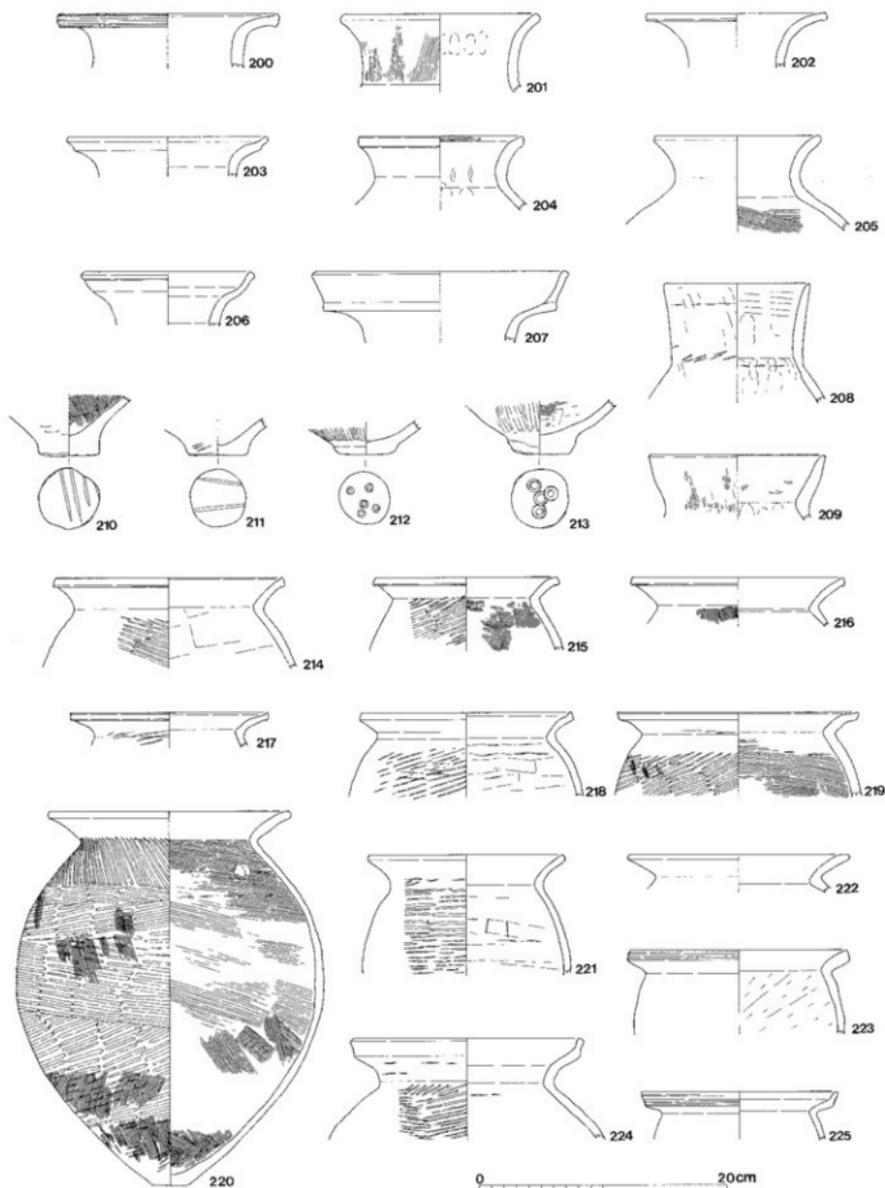
199は小型の蓋で中実の柄を持つ。器壁に煤の附着が見られず、壺などの蓋と考えられる。197~199も多量の赤色酸化粒を胎土に含み非在地産と思われる。

200~238は上層砂層出土の土器である。

200~203は短い筒状の頸部から斜め上方に伸びる口縁部を持つ広口壺である。200は口縁端部を上下に拡張し3条の凹線文を施す。201は胎土に角閃石を多量に含む牛胸西麓産の土器である。203は口縁端部を上方に拡張している。204・205はくの字状の頸部を持つ広口壺である。206・207は二重口縁壺であるが、206は受口状という表現に近い。いずれも拡張部外面は無文である。208は長頸壺で、口縁部高は体部高より低いものと推定される。209は直口の広口壺である。

210~213は壺の底部と考えられる。210・211の外面にはヘラ記号があり、212・213の外面には竹管による刺突文が見られる⁹⁾。前者と後者の間に大きな胎土の差異は認められないが、212・213の体部外面はヘラミガキで調整されている。

214~216は口縁端部を若干下方に拡張する甕である。217~219は口縁端部を上方に拡張するもので、218は柄上げ気味になっている。220~222は口縁端部に明瞭な面を成さず、丸く収めるものである。220は成形技法が特異なもので、外面タタキは角度の異なる4方向のものが見られ、特に上半のタタキは縦方向に近い。タタキ成形の後外面にハケを加える。体部内面はハケ調整であるが、外面のタタキが大きく角度を違える中位に対応する部分ではハケ原体が異なっている。径3cmほどの小平底を持ち、体部の最大径は中位にある。223は分厚く短い口縁部を持ち、体部内面は頸部までヘラケズリする。胎土に大粒の赤色酸化粒を含み、色調も橙色系で非在地産と考えられる。224・225は複合口縁を持つ甕である。224は口縁端部を上方に拡張している。体部外面に4本/cmの



第33图 SD02上層砂層出土土器実測図(1)

タタキを残すが、煤の附着が見られず壺の可能性もある。225は拡張部外面に擬凹線を持つ非在地的形態の甕だが、体部内面はよこ方向のナデで、ヘラケズリではない。

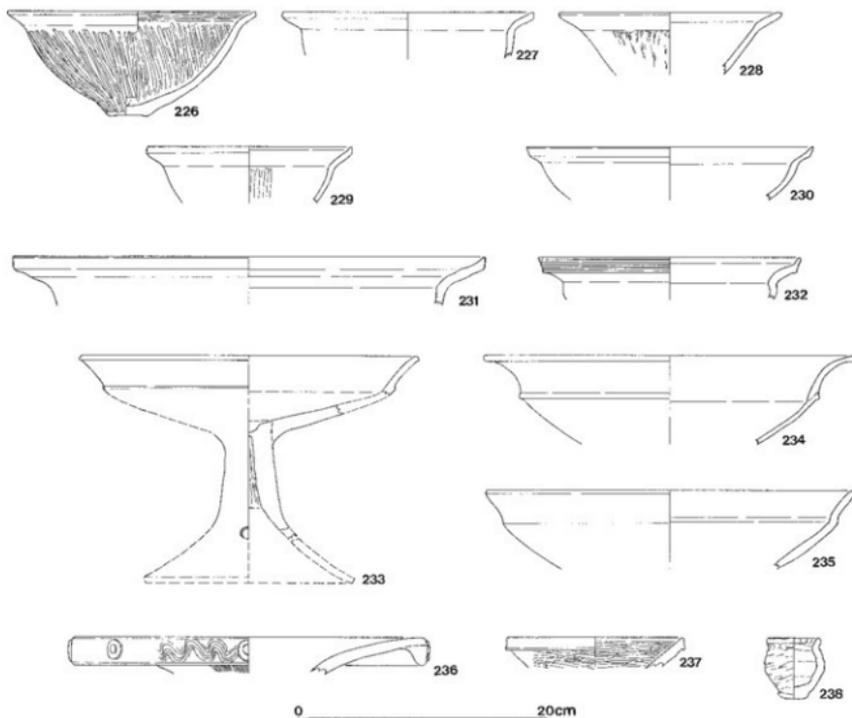
226～232は鉢で、いずれもくの字状の頸部を持つものである。その内、230～232は口縁端部を上方に拡張する。232は外面に4条の擬凹線を施し、県北部の土器と形態が共通する非在地系のものである⁽⁹⁾。230・232、特に後者は高坏部の可能性が高い。

233～235は高坏で坏部に屈曲部を持つものである。碗状坏部のものは確認できない。黑色粘砂層出土の高坏と基本的には変化はないが、234の坏口縁部がわずかに発達している。胎土に大粒の赤色酸化粒を含み非在地産と考えられる。

236は器台の口縁部と考えられる。口縁端部の拡張部外面に櫛描き波状文と竹管文付円形浮文がある。櫛描き波状文は施文原体をコンパス状に動かして描いている。

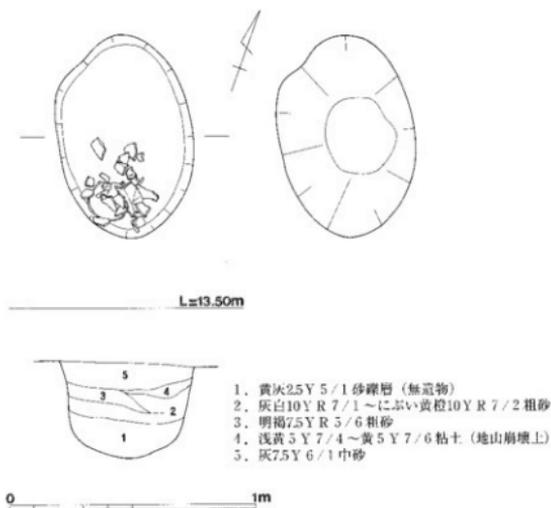
237は口径14.2cmの小型器台の受部である。上層砂層と下層砂層からの破片が接合し、その帰属土層が明確ではない。ただ当地域では、小型器台は庄内期でも中頃以降に明確になることから、より新しい層に属すものと判断した⁽¹⁰⁾。

238はミニチュアの甕で器高5cmである。



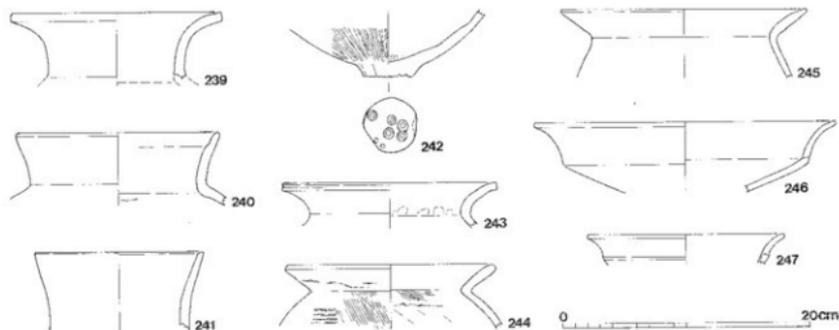
第34図 SD02上層砂層出土土器実測図(2)

Ⅲ区西端付近のS D02北辺部で検出された土坑である。土坑南半はS D02の埋土をベースとしている。東西約55cm、南北約85cm、深さ約40cmである。埋土上層で庄内期の土器が出土した。土層5で大半の遺物が出土しており、第35図は同層内の遺物出土状態である。



第35図 S K 01平面図・土層断面図

239は筒状の短い頸部から斜め上方に伸びる口縁部を持つ甕である。240・241は直口の広口甕で240はS D02上層砂層出土の破片と接合した。242は竈底部で体部外面はヘラミガキ、底部外面に計5箇所の竹管文が見られ、S D02上層砂層の212・213と共通する。直径8mmの竹管文に近接して直径5mmの刺突文状のものがあるが意識的なものか断定できない。243～245は甕で243には口縁端部に面があるが、後2者は丸く収めるタイプである。246・247は高坏で247は口縁部の発達しない小型のものである。



第36図 S K 01出土土器実測図

注

- (1) 丹治康明『雲井遺跡 第1次発掘調査報告書—』神戸市教育委員会 1991年3月31日
この報告書のなかで丹治氏は「長頸壺形土器」を弥生時代後期の畿内に多く見られる1群の壺の祖形と考えられている。
- (2) 今回出土した土器には中砂程度の赤色酸化粒を少量含むものが見られるが、直径2～3mmないしそれ以上の大粒の赤色酸化粒を多量に含むものは少ない。また多くは色調がにぶい黄橙色系を呈するが、橙色系、褐色系や灰色系のものが散見される。在地産のものか否かは無論、より科学的な砂粒等の分析が不可欠ではあるが、これらのやや異なる様相を持つ土器を「非在地産」としておく。また、胎上は在地産と変わらないが形態が異なるものを非在地系とした。
- (3) 中谷正・山本雅和『大手町遺跡第1～4・6次発掘調査報告書 神戸市都市計画道路山麓線街路築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2003年3月31日
- (4) 森田克行『摂津地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 寺沢薫・森岡秀人編 木耳社 1990年11月26日
- (5) 口縁部の形態は旧国でいえば丹波・丹後・但馬や越前系統のものと思われるが、これらの地域の甕の体部内面はヘラケズリされるのが一般的である。よってこれらの地域からの影響下で作られたものというに留めておき、類例の探索に努めたい。
- (6) 森岡秀人『「淡路型叩き甕」の提唱と攝津—環大阪湾をめぐる交流の一要素』『初期古墳と人との考古学』石野博信編 (株)学生社 2003年12月10日
- (7) 柴田昌見『伊予東部地域』『弥生土器の様式と編年』四国編 菅原康夫・梅木謙一編 木耳社 2000年3月25日
- (8) 東灘区森北町遺跡第8次調査S B03出土土器に類例がある。
丹治康明・須藤宏『森北町遺跡』『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992年3月
- (9) 石井清司編『京都府弥生土器集成』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989年3月25日
石井清司『丹波・丹後地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 寺沢薫・森岡秀人編 木耳社 1989年6月15日
- (10) 本書第4章参照の事



第37図 中世～近世遺構平面図

第4節 室町時代

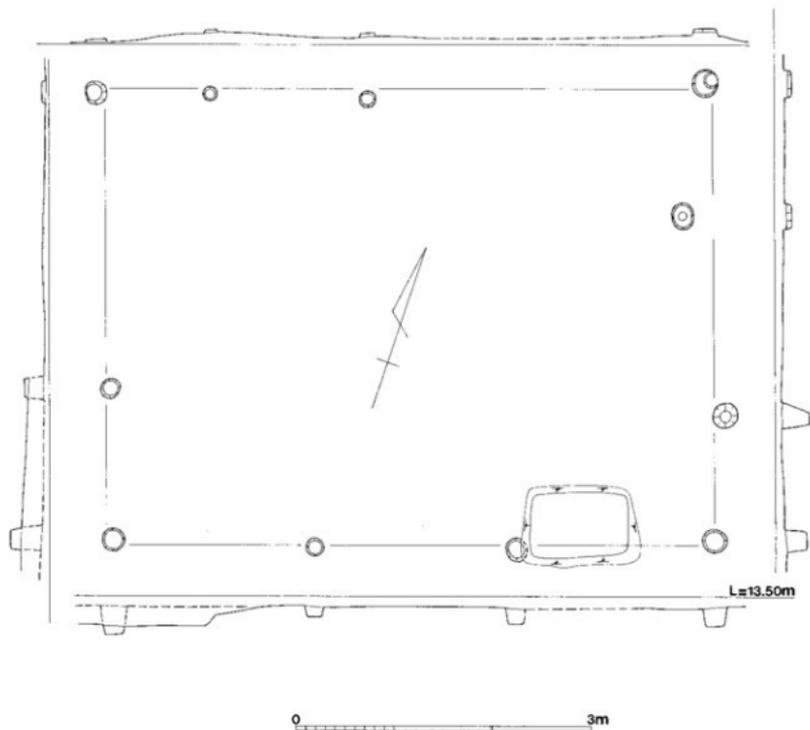
遺構と遺物

今回の調査区ではⅠ区からⅣ区に亘り、中世以降と思われるピット群が検出された。

S B01

Ⅰ区、Ⅲ区東半およびⅣ区西半部に集中するが、建物として復元できるものは1棟のみである。Ⅳ区西半のそれは方形に並ぶように検出されたが、柱穴からの遺物がなく近世以降の可能性もあるため、ここでは報告しない。

S B01はⅠ区西辺で検出された南北3間（4.7m）、東西3間（6.1m）の掘立柱建物で、主軸はN20° Wである。土師器小皿の細片が柱穴から出土したが、図示できるほどの大きさはない。中世のものと思われるが具体的な時期について、明らかにできない。

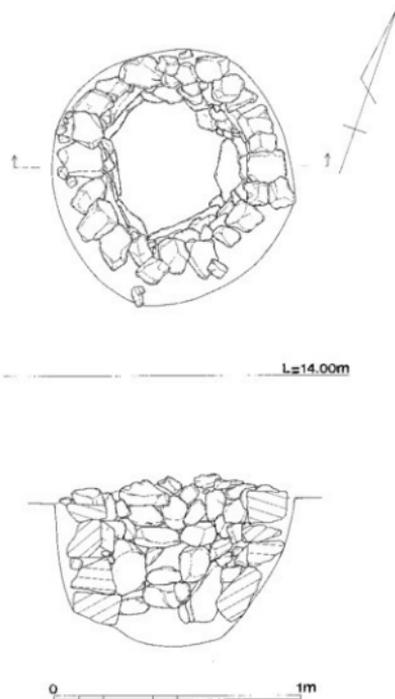


第38図 S B01平面図・断面

S E 01

内法の直径約50cm、深さ約60cmの石組井戸である。石組は自然石を乱積みしており、4段目まで残存している。井戸掘形は直径約1mで、底面は直径約30cm、深さ10cmほど窪んでいるが、特別な集水施設は見られない。掘形底部は湧水層まで達しておらず、水溜のための施設と思われる。

内部の埋土から少量の土師器・中国製青磁片が出上し中世のものと思われるが、時期を確定することは困難である。



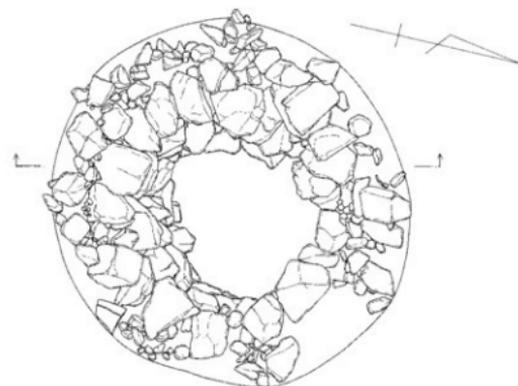
第39図 S E 01平面図・断面図

S E 02

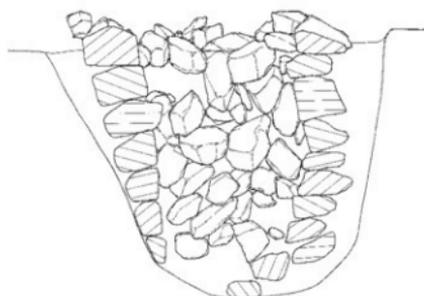
内法の直径約60cm、深さ約1.1mの石組井戸である。石組は自然石を乱積みして構築されている。9段目まで残存しているが、その方法はやや雑で抜け落ちた箇所が多く見られる。底部には集水施設や浄水施設はなく、素掘のままである。掘形は直径約1.5mで、石組裏込土から備前焼スリ鉢片が、内部の埋土から土師器鍋・スリ鉢・小皿、東播系須恵器捏鉢、備前焼壺、中国製青磁碗・青花碗、瓦のほか、小型曲物底部、漆器合子蓋が出上した。

248・249は備前スリ鉢で石組掘形内から出土した。いずれも中世5期a⁽¹⁾で15世紀後半である。

250以下は石組内部の埋土から出土した。250・251は土師器鍋、252は土師器スリ鉢である。252のスリ鉢は口縁部外面の段が消失しかかっており、16世紀でも後半のものと思われる⁽²⁾。254は東播系須恵器掬鉢である。14世紀後半以降のものと考えられる⁽³⁾。

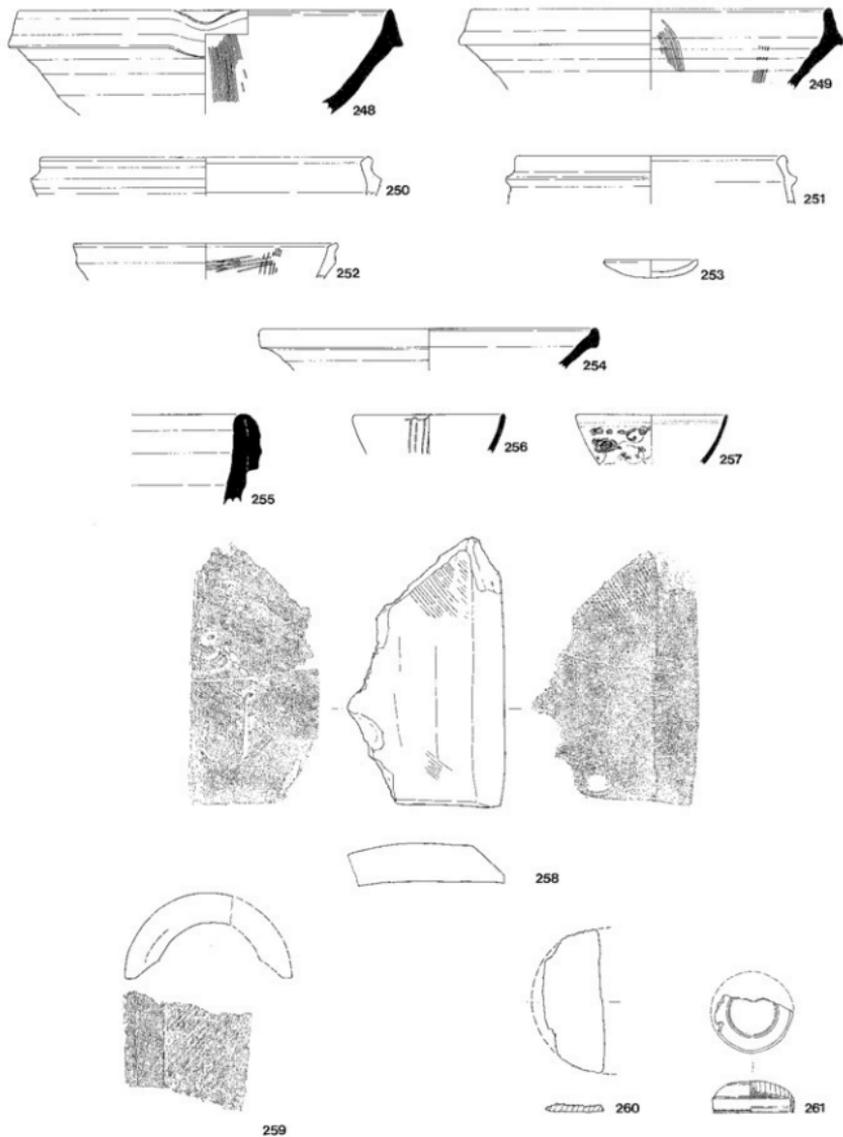


L=14.00m



0 1m

第40図 S E 02平面図・断面図



第41图 S E 02出土遺物実測図

255は備前焼堿の口縁部で外面に2条の凹線が通る。16世紀代のものである。

256は中国製青磁碗で外面に細線描きの蓮弁文を持つ、上田分類B-IV類⁽⁴⁾で15世紀末~16世紀代のものである。257は中国製青花碗で外面に唐草文、内面は口縁部端近くに直線文のみである。小野分類のF類⁽⁵⁾と思われるが明確ではない。

258は鬘斗瓦と思われる。上下面ともほぼ平らで上面にコビキ痕が残る。259は丸瓦で凹面にA類のコビキ痕が見られる。いずれも焼し瓦であるが259の凸面の炭素吸着にはムラがある。

260は小型曲物の底板で、復元の直径約12cmである。スギ柾目の材を使用している。

261は木製合子の蓋と考えられる。還元口径6.7cm、器高2.6cmを測る。轆轤挽きによって整形されており、内面中央には轆轤固定具を装着するための直径1~3mm、深さ4.4mmの穿孔がある。器外面は非常に平滑に仕上げられているが、内面には轆轤挽きの痕跡を残す。また外面には天井部と立ち上がりの屈曲部、口唇部に段を設けている。材にはブナ属が使用されている。

SE02は出土遺物から15世紀後半から16世紀後半にかけて使用されたものと推測される。

S E 03

石組北壁が内側に倒れこんでおり内法の直径を正確に測定しがたいが、約90cmと思われる。石組は自然石を乱積みして構築されている。18段目まで確認したが、SE02同様、石組は極めて雑で崩壊が危惧された事や、調査地北側にはJRの線路が近接していたため、深く断ち割りを実施することができず、底部まで確認していない。よって集水施設等の有無や構造などは明らかではない。検出できた深さは約2mである。掘形の直径は上面では約1.8mであるが下方は約1mとなる。石組裏込上から鉄器片と土鍾、内部の埋土から備前焼瓶、中国製白磁・青磁・青花碗、瓦、石臼、鉄鍋、鉄製犁先、曲物底のほか漆器碗などが出土した。このうち鉄製犁先は2個体あり、6片に割って重ねられ鉄鍋に入れられた状態で出土した。鉄鍋内からはこの他の遺物は検出されなかった。埋土の下層泥層内から出土したが湧水が激しく、投棄されたものかあるいは埋置されたものかを明らかにすることはできなかった。

262は石組掘形内から出土した性格不明の鉄器片である。全長7.8cm、幅1.9cm、厚さ4mmである。

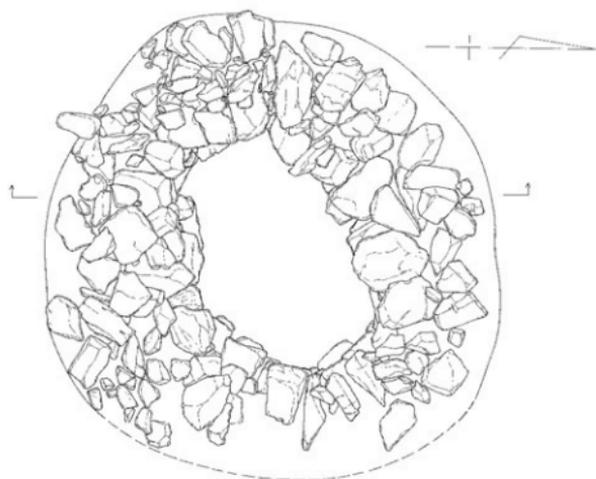
263は備前焼瓶の体部片である。内面に水引き痕が残る。残部の器高は18.6cmである。

264は中国製青磁碗で外面に細線描きの蓮弁文下部と、内面見込み部中央に「吉」とそれを取り囲むようにして「金満玉堂」の文字が印刻される。上田分類のB-IV類で15世紀末~16世紀のものである。

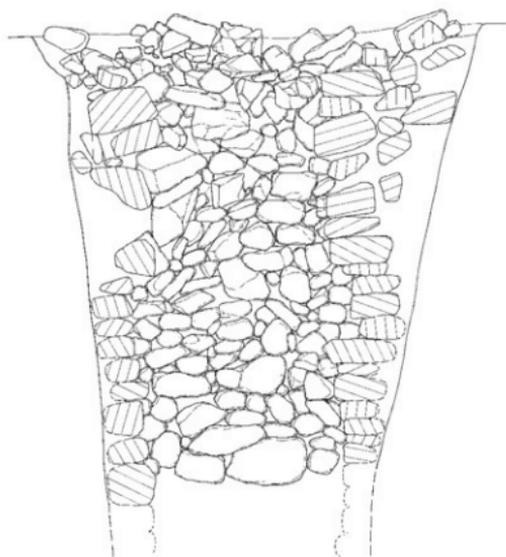
265は口径12.8cmの小型の中国製白磁皿で小野分類のC群⁽⁴⁾、15世紀末~16世紀のものである。

266は中国製青花碗で外面に芭蕉葉文と波濤文が、内面には見込みに直線文が描かれる。小野分類の集付碗C群で15世紀末~16世紀中ごろのものである。

267は土鍾で石組掘形内から出土した。高さ3.4cm、直径4.1cmである。



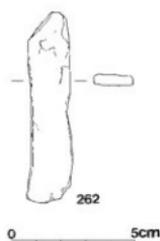
L=13.50m



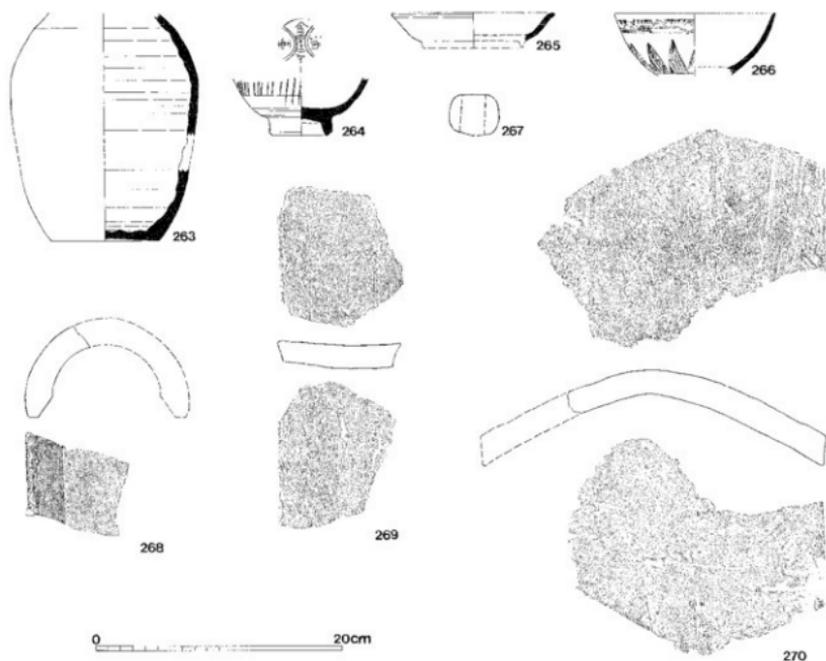
0 2m

第42図 S E 03平面図・断面図

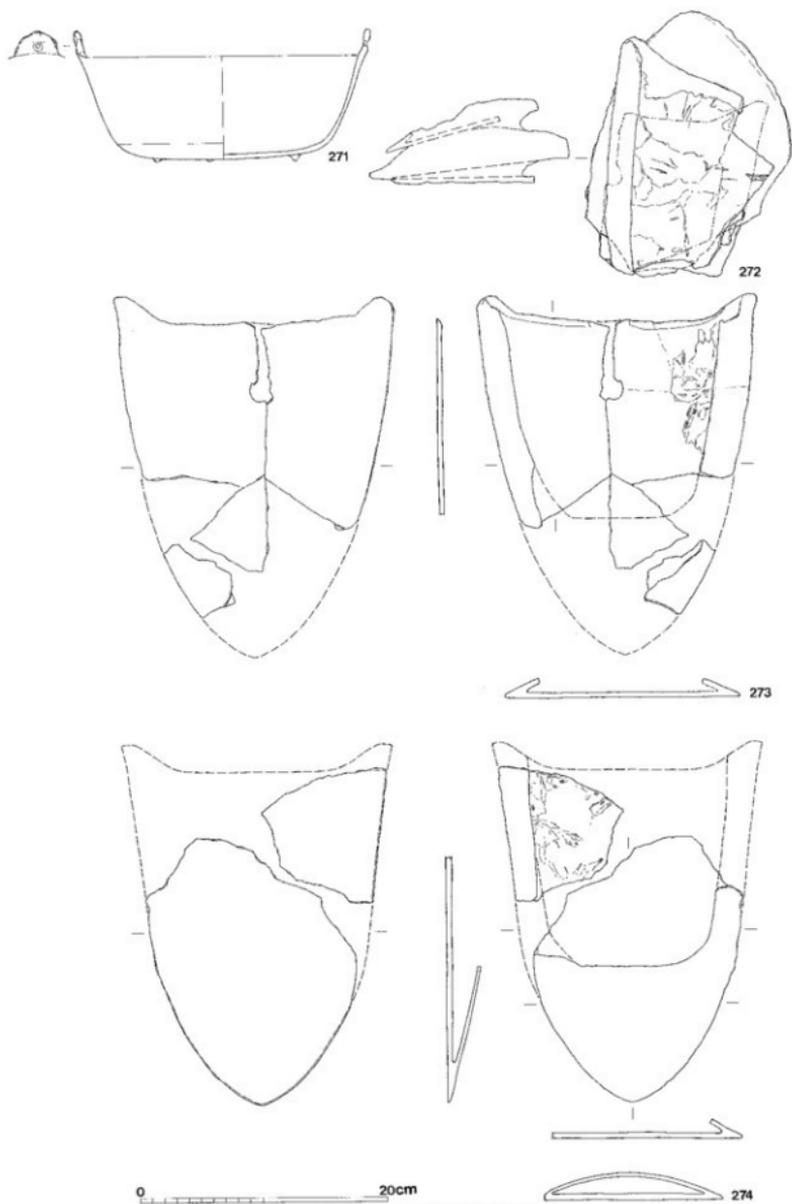
268は丸瓦で凹面に16本×10本/cmの布目が残る。269は平瓦で凹面に14本×12本/cmの布目、凸面にはナデが見られる。270は雁振瓦で凹面・凸面共にナデで仕上げている。



第43図 S E 03掘形内出土鉄器実測図



第44図 S E 03出土遺物実測図



第45图 S E 03出土铁制品实测图

271は鉄製鍋で全体の約80%が残る。直径2～3mmの1孔を穿つ吊手（弦耳）は1方のみ残存するが、両側に付くものと考えられる。形状は五角形の花弁状である。胴部と底部との境は明瞭ではなく、緩やかに移行しており底部外面に低い3足がある。足部は直径約9mm、高さ約5mmの半球形のものである。口縁部の直径23.2cm、吊手上端までの高さは10.8cm、口縁部までの高さ8.6cmの小型のものである。厚さは底部で4mm、胴部中央で3mm、吊手付近では5mmを測る⁽⁷⁾。

272は鉄製犁先の検出時の状態である。下図は分離後の実測図で犁先は2個体あり、出土時は273の破片が274の破片を上下から挟んだ状態にあった。

273・274共に鑄造製である。273は最大幅22.7cmで、推定の長さは約29cm、鉄板の厚みは約4mmである。4片に割られているが、先端に近い1片は他の3片とは若干厚みが薄いことから別個体の可能性もある。ただこれは破片の元位置の問題もあり、ここでは同一個体と考え図化した。先端部は欠失している。上面は平坦で中央に隆起などは見られない。中央部に直径1.5cmの孔が見られ、孔の周縁には面取も見られる。下面右側には草の茎状のものが着している。

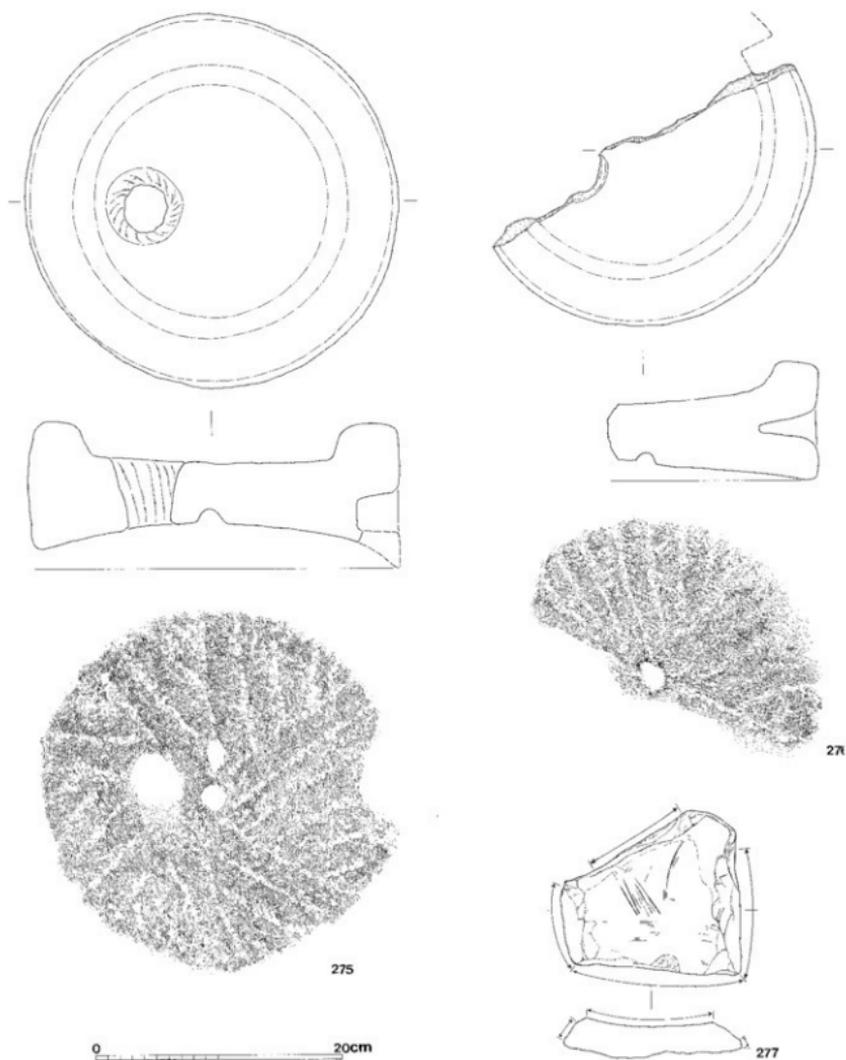
274は273とほぼ同形のもので、現存の最大幅19.6cmで、推定の長さは約29cmである。鉄板の厚みは前者より厚めで約5mmある。2片から成るが中央部分が欠失していて273にあった円孔の有無は確認できない。上面は平坦で中央に隆起などは見られないのは前者と同様である。先端は尖ってはいるが擬宝珠状に突出はしていない。先端の断面の角度は約15°である。長／幅比は273が推定で1.28、274が推定1.35で274の方がやや細身となっている⁽⁸⁾。

275・276は花崗岩製粉引き臼の上臼である。275は完形、276は約半分が残る。275は直径30.5cmで、直径6.5cmの供給口の内面には鑿の痕跡が残る。裏面中央には直径約2cm、深さ約1cmの心棒受けの穴があるが、その横にも長径約3cm、短径約1.5cmの窪みが見られる。臼の目は7分割で正常臼である。白面のふくみは約3.6cmでかなり湾曲しておりそのため挽き木の膾孔の下端は欠けている。挽き木の膾孔は平面・断面共長方形で、幅3.8cm、高さ3.5cmで深さは3.4cmである。

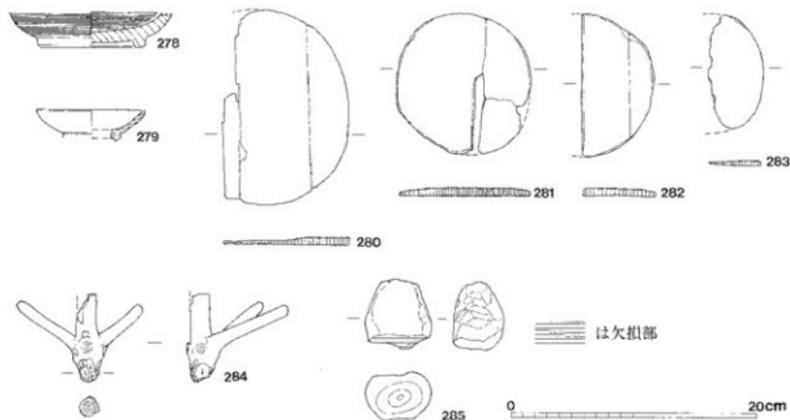
276は直径29.6cmで、臼の目5分割と思われるもので、正常臼である。白面のふくみは約1.3cmである。裏面中央には直径約1.5cm、深さ約1cmの心棒受けの穴がある。挽き木の膾孔は平面長方形だが、断面は楔状となっている。幅6.2cm、高さ3.0cm、深さ4.6cmである。またこの膾孔から約4cm離れたところにも1箇所挽き木の膾孔と思われるものがある。幅は不明だが高さは2.1cm、深さは2.9cmである。平面・断面共長方形のものと思われる。当初の膾孔が使用できなくなったため、現存する膾孔を新に設けたものと考えられる⁽⁹⁾。

277は砥石で黒色系の砂岩製である。上面および側面を使用し、下面には使用痕がない。

278は木製の椀底部で、内外面に轆轤挽きの痕跡を残す。表面は炭化しており、漆塗りが存在したかは不明である。復元底部径8.8cm、残存する器高2.9cmを測る。使用された材はタブノキ属である。



第46图 S E 03出土石製品実測図



第47図 S E 03出土木製品実測図

279は漆塗りの木製環である。内面に赤漆、外面は黒漆によって仕上げられている。内面の赤漆の下には黒色の皮膜痕が見え、黒漆もしくは胡粉による下地処理が施されていることがわかる。復元口径約9cm、推定器高約2.9cmを測る。材はイスシデ節である。

280～283は小型曲物の底板である。最大の280は直径約16cm、最小の283で直径約10cmである。これらの小型曲物は柄杓などが想定される。材はいずれもスギの柎目を使用している。

284はアカマツの枝の一部を切り取ったようなもので、下端に加工痕が見られるが用途は不明である。

285も用途不明の加工材で、アカガシ亜属の芯持ち材を使用している。高さ約6cm、断面の長径約5cmである。下端は欠けている。

S E 03は出土遺物から15世紀末から16世紀中頃にかけて使用されたものと思われる。

S E 04

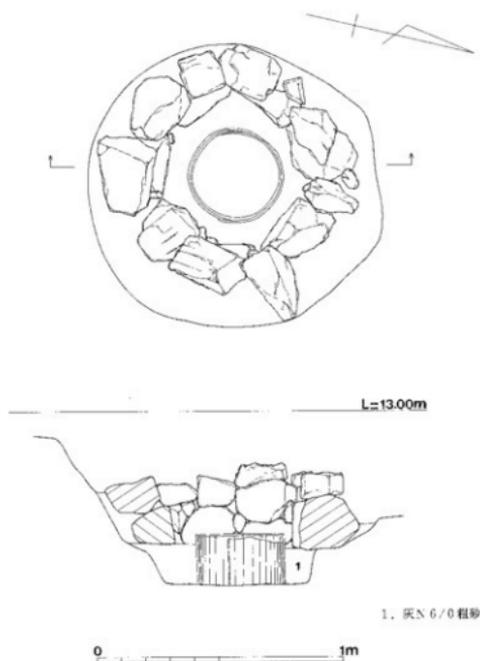
直径約60cm、深さ約50cmの石組井戸である。石組は自然石を乱積みして構築するものと考えられるが、残存状態が良好ではなく、石組も3段を残すのみである。掘形底部は2段掘となっており、集水施設として底を抜いた曲物を設置している。出土遺物が全くなく時期決定の資料を欠いている⁽⁹⁾。曲物は2個が入れ子の状態で検出された。側板内面にケビキ跡があるものを内側に、両者とも底部を上にして設置されていた。

286・287はS E 04の集水施設として設置されたものである。286が内側にあったものである。

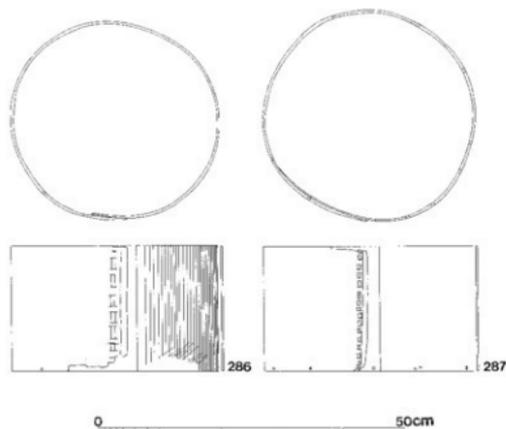
286は直径34cm、高さ20.5cm、厚さ3mmである。スギの薄板を曲げ、樫紐で綴じ付けている。側板は左前に合わせ、内綴じで7段の1列綴じとしている。樫紐の縫い始め部分の残りが悪く、状態が観察できない。縫い終わりは外面切り離しである。側板の上端（外側になる板の端）にキメカキはなく、樫紐列の外側に引かれる外面ケビキもない。

打合せは約6cmで側板の上端・下端とも約1cmの幅で面取りされている。内面ケビキは間隔の幅約5mmで垂直方向に行い、一部右上がり方向のものが残る。打合せ部分にはケビキはなく、側板上端の裏側も約2cmの幅でケビキはない。側板下縁に開けられる釘穴はこの部分の残存状態が悪く1箇所のみ確認できる。

287は直径34.9cm、高さ20.5cm、厚さ3mmである。スギの薄板を曲げ、樺紐で綴じ付けている。側板は左前に合わせ、内綴じで16段の1列綴じとしている。樺紐の縫い始め部分は内面返し縫いで、縫い終りは内面切り差しと思われるがこの部分を欠損している。側板の上端にキメカキはない。樺紐列の外側に引かれる外面ケビキがあるが、内面のケビキはない。打合せは約17cmで板両端の厚みを次第に減じて合わせている。側板下縁に開けられる釘穴は現存で11箇所であるが下縁の一部を欠くため本来は13箇所程度と思われる⁽⁴⁾。



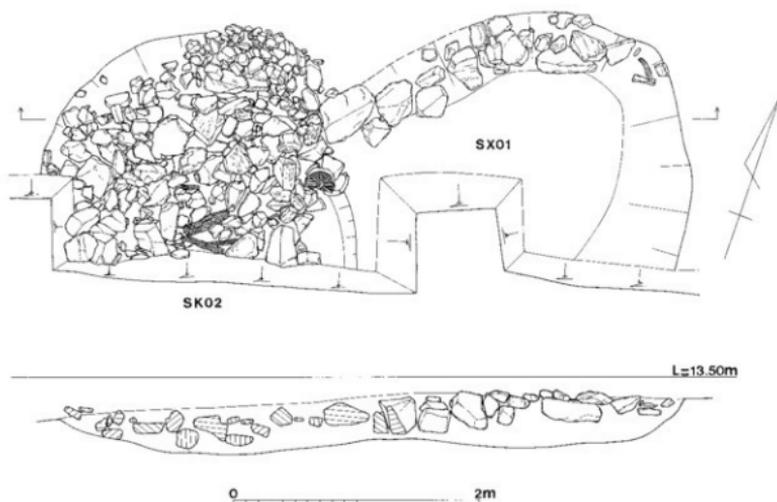
第48図 S E 04平面図・断面図



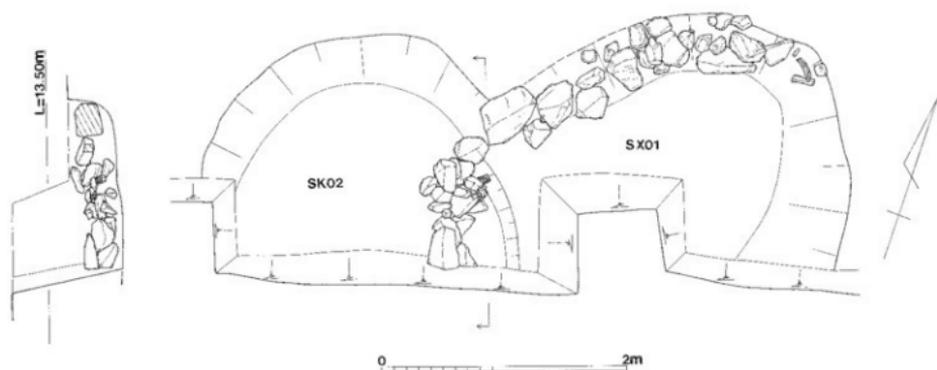
第49図 S E 04出土曲物実測図

S X 01

東西約3.5m、南北約1.9m以上、深さ約40cmの不整長方形の土坑で、北・西側に石組を伴う。西側の集石土坑（S K 02）が埋没した後で構築されている。石組は土坑底部から浮いた状態にあり、上坑にある程度土砂が堆積した段階で構築されたものと考えられる。水溜用のものと考えられるが性格は明確ではない。埋土から土師器羽釜、土壁片、花崗岩製石臼などが出土し、西側石組を除去中に備前スリ鉢片などを検出した。



第50図 S X 01、S K 02平面図・断面図



第51図 SK02集石除去後平面図、SX01西辺部石組立面図

288は土坑北東隅から出土した土師質の羽釜である。口縁部外面に3条の凹線が巡る。
289は西側石組を除去中に出土した備前焼スリ鉢で、中世5期a、15世紀第3四半期のものである。

290・291は石製粉引き白の上臼である。290は直径27.8cmで、供給口の直径は約5cmである。裏面中央には直径約2cm、深さ1.5cmの心棒受けの穴がある。臼の目は8分割で正常臼である。白面のふくみは約3mmである。挽き木の臍孔は破断面に一部が残り幅3.8cm、高さ2.8cm、深さ1.5cm以上の平面・断面共長方形のものである。

291は直径約25.8cm、臼の目8分割と思われるもので、正常臼である。直径約5cmの供給口が半分残る。裏面中央には直径約2cm、深さ約1.5cmの心棒受けの穴がある。白面のふくみは約4mmである。挽き木の臍孔は平面・断面共長方形と思われるが、破断面にごく一部が残るのみである。幅1.4cm以上、高さ3.3cm、深さ7mm以上である。

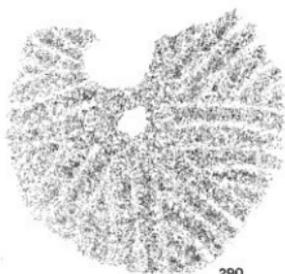
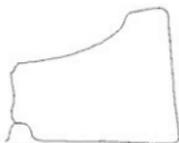
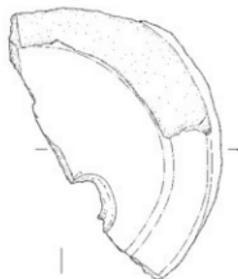
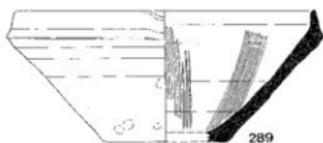
S K 02

東西約2.5m、南北1.9m以上、深さ40cmの円形土坑で、SX01に東端を切られている。土坑内には多量の人头大から拳大の石、炭化材等が投棄されていた。多量の石に混じって少量の土師器小皿・鍋、瓦質羽釜や陶器の小片が出土した。

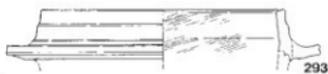
292は土師器鍋で外面に4本/cmのタタキがある。

293は瓦質羽釜で、口縁部外面は2段となっている。いずれも15世紀代のものと考えられる。

294は土師器小皿である。15世紀以降のものと考えられる。

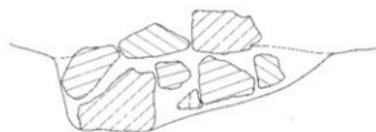
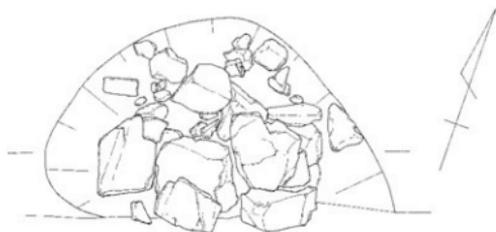


第52图 S X 01出土遺物実測図

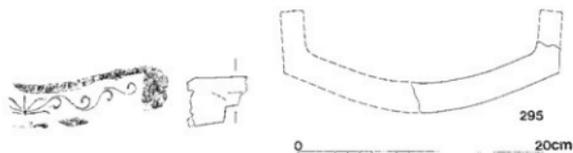


第53图 S K 02出土土器実測図

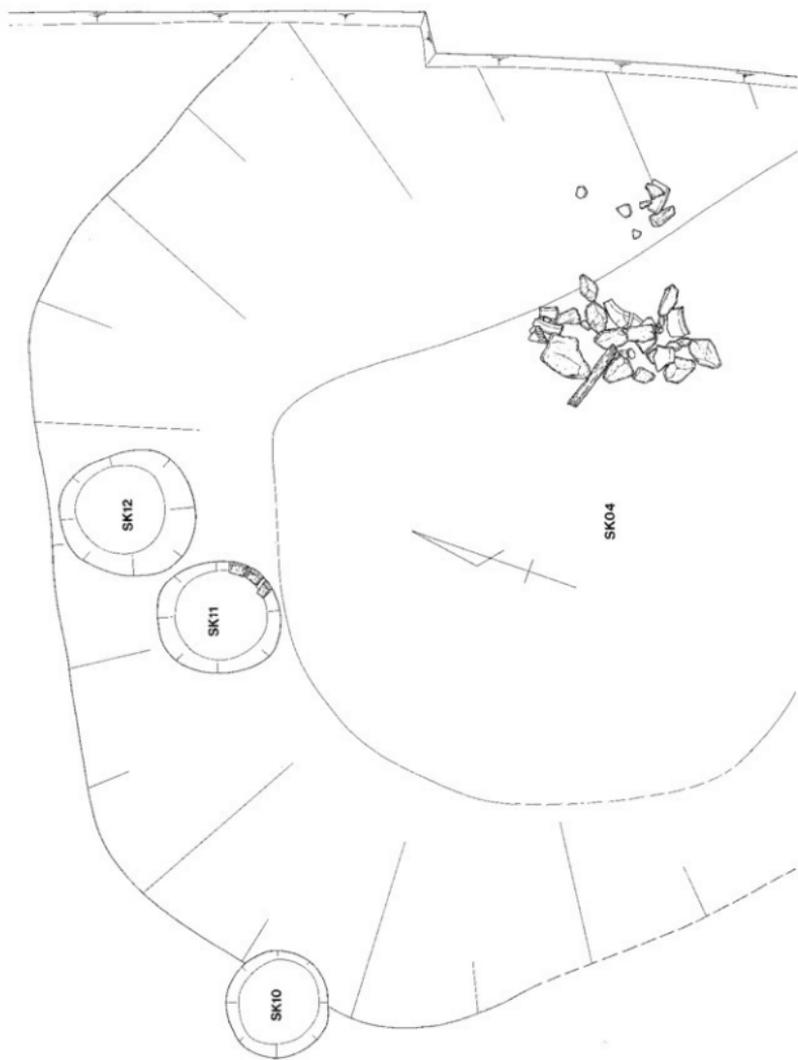
Ⅲ区南辺で検出した集石十坑で、東西約1.4m、南北80cm以上、深さ約35cmの規模を有する。人頭大の自然石と共に、備前焼スリ鉢の小片および室町時代の軒平瓦片が出土した。295は水返しが付く軒平瓦である。瓦当面が約半分残る。中心飾りから左右に4反転する唐草文が伸びるものと思われる。唐草文は神戸市西区の如意寺でC類とされた軒平瓦に近似しており⁽¹²⁾、これより295は室町時代中期、15世紀後半のものとして推定される。



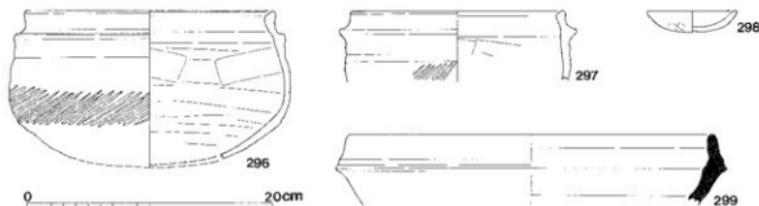
第54図 S K 03平面図・断面図



第55図 S K 03出土軒平瓦実測図



0 2m
 第56图 SK04、SK10~12平面图、SK04遺物出土状態平面图



第57図 S K04出土遺物実測図

S K 04 東西4.0m以上、南北3.9m以上、深さ0.3mの不整楕円形の土坑である。土坑内には人頭大から拳大の石が投棄されていた。埋上から土師器鍋・小皿片、備前焼スリ鉢、中国製青磁碗片のほか、中央やや東よりの底面で土壁片と共に土師器鍋が1個体分出土した。また北辺部から近世以降の小土坑、S K10～S K12が検出された。

296・297は土師器鍋で15世紀代である。298は土師器小皿である。15世紀以降のものと思われる。

299は備前焼スリ鉢である。中世5期aで15世紀代3四半期である。

S K 05・06 Ⅲ区東端で検出された2基の円形土坑で、S K05は直径約1.5m、深さ約60cm、S K06は直径約1.8m、深さ約50cmである。S K06はS K05の南端を切って構築されている。S K06から備前スリ鉢片、土師器スリ鉢片、土師器小皿や土錘などが出土した。S K05からは弥生土器のみ出土したが、堆積上層の状態などからS K06と同世代のものと考えられる。出土遺物からこれらの土坑は16世紀後半頃と思われる。

S K 07 近世の上坑、S X02に切られた円形土坑である（第37図）。直径約90cm、深さ約20cmを測る。備前焼スリ鉢の破片が出土した。

300は中世5期aの備前焼スリ鉢である。

遺構外出土遺物 中世の遺物はこれ以外にS D02の上面や近世以降の盛土内から出土している。以下、遺構外出土の遺物を近世のものを一部含めて報告する。

301は土師質の羽釜で直立する長い口縁部を持つ。16世紀代と思われる。

302は瓦質の羽釜で岡田・長谷川分類のⅢB類である⁽¹³⁾。16世紀代のものである。

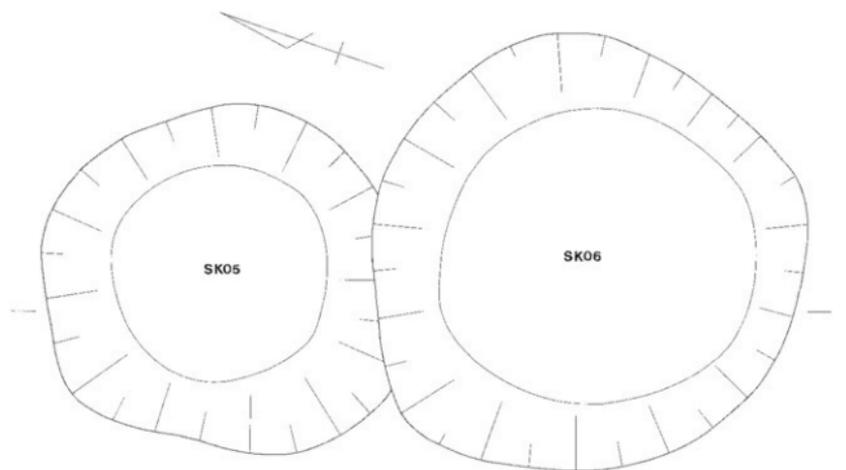
303～307は備前焼スリ鉢で303・304は中世4期aで15世紀第2四半期、305は中世5期bで15世紀代第4四半期、306は近世1期bで16世紀第4四半期、307は近世1期cで15世紀末～16世紀初頭である。

308～310は丹波焼スリ鉢で、308・309は長谷川分類のI B1類16世紀後葉～17世紀中頃、310はI A3類(b)で17世紀中葉～末である⁽¹⁴⁾。

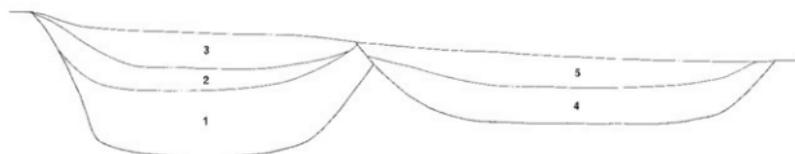
311は瀬戸・美濃丸壺で外面にへら掻き蓮弁文がある。大窯1期前半、15世紀末と考えられる⁽¹⁵⁾。

312も瀬戸・美濃の天目壺で大窯2期前半、16世紀前半と考えられる。

313は備前焼大窯の底部である。



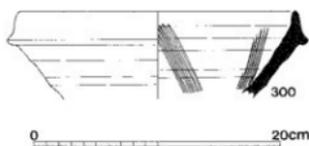
L=13.50m



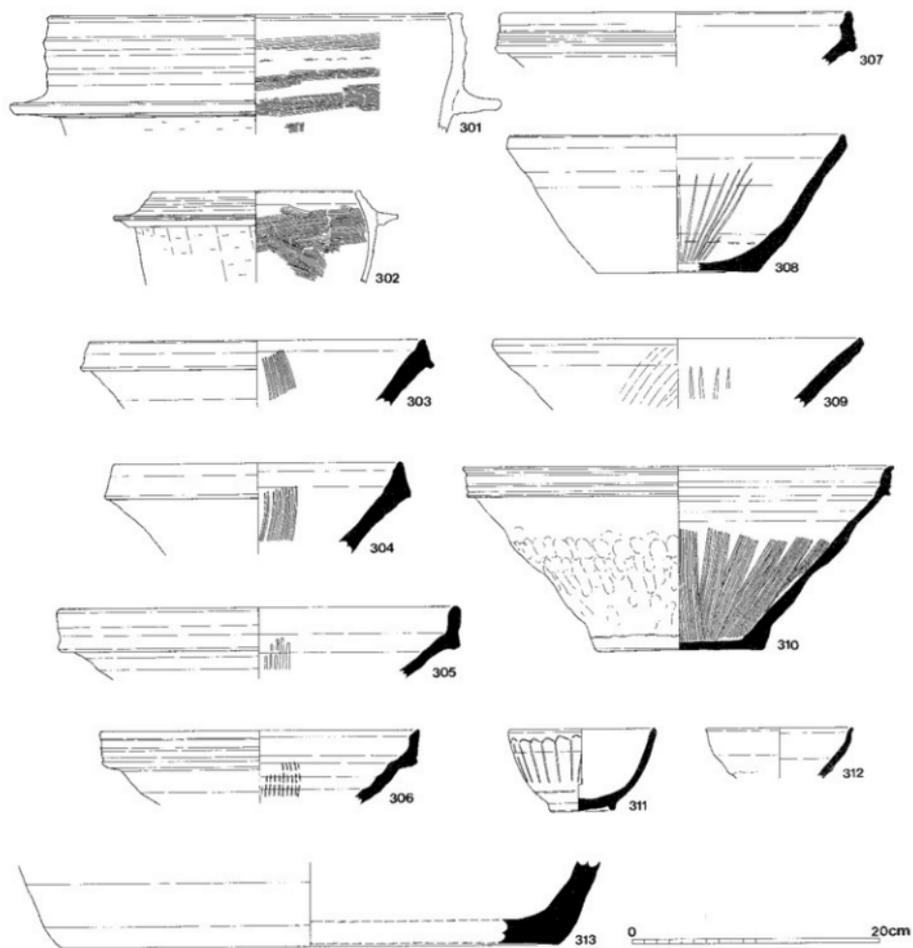
1. 灰5Y4/1細砂(黄色粘土小塊含む) 4. 灰N5/0細砂
 2. 灰N5/0細砂 5. 灰黄褐10YR5/2~4/2中礫混じり細砂
 3. 黄灰2.5Y4/1細砂

0 2m

第58図 SK05、SK06平面図・土層断面図



第59図 SK07出土遺物実測図



第60图 遗構外出土遺物実測図

- (1) 乗岡実「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会 2000年11月25日
- (2) 西口圭介「第Ⅵ章第1節」『三田城発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第194冊 西口圭介編 兵庫県教育委員会 2000年3月31日
 黒山恭正「Ⅳ、まとめ」『萩原城遺跡発掘調査報告書・第1・3・5次』神戸市教育委員会 2001年3月31日
 山本雅和「第4章第4節 S D01出土の上師器について」『日輪寺遺跡発掘調査報告書』山田清朝編 神戸市教育委員会 2002年1月31日
- (3) 丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985年10月
 森田 稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館 1986年3月31日
- (4) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会 1982年8月28日
- (5) 小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会 1982年8月28日
- (6) 小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」同上
- (7) 五十川伸矢「古代・中世の鉄製物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集 国立歴史民俗博物館 1992年12月25日
 五十川伸矢「中世の鍋釜」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館 1997年3月28日
 五十川伸矢「2鉄製物の鑄造遺跡と鑄造技術」『鉄と銅の生産の歴史』佐々木稔編 (株)雄山閣 2002年2月20日
 杉山大吾「北陸の中世鉄製製品について—越中の鉄鍋を中心に—」『富山考古学研究』第7号 (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2004年6月30日
 朝岡康二「鍋・釜」ものと人間の文化史72 (財)法政大学出版局 1993年6月1日
- (8) 遺跡出土の鉄製壺先には次の4例がある。
- ①福岡県筑紫郡大宰府町御笠川南条坊遺跡
 鎌倉時代
 浜田信也「鉄製品」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集 前川威洋他編 福岡県教育委員会 1978年3月31日
- ②広島県福山市草戸千軒町遺跡 S D540
 15世紀中頃～15世紀後半
 福岡政文「金属製品」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ—北部地域南半部の調査—』広島県草戸千軒遺跡調査研究所 1994年3月30日
- ③島根県匹見町広瀬遺跡
 室町時代末期カ
 木下忠「島根県匹見町広瀬出土の壺籠の再検討」『考古論集—慶祝松崎寿和先生63歳論文集』松崎寿和

先生退官記念事業会 1977年3月

木下忠「Ⅳ、古代の犁」『日本の鎌・鋤・犁』社団法人大日本農会編 1979年1月20日

④山梨県八代郡八代町八王子遺跡

平安時代（9世紀前半）

中山誠二「山梨県 25八王子遺跡」『古代における農具の変遷—稲作技術史を農具から見る—』発表要旨
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994年11月26日

犁先鋤型は次の3遺跡から出土している。

①大阪市東区道修町遺跡

豊臣時代1期

森毅「〔船場〕道修町の発掘調査」『葦火』第5号 (財) 大阪市文化財協会編 1986年12月1日

伊藤幸司「道修町出土の鋤型とその製作実験」『葦火』第7号 (財) 大阪市文化財協会編 1987年4月1日

森毅「都市のなかの職人・商人 鋤物屋と魚市場」『よみがえる中世』2 佐久間貴土編 (株) 平凡社 1989年2月6日

②山口県萩市郡司鋤造所跡遺跡

江戸時代

上山佳彦編『郡司鋤造所跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第30集 (財) 山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター 2002年3月27日

③伊丹郷町第192次調査S X 1001

江戸時代（天保年間）

伊丹市立博物館「酒の町 伊丹」解説資料第49号 平成16年度秋季企画展 2004年10月

その他犁先に関しては下記の文献を参照した。

朝岡康二『日本の鉄器文化』考古民俗叢書 慶友社 1993年3月28日

朝岡康二「鋤き作り—湯釜と『百姓伝記』を中心として—」『民具マンスリー』第12巻第9号 1979年12月（木下忠・網野善彦・神野善治編『生産技術と物質文化』日本歴史民俗論集2 (株) 吉川弘文館 1993年4月1日 所収）

河野通明『日本農具史の基礎的研究』(祐和泉書店 1994年2月28日)

犁先先端部の形状に関しては下記の文献を参照した。これによると犁先先端部は時代が下るに従い擬宝珠状に突出するようになるが、そうでないものが並存すること、それらは耕作地の土質によって使いわけがなされることなどが知られる。

河野通明「御田植神事の模型犁」『近畿民具』第13輯 1989年（『日本農具史の基礎的研究』前掲書所収）

吉田晶子「犁先の鋤造—河内惣官鋤物師、田中家の事例報告—」『近畿民具』近畿民具学会年報第11輯 近畿民具学会 1987年10月31日

渡辺武「西南中国の犁と犁耕文化」『四川の伝統文化と生活技術』渡辺武・霍巍・C・ダニエルズ編 慶友社 2000年8月28日

(9) 三輪茂雄「白(うす)もの」と人間の文化史25 (財) 法政大学出版局 1978年3月1日

秋山浩三「迷いの資料・5分画挽き白の謎—石臼雑記(2)—」『大阪文化財研究』第22号 (財) 大

阪府文化財センター 2002年6月

秋山浩三「大和山中挽き臼踏査覚書—民俗(民具)資料・考古遺物の接点と歴史の変遷:石臼雑記(4) —」『大阪文化財研究』第25号 (財)大阪府文化財センター 2004年3月

- (10) 井戸集水施設ではないが井戸枠に曲物を使用する例は、広島県草戸千軒町遺跡や東大阪市内の遺跡ではほぼ14世紀までであることが報告されている。

鐘方正樹「井戸の考古学」ものが語る歴史8 (株)9同成社 2003年12月25日

岩本正二「5 井戸」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』V 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1996年3月29日

東大阪市立郷土博物館『中世のくらし』 1984年3月4日

(11) 曲物

岩井宏實「曲物(まげもの)もの」と人間の文化史 (財)法政大学出版局 1994年4月5日

成田寿一郎『日本木工技術史の研究』 (財)法政大学出版局 1990年2月28日

成田寿一郎「曲物・簞物」木工諸戦双書 理工学社 1996年12月1日

西村歩「曲物の細部技法—継ぎ方を中心として—」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994年8月14日

尚、曲物側板の内面ケビキが「ななめ+たて」方向に施されるのは13世紀までで、14世紀にはなくなるという報告も大阪府出土例を基になされている。

市川秀之「曲物」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・IV—東大阪市東石切町所在—』大阪府教育委員会 1987年3月31日

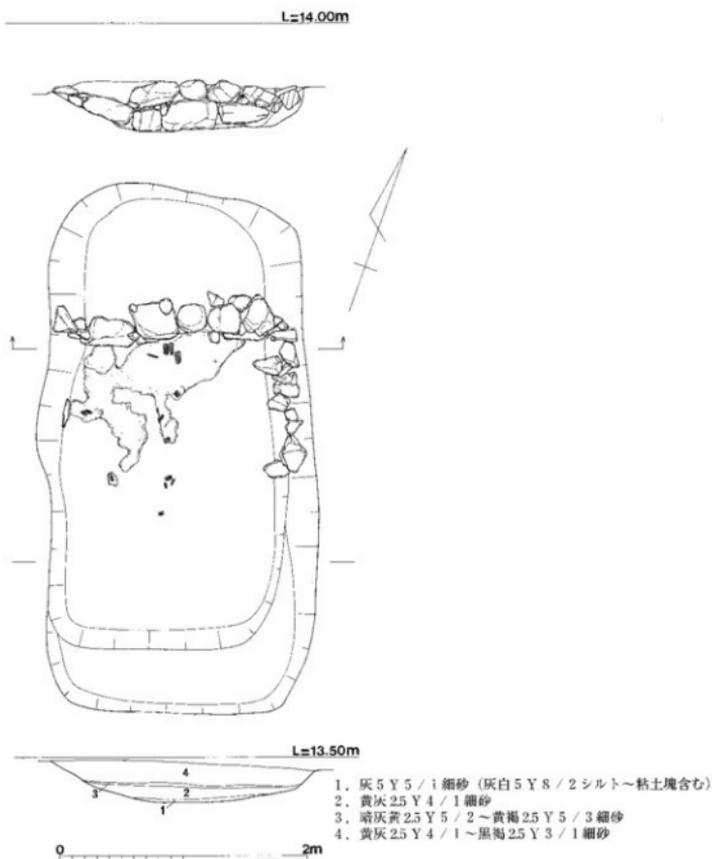
- (12) 浅谷誠吾「第4章発掘調査」『重要文化財如意寺三重塔保存修理工事報告書』(財)文化財建造物保存技術協会編 1997年3月
- (13) 岡田章一・長谷川眞「兵庫津遺跡出土の上製煮炊具」『研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2003年9月1日
- (14) 長谷川眞「近世丹波焼の成立と展開—丹波焼における技術移入・導入と技術拡散を中心に—」『塵界』第15号 兵庫県立歴史博物館 2004年3月30日
- (15) 藤澤良祐「城郭出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』(株)新人物往来社 1991年12月25日

第5節 江戸時代

遺構と遺物

S X 02

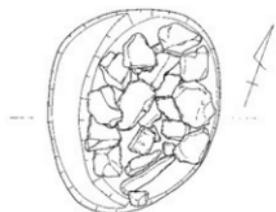
西約2.2m、南北約4.3m、深さ約40cmの隅円長方形の土坑で、土坑内部の中央部やや北側と東側に石組が残る。北側の石組は2段分が、東側のそれは1段のみ残存していた。中央部底面には焼土層と炭が北側石組に接してあったが、石組南面に赤変箇所は明確に認められなかった。また土坑底面にも赤変箇所は見られなかった。土坑埋土中からの遺物は極めて少なく青磁細片、中国製青花（ⅢC群、15世紀末～16世紀前半）の細片、瓦質羽釜と共に近世の炮烙片が検出された⁽¹⁾。



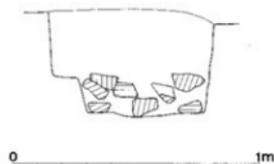
第61図 S X 02平面図・石組立面図・土層断面図

S K 08

東西約70cm、南北約85cm、深さ約45cmの不整楕円形の土坑である。底部は2段になり、直径20cmほどの自然石と共に砂目の肥前系陶器皿、肥前系磁器皿が出土した。



L=13.50m



0 1m

第62図 S K 08平面図・断面図

S K 09

直径約40cm、深さ約10cmの小円形土坑内から瓦質火舎が出土した。瓦質火舎は約3分1を残すのみだが、ほぼ水平の状態の底部からみて埋置されたものと考えられる。

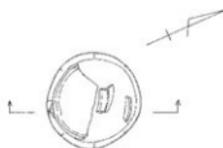
314は瓦質火舎で口径30cm、高さ16.6cmである。底部～脚部の破片と、それとは接合しない口縁部の破片を図上で接合したものである。体部外面には細かい格子タタキがある。

獸脚部は中空で裏面から径7mmで穿孔される。共存遺物がないが、類例が山口県萩城にあり⁽¹⁾近世のものだと判断した。

S K 10～12

S K 04の北辺で検出された円形土坑である(第56図)。S K 10は直径約45cm、深さ約15cm、S K 11は直径約45cm、深さ約30cm、S K 12は直径約50cm、深さ約20cmである。S K 11には小形の桶の一部が残存していた。他の2基についても同様の規模を有すことから判断してそれぞれに小型の桶が埋置されていたものと推定される。S K 11から櫛スリ目の丹波スリ鉢片が出土し、近世のものと考えられる。

315は小型の桶である。現存する高さ8.3cm、復元径約24cmを測る。ヒノキの銅板は板日板で、幅は約3.5cm～8.0cm、厚さ1.4cmの内湾するものが4枚残存していた。底板や箆などは出土していない。



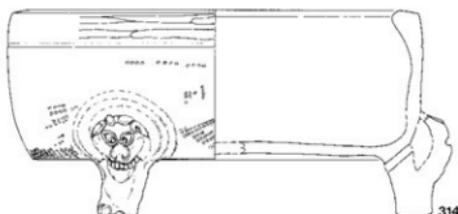
L=13.50m



0 50cm

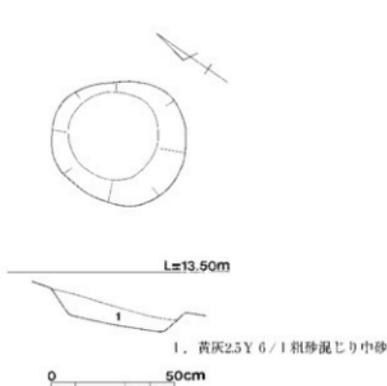
1. 黄灰2.5Y 5/1～暗灰黄2.5Y 5/2 細砂

第63図 S K 09平面図・断面図

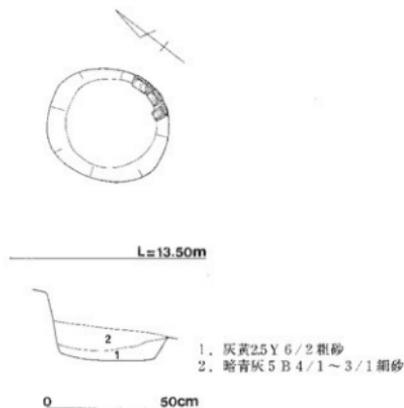


0 20cm

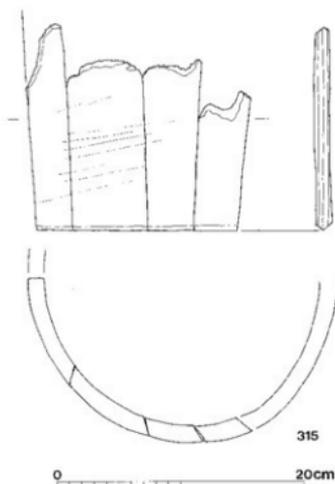
第64図 S K 09出土瓦質火舎実測図



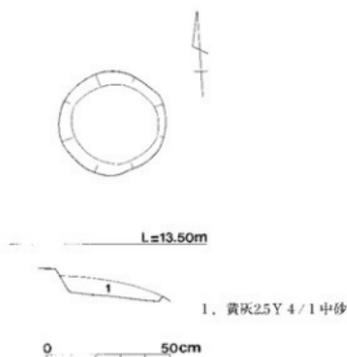
第65図 SK 10平面図・土層断面図



第66図 SK 11平面図・土層断面図



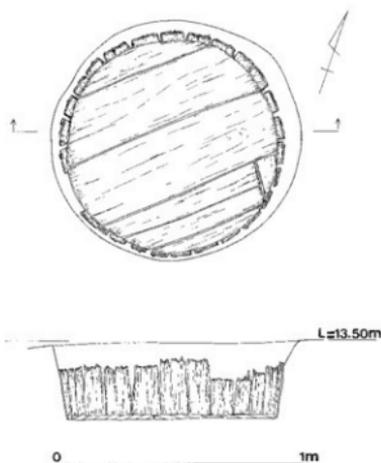
第67図 SK 11出土桶実測図



第68図 SK 12平面図・土層断面図

SK 13

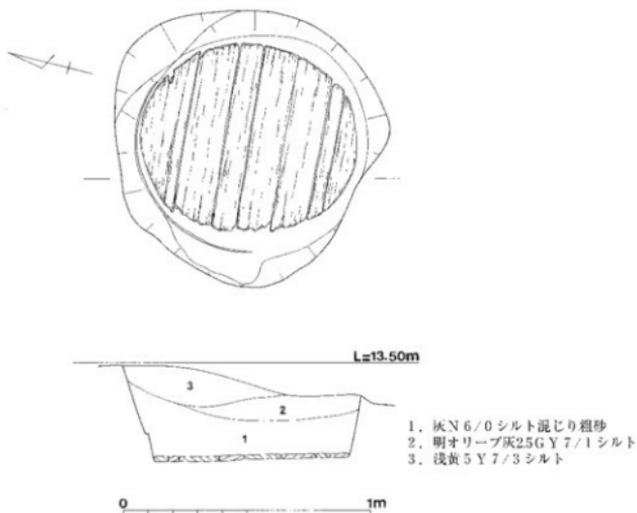
直径約1m、深さ約40cmの円形土坑である。内部に直径約85cmの桶が埋置されていた。SK 13は最も桶の残存状態が良好なもので底板は大小6枚からなり、側板は計26枚が残存していた。ただし杵材の状態は良好ではなく、残存高約25cmほどである。埋土から瓦質羽釜、近世磁器類、近世丸瓦片などが出土した。



第69図 SK13平面図・断面図

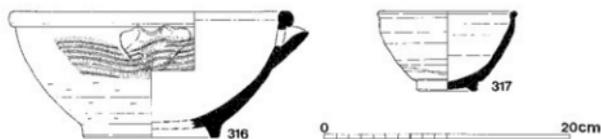
SK14

SK14は直径約1.1m、深さ約40cmの円形土坑で、内部に直径約90cmの桶が埋置されていた。桶の残存状況は良好ではなく、8枚からなる底板と最下と考えられる箍が1条部分的に残っていた。内部から肥前系陶器の片口鉢と瀬戸・美濃天日塊が出土した。



第70図 SK14平面図・土層断面図

1. 灰N6/0シルト混じり粗砂
2. 明オリープ灰25GY7/1シルト
3. 浅黄5Y7/3シルト



第71図 S K 14出土遺物実測図

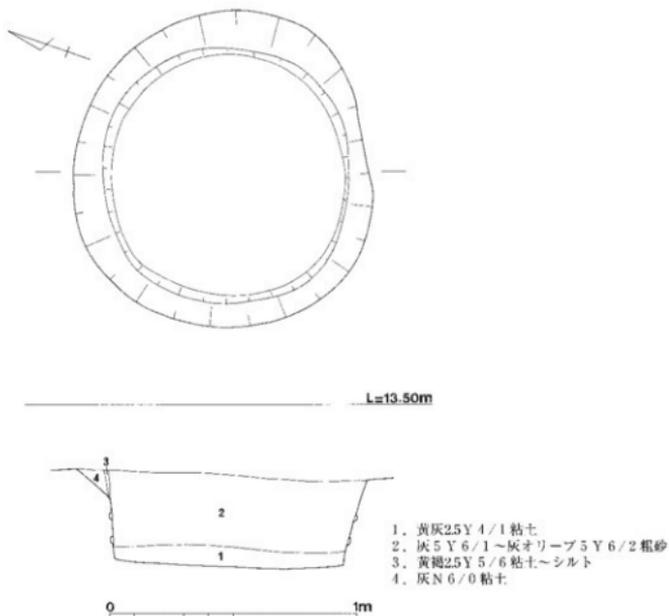
316は肥前系陶器の片口鉢である。口径21.2cm、器高10.3cmで40%程度が残存する。外面全面に褐色釉を施した後、白濁釉で波状文を描く。17世紀末頃と思われる⁽³⁾。

317は瀬戸・美濃の天目埴で底部外面は露胎、その他の内外面に褐色釉を施している。口縁部は緩やかに立ち上がり、口縁端部は外方に肥厚させている。口径11cm、器高6.5cmである。17世紀後半と考えられる⁽⁴⁾。

S K 15

S K 15は直径約1.3m、深さ約40cmの円形土坑で、直径約90cmの桶が埋置してあったものと考えられる。ただ木質部は全く残っておらず、土坑壁面に上下2条の籬の痕跡があった。

埋土から18世紀代の丹波スリ鉢片や、柄杓と考えられる小型曲物の底板などが出土した。



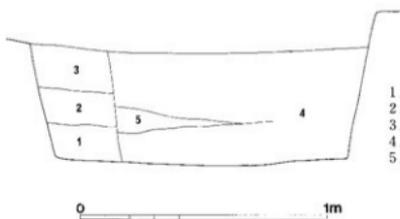
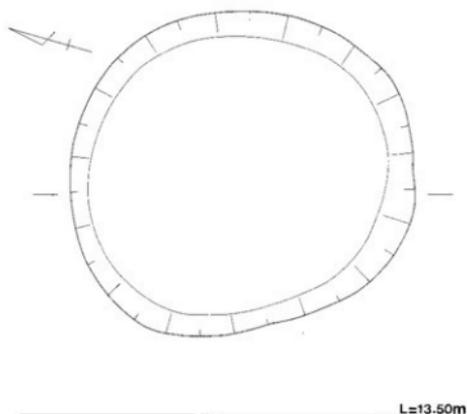
第72図 S K 15平面図・土層断面図

1. 黄灰2.5Y 4/1 粘土
2. 灰5 Y 6/1～灰オリーブ5 Y 6/2 粗砂
3. 黄褐色2.5 Y 5/6 粘土～シルト
4. 灰N 6/0 粘土

S K 16

S K 16は直径約1.4m、深さ約60mの円形土坑で、内部南よりに直径約90cmの桶が埋置してあった事が土層断面から伺われる。

埋土から見込みにコンニャク印の五弁花文を持つ肥前系磁器碗や、瓦などが出土した。尚、このS K 16の南に接しほぼ同規模の円形土坑があったが、埋土から遺物が出土しなかったことから攪乱として扱ったが、S K 16およびこれ以外の円形土坑と同様の性格を持つものとも推定される。



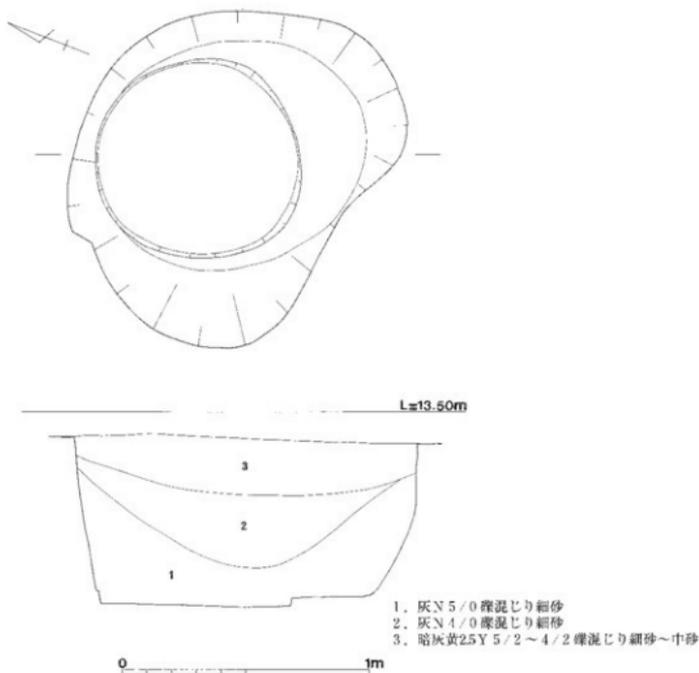
1. 暗緑灰10G 4/1シルト～粘土
2. 黒N 2/0 灰層
3. 緑灰5 G 5/1シルト～粘土
4. オリーブ灰2.5G Y 6/1粘土
5. 灰N 5/0～4/0 細砂～中砂

第73図 S K 16平面図・土層断面図

S K 17

S K 17は直径約1.4m、深さ70cmの円形土坑で、内部北よりに直径約80cmの桶が埋置してあった事が土坑底部の痕跡から推測できる。また底部付近から桶の一部も検出されている。

埋土から肥前系磁器碗の小片や平瓦片が出土した。いずれも小片で時期を確定することはできなかった。



第74図 SK 17平面図・土層断面図

SK 18 SK 18は直径約90cm、深さ約40cmの円形土坑である。内部からは桶の痕跡は検出されていない。

埋土から白磁の細片が出上した。肥前系磁器と思われるが明確ではない。時期も明確ではない。

SK 19 SK 19は直径約80cm、深さ約35cmの円形土坑である。内部からは桶の痕跡は検出されていない。埋土から土師器小皿、肥前系陶器碗・皿と土錘が出上した。SK 18とこの19はいずれも内部から桶の痕跡は検出されていないが、その規模や構築場所からみて桶埋置土坑であった可能性が考えられる。

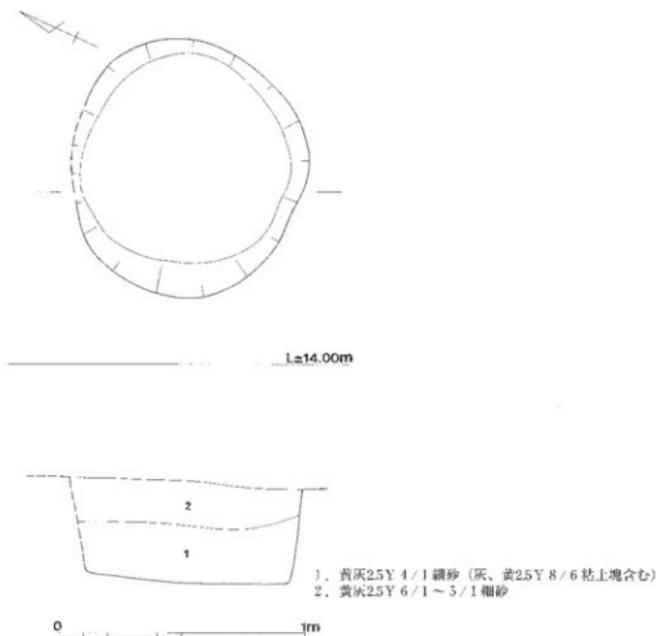
318~323は土師器小皿である。318は褐色系で直径10.8cm、高さ1.95cmで底部外面に回転ヘラケズリを施している。口縁端部に煤が附着する。319・320・322・323は白色系で直径7.0cmから10.3cm、高さ1.1cmから1.8cmである。320は口縁部外面にヨコナデを加えるが、その他は指オサエ、ナデで調整している。口縁端部に煤が見られるものが多い。321は灰色系のものである。口径9.6cm、高さ1.7cmで口縁部外面にヨコナデを施す。

これらの小皿は細片化したものが多く数量を正確に記しがたいが、円化したものを含め、褐色系1、白色系9以上、灰色系1を数える。

324・325は肥前系陶器の埴・皿である。

326は土錘である。高さ6.9cm、幅4.2cmで胎土は白色系土師器皿のそれに近い。

このほか初期伊万里と思われる瓶、瀬戸・美濃天目埴や肥前産京焼写し陶器と思われる破片などが出土した。17世紀代と考えられる。

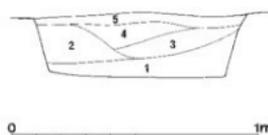
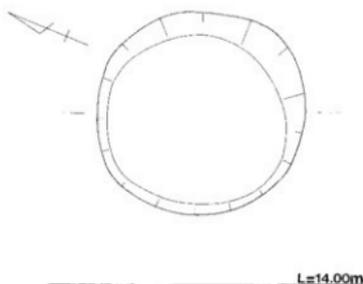


第75図 SK18平面図・土層断面図

SK20

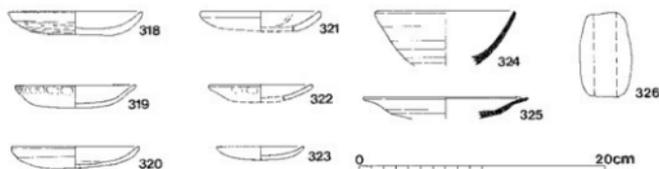
SK20は直径約1.1m、深さ約40cmの円形土坑である。内部に直径約90cmの桶が埋置してあった事が埋土の上層断面から推測できる。桶は上坑底部に厚さ約20cmの砂を敷いた後で設置されたものと推定される。

埋土から時期を確定し得る遺物は出土しなかったが、位置や規模、埋土の状況から近世のものと判断した。



1. 灰5Y5/1中砂～粗砂
2. 黄灰2.5Y6/1中砂
3. 黄橙10YR7/8シルト～粘土
4. 浅黄2.5Y7/3粘土
5. 灰5Y5/1細砂

第76図 SK 19平面図・土層断面図



第77図 SK 19出土遺物実測図

SK 21

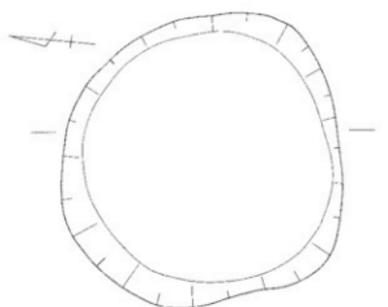
SK 21は直径約1.2m、深さ約40cmのやや歪な円形土坑である。土坑底面は水平で、他の植埋置土坑と共通するが、桶が設置されていたか断定はできない。

埋土に土師器の細片が含まれていたが、時期を断定できない。後述のSK 22と共にSK 13～SK 20とはやや離れた場所で検出されたが、規模や埋土の状況から近世のものとして判断した。

SK 22

SK 22は直径約1.3m、深さ約70cmの円形土坑である。内部に直径約90cmの桶が埋置してあった事が埋土の土層断面から推測できる。

SK 21同様時期を確定するだけの遺物は出土していない。



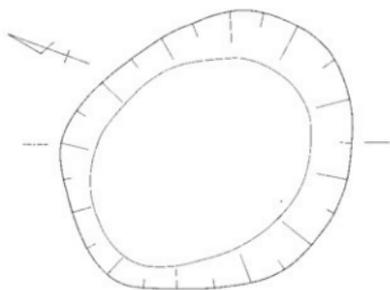
L=13.50m



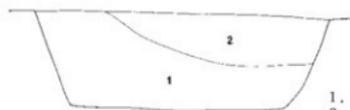
1. 緑灰75G Y 6 / 1 細砂～中砂 (地山崩壊土)
2. にくい黄2.5 Y 6 / 4 細砂混じり粘土
3. 明黄褐2.5 Y 6 / 8 粗砂混じり粘土
4. 黄灰2.5 Y 4 / 1 礫混じり粘土 (明黄褐色粘土塊含む)

0 1m

第78図 S K 20平面図・土層断面図



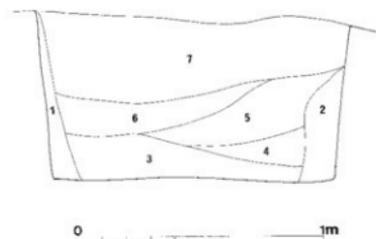
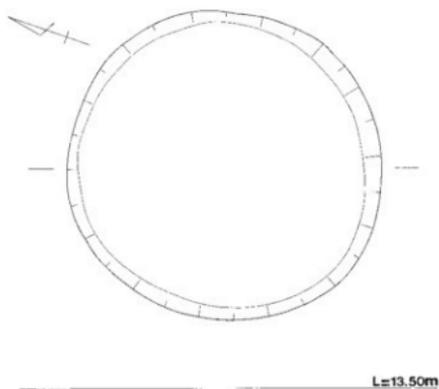
L=13.50m



1. 灰N 4 / 0 中砂 (明黄褐10 Y R 6 / 6 粘土塊含む)
2. 暗灰黄2.5 Y 5 / 2 細砂混じり中砂

0 1m

第79図 S K 21平面図・土層断面図

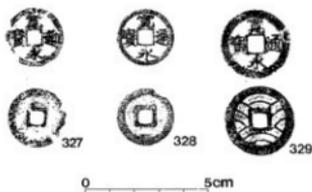


1. 地山崩壊土
2. 地山崩壊土
3. 暗青灰 5 PB 4 / 1 細砂
4. 黄灰 2.5 Y 4 / 1 細砂
5. 黄灰 2.5 Y 5 / 1 細砂
6. 青灰 5 PB 3 / 1 粘土
7. 褐灰 10 Y R 5 / 1 雑混じり細砂

第80図 S K 22平面図・土層断面図

このほか、遺構に伴わない近世以降の陶磁器、金属器、瓦などが出土している。第60図でその一部を示したが、紙面の都合上割愛しここでは銭貨のみ報告する。

327・328は古寛永通宝で、329は1769年以降の寛永通宝四文銭である。



第81図 遺構外出土銭貨拓影

注

- (1) 炮烙は細片のため図示できないが、難波洋三氏分類のDa 1類（18世紀前半）と思われる。
難波洋三「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究』第9 八木久栄編（財）大阪市文化財協会
1992年6月15日
- (2) 萩城跡出土の瓦質火舎は17世紀前葉～中葉とされる。
岩崎仁志他編「萩城跡（外堀地区）Ⅱ」山口県埋蔵文化財センター調査報告第46集 山口県埋蔵文化財
センター 2004年3月30日
- (3) 家田淳一「陶器の編年2、搦鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水柱・灯火具」『九州陶磁の編年』九
州近世陶磁学会10周年記念 九州近世陶磁学会 2000年2月11日
長谷川眞「伊丹郷町発掘調査報告書」兵庫県文化財調査報告書第123冊 兵庫県教育委員会 1993年3
月31日
- (4) 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 瀬戸市歴史民俗資料館
1986年3月31日
藤澤良祐・岡本直久「江戸時代の瀬戸窯業」『江戸時代の瀬戸窯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
企画展図録 2002年11月30日

第3章 自然科学的調査

第1節 森南町遺跡第1次調査出土木材の樹種

三村 昌史 (パレオ・ラボ)

ここでは第1次調査に伴う出土木材のうち、計105点の樹種同定結果を報告する。このうちの大半はSD02の東西方向に打ち込まれていた杭材であり、その他にはSD02出土の矢板・割材・柱材、円形土坑SK11出土の桶板などが含まれる。時代的にはSD02出土のものが弥生時代後期末から古墳時代初頭、SK11のものが近世と考えられており、SD02は水田への導水施設と想定されている。これら遺物の樹種構成と形状・使用方法・製作法などの遺物の特徴との関連から、樹種の選択圧の有無やその背景に係わる木材利用について調査した。

1. 方法

遺物から採取されチャック付きのビニール袋に小分けにされた木材小片から、剃刀を用いて横断面・放射断面・接線断面の3断面を切り取り、ガムクロラル (アラビアゴム・グリセリン・抱水クロラル・蒸留水の混合液) で封入してプレパラートを作成した。検鏡は光学顕微鏡にて40~400倍で行い、現生標本との対照により同定を行った。なおプレパラートは神戸市理蔵文化財センターに保管されている。

2. 結果と分類群の記載

樹種同定の結果、対象遺物中に針葉樹材ではイヌガヤ・アカマツ・マツ属複雑管束亜属・ヒノキ・ヒノキ科が、広葉樹材ではツブラジイ・シイノキ属・コナラ節・クスギ節・アカガシ亜属・エノキ属・ツバキ属・イボタノキ属が認められ、計13分類群が検出された (表3, 4, 5)。このうち、マツ属複雑管束亜属・ヒノキ科・シイノキ属としたものは、材組織の保存不良等によりそれ以下のレベルでの同定がなしえなかったものである。主な器種別にみると、見出された樹種は88点ある杭材では13分類群すべてが見出され、矢板7点中にはクスギ節・アカガシ亜属の2分類群、桶材6点中にはヒノキ・アカガシ亜属の2分類群が見出された (表4, 5)。次に、これら検出された分類群の解剖学的記載等を行うと共に、代表的な切片の光学顕微鏡写真を写真図版に付けて同定の根拠を示す。

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K.Koch (イヌガヤ科) 写真図版1a~1c

仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで明瞭でなく、晩材部の量は少ない。仮道管壁は全体にやや厚く、丸みを帯びる。樹脂細胞は早材・晩材の区別なく散在する傾向にある。仮道管の内壁にはらせん肥厚がみられ、しばしば対になる傾向がある。分野壁孔は小さなヒノキ型で、1分野にふつう2~3個。

イヌガヤは小高木になる常緑針葉樹で、主に温帯下部~暖温帯に分布する。耐陰性の高い樹種で林床や谷沿いの陰湿地にみられる。材質はやや緻密で硬い。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. (マツ科) 写真図版2a~2c

仮道管と放射組織、放射仮道管、および水平・垂直両樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞からなる針葉樹材。エビセリウム細胞は薄壁で、保存性は悪い。放射仮道管の水平壁は、内腔側に向かって鋸歯状の突起を有し、鋸歯の先端部は鋭利で鋸歯の間隔も密、時に重鋸歯状となる。分野壁孔は大型の窓状。

アカマツは温帯～暖温帯にかけて広く分布し、主に尾根沿いなどの立地や二次林山中などの土壌の薄く明るい立地にみられる。材質は針葉樹材の中では重硬で割裂困難、保存性は中層であるが水湿には耐性がある。マツ属複維管束重属 *Pinus subgen. Dipoxylon* (マツ科)

材組織の保存が悪く放射仮道管の水平壁の鋸歯が部分的にしか観察されないものであり、その他は上のアカマツと同様の材構造を持つ。マツ属複維管束重属にはアカマツの他、クロマツ *Pinus thunbergii* Parlatores が含まれ、どちらの材であるかは判断できない。

ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* (Sieb. et Zucc) Endl. (ヒノキ科) 写真図版3a～3c

仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、樹脂細胞はこの移行部分にかけて散在し、しばしば接線方向に配列する。また晩材部は量少ない。分野壁孔は大型のトウヒ型からヒノキ型でやや大きく、1分野にふつう2個。

ヒノキは主に暖温帯に分布し山地の尾根沿いなどの乾性立地に生育する、高木になる常緑針葉樹である。材質はやや軽軟であるが強度に優れ、加工し易く保存性が著しく高いという特徴がある。

ヒノキ科 *Cupressaceae*

材組織の保存が悪く分野壁孔の孔口がほとんど観察されないもので、その他の材構造はヒノキと同様なのであり、種の特定は困難である。ヒノキ科にはヒノキの他、サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endl.、アスナロ *Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.等が含まれる。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb. ex Murray) Schottky (ブナ科) 写真図版4a～4c

直径約150～200 μm の丸い導管が、年輪の始めに単独で間隔をあけて並び、その後はやや不規則に径を減じながら分布し、晩材部では極小型の薄壁で角張った導管が火炎状に配列する環孔材。木部柔細胞は散在状～短接線状。導管の穿孔は単一。放射組織は単列同性のものと、多列の複合状のものからなる。

ツブラジイは高木になる常緑広葉樹で、暖温帯に分布する照葉樹林要素の樹木の一つである。材質はやや重硬、割裂・加工は困難でなく、保存性は良好でない。

シノキ属 *Castanopsis* (ブナ科)

放射組織に複合状のものが確認されない以外は、上記のツブラジイと同様の材構造を有するものである。シノキ属にはツブラジイの他、スタジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatusima ex Yamazaki et Mashibaが含まれ、両者は複合放射組織の有無により区別されるが、今回は遺物の肉眼観察により組織の観察を行っておらず、試料も小片で十分に横断面・放射断面の採取がし得なかったためシノキ属に留めている。

コナラ節 *Quercus sect. Prinus* (ブナ科) 写真図版5a～5c

年輪の始めに直径約150～300 μm の丸い道管が単独で1～2列に並び、晩材では極小型でやや角張った道管が火炎状に配列する環孔材。木部柔組織はいびつな接線状で1～2列。道管の穿孔は単一で、道管内部にはチロシスが著しい。放射組織は単列同性であるが大型の複合放射組織が混在する。

コナラ節には温帯下部～暖温帯に分布するコナラ *Quercus serrata* Thunb. ex Murray、上に暖温帯の湖畔や沿海地に多いカシワ *Quercus dentata* Thunb. ex Murray、暖温帯に点在して分布するナラガシワ *Quercus*

aliena Blumeなどが含まれる。いずれも重硬で弾性を持つ材で、保存性は中庸、割裂・加工は困難である。

クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* (ブナ科) 写真図版6a~6c

直径約200—300 μm の丸い導管が単独で1—数列ならび、そこから径を減じていき、年輪界付近では丸く厚壁の小導管が単独で放射方向に配列する環孔材。木部柔細胞は数列の束になって、まばらな帯状に分布する。導管の内腔にはチロースが認められる。導管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列のものに複合放射組織を交える。道管と放射組織との壁孔は櫛状。

クヌギ節にはクヌギ *Quercus acutissima* Carruthers、アベマキ *Quercus variabilis* Blumeが含まれる。いずれも暖温帯の向陽地に多くみられる、高木になる落葉広葉樹である。材質はいずれも重硬であり弾性を有する材で、割裂・加工は困難。

アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* (ブナ科) 写真図版7a~7c

直径80—120 μm で丸い厚壁の導管が単独で1—数列まとなり、やや斜めに連なって放射方向に配列する放射孔材。導管の穿孔は単一で、木部柔細胞は数列の束となって何層もの帯状に配列する。導管の内腔にはチロースが認められる。放射組織は単列同性のものに5mm複合—広放射組織が混じる。

アカガシ亜属の母植物としてはアカガシ *Quercus acuta* Thunb. ex Murrayほか数種が考えられる。種によって若干分布は異なるが、いずれも高木になる常緑広葉樹で、暖温帯の主要な樹種である。材質はいずれも重硬で強靱な部類に属し、加工は困難、割裂性は中庸—やや困難である。

エノキ属 *Celtis* (ニレ科) 写真図版8a~8c

直径約150—250 μm で丸く壁の厚い導管が、単独ないしは1—2個複合してややまばらに配列し、年輪界付近では直径約20—50 μm でやや角張った導管が多数複合して、接線状・かたまり状に分布する環孔材。導管の穿孔は単一。木部柔細胞は周囲状。放射組織は異性で、直立細胞数個からなる低い単列のもの、6—8列程度の多列部のものがあり、多列部のものには鞘細胞がみられる。鞘細胞にはしばしば結晶が認められる。小導管の内腔にはらせん肥厚が認められる。

エノキ属の母植物にはエノキ *Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* (Planch.) Nakai、エゾエノキ *Celtis jessoensis* Koidz.が主に考えられる。どちらも河畔などの適湿な向陽地にみられる高木になる落葉広葉樹で、エノキはエゾエノキに比べ暖温帯に分布が偏り、沿海地などにも多い。材質は重さが中庸でやや硬く従曲性を持ち、割裂はやや困難。

ツバキ属 *Camellia* (ツバキ科) 写真図版9a~9c

直径約30—40 μm で薄壁のやや角張った導管がほぼ単独で並び、その後はゆるやかに径を減じて晩材では極小型の角張った導管が数個複合して散在する散孔材。木部柔細胞は散在状。導管の穿孔は階段状で10本程度。放射組織は異性で2—3列、しばしば大きな結晶を含む。導管と放射組織との壁孔は階段状。

ツバキ属にはヤブツバキ *Camellia japonica* L.、サザンカ *Camellia sasanqua* Thunb.等が含まれるが、現在の植物分布を考慮すると母植物はヤブツバキであろう。ヤブツバキは小高木—高木になる常緑広葉樹で暖温帯の山地にみられる。材質は日本産木材のうちでも最も重硬で強靱な部類に入り、加工困難で耐朽性が大きい。

イボタノキ属 *Ligustrum* (モクセイ科) 写真図版10a~10c

年輪の始めに一回り大きい直径約50 μ m前後の丸い導管が、単独あるいは接線方向に1-2個複合して間隔をあけて1列に並び、その後は一回り小さい直径約20-30 μ mの丸い導管がほぼ単独でまばらかつ均質に分布する環孔性の散孔材。導管の穿孔は単一で内腔にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性で1-2列、しばしば結晶を含む。

イボタノキ属の母植物は暖温帯の林内に普通な常緑の小高木のネズモチ *Ligustrum japonicum* Thunb. が主に考えられる。

3. 考察

以下では、弥生時代後期末から古墳時代初頭に相当するSD02出土木材と近世に相当するSK11出土木材について分けて考察を行う。

SD02出土木材

対象遺物中最も多いのは2条検出された杭列の杭材であり、その樹種の組成は大半(63.6%)をクスギ節が占め、コナラ節(9.1%)・アカガシ亜属(5.7%)・ツブラジイ(5.7%)・ヒノキ(4.5%)などの樹種が続いている。今回同時にSD02の堆積物を用いて行われた花粉分析の結果(第2節参照)をみると、杭材に多く用いられた上記の樹種の属する花粉は比較的多く検出されているものの、双方の分析では調和的でない部分もある。例えば杭材ではヒノキは4.5%しか検出されていないが、ヒノキの属するイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科花粉は最も優占しているほか、花粉ではアカガシ亜属とコナラ亜属がほぼ同じくらい検出されているが、杭材としてはクスギ節・コナラ節といったコナラ亜属の材の方が圧倒的に多く用いられている。

こうした相違の要因として考えられるのが、ひとつは西日本における農具の用材として一般的なアカガシ亜属の材を意図的に杭材には用いないようにした可能性がある。また、樹種の樹高・樹形等も杭材の採取の際に影響を与えることが考えられる。クスギ節やコナラ節の樹種は萌芽性が強く、基部から株立ち状になることも多いために適度な径長の杭材の採取に適したことが想定される一方、ヒノキの樹形はそのようになることはなく、主幹は真直ぐに伸長し、幹の基部近くに枝はあまりつかず枝の径も太くなりにくいことから、杭材としては利用しにくかったことが想定される。また、そもそも花粉分析結果は周囲の比較的広い範囲の植生を反映しているものであるから、ある林分から採取されたであろう杭材の樹種構成とは異なっている当然で、その林分に局所的にクスギ節などが多かったに過ぎないのかもしれない。ここで、神戸市内の遺跡におけるこうした杭材の樹種同定の事例(例えば、株式会社古環境研究所 1995; 藤根 1999; 植田 1999, 2000, 2001; 松葉 2000, 2001a, 2002; パリノ・サーヴェイ株式会社 2001)を参照してみると、これといった決まった樹種が用いられるといった傾向にはなく、各遺跡で使用されている樹種は雑多である。こうしたことを考慮すると、杭材採取には前述したような選択性が働くことは考えられるが材質に着目した選択性は弱く、したがってその樹種構成は杭材を採取した林分の樹種構成を比較的反映していると考えられ、SD02に見出された杭材は、落葉広葉樹であるクスギ節が広がりコナラ節・エノキ属などの他の落葉広葉樹が多い明るい林分から採取されたものであろう。その林分にはアカガシ亜属・ツブラジイ・ツバキ属・イボタノキ属といった照葉樹林要素の常緑広葉樹は少なかつたとみられる。また、僅かであるがアカマツやマツ属複雑管束亜属といった分類群が検出されていることは時代的にも注目されるであろう。繰り返しの伐採など植生への強い攪乱が働き始めて、これらの樹種の定着に適した明るく土壌の薄い立

地ができていたと考えられる。全国的にはしばしばこうした杭材にヤナギ属などの湿生樹種が見出されることがあるが、本調査で検出された樹種は適湿～やや乾燥した立地にみられるものであることから、杭材が近辺で採取されたものであるならば、SD02の掘削・導水以前に近辺は水湿の存在する環境でなかったことも想定される。SD02北側の杭列と南側の杭列とでその樹種構成を比較してみると、最も多く用いられている樹種はクスギ節で共通するが、北側の杭列では他の樹種も多く見出されてより多様性が認められる(表4)。一般に、安定した林に伐採などの擾乱が起きると、林床への光環境が好転化してさまざまな樹種が侵入して種数からみた多様度は高くなり、特に明るい立地を好む樹種や先駆的な樹種が多くなる。しかしながら、SD02南側比べてより多様なSD02北側の杭列の樹種をみる限り、特にそのような樹種が多いというわけではなくクスギ節以外の樹種ではアカガシ亜属・ツブラジイ・ツバキ属・イボタノキ属といった照葉樹林要素の樹種がほとんどであるから、これはおそらく、北側の杭材を採取した林分がより人為的な干渉が加わっていたというよりも、もともと局所的に樹種数が多かったということであろう。

次に杭材の種別に着目すると、角杭とみかん割にした割杭に限ってヒノキ・ヒノキ科といった針葉樹材が見出されているが(表5)、これはこうした針葉樹材が通直であり、板目・柾目のどちらにも割裂容易であるという材特性を反映した結果とみられ、また前述したように適度な枝材を得にくかったためとも考えられる。忌持材の丸杭にはアカガシ亜属・アカマツ・イボタノキ属・ツバキ属といった材が見出されているが、その背景としては割裂の必要のない適度な径の材であったことのほかに、これらの材が強固で割裂困難であったためとも想定される。ただしアカガシ亜属は割杭にも用いられており、同様に硬い材であるクスギ節も割杭に多く用いられているが、これらの樹種は軟らかい組織である広放射組織(木口面で放射方向に走る髄線として確認される)を有するので、これに沿って割裂してみかん割材を製材することはそれほど困難でなかったであろう。全体でも最も多く見出されたクスギ節の材は、丸杭・割杭・転用杭のいずれにも最も多く見出されている。

その他では、矢板7点中に丈夫なクスギ節とアカガシ亜属の材がそれぞれ6点・1点ずつ見出されており(表5)、強度に配慮した樹種選択がなされた可能性がある。柱材には前述した通り人為的な干渉により周辺で増加し始めていたとみられるマツ属複雑維管束亜属の材が用いられていて、柱材として用いられるだけの十分に生育した個体が周囲にみられたことが想定され、加えて丈夫な材質への着目も伺える。

SK11出土木材

対象としたSK11出土木材のほとんどは桶板であり、5点すべてにヒノキが用いられていることが明らかになった(表5)。前述したようにヒノキの材は通直で割裂性・加工性に優れる上、強度・腐朽性も大きいために用いられたのであろう。神戸市内の他の遺跡においても、このような桶板をはじめ板材状の製品に時代を問わず針葉樹材が多く、その中でもヒノキは比較的に見出されており(例えば、鳥地1996; 松葉2001a,2001b,2002; バリノ・サーヴェイ株式会社2001)、これらの事例と共通性を有するものであるといえる。

引用文献

- 株式会社古環境研究所(1995) 木質遺物の樹種同定、「神戸市東灘区 本山中野遺跡 一道路状遺構の調査—」六甲山麓遺跡調査会、52-65 *図版32-37
- バリノ・サーヴェイ株式会社(2001) 御倉遺跡から出土した木器等の樹種「御倉遺跡 第4・6・14・32次発

掘調査

- 報告書 御音西地区震災復興十地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 神戸市教育委員会, 114-128
- 藤根久 (1999) 北青木遺跡出土の樹種同定. 「北青木遺跡発掘調査報告書—第3次調査—」神戸市教育委員会, 81-101
- 松業礼子 (2000) 水田浜畔出土木材の樹種同定. 「玉津田中遺跡発掘調査報告書 第8・10・12・13・15次調査—宮前田中線築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—」神戸市教育委員会, 148-155
- 松業礼子 (2001a) 二葉町遺跡出土木材の樹種同定. 「二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査—新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う—」神戸市教育委員会, 141-166
- 松業礼子 (2001b) 松野遺跡出土木製品 (古墳時代後期初頭～鎌倉時代) の樹種同定. 「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査—新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う—」神戸市教育委員会, 175-186
- 松業礼子 (2002) 深江北町遺跡第9次調査 出土した木製品の樹種同定. 「深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書—葦屋驛屋関連遺跡の調査—」神戸市教育委員会, 107-134
- 島地謙 (1996) 玉津田中遺跡出土木製品の樹種. 「兵庫県文化財調査報告第135-6冊 神戸市西区 玉津田中遺跡—第6分冊— (総括編) - 田中特定十地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 -」兵庫県教育委員会, 15-49
- 植田弥生 (1999) 白水遺跡第4次調査から出土した木製品の樹種. 「白水遺跡第4次—神戸国際湾都建設事業 神戸市白水特定十地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」神戸市教育委員会, 66-72
- 植田弥生 (2000) 白水遺跡第6次調査北端地区出土の木製品及び木質遺物の樹種同定. 「白水遺跡第3・6・7次 高津橋大塚遺跡第1・2次 発掘調査報告書—神戸市白水特定十地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書その2—」神戸市教育委員会, 111-121
- 植田弥生 (2001) 出土木製品の樹種同定. 「住吉宮町遺跡 (第19次・第20次調査) —阪神・淡路大震災に伴う発掘調査—」神戸市教育委員会, 88-97

表3 森南町遺跡第1次調査の樹種同定リスト

No.	遺物名	樹種	出土層位	時期
8866	柱材	マツ属複雑管束亜属	SD02	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8867	割材	マツ属複雑管束亜属	SD02	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8868	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8869	丸杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8870	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8871	丸杭	コナラ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8872	丸杭	コナラ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8873	転用杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8874	転用杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭

8875	転用杭先	マツ属複雑管束重属	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8876	転用杭	コナラ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8877	割杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8878	転用杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8879	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8880	割杭	ツブラジイ	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8881	転用杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8882	転用杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8883	転用杭	ツブラジイ	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8884	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8885	転用杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8886	丸杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8887	丸杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8888	矢板	アカガシ亜属	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8889	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8890	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8891	割杭	ヒノキ	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8892	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8893	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8894	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8895	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8896	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8897	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8898	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8899	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8900	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8901	割杭	ツブラジイ	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8902	丸杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8903	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8904	割杭	ツブラジイ	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8905	割杭	シノキ属	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8906	割杭	ヒノキ科	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8907	丸杭	アカガシ亜属	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8908	丸杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8909	丸杭	コナラ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8910	丸杭	アカガシ亜属	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8911	転用杭	マツ属複雑管束重属	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8912	割杭	ヒノキ	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8913	丸杭	アカガシ亜属	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8914	丸杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭

8915	丸杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8916	丸杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8917	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8918	丸杭	アカガシ亜属	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8919	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8920	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8921	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8922	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8923	割杭	ヒノキ	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8924	丸杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8925	丸杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8926	丸杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8927	丸杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8928	割杭	アカガシ亜属	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8929	割杭	アカガシ亜属	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8930	丸杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8931	割杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8932	角杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8933	丸杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8934	矢板	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8935	割杭	ツブラジイ	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8936	矢板	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8937	丸杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8938	割杭	クスギ節	SD02杭列南側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8939	割杭	アカガシ亜属	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8940	矢板	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8941	矢板	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8942	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8943	丸杭	コナラ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8944	割杭	アカガシ亜属	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8945	矢板	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8946	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8947	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8948	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8949	割杭	エノキ属	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8950	丸杭	アカマツ	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8951	丸杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8952	矢板	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8953	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8954	丸杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭

8955	丸杭	ツバキ属	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8956	丸杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8957	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8958	転用杭	イスガヤ	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8959	丸杭	イボタノキ属	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8960	割杭	エノキ属	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8961	割杭	クスギ節	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8962	角杭	ヒノキ	SD02杭列北側	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8963-1	插板	ヒノキ	SK11	近世
8963-2	插板	ヒノキ	SK11	近世
8963-3	插板	ヒノキ	SK11	近世
8963-4	插板	ヒノキ	SK11	近世
8964	插板	ヒノキ	SK11	近世
8965	板材	ヒノキ	SD02	弥生時代後期末～古墳時代初頭
8966	板材	アカガシ亜属	SD02	弥生時代後期末～古墳時代初頭
R-054	加工材	アカマツ	SK11	近世

表4 SD02出土杭材の樹種

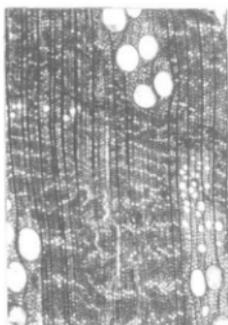
樹種	杭列南側	杭列北側	杭材計	(%)
クスギ節	21	35	56	(63.6)
アカガシ亜属	4	4	8	(9.1)
コナラ節	2	3	5	(5.7)
ツブラジイ		5	5	(5.7)
ヒノキ		4	4	(4.5)
エノキ属		2	2	(2.3)
マツ属複雑管束亜属	1	1	2	(2.3)
アカマツ		1	1	(1.1)
イスガヤ		1	1	(1.1)
イボタノキ属		1	1	(1.1)
シイノキ属		1	1	(1.1)
ツバキ属		1	1	(1.1)
ヒノキ科		1	1	(1.1)
計	28	60	88	(100.0)

表5 時代別・形状別にみた樹種

樹種/器種・時代	弥生時代後期末から古墳時代初頭 (SD02 出土)									近世 (SK11 出土)		計
	角杭	割杭	割材	丸杭	転用杭	転用杭先	柱材	矢板	板材	桶板	加工材	
クスギ節	1	31		18	6				6			62
アカガシ亜属		4		4				1	1			10
ヒノキ	1	3							1	5		10
コナラ節				4	1							5
ツブラジイ		4			1							5
マツ属複雑管束亜属			1		1	1	1					4
アカマツ				1							1	2
エノキ属		2										2
イスガヤ				1								1
イボタノキ属				1								1
ツバキ属				1								1
シイノキ属		1										1
ヒノキ科		1										1
計	2	46	1	29	10	1	1	7	2	5	1	105

補記 SD02出土の「柱材 (No.8866)」は時期を決定するだけの資料を欠いており、確定的ではないが中世以降に下る可能性も考えられる (黒田)。

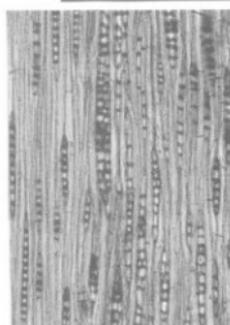
第82図 出土木材切片の光学顕微鏡写真(1) a:横断面 b:放射断面 c:接線断面 ※スケールに注意
 () 内の数字は報告番号を示す。



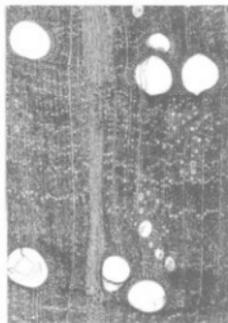
1a.イヌガヤ (8958) bar:1.0mm



1b.同 bar:0.1mm



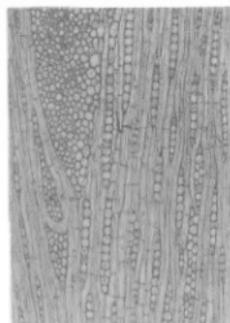
1c.同 bar:0.2mm



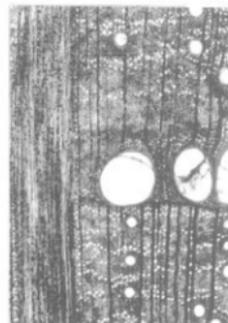
2a.アカマツ (R-054) bar:1.0mm



2b.同 bar:0.1mm



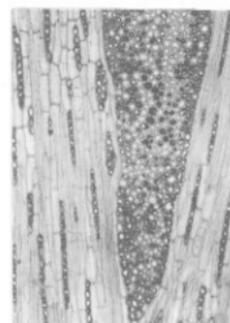
2c.同 bar:0.4mm



3a.ヒノキ (8958) bar:1.0mm

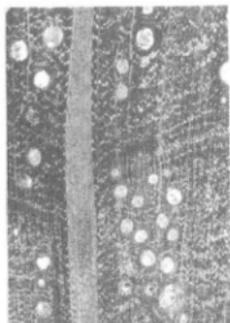


3b.同 bar:0.1mm

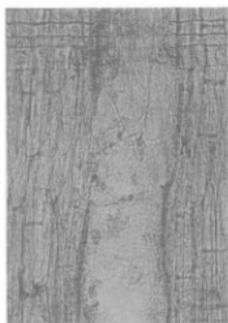


3c.同 bar:0.2mm

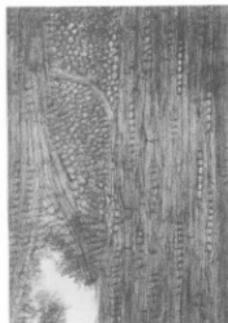
第83図 出土木材切片の光学顕微鏡写真(2) a:横断面 b:放射断面 c:接線断面



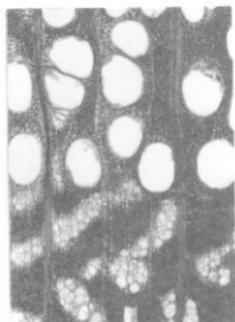
4a.ツブラジイ(8880) bar:1.0mm



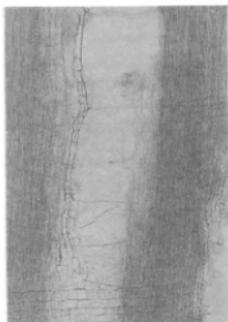
4b.同 bar:0.4mm



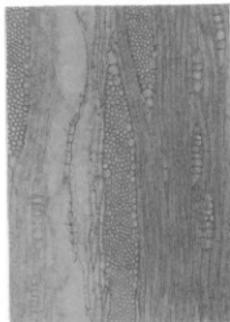
4c.同 bar:0.4mm



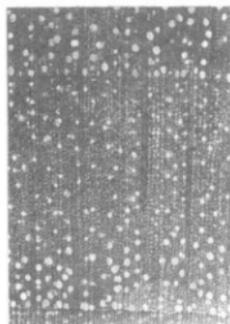
5a.コナラ(8871) bar:1.0mm



5b.同 bar:0.4mm



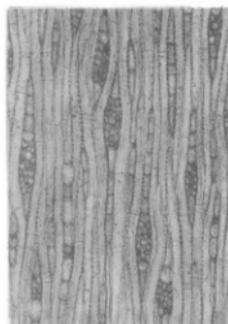
5c.同 bar:0.4mm



6a.クヌギ(8890) bar:1.0mm



6b.同 bar:0.2mm



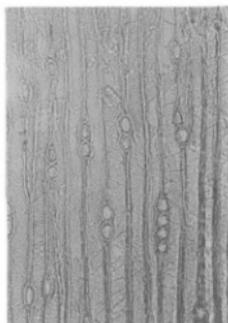
6c.同 bar:0.4mm



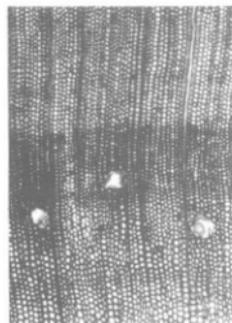
7a.アカガシ亜属 (8913) bar:1.0mm



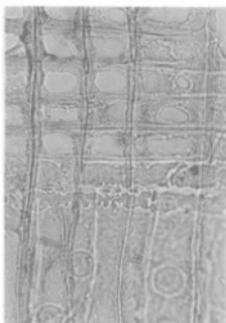
7b.同 bar:0.2mm



7c.同 bar:0.4mm



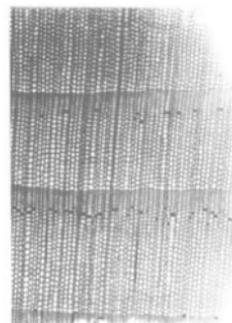
8a.エノキ属 (8949) bar:1.0mm



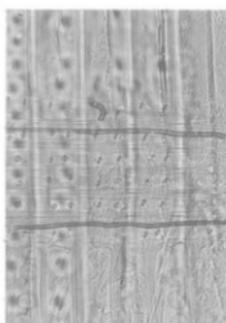
8b.同 bar:0.4mm



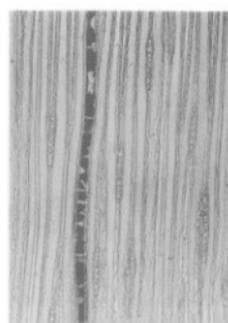
8c.同 bar:0.4mm



9a.ツバキ属 (8955) bar:1.0mm

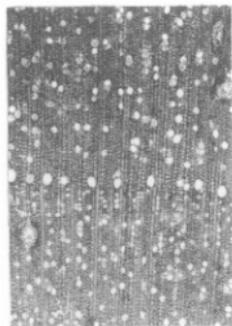


9b.同 bar:0.2mm



9c.同 bar:0.4mm

第85図 出土木材切片の光学顕微鏡写真(4) a:横断面 b:放射断面 c:接線断面



10a. イボタノキ属 (8959) bar:1.0mm



10b. 同 bar:0.4mm



10c. 同 bar:0.4mm

第2節 森南町遺跡の花粉化石群集

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

森南町遺跡は、神戸市東灘区森南町に所在し、六甲山南麓の扇状地の端部、標高13m付近に立地する。本遺跡は、縄文時代晩期から中・近世に及ぶ集落・生産遺跡であり、縄文時代から江戸時代までの土器類と弥生時代の杭といった遺物や弥生時代から中世の掘立柱建物、井戸、柱穴、土坑、溝、杭列などの遺構が検出された。ここでは、弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられている杭列を伴う流路(SD02)の埋土を試料とし、占植生の推定を試みた。

2. 試料

花粉化石群集の検討は、弥生時代後期末から古墳時代初頭のSD02最下層より採取された堆積物2試料(R-073、R-074)について行った。試料は、黒褐色砂礫泥り粘土で植物遺体を多く含む。なお、これら2試料は、大型植物化石・珪藻化石群集の検討も行われた。

3. 方法

花粉化石の抽出は、試料約3~4gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリス処理(水酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離(臭化亜鉛を比重2.1に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

4. 花粉化石群集の記載

同定された分類群数は、樹木花粉28、草本花粉6、形態分類で示したシダ植物胞子2である。樹木花粉の占める割合は、約96~98%と非常に高率である。その中で、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が60%程度と非常に高率であり、次いでスギ属が10~20%程度を占める。また、R-073とR-074で幾分出現率に差がみられるが、クマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、シノキ属が比較的目立つ傾向である。他では、ツガ属、トチノキ属などが両試料から出現し、R-073ではヤマモモ属、ヤドリギ属、R-074ではモチノキ属なども出現する。草本花粉は、R-073ではヨモギ属、タンポポ科のみ、R-074ではイネ科、アブラナ科、ワレモコウ属、マメ科、ヨモギ属が低率で出現する。

5. 考察

弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺跡周辺には、針葉樹のイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科の卓越する

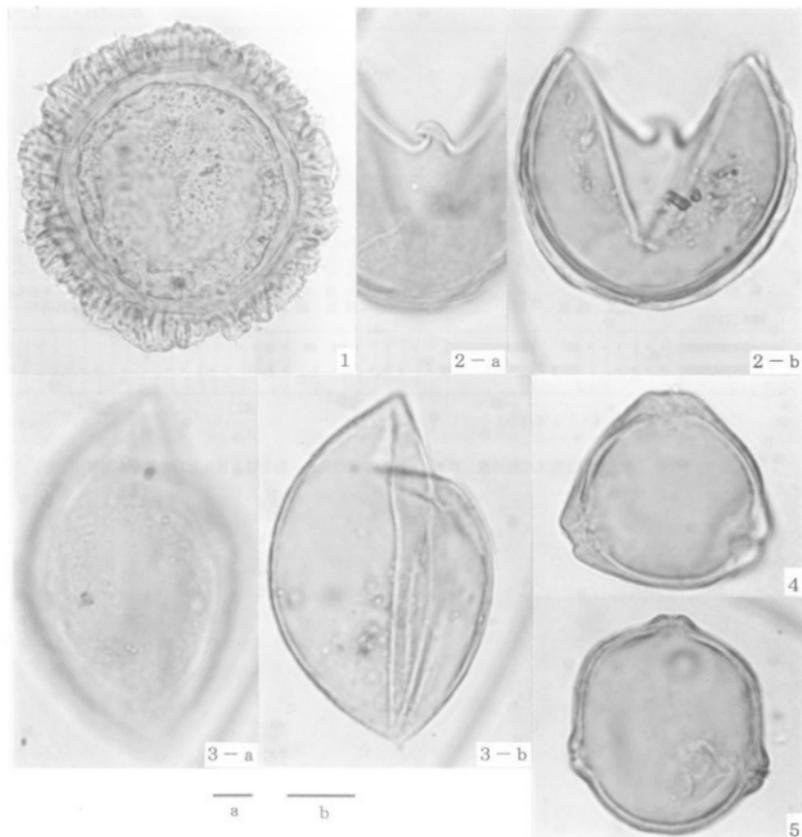
森林が成立していたと予想される。このイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科は、大型植物化石の検討でヒノキ小枝が検出されており、ヒノキを主体としたものであった可能性が考えられるが、付近に生育していたものが幾分過大に評価されている可能性もある。森林を構成する主要な要素は、針葉樹ではスギ属、落葉ではクマシデ属-アサダ属、コナラ亜属であり、アカガシ亜属、シノキ属を主体にヤマモモ属などをまじえる照葉樹林の林分も幾分みられたと考えられる。他では、針葉樹のツガ属、落葉のトチノキ属などが混じり、これら森林にヤドリギ属が寄生していたであろう。一方、草本類についてみると、産出した分類群数・個数は、共に非常に少ないことから、付近には草地が広がるような環境はみられなかったのではないと思われる。

表6 S D02 (最下層)の花粉化石産出一覧表

和名	学名	R073	R074
樹木			
マキ属	<i>Podocarpus</i>	1	1
モミ属	<i>Abies</i>	1	2
ツガ属	<i>Tsuga</i>	4	2
マツ属復雑管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	1	1
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	1	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	2	-
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	28	48
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	173	174
ヤナギ属	<i>Salix</i>	-	1
ヤマモモ属	<i>Myrica</i>	1	-
クルミ属	<i>Juglans</i>	-	1
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	4	9
カバノキ属	<i>Betula</i>	-	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	1	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	26	7
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	24	5
クリ属	<i>Castanea</i>	1	1
シノキ属	<i>Castanopsis</i>	12	8
エノキ属-ムクノキ属	<i>Celtis</i> - <i>Aphananthe</i>	2	-
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	2	-
モチノキ属	<i>Ilex</i>	-	1
カエデ属	<i>Acer</i>	-	1
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	2	4
ムクロジ属	<i>Sapindus</i>	-	1
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	1
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	1	-
エゴノキ属	<i>Styrax</i>	1	-
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	2
草本			
イネ科	<i>Gramineae</i>	-	1
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	-	1
ワレモコウ属	<i>Sanguisorba</i>	-	1
マメ科	<i>Leguminosae</i>	-	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	3	2
タンポポ亜科	<i>Liguliflorae</i>	1	-
シダ植物			
単葉型胞子	<i>Monolete spore</i>	-	1
三葉型胞子	<i>Trilete spore</i>	1	3
樹木花粉			
樹木花粉	<i>Arboreal pollen</i>	288	271
草本花粉	<i>Nonarboreal pollen</i>	4	6
シダ植物胞子	<i>Spores</i>	1	4
花粉・胞子総数	<i>Total Pollen & Spores</i>	293	281
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	7	14

T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

第87図 産出した花粉化石



産出した花粉化石 (scale bar: 10 μ m a:1 b:2~5)

1. ツガ属、R-073、PALMN 1932
2. スギ属、R-074、PALMN 1937
3. イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、R-074、PALMN 1936
4. ヤマモモ属、R-073、PALMN 1929
5. クマシデア-アサダ属、R-073、PALMN 1931

第88図 産出した花粉化石



産出した花粉化石 (scal bar:10 μ m)

- 1.コナラ属コナラ亜属、R-073、PALMN 1935
- 2.コナラ属アカガシ亜属、R-073、PALMN 1934
- 3.シイノキ属、R-073、PALMN 1933
- 4.ヤドリギ属、R-073、PALMN 1930

第3節 森南町遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

森南町遺跡は、神戸市東灘区森南町に所在し、六甲山南麓の扇状地の端部、標高13m付近に立地する。本遺跡は、縄文時代晩期から中・近世に及ぶ集落・生産遺跡であり、縄文時代から江戸時代までの土器類と弥生時代の杭といった遺物や弥生時代から中世の掘立柱建物、井戸、柱穴、土坑、溝、杭列などの遺構が検出された。ここでは、弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられている杭列を伴う流路 (S D02) の埋土を試料とし、古植生の推定を試みた。

2. 試料と方法

大型植物化石の検討は、弥生時代後期末から古墳時代初頭のS D02最下層より採取された堆積物2試料 (R-073、R-074) について行った。試料は、黒褐色砂礫混じり粘土で植物遺体を多く含む。大型植物化石の採集は、堆積物試料約1lを0.25mm目の篩により、水洗篩い分けを行い、残渣から実体顕微鏡下で拾い上げた。なお、これら2試料は、花粉化石群集および珪藻化石群集の検討も行われた。

3. 出土した大型植物化石

出土した大型植物化石の一覧を表1に示した。以下に、各試料の大型植物化石を記載する。

R-073: 同定されたのは、木本4分類群、草本2分類群であった。木本で出土したのは、ヒノキ小枝、コナラ

表7 大型植物化石一覧表

数字は個数、()内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位\試料名		R-073	R-074
ヒノキ	小枝	1	1
	炭化小枝		1
コナラ亜属	幼果	1	
ケヤキ	炭化果実	1	
ブドウ属	炭化種子		1
不明	芽	1	1
	炭化芽		2
スゲ属	果実	1	
タデ属	炭化果実		1
マメ科	炭化種子	8	4

亜属幼果、ケヤキ炭化果実、分類群不明の芽であった。草本で出土したのは、スゲ属果実、マメ科炭化種子であり、マメ科炭化種子は比較的多産した。

R-074: 同定されたのは、木本3分類群、草本2分類群であった。木本で出土したのは、ヒノキ小枝、ブドウ属炭化種子、分類群不明の芽であり、ヒノキ小枝、分類群不明の芽には炭化したものもみられた。草本で

出土したのは、タテア属炭化果実、マメ科炭化種子であり、マメ科炭化種子はやや目立った。

4. 考察

検討した結果、出土分類群数・個数共に少なく、森林植生についての情報量に乏しい。付近の植物群として考えられるのは、針葉樹のヒノキ、落葉広葉樹のコナラ亜属、ケヤキ、ブドウ属である。草本類については、スゲ属、タテア属、マメ科が生育していたであろう。なお、堆積物中には、植物遺体が豊富に含まれていたが、残渣を顕微鏡下で観察したところ、炭化した植物遺体はかなり目立った。このことから、S D02最下層には、燃えた（燃やされた？）植物の遺体が集積していると言え、そのために、出土した大型植物化石に炭化したものがしばしば混じるのであろう。

5. 主な大型植物化石の形態記載

ヒノキ *Camacyparis obtusa* Sieb. et Zucc. 小枝、炭化小枝

小枝には鱗片状の葉が十字対生に付き、葉は鈍頭で先端は茎に密着する。

コナラ属コナラ亜属 *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* 効果

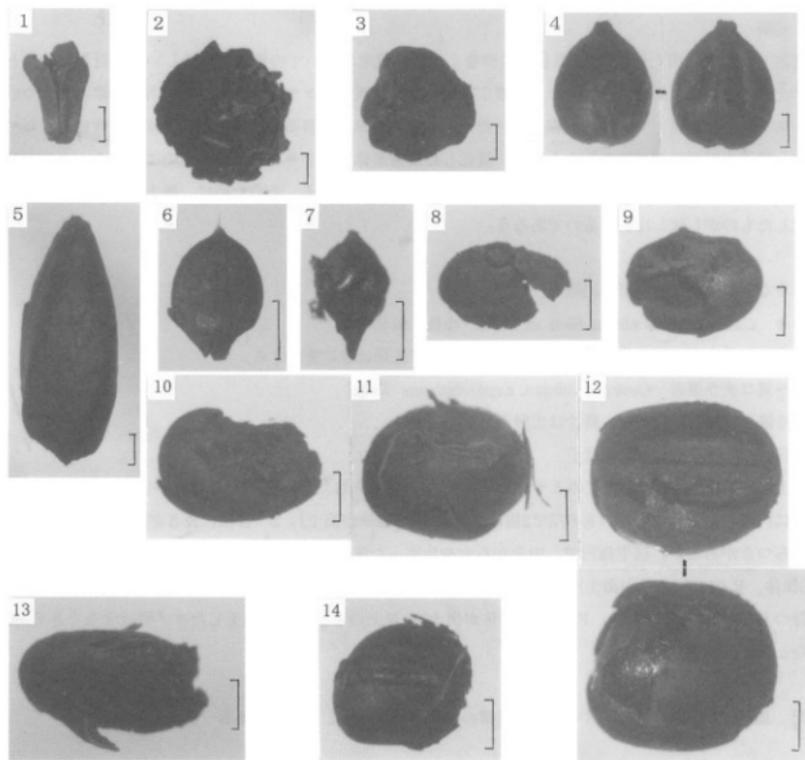
殻斗鱗片は覆瓦状に並び、鱗片は広卵形。

マメ科 Leguminosae 炭化種子

出土した炭化種子には、次ぎのような3つのタイプが認められた。1つ目は、長さ2.3~2.4mm程度と小型で、中央に円形の臍を持つもの（R-073で2個体、R-074で1個体が出土）。2つ目は、長さが2.6~4.3mm程度とややばらつきがあるが、扁平楕円で、中央からやや片寄った位置に円形ないし楕円形の臍を持つもの（R-073で3個体、R-074で2個体が出土）。3つ目は、長さ2.9~3.8mm程度で厚みがあり、種子長と同程度の細長い臍を持つもの（R-073で3個体、R-074で1個体が出土）。以上のことから、出土したマメ科は少なくとも3種を含むと推定される。

補記 R-073・074は共にI区中央部堰遺構のやや南側で採取したものである（黒田）。

第89図 出土した大型植物化石



出土した大型植物化石 (スケールは1mm)

1.ヒノキ、小枝、R-074 2.コナラ属コナラ亜属、幼果、R-073 3.ケヤキ、炭化果実、R-073 4.ブドウ属、炭化種、R-074 5.不明、芽、R-074 6.スゲ属、果実、R-073 7.タデ属、炭化果実、R-074 8~12マメ科、炭化種子、R-073 13、14.マメ科、炭化種子、R-074

第4節 森南町遺跡の珪藻化石群集

黒澤 一男 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

珪藻は淡水から海水に至るほとんどすべての水域に生息し、水域生態系の一次生産者として重要な位置を占めている。微小(0.01~0.5mm程度)ながら珪酸体からなる殻を形成するため、化石として地層中によく保存される。また種類ごとに様々な水域に適応し生息するため古環境の指標としてもよく利用されている。

ここでは兵庫県神戸市の森南町遺跡から採取された堆積物試料を用いて珪藻化石群集を調べ、その堆積環境について検討する。

2. 試料及び分析方法

分析試料には、SD02の最下層から採取されたR-073とR-074の2試料を用いた。それらの試料について以下の珪藻分析をおこなった。

- ①試料を湿潤重量で約2g程度取り出し、秤量した後にトルビーカーに移し、30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。
- ②反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで7回程度繰り返し行った。
- ③ビーカーに残った残渣は遠心管に回収した。
- ④マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥した。乾燥後にマウントメディア(封入剤)で封入し、プレパラートを作成した。
- ⑤各プレパラートを光学顕微鏡下400~1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお、珪藻化石が少なかったためプレパラート全面について精査した。

3. 珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、主に安藤(1990)により設定された環境指標種群に基づいた。安藤(1990)は淡水域における環境指標種群を設定した。なお環境指標種群以外の珪藻種については、広布種として扱った。また、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。以下に安藤(1990)において設定された環境指標種群の概要を記す。

上流性河川指標種群(J) 河川上流の渓谷部に集中して出現する種群。

中~下流性河川指標種群(K) 中~下流域、すなわち河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群。

最下流性河川指標種群(L) 最下流域の三角洲の部分に集中して出現する種群。

湖沼浮遊性指標種群(M) 水深が1.5m以上で、水生植物が水底には生息していない湖沼に生息する種群。

湖沼沼沢湿地指標種群(N) 湖沼における浮遊性種としても、沼沢湿地における付着性種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群。

沼沢湿地付着指標種群(O) 水深が1m内外で、湿地および植物が一面に繁茂している沼沢、ならびに湿地において付着状態で優勢な出現が見られる種群。

高層湿原指標種群(P) ミズゴケを種とした植物群落および泥炭地の発達が見られる場所に出現する種群。

陸域指標種群 (Q) 前述の水域に対して、陸域を生息域として生活している種群 (陸生珪藻)。

4. 珪藻化石群集の特徴 (表8)

検出された珪藻化石は、5分類群3属3種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、広布種を含め2種群である (表8)。検出された珪藻化石は7個体、11個体と非常に少なく、堆積物1g中の珪藻殻数はおよそ1000個程度となる。

5. おわりに

森南町遺跡の堆積物中の珪藻化石を調べた結果、珪藻化石が非常に希薄であった。珪藻は水生植物であるため水分の少ない乾燥した環境下では生育しないことから、こうした環境であったことが考えられる。また、Murakami(1996)では湿原において珪藻殻が消失する現象が報告されている。しかしその原因は明確になっていないため、今回の試料と比較することは不可能であるが、可能性としてこのような原因も考えられる。

引用文献

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と占環境復元への応用。東北地理, 42, 73-88.

Murakami, T. (1996) Silicious Remains Dissolution at Sphagnum-bog of Nagano-yama Wetland in Aichi Prefecture, Central Japan. The Quaternary Research, 35, 17-23.

表8 珪藻化石産出表 (種群は安藤 (1990) に基づく)

分 類 群	種群	R-073 R-074	
<i>Achnanthes crenulata</i>	W	-	3
<i>Eunotia pectinialis</i>	O	-	1
<i>E.</i> spp.	?	1	1
<i>Pinnularia</i> spp.	?	-	1
<i>Synedra ulna</i>	W	6	5
沼沢湿地付着生 (O)		-	1
広 布 種 (W)		6	8
不 明 (?)		1	2
珪 藻 殻 数		7	11

第5節 森南町遺跡第2次発掘調査の花粉分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

森南町遺跡は兵庫県神戸市森南町に所在し、六甲山南麓東部の扇状地上部に立地する。今回の調査では、縄文時代後期の包含層に掘削された弥生時代後期末から古墳時代初頭の溝などが検出されており、溝の最上部は中世遺構の擾乱を受けている。

本報告では、検出された弥生時代後期末から古墳時代初頭とされる溝遺構を充填する堆積物について、遺構やその周辺の高植生推定を行うことを目的として、花粉分析を実施する。

1. 試料

今回の分析では、弥生時代後期末から古墳時代初頭とされる溝遺構SD02の覆土、及びその直下・直上層を対象とする。最下層の土層6は中礫混じりの細粒砂であり、SD02が掘り込まれたベース土とされている。本層には縄文時代後期の包含層であり、土器片などが含まれている。上層5から土層2がSD02の覆土であり、覆土最下層の土層5は中粒～粗粒砂からなる。土層4は極細粒砂混じりのシルト～粘土、上層3は粗粒～極粗粒砂、土層2はシルトからなる。最上位の土層1は粗粒砂混じりの細粒砂からなり、中世遺構のベース土とされている。

花粉分析に用いる試料は、土層6～土層1の各層より採取した土壌6点である。

2. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉および草本花粉・シダ類胞子は、総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3. 結果

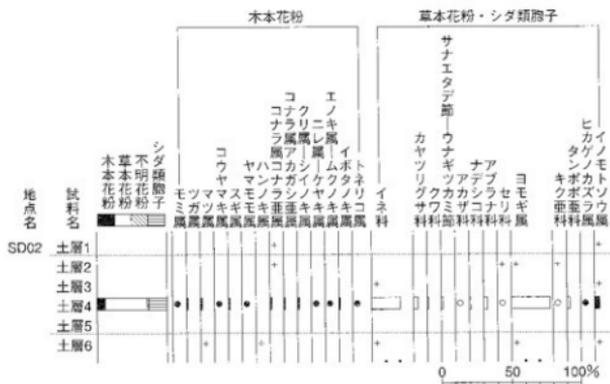
結果を表9、第90図に示す。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示することとめておく。

SD02の覆土とされる土層4以外の5試料からは、花粉化石がほとんど産出せず、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。木本花粉ではマツ属、コナラ属コナラ亜属などが、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属などがわずかに認められるだけである。これらの花粉化石の保存状態は悪く、そのほとんどが、花粉外膜が溶解あるいは壊れている状態で産出していた。

SD02の覆土とされる土層4からは花粉化石が認められるものの、産出状況・保存状況とも良好とはいえない

表9 花粉分析結果

Taxon	種類	地点・試料名					
		SD02					
学名	和名	土層1	土層2	土層3	土層4	土層5	土層6
Arboreal pollen	木本花粉						
<i>Abies</i>	モミ属	-	-	-	1	-	-
<i>Tsuga</i>	ツガ属	-	-	-	3	-	-
<i>Pinus</i>	マツ属	-	-	-	4	-	1
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	-	-	-	2	-	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	-	-	-	3	-	-
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	-	-	-	1	-	-
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	-	-	-	-	-	1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1	1	-	4	-	-
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	3	-	-
<i>Castanea-Gastanopsis</i>	クリ属-シイノキ属	-	-	-	4	-	-
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	2	-	-
<i>Celtis-Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	1	-	-
<i>Ligustrum</i>	イボタノキ属	-	-	-	3	-	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	-	-	-	1	-	-
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Gramineae	イネ科	-	-	1	57	-	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	-	-	-	9	-	-
Moraccae	クワ科	-	-	-	3	-	-
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> - <i>Echinocaulon</i>	サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	3	-	-
Chenopodiaceae	アカザ科	-	-	-	2	-	-
Caryophyllaceae	ナデシコ科	-	-	-	3	-	-
Cruciferaeae	アブラナ科	-	-	-	8	-	-
Umbelliferae	セリ科	-	1	-	2	-	-
Artemisia	ヨモギ属	-	4	-	78	-	1
Carudoideae	キク亜科	-	1	-	2	-	-
Chicorioideae	タンポポ亜科	-	-	-	6	-	-
unknown	不明花粉	-	-	-	6	-	1
Fern spore	シダ類孢子						
Lycopodium	ヒカゲノカズラ属	-	-	-	1	-	-
Pteris	イノモトソウ属	3	-	2	10	-	13
other fernspore	他のシダ類孢子	12	2	2	62	2	5
Total	合計						
Arboreal pollen	木本花粉	1	1	0	32	0	2
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	6	1	173	0	2
Unknown	不明花粉	0	0	0	6	0	1
Fern spore	シダ類孢子	15	2	4	73	2	18
Total pollen and spore	総計	16	9	5	284	2	23



第90図 花粉化石群集の層位分布

出現率は、総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は花粉総数100個体未満の試料について検出した種類を示す。

い。群集組成を見ると草本花粉の割合が高く、イネ科、ヨモギ属が多産する。その他ではカヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属などを伴う。木本花粉の産出は少なく、マツ属、コナラ亜属、クリ属-シイノキ属などが認められる。

4. 考察

縄文時代後期のベース上とされる上層6、弥生時代後期末から古墳時代初頭とされるSD02覆土の上層5.3.2、中世遺構のベース上とされる上層1のいずれにおいても、花粉化石がほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性があげられる。分析対象とした土層は、中粒砂や粗粒砂など粗い砂の堆積物が多いことから、堆積速度が速く上層中に花粉が取り込まれにくかった可能性がある。また、一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971)。今回検出された花粉化石の保存状態は悪く、花粉外膜が溶解あるいは壊れているものが多く認められたことから、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失したことも考えられる。

一方、花粉が検出された上層4においても、花粉化石の産出状況は良好とはいえず、他の試料同様に花粉外膜が溶解しているものが多い。また、本試料より検出された種類は、比較的分解に強い花粉や分解が進んでも同定可能な花粉が多いことから、当時の周辺植生を正確に反映しているとは言い難い。その点を考慮した上で、考察を行う。

広域な植生を反映する木本類の産出は少なく、今回の試料から周辺域の森林植生を検討することは困難である。しかし、少なからず温帯性針葉樹林(いわゆる照葉樹林)要素であるコナラ属アカガシ亜属やシイノキ属、温帯性針葉樹であるモミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属などが検出されていることから、周辺域でこれらが生育していたことが伺える。既存の研究結果によると、6000年前以降コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属中心の照葉樹林が主体であったが、2000年前よりマツ属複雑管束亜属、スギ属が増加するとされている(前田,1984)。今回の結果は、既存の結果と大きく異なるものではない。また、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、トネリコ属などは河畔や低湿地などに林分を形成する種を含む分類群であることから、遺跡周囲の河畔や低湿地に生育していたものに由来する可能性がある。

低地の植生を反映する草本類についてみると、イネ科、ヨモギ属が多産し、カヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、ナデシコ科、アブラナ科、タンポポ重科などを伴う。これらの種類は開けた明るい場所を好む「人里植物」であることから、当時の溝周辺などの草地などに生育していたと推測される。

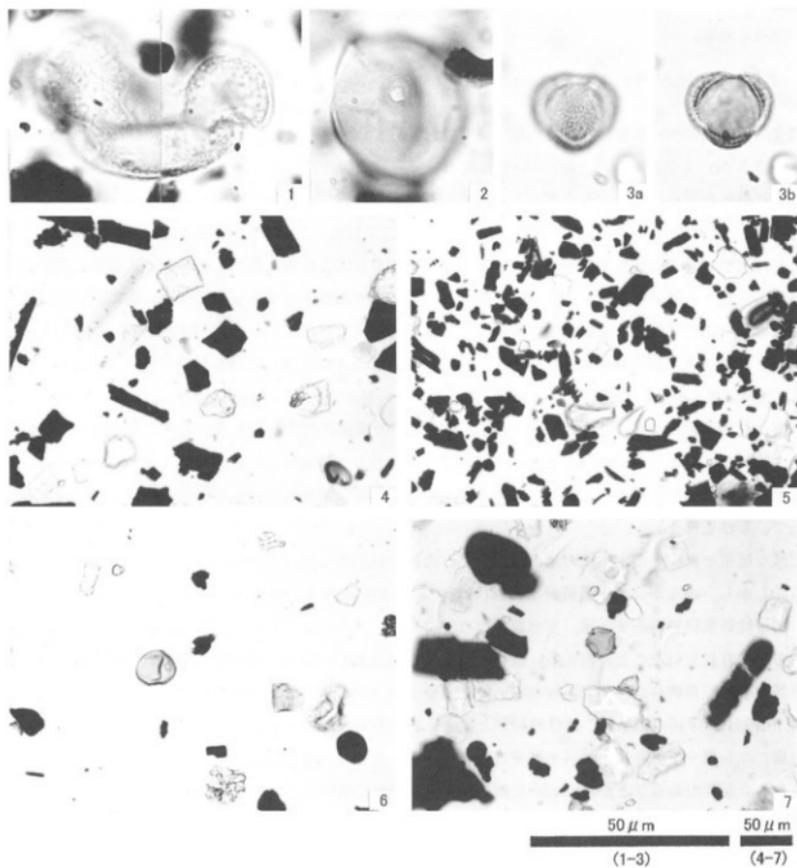
引用文献

前田 保夫,1984.花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積(更新)世後期以降の植生変遷.宮脇 昭(編著),日本植生誌 近畿,至文堂,87-99.

中村 純,1967.花粉分析.古今書院,232p.

徳永 重元・山内 輝子,1971.花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.

第91図 花粉化石



1. マツ属 (SD02; 土層4)

3. ヨオモギ属 (SD02; 土層4)

5. プレバラー特内の状況写真 (SD02; 土層2)

7. プレバラー特内の状況写真 (SD02; 土層6)

2. イネ科 (SD02; 土層4)

4. プレバラー特内の状況写真 (SD02; 土層1)

6. プレバラー特内の状況写真 (SD02; 土層3)

第6節 森南町遺跡第2次発掘調査出土木製品の樹種

三村 昌史 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

第2次調査に伴う出土木材のうち計19点の樹種同定結果を報告する。対象となる木製品は井戸・溝・上坑・柱穴から出土したもので、合子蓋・漆椀・曲物・円形底板といった容器類、柱根・杭といった建築・土木材などが含まれる。ここでは、これら出土材の樹種同定を行うことで、性格の異なる器種毎の用材傾向を明らかにし、用材選択の背景にある材質をはじめとした木材特性と製作・使用方法との関連性について調査を行った。

2. 試料と方法

分析に用いた試料は、各出土材から採取されチャック付きのビニール袋に保存された小片の材である。この小片から剃刀を用いて横断面・放射断面・接線断面の3断面を切り取り、ガムクロラール（アラビアゴム・グリセリン・抱水クロラール・蒸留水の混合液）で封入してプレパラートを作成した。検鏡は光学顕微鏡にて40～400倍で行い、現生標本との対照により同定を行った。同定後のプレパラートは神戸市理蔵文化財センターに保管されている。

3. 見出された樹種

表10 樹種同定結果

No.	サンプル番号	器種	樹種	木取り等	出土遺構	遺構番号	時期	報告書番号
1	W-9264	合子蓋	ブナ属		井戸	SE02	室町(15C後半～16C後半)	261
2	W-9265	円形底板	スギ	柃目	井戸	SE02	室町(15C後半～16C後半)	260
3	W-9266	柱根	モミ属	芯持丸木?(残存径9.1cm)	柱穴	Pit-4	中世(室町?)	
4	W-9267	曲物(椀板)	スギ		井戸	SE04	中世(室町?)	287
5	W-9268	曲物(椀板)	スギ		井戸	SE04	中世(室町?)	286
6	W-9269	板材	モミ属	板目	溝	SD02	庄内期	47
7	W-9270	杭	アカマツ	芯持・面取り(直径2.5cm)	溝	SD02	庄内期	48
8	W-9271	杭	サクラ属	芯持・面取り(直径3.8cm)	溝	SD02	庄内期	49
9	W-9272	杭	サクラ属	芯持・面取り(直径2.3cm)	溝	SD02	庄内期	50
10	W-9273	杭	エノキ属	芯持・面取り(直径2.5cm)	溝	SD02	庄内期	51
11	W-9274	加工材	アカガシ亜属	芯持	井戸	SE03	室町(15C末～16C中頃)	285
12	W-9275	円形底板	スギ	柃目	井戸	SE03	室町(15C末～16C中頃)	284
13	W-9276	円形底板	スギ	柃目	井戸	SE03	室町(15C末～16C中頃)	280
14	W-9277	円形底板	スギ	柃目	井戸	SE03	室町(15C末～16C中頃)	282
15	W-9278	円形底板	スギ	柃目	井戸	SE03	室町(15C末～16C中頃)	283
16	W-9279	加工材	アカマツ	芯持・分枝部	井戸	SE03	室町(15C末～16C中頃)	284
17	W-9280	漆椀	イヌシダ属		井戸	SE03	室町(15C末～16C中頃)	279
18	W-9281	漆椀	タブノキ属		井戸	SE03	室町(15C末～16C中頃)	278
19	W-9282	円形底板	ヒノキ	追柃目	上坑	SK15	江戸(18C)	—

樹種同定の結果を表1に示す。19点の出土材には10分類群の樹種が見出され、内訳は針葉樹が4分類群（アカマツ・モミ属・スギ・ヒノキ）、広葉樹が6分類群（イヌシデ属イヌシデ節・ブナ属・コナラ属アカガシ亜属・エノキ属・タブノキ属・サクラ属）であった。これら見出された樹種の木材組織の特徴等は以下の通りである。

1) アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 写真図版1a-1c

仮道管と放射柔組織、放射仮道管、および水平・垂直両樹脂道を取り囲む薄壁のエピセリウム細胞からなる針葉樹材。放射仮道管の水平壁は内腔側に向かって鋸歯状の突起を有し、鋸歯の先端部は鋭利で鋸歯の間隔も密、しばしば重鋸歯状となる。分野壁孔は大型の窓状。

アカマツは高木になる常緑針葉樹で、本来は尾根沿いや崖などの十分な陽の当たる土壌の薄い乾性立地や酸性物質上壤からなるような湿地縁辺などに生育するが、現在では各地の山野に普通にみられる。材はやや重硬で割裂困難、樹脂分が多いため水湿には耐性がある。

2) モミ属 *Abies* マツ科 写真図版2a-2c

道管と放射柔組織からなる針葉樹材。晩材部は明瞭で量多い。放射組織の末端壁はじゅうず状末端壁を有する。分野壁孔はスギ型で小さく、1分野にふつう2-4個。

モミ属にはいくつかの種が含まれるが、母植物としては温帯下部～暖温帯に分布し最も低標高からみられるモミの可能性が最も考えられる。モミは緩傾斜地などにみられ高木になる常緑針葉樹で、材は通直でやや軽軟、強度もあり加工しやすく割裂性に優れるが、狂いは大きい。

3) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don スギ科 写真図版3a-3c

仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部は量多く明瞭。分野壁孔はスギ型で大きく、1分野にふつう2個。

スギは高木になる常緑針葉樹で、天然分布は降水量の多い地域に限られ、日本海側などにはまとまった分布域が多い。生育地は湿地周辺や谷部、尾根沿いや幅広く、低地から比較的高標高のブナ林までみられる。材は通直で軽軟、保存性は中庸、適度な強度があり割裂性・加工性に優れる。

4) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科 写真図版4a-4c

仮道管と放射柔組織、および樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部は量少ない。分野壁孔は大型のトウヒ型からヒノキ型でやや大きく、1分野にふつう2個。

ヒノキは主に暖温帯（福島県以南）に分布し山地の尾根沿いや緩斜面などに生育する、高木になる常緑針葉樹である。現在のまとまった分布は中部地方や紀伊半島、四国南部にある。材は通直でやや軽軟、加工し易く強度に優れる上、耐朽性が著しく高い。

5) クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Carpinus* カバノキ科 写真図版5a-5c

小型で放射方向に伸びた丸い道管が、単独あるいは放射方向に数個複合してまばらに散在する散孔材。木部柔細胞は短接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性または異性で、1-3列のものに複合状のものを交える。

イヌシデ節には、アカシデやイヌシデ等が含まれる。いずれも高木になる落葉広葉樹で、アカシデは乾いた立地に、イヌシデは適湿・肥沃な立地によくみられ、ともに山地の谷筋に多いが、低標高の山野にもみられる。材はやや重硬で弾力性に富んでいるが、反りや振れがでることがある。

6) ブナ属 *Fagus* ブナ科 写真図版6a-6c

小型のやや丸い道管が、ほぼ単独時に数個複合して密に配列する散孔材。道管の直径は年輪界に向けてやや急に減少する。道管の穿孔は単一または階段状。放射組織は1-数列のものに広放射組織が混在する。

ブナ属には温帯上部に分布する高木性の落葉広葉樹であるブナ、イヌブナがある。ブナは当に対する生理的・生態的な耐性が高く、日本海側の多雪地でしばしば優占した林を形成し、一方イヌブナはそのような地域には分布していない。材は重硬で均質、強度もあるが、保存性は低い。

7) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 写真図版7a-7c

中型で丸く壁の厚い道管が単独で放射方向に帯びをなす放射孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性のものと同型の広放射組織からなる。

いわゆるカシ類の材で、アカガシ、アラカシ、ウラジロガシ、シラカシなどを含む。いずれも暖温帯を中心に分布する常緑高木で、照葉樹林の主構成種となる。材は日本産の木材の中で最も重硬で強靱な部類に入り、加工は困難、割裂性は中庸。

8) エノキ属 *Celtis* ニレ科 写真図版8a-8c

年輪始めに大型で丸く壁の厚い道管が単独ないしは1-2個複合してややまばらに配列し、晩材部では小型でやや角張った道管が多数複合して、斜上状・接線状・かたまり状に分布する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端に1-2個直立細胞が連なる異性で1.5列程度、鞘細胞がみられる。

エノキ属にはエノキやエゾエノキ等が含まれ、共に河畔などの適湿な向陽地に多い。エゾエノキはエノキよりも高所にみられ、エノキは比較的先駆的な樹種で二次林山中にも多い。材は重さが中庸でやや硬く、従曲性を持つ。

9) タブノキ属 *Machilus* クスノキ科 写真図版9a-9c

やや小型の厚壁のやや放射方向に長い道管が、単独もしくは放射方向に1-2個複合してまばらに分布する散孔材。年輪界の始めと終わりでは道管の直径および密度が小さい。道管の穿孔はほとんど単穿孔。木部柔細胞は周囲状でしばしば油細胞となる。道管と放射組織との壁孔はレンズ状。放射組織は異性で1-2列、しばしば油細胞が直立細胞にみられる。

タブノキ属にはタブノキ、ホンバタブノキが含まれる。いずれも暖温帯の山中や沿海地に多い高木になる常緑広葉樹で、材は重さ・硬さ中庸程度、加工は容易であるが、狂いが大きい。

10) サクラ属 *Prunus* バラ科 写真図版10a-10b

小型で丸い道管が単独あるいは1-数個放射方向に複合し、斜めに連なりながら分布する散孔材。道管の穿孔は単一。道管内腔には着色物質が詰まり、らせん肥厚がみられる。放射組織は異性で、1-3列。

サクラ属には多くの種が含まれその分布も様々である。現在兵庫県にはヤマザクラ、カスミザクラ、キンキマメザクラ（北部に多い）、エドヒガンなどが分布している。材は重さ・硬さ中庸～やや重硬で強度もあり、割裂性はやや困難、均質で加工は比較的容易。

4. 考察

表11 器種別の用材

樹種 / 器種		漆椀	合子蓋	曲物匱板	円形底板	板材	杭	柱根	加工材	計
針葉樹	アカマツ	—	—	—	—	—	1	—	1	2
	モミ属	—	—	—	—	1	—	1	—	2
	スギ	—	—	2	5	—	—	—	—	7
	ヒノキ	—	—	—	1	—	—	—	—	1
広葉樹	イヌシデ属	1	—	—	—	—	—	—	—	1
	ブナ属	—	1	—	—	—	—	—	—	1
	アカガシ重属	—	—	—	—	—	—	—	1	1
	エノキ属	—	—	—	—	—	1	—	—	1
	タブノキ属	1	—	—	—	—	—	—	—	1
	サクラ属	—	—	—	—	—	2	—	—	2
計		2	1	2	6	1	4	1	2	19

ここでは、器種別に用材の傾向と選択の背景について考察を加えていくこととする（表11参照）。

まず、挽物の類をみると、2点ある漆椀には広葉樹材のイヌシデ属とタブノキ属の材が1点ずつ見出され、1点ある合子の蓋には広葉樹材のブナ属の材が見出されている。挽物の用材には回転整形の際に表面を平滑に仕上げることのできる均質な材質のものが適するので、用いられていた樹種はいずれも製法に見合った材質のものが選択されているといえる。こうした挽物の用材としてはブナ属・ケヤキ・トチノキの3種類の広葉樹材が各地で最も一般的に見出されているが、このたびイヌシデ属やタブノキ属が見出されたのは類例が少なく珍しい部類の結果である。木地屋の活動や周辺植生としての木材資源など、地域的な要因が関わっていることも想定される。

板材から製作される製品や板材状の製品では、2点ある曲物匱板にはスギが2点、また6点ある円形底板にはスギが5点とヒノキが1点、1点ある板材にはモミ属というように、すべて針葉樹材が見出されている。スギ・ヒノキ・モミ属などの針葉樹は材が通直である上、木理も通直でまた軽軟であるため割裂容易であるため、原木から板材を割り出し易く、その結果このような製品にさかんに用いられたのであろう。

1点ある柱材にはモミ属が見出されている。モミ属の樹種は通直な伸長をし、高木になるので柱材の法量に見合う径長の材が得られ、また適度な強度もあることから用いられたとみられる。

杭は芯持丸木材を面取りしたものが4点あり、いずれも直径2～3cm台のものである。見出されたのは針葉樹材のアカマツが1点、および広葉樹材のサクラ属が2点とエノキ属が1点で、特に決まった樹種が用いられている傾向にはない。全国的にみても、杭の用材には様々な樹種が見出されるのが一般的であることから、おそらく適度な径長の材を用いるという以外には選択性は働いておらず、身近な材が利用されたものと推測される。なお、アカマツの材の利用に関しては、その材に樹脂分が多く割裂・加工が困難であることから製

品類には利用し難かったために土木材として活用された可能性も想定される。

また、輪生状に枝を出した分枝部が利用されている加工材はアカマツであった。この加工材の性格は不明であるが、針葉樹の中でもアカマツなどはスギやヒノキなどと異なり幹に対して枝を輪生状に出す特徴があり、アカマツが利用されたのはそのような材の形状によるものではないかと推測される。

5. まとめ

以上のように、椽・合子には広葉樹材のうち均質な材質をもつ樹種が用いられ、一方曲物・円形底板などには板材を割り出しやすい針葉樹材がそれぞれ用いられていた。また、柱材には大径の得られる樹種が選択され、杭材には特定の樹種が用いられているわけではないが製品には利用し難い材も利用されているなど、各器種の器形・法量や製作法などに応じて樹種が使い分けられていたことが明らかになった。神戸市内の遺跡における中世後半の樹種同定例は少ないが、これまで比較的多く行われてきている中世前半のものと比較参照すると（バリノ・サーヴェイ株式会社 2001; 松業 2001a,2001b,2002）、板材状の製品や柱材・杭材に関する限りほぼ同様の用材傾向が窺われ、木材利用の特徴や形態は継続しているようである。

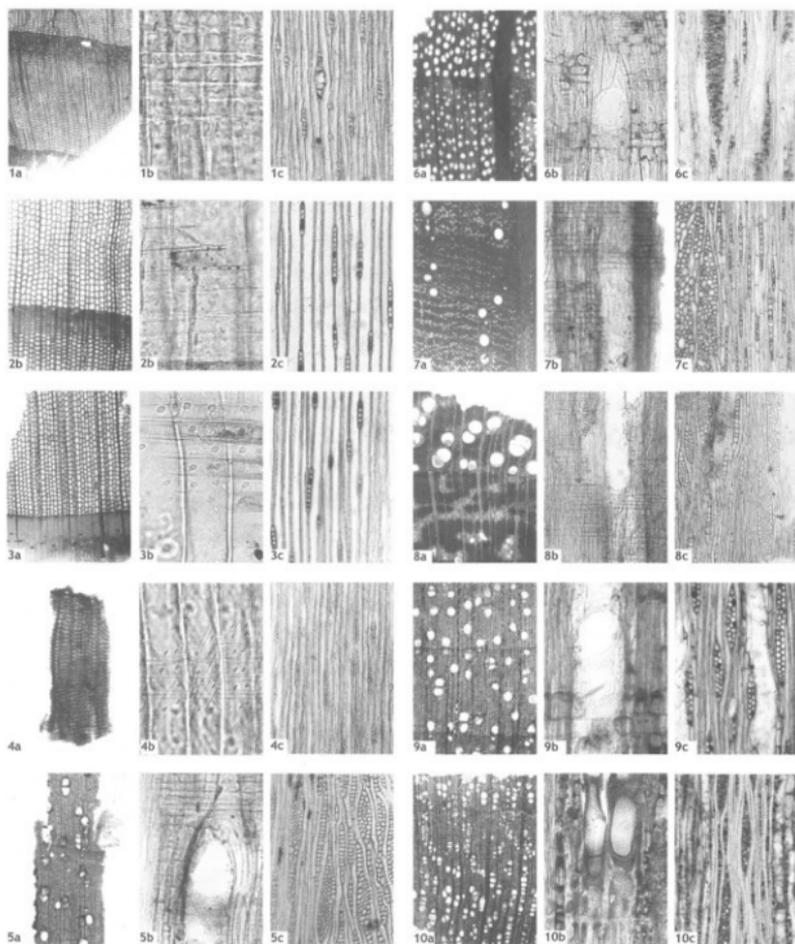
引用文献

バリノ・サーヴェイ株式会社（2001）御藏遺跡から出土した木器等の樹種「御藏遺跡 第4・6・14・32次発掘調査報告書 御菅西地区震災復興上地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」神戸市教育委員会、114-128

松業礼子（2001a）二葉町遺跡出土木材の樹種同定。「二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査 一新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う」神戸市教育委員会、141-166

松業礼子（2001b）松野遺跡出土木製品（古墳時代後期初頭～鎌倉時代）の樹種同定。「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査 一新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う」神戸市教育委員会、175-186

松業礼子（2002）深江北町遺跡第9次調査 出土した木製品の樹種同定。「深江北町遺跡第9次埋蔵文化財発掘調査報告書 一葦屋驛屋閩連遺跡の調査」神戸市教育委員会、107-134



1-4: a-1.0mm, b-0.1mm, c-0.4mm
 7,8: a-1.0mm, b-0.4mm, c-0.4mm

5,6,9,10: a-1.0mm, b-0.2mm, c-0.4mm

a: 横断面 b: 放射断面 c: 接線断面

第4章 考察

第1節 神戸市域（六甲山南麓地域）における弥生時代第V様式～布留式併行期の土器様相

<地域の設定の理由>

現在の神戸市域はその地理的条件から、大きく3つの地域に分けられる。①西半の明石川とその支流によって形成された平野部、②六甲山地北側の小河川による小規模平野部と今回対象地域とする③六甲山南麓地域である。

①は旧国区分では播磨国（明石郡）に属しており、瀬戸内海地域との関連性を無視できない。②は北辺を旧丹波国と接しており、出土土器に近畿北部地域の影響も認められる。

森南町遺跡が位置する③の地域は、北側の六甲山地と南側の海に挟まれた、東西に長くのびる主として扇状地によって形成された斜面地からなっている。旧摂津国の西半部に当り、神戸市中央区の旧生田川を境に、西半は八部郡、東半は菟原郡に属している。森南町遺跡は神戸市東灘区の東端に位置するが、この東側に接する芦屋市・西宮市まで地形的にはほぼ同様の条件下にある。旧生田川から西宮市の夙川までが旧菟原郡に比定されることは、このような地理的条件も関係するものと推測される。

これより、森南町遺跡出土土器の様相を考える際には、③の地域全体の土器様相のなかで位置づける事が重要と思われる。ただ今回は、芦屋市・西宮市域の土器を実際に観察する機会に恵まれなかったため、神戸市域の資料を中心として考察を加え、隣接地域との比較検討等については次の機会を待ちたい。

<編年作業の現状>

六甲山南麓地域の弥生時代後期から布留式併行期の土器については、その具体的様相が長く不明であった。その原因の1つとして資料不足がまず挙げられるが、近年この時期の遺跡の調査例が増加し、出土資料的には充実しつつある。ただ、その大部分は未整理・未発表の状態で見捨てられているに等しく、「資料化」されていないというのが現状となっている。

一方、そのような中でも当地域の編年の試みは進められており、森岡秀人氏⁽¹⁾や竹村忠洋氏⁽²⁾の重要な研究成果が公表されている。しかしこの研究も上記の現状から、神戸市内の出土例を十分に活用したものには当然のことながら得ていない。

そこで今回は、当該地域の弥生時代後期社会の復元に一助となることを期待して、摂津地域の弥生土器の概要を示された森田克行氏⁽³⁾や森岡・竹村両氏の成果に導かれつつ、多くの検討課題を含むことを承知の上で、複雑な編年の試案を提示しておきたい。尚、編年に当たっては器種ごとの型式分類を明らかにすべきと思われるが、紙幅の都合上1つの基準となる高坏のそれを提示するに留めておきたい（第94図）。

<様式の設定>

神戸市域（六甲山南麓地域）の第V様式土器について、1990年に発表された『弥生土器の様式と編年』の森田編年を基軸としつつ当地域の上器編年を試みたい。このなかで森田氏は弥生時代後期土器を計7様式に編年されたが、当該地区は第V-1様式から第

V-4 様式の4段階にまずは大別し、細分は可能性を示すにとどめ資料の充実を待ち再考したい。以下後期前半の第V-1・2様式が森田編年の第V-0～3様式に、同後半の第V-3・4様式が森田編年の第VI-0～2様式に、そして森田編年第VI-3様式は第VI-1様式(庄内式古段階)にほぼ相当するものと考えている。

第V様式、庄内式および布留式併行期の土器編年において、高環形土器の型式変化が1つの基準となり得ることは、多くの研究者により夙に指摘されている。よってここでも高環の型式の変遷を重視して様式設定を行った。また時期が下るに従って、壺や甕の口縁部型式が単純くの字口縁に統一化していくこと、甕体部の球形化が進行することなどを考慮した。

庄内式土器に関しては一般的に古段階、中段階、新段階またはⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ(布留古段階)に編年されているが、神戸市内の庄内式(併行期の)土器については、前記のように資料化されていないものが多く、実態が明確に把握できていないのが現状である。よって、現時点では現在1つの基準となっている河内地域の編年との併行関係が、後述のように河内産庄内甕の搬入が遅れることから、確定できないことを考慮して、「古段階、中段階、新段階」という3時期に分類し、第VI-1～3様式とした。

布留式・布留形甕出現以降で須恵器出現以前を第Ⅷ様式とする。第V様式形甕、庄内式・庄内形甕の残存や、庄内形と布留形の折衷型式甕(寺沢薫氏の「布留式影響甕」⁽⁴⁾)の存在、などを指標として第Ⅷ-1様式を設定した。布留式甕は搬入品と推定できる甕を、布留形甕は在地産の布留的甕を指しているが、両者の峻別は困難な場合がある。

また今回は第Ⅷ様式に十分な検討を加える時間がなく、当様式の細分に至らなかった。よって第Ⅷ様式初頭～前半と考えられるものを中心に、第Ⅷ-1様式としておいた。

<第Ⅳ様式末>

第V-1様式の前段階として、91年度調査の滝ノ奥遺跡出土土器を1つの基準に、第Ⅳ様式末を設定しておく。滝ノ奥遺跡出土土器⁽⁵⁾は、円形竈穴住居址(SB01)とC-1b区土器群からの出土遺物がまとまった資料である。SB01からは広口壺、直口壺、細頸壺、小型無頸壺と高環が出土している。C-1b区土器群には広口壺、甕、無頸壺、結合形土器や小型の高環がある。

広口壺にはSB01から出土した、凹線のある上方に広がる頸部と端部外面に凹線を施した口縁部を持ち、体部外面に櫛掻き波状文・直線文を施文する壺と、C-1b区土器群出土の太く短い頸部から外反する口縁部を持ち、前者より球形に近づいた体部を示すものがある。後者の広口壺は口縁端部外面に凹線を施す以外無文で、体部上半には後期的な右上がりのタタキが残る。森田編年ではこのタイプの壺は第V-0様式とされているが、C-1b区土器群出土のこれに伴う土器類に第V様式と断定するだけの型式変化が捉えられず、今は第Ⅳ様式としておきたい。

甕は口縁端部外面に凹線を巡らし、体部外面の中位にハケ原体による列点文を持つもので、体部外面の上半に中期的な左上がりのタタキと、一部後期的な右上がりのタタキを残している。またそれと共に口縁端部を上下に拡張し凹線を施したやや大型の甕がある。

高環は環口縁部が直立気味に立ち上がり、外面に2条の凹線文を施す。脚部は細い脚柱部から緩やかに裾部につながり、脚柱部外面にヘラ描沈線を巡らし、裾部内面をヘラケズリしている。裾部には多数の小孔を穿孔するものがある。

<第V-1様式>

明石川流域に於ける後期初頭から前半の土器様相に関しては、表山⁽⁶⁾・城ヶ谷⁽⁷⁾両高地性集落の調査で明らかになりつつあるが、六甲山南麓地域の第V-1様式土器については不明確な点が多い。

このような状況のなかで、1995年に調査した祇園遺跡第5次調査の14区土石流出上土器⁽⁸⁾は、高環を基準にすれば、第V-1様式とそれ以降のものを含む資料として注目される。

完形に復元できた高環はA1類で、短く直立気味に立ち上がる環口縁部、開きの少ない脚裾部に第V-1様式の特徴が現れている。坏体部のヘラミガキはよこ方向のものと放射状の2種が見られ、後者の方が環口縁部と体部との境がシャープな作りとなっている。

この高環と共に出土した壺・甕・器台の中には当様式と考えて良いものが含まれている。壺は太く短い頸部から外方に開く口縁部を持つ広口壺があり、生駒西麓産の壺も見られる。

甕には口縁端部に面を持ち、体部外面は右上がりのタタキで、同内面はヘラケズリする他地域の後期初頭例と類似するものが認められる。

器台は脚部のみで全形を明らかにし難いが、裾部の開きが少なく上部にヘラ刺突文が一部残る。

弥生時代中期を中心とする高地性集落の収束後、山麓平野部に立地する後期初頭の集落の実態を知る上で、この祇園遺跡第5次調査出土土器の分析は重要と考えられるが、高環に複数型式が見られることから第V-1様式の実態に関してはより良好な資料の検出が待たれる。

また、1983年調査の篠原A遺跡⁽⁹⁾では溝状遺構から長頸壺、高環などが出土しているが、これも複数時期の土器が混在しているものと思われる。

さらに前田佳久氏が『みづほ』第35号誌上で発表された、伯母山遺跡・C22区出土土器⁽¹⁰⁾も、第V-1様式の貴重な資料で、広口壺、無頸壺、長頸壺、甕などがある。

<第V-2様式>

熊内遺跡第3次調査のSD01出土土器⁽¹¹⁾は、高環の型式から判断すると第V-2様式前半から第V-3様式までを含む可能性があるが、ここではSD01出土土器中、埋上第3層内の「土器群」として取り上げられたものを後期前半でも新しい段階の第V-2様式と考えておきたい。

熊内遺跡・SD01出土には口縁端部を下方に拡張し外面に施文する前様式以来の広口壺と共に、口縁端部を丸く収めた広口壺が見られる。前者の広口壺はこれ以後減少しつつ第VI-1様式まで存続する。

高坏A2・3類、B1・2類およびE1～3類は第V-2様式の指標となるものである。熊内遺跡・SD01出土のA・B及びE類の高坏が脚・坏連続成形技法によるもの他に、挿入付加法、接合手法のものを含むのに対し、長田神社境内遺跡第1次調査・礫上出土土器群⁽¹⁰⁾には脚・坏連続成形技法が見られず、挿入付加法と接合手法のみとなっており技法上の変化が看取される。これは熊内遺跡・SD01出土土器と、長田神社境内遺跡・礫上出土土器群が区分される可能性を示すものと考えられる。

甕についても、熊内遺跡・SD01出土のものが、内面ヘラケズリという第V-1様式からの調整技法を引き継ぐものが残存するのに対し、後者のそれは内面をヘラケズリで仕上げ上げるもののみで構成され、高坏における変化の方向性と合致している。よって熊内遺跡・SD01出土土器を第V-2様式前半、長田神社境内遺跡・礫上出土土器を第V-2様式後半と仮定しておきたい。

<第V-3様式>

第V-3様式は後期後半の古段階で、森田克行編年の第VI-0・1様式に当たる。二重口縁壺・手焙り形土器出現以前の森田第VI-0様式段階の土器には、上沢遺跡第1次調査・SK01⁽¹¹⁾、郡家遺跡城の前地区第14次調査・SB15出土土器⁽¹²⁾や同地蔵元地区第3次調査・土器群⁽¹³⁾などがある。

高坏A4類の出現が第V-3様式の指標である。脚・坏接合技法にはまだ連続成形のものが見られる。A4類の高坏の坏体部高は坏口縁部高を凌駕するか、ほぼ同じとなっており、口縁部の発達は未熟である。坏口縁部外面のヘラミガキは、たて方向のものが第V-2様式後半と考えられる長田神社境内遺跡・礫上出土土器群に出現しこの様式になっても引き続き見られるが、主流となるかは確認できていない。脚部の開きは第V-2様式のものに比べ大きくなっている。

口縁部がやや退化した長頸壺や、体部外面にタタキ痕をそのまま残す長頸壺、そして細頸壺がこの段階から見られるようになる。

甕体部は前様式以来の2分割のタタキ成形が目につく。体部内面をヘラケズリするものはあるが主流ではない。口縁部外面の中位にまでタタキを残す、口縁部タタキ出し手法が見られるようになる。尚、上沢遺跡1次調査・SK01には「淡路型」甕と思われるものがある。

長田神社境内遺跡第1次調査・シルト内出土土器群⁽¹⁴⁾や森北町第8次調査・SB04出土土器⁽¹⁵⁾は、二重口縁壺・手焙り形土器出現以後の土器群で、第V-3様式後半(森田第VI-1様式段階)のものである。ただし、当地域に於ける二重口縁壺・手焙り形土器の出土例そのものが少なく、この2器種を指標として細分する際に困難を感じる。

高坏の坏・脚接合技法の出現は第V-2様式のE類に見られ、長田神社境内遺跡・シルト内出土土器のE類にも引き続き確認することができる。一方A・B類については坏・脚接合技法出現の問題に関して寄与する資料がなく、現在は不明と言わざるを得ない。

甕体部外面のタタキは右上がりの連続ラセンタタキとなるものがごく少量存在する

が、大半は2分割成形と思われる。体部内面のヘラケズリは、ほとんど確認することができない。

<第V-4様式>

第V様式終末の第V-4様式の資料として位置づけられるものとして、熊内遺跡第3次調査・SD05の他、同遺跡SB04・SB08・SB09出土土器²⁰⁾しか把握できておらず、検討材料の不足は否めない。この状況は庄内古段階、第VI-1様式の土器様相を考える上でも大きな障害となっている。

熊内遺跡・SD05出土の高坏（『報告書』282）はA4類に近いが、坏口縁部高が同体部高を凌駕し口縁端部に面を持たない事以外はA5類に近いことからこの時期とした。当様式も高坏の脚・坏の接合技法が明確な資料に恵まれていない。この時期まで坏口縁部内面のヘラミガキはよこ方向が多いが、放射状に施されるものも見られる。第VI-1以降は放射状ヘラミガキが漸次主流となっていくものと思われる。

SD05には口縁部が退化した長頸壺があり、SB08には長頸壺の体部と考えられるものがある。

細頸壺は口縁部が外反気味に開くもので、第VI-1様式以降に見られる内湾する口縁部を持つものは出現していないと思われる。

二重口縁壺はあるが外面に波状文、円形浮文などで加飾するものを現時点では確認することができない。

甕の体部外面のタキは右上がりの連続ラセンタキとなるものが多いが、底部はまだしっかりとした平底か、分厚い突出底となっている。熊内遺跡・SD05出土の甕には、胴部が楕円形を呈する大形のものがあるが、これは讃岐V-5（庄内期以前）に類例が見られ²¹⁾、SD05出土土器の位置づけの参考となる。

大形の鉢は前代に比較し、口縁部がやや発達しており森田第VI-2様式の様相と共通している。

SD05はSD01同様、長期に亘って開口していたことが十分考えられ、実際SD05では第4・5層、SD05も第3層中に布留式土器の混入がある。よってSD05出土土器すべてを第V-4様式とすることは、今後検討されねばならない。

<第VI-1様式>

第VI-1様式土器の一括資料には郡家遺跡城の前地区第24次調査・SX01出土土器²²⁾、長山神社境内遺跡第1次調査・SD01出土土器²³⁾がある。郡家遺跡・SX01出土土器には、第V様式の系譜上にある長頸壺が残り、かつ庄内甕は共伴しないが、B4類の高坏、球形に近い体部を持つ壺や甕、小型器台と思われる破片、小型の丸底埴や庄内期以降に顕著な存在となる脚付小型鉢の存在などを重視し第VI-1様式に位置づけておく。

長山神社境内遺跡・SD01出土土器は、第V-3様式としたシルト内出土土器を包含する土層の上面から切り込む溝からのものである。また第V-2様式後半の資料に位置づけた礫上出土土器は、このシルト層を除去した段階で検出した礫の上面で出土したものである。これから礫上出土土器→シルト内出土土器→SD01出土土器の順が確認でき

ている。S D01出土土器には高環A 6類や口頸部が内湾する細頸壺、丸底化した小型壺の体部のほか楕円形の体部を持つ甕などが出土している。

長田神社境内遺跡第1次調査・S B03出土土器¹⁰⁰も当様式と考えられる。出土個体数は少ないがB 3類の高環、脚付小型鉢などがあり1つの基準となろう。

第VI様式土器の編年の基準となるのは、第V様式同様、高環の型式変化である。高環B 3・B 4類が第VI-1様式の指標となる。この時期の資料も不足しており、脚・環接合技法を明らかにし得る資料に恵まれていない。前代までの高環は環口縁部内面のヘラミガキがよこ方向に施される場合が多いのに対し、この様式以降は放射状のもの比率が高まるものと推定されるが、よこ方向のヘラミガキが消滅するわけではない。

口頸部が内湾する細頸壺はこの様式に出現し、第VI-2様式まで確認される。長田神社境内遺跡・S D01出土土器にはこのタイプの細頸壺の口縁部とともに、別個体ながら細頸壺の体部と考えられるものがあるが、その底部は既に丸底となっている。二重口縁壺に円形浮文・櫛掻き波状文で加飾するものがこの時期になって確認することができるが、所属様式が判明する二重口縁壺が少なく、無文のものとの比率は不明である。

甕に関して言えば、庄内式甕（河内産の庄内甕）・庄内形甕（河内産以外の庄内的甕）の有無も様式設定の重要な要素と考えられる。庄内式・庄内形甕の搬入、受容に関しては、六甲山南麓地域でも濃淡があることが当然推測され、おそらく数%程度受容されるに過ぎない庄内甕の存在を重視することについては批判も十分予想されるが、近接する遺跡間（たとえば上沢、御蔵、長田神社境内遺跡）や同一遺跡内の別遺構間での庄内式・庄内形甕の有無は、ある程度時期差を反映するものと仮定し編年の参考としている。

また、庄内式甕の影響を受けたと思われる第V様式形甕（庄内期以降に残存する弥生時代後期的甕で、球形に近い体部、鋭く屈曲する頸部を持つものなど）の有無も庄内併行期と判断する材料となりうる。

しかし、当地域の第VI-1様式期にはこの庄内式・庄内形甕及び庄内式甕の影響を受けたと思われる第V様式形甕の存在を確認することができず、当該期はこれらの甕の出現以前に位置する可能性が高い。

郡家遺跡城の前地区・S X01出土の甕は甕に比較して出土量が少ないが、口縁端部に面を持ち、体部上半に最大径があるような形態が第V-3様式に近いものから、単純くの字口縁で体部の球形化がかなり進んだ甕まで含まれている。体部外面のハケ調整も加えるものと加えないものが混在している。長田神社境内遺跡・S D01出土の甕は外面のハケ調整を省略し、厚めの底部と楕円形に近い胴部を持つものが多いが、球形に近い体部を持つ甕は含まれていない。

大型器台（この「大型」は第VI-2様式以降に明確になる小型器台に対する「大型」である）の存在がこの時期になって明確となるが、第V-2様式から第V-4様式までの様相が明確ではなく、系譜関係が明らかではない。ただ、第VI-2様式以降の資料には見当たらず当様式をもって消滅している可能性がある。

一方、小型器台はそれと思われる破片は認められるが極めて稀な存在である。第VI-

Ⅰ様式は小型器台出現以前の可能性も考えられる。

またS D01出土の大型鉢の形態も布留式併行期に見られるような、単純くの字口縁と張りのある腰部を持つもので、新しい傾向を示している。

小型鉢には底部に低い脚をもつものがあり、第Ⅴ-3様式の土沢遺跡第1次調査・S K01下層出土土器にも含まれるが、第Ⅵ-1様式以降の資料中に特徴的に見られるようになる。当様式から第Ⅶ様式までこの脚付小型鉢は継続するが、次様式以降に脚部が当様式に比較してより発達している例が見られる。

<第Ⅵ-2様式>

第Ⅵ-2様式の一括資料は多く検出されているが、これもまた未発表のものが大半を占めている。

高坏は坏口縁部が発達し、外反して大きく広がるB5類が出現する。坏口縁部が直線的に斜め上方に大きく伸びる、B6乃至B7類と思われる高坏も当様式に出現するが、坏底部を欠くため、いずれか確定できない。第Ⅴ様式前半に特徴的な有段高坏がこの様式になって、再び見られるようになるが、その系譜関係などは不明である。

第Ⅴ-1様式以来の長頸壺は確認されない。前様式までで消滅したと思われる。

御蔵遺跡第10次調査・土器溜り⁽⁴⁰⁾出土の河内産庄内甕は、庄内式中段階のものである。また日暮遺跡第7次調査・S X206出土土器⁽⁴¹⁾にも河内形庄内甕が含まれている。ただ、これ以外に第Ⅵ-2様式に属す資料で庄内式・庄内形甕が伴出した例が確認できず、現時点では当様式は庄内式・庄内形甕の搬入が明瞭となる以前の段階と考えておきたい。

平成元年調査の森北町遺跡第8次調査・S B03出土土器⁽⁴²⁾は、庄内式・庄内形甕の受容と出現以前の状況を示す極めて良好な、且つ現時点では唯一と言える資料である。口縁部の発達した高坏、小型器台、櫛描き波状文・円形浮文による加飾二重口縁壺がある。この住居に近接して流下する自然河道から多くの庄内式甕が出土しているにもかかわらず、このS B03からは庄内式・庄内形甕は小片の状態でも確認できない。

戎町遺跡第19次調査・S R501出土土器⁽⁴³⁾も当該期の良好な資料で、これも庄内式・庄内形甕を含まないが河道出土という条件や、地域差も反映している可能性など戎町遺跡内や周辺遺跡の庄内式・庄内形甕の受容状態の把握など検討課題も多い。

庄内式・形甕以外のものは第Ⅴ様式形の甕が依然として主流で、腰部が球形に近づくものが多い。底部は外面にタタキや木の葉状痕を残す径4～5cmの平底のものもあるが、径2～3cmで底部外側面に強い横方向のナデまたはヘラズリを加え、丸底化を指向するものも確認される。

小型器台は当様式になって明確となる。この時期のものは、受部・脚部の形態に多様性が認められる。これとセットとなる小型丸底増は平底を残すが、第Ⅵ-1様式に丸底のものが既に出ており、将来この時期に属す丸底増が検出されるものと思われる。

大型の器台は現時点では確認できない。きわめて稀な存在になっている可能性がある。

小型鉢には浅い丸底のものが確認されるが、第Ⅶ様式のものに比べやや器高が高い。

当様式は他地域からの搬入品、その影響を受けた上器の存在が日立つようになる時期でもある。四国・山陰および淡路との交流を示すものが確認されるなかで、庄内式甕が極めて少量しか確認できないことは注意される。

長頸壺、大型器台等の消滅と、布留式につながる口縁部が発達した高環、小型器台などの出現は第Ⅴ様式の器種構成がほぼこの段階で崩壊したことを示すようである。しかし、太い頸部から大きく開く口縁部を持つ広口壺は依然として残っている。

これ以外に若松町遺跡第2次調査・S B 203³⁹⁷、御蔵第12次調査・S X 12302³⁹⁸、上沢遺跡第8次調査・S K 216³⁹⁹、住吉宮町遺跡第2次・S K 02出土土器⁴⁰⁰は当様式のものと考えられる。

<第Ⅵ-3様式>

高環では、坏体部内面が水平になる高環B 7類が出現している。一方、第Ⅵ-2様式からの高環B 5類も当様式まで残存している。浅い腕状の坏部を有する高環C類が出現している。これは第Ⅵ-1以降に増加するものと考えられる。

第Ⅴ様式の系譜を引く太い頸部から大きく開く口縁部を持つ広口壺は、この様式にも残存している。

第Ⅴ様式形甕は、口縁部に面を作るものは少なく、丸みをもって終わる例が大半となる。第Ⅵ-2様式までは様々な口縁部形態があるが、この様式になって端部が丸みをもって終わる単純くの字口縁甕が主流となるものと考えられる。

庄内式・庄内形甕の出現は確実に第Ⅵ-3様式からである。この庄内甕の共伴を第Ⅵ-2様式と第Ⅵ-3様式を分ける1つの要素と仮定しておきたい。高環B 7類を含む御蔵遺跡第7次調査・土器溜り⁴⁰¹、本庄町遺跡第9次調査・S D 01出土土器⁴⁰²に庄内式・庄内形甕が伴い、高環B 7類の共伴を確認できない第Ⅵ-2様式土器群に庄内甕が見られないことを重視しておきたい（ただし、若松町遺跡第2次・S B 203出土土器は第Ⅵ-2様式だが、出土高環にB 6類かB 7類かが判断できないものが含まれている⁴⁰³）。

庄内式・庄内形甕と共に、山陰系5の字口縁甕、四国産二重口縁壺、河内産広口壺などが搬入されている。

これ以外では千歳遺跡第3次調査・S H 02⁴⁰⁴、御蔵遺跡5丁目南地区・第2調査区土器溜り⁴⁰⁵、郡家遺跡城の前地区第15次調査・S B 02出土土器⁴⁰⁶は当様式のものと考えられる。

<第Ⅶ-1様式>

当該地域では、布留期になっても第Ⅴ様式形甕が残存することは夙に指摘されている。このため、庄内新段階と布留初頭との境界が、層不明瞭な状況となっている。

「布留式（形）甕」「小型器台、小型丸底壺、二重口縁小型浅鉢の確立」「広口壺の形式数の減少」などが第Ⅶ様式のメルクマールとなる。

昭和63年度に調査された住吉宮町遺跡第11次調査・S B 10出土土器⁴⁰⁷には、高環B 6類、有段高環、広口壺、第Ⅴ様式形甕、庄内形甕、布留形甕、小型器台と二重口縁の小型壺がある。同S B 11出土土器には高環B 6類、装飾付二重口縁壺、第Ⅴ様式形甕、

庄内形甕のほか布留形甕の破片が含まれている。この他当様式に属するものは或町遺跡第3次調査・S X 01⁽³⁰⁾、御蔵遺跡第21次調査・土器溜り⁽³⁰⁾、御蔵遺跡5丁目南地区第2調査区・S X 301⁽³⁰⁾、上沢遺跡第50-1次調査・S K 101⁽⁴¹⁾、上沢遺跡第51次調査・土器集中部⁽⁴²⁾、兵庫本道跡第1次調査・S X 01⁽⁴³⁾、日暮遺跡第4次調査・S B 01⁽⁴⁶⁾、住吉宮町遺跡第2次調査・S X 01出上土器⁽⁴⁵⁾などがある。

高坏は口縁部が大きく外反するB 5類は見られないが、坏体部底面が窪むB 6類は依然として残っている。有段高坏もあるが脚裾部の段は消失している。

太い頸部から大きく開く口縁部を持つ広口壺は、当様式にも見られるが、その数は極めて少なくこの段階で消滅したものと推測される。

端部にあまい面を持つ単純くの字口縁部で、外面肩部にヨコハケを施し内面をヘラケズリした球形に近い体部の甕や、口縁部は布留式甕に似るが、頸部は鋭角に屈曲し、体部内面は頸部直下までヘラケズリを施す甕がある。庄内形・布留形折衷型式の甕で、寺沢氏の言う「布留形影響甕」と考えられる。

新たな形式として二重口縁小型浅鉢が出現する。単純くの字口縁の小型浅鉢も見られるが、いずれも出土例が少なく、両者の出現の前後関係は不明である。

以上、弥生時代中期末の第Ⅳ様式から古墳時代前期の第Ⅶ-1様式までの土器変化の概観を試みた。当節の冒頭でも述べたように基準として取り上げた一括資料の中には接合すらできていないものが含まれており「基準」として使用することに躊躇を強く感じている。またそれぞれの土器群に対する評価や位置付けは当然、発掘調査の担当者が行うべきであることは言うまでもなく、いずれそれぞれの「報告書」で明示されるものと思われる。よってこの編年の試みはあくまで現時点のもので、近い将来に見直しが必要となるものと考えられる。

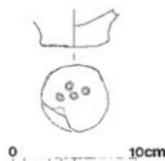
第2節 森南町遺跡S D 02出土土器の編年的位置

S D 02中層の黒色粘砂層出土土器をみると、大きく2つの要素を確認することができる。まず1つ目として「長頸壺」がわずかではあるが残存している事、太い筒状の頸部から上方に伸びる口縁部を持つ広口壺が多く見られる事、第Ⅴ様式の系譜上にあると推定される大型器台がある事、高坏では坏部の口縁部が発達しないものが多くを占める事、そして庄内式・形甕及びその影響下に出現したと思われるような在地産甕を含まない事である。他の1つは短頸直口壺(98)や脚付き小型鉢(165・166)の存在及び、体部内面にケズリを加える甕(142-151)、丸底となった甕(197)が確認される事である。

短頸直口壺は山城第Ⅵ-1様式の土器⁽⁹⁶⁾、姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡C地区S X 03出土土器⁽⁹⁷⁾に類例が求められる。体部内面にケズリを加える甕は、赤穂市周世入相S K 22出土土器⁽⁹⁸⁾や讃岐第Ⅴ-6~8様式⁽⁹⁹⁾のものに近い。つまりS D 02に見られる2つの要素のうち前者は、第Ⅴ様式以来の古い要素、後者は庄内期に見られる新しい要素と言い換えることができる。

これは下層出土土器に有段高坏の脚柱部と思われるものがあり、同形式の脚裾部と推

定できるものもあること、上層出土土器に第VI-2様式とした森北町遺跡第8次調査・SB03出土土器(第93図)に類例がある外面に竹管文を持つ壺底部が確認できる事、同じく上層出土土器に庄内期と考えられる三田市桑原遺跡SB01出土土器⁽⁵⁶⁾と共通する壺(224)がある事、そして出土層位に不確定さを残すものの小型器台が出現していることは、中層出土土器の編年の位置づけに大きな役割を果たすものと思われる。



第93図 森北町遺跡・SB03

これらのことを総合的に考えると、SD02の黒色粘砂層出土土器は既に庄内期に入りながらも第V様式的要素を多く残す段階、すなわち第VI-1様式期に位置付けることが現時点では妥当ではないと思われる。

第VI-1様式とした郡家遺跡城の前地区第24次調査・SX01出土土器群も長頸壺や、口縁部の発達が未熟な高坏などを含み、当遺跡のSD02黒色粘砂層出土土器と共通する様相が看取される。

ただ郡家遺跡・SX01出土土器は口縁部が発達した高坏B4類、体部が球形に近い壺など第VI-2様式に近い要素を兼ね備えている。SX01出土土器に含まれる加飾二重口縁壺についても第VI-1様式と思われる長田神社境内遺跡第1次調査・SD01や当遺跡SD02黒色粘砂層出土土器に見られず、第VI-2様式とした日暮遺跡第7次調査・SX206、森北町遺跡第8次調査・SB03出土土器にある事から、これも新しい要素と考えることができる。この第VI-1様式とした森南町遺跡・SD02黒色粘砂層出土土器と、郡家遺跡城の前地区第24次調査・SX01出土土器の間に存在する相異点が、时期的差を反映するものか小地域の中での地域的差なのかについては今後の課題としておきたい。

注

- (1) 森岡秀人「摂津における土器交流拠点の性格—真正弥生時代と庄内式期を比べて—」『庄内式土器研究』XXI 庄内式土器研究会 1999年11月6日
- (2) 竹村忠洋「摂津地域における古墳出現期前後の土器様相」『古墳出現期の土器と実年代』シンポジウム資料集 (財)大阪府文化財センター 2003年3月8日
- (3) 森田克行「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 寺澤薫・森岡秀人編 木耳社 1990年11月26日
- (4) 寺沢薫「出土遺物詳論」『矢部遺跡—国道24号線榎原バイパス建設に伴う遺跡調査報告(Ⅱ)—』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県立橿原考古学研究所編 1986年3月31日
- (5) 黒田恭正「滝ノ奥遺跡」『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994年3月
- (6) 深江英憲他「表山遺跡・池ノ内群集墳」神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 兵庫県文化財調査報告第202冊 兵庫県教育委員会 2000年3月17日

- (7) 山本雅和・浅谷誠吾「城ヶ谷遺跡 第2次調査」『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1999年3月
- (8) 富山直人「祇園遺跡第5次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2000年2月11日
- (9) 定森秀夫「神戸市灘区篠原A遺跡」(財)古代学協会 1984年3月31日
- (10) 前田住久「大阪湾北岸地域の弥生集落—神戸市域を中心にして—」『みずほ』第35号 大和弥生文化の会 2001年4月14日
- (11) 安田滋編「熊内遺跡第3次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2003年3月31日
- (12) 黒田基正編「長田神社境内遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会 1990年3月31日
- (13) 阿部敬生編「上沢遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1995年3月31日
- (14) 宮本郁夫・池野素子「郡家遺跡 城の前地区第14次調査」『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1987年3月31日
- (15) 西岡誠司「郡家遺跡 地蔵元地区第3次調査」『昭和62年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1990年3月31日
- (16) (12)に同じ。
- (17) 丹治康明・須藤宏「森北町遺跡」『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992年3月
- (18) 安田滋編「熊内遺跡第3次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2003年3月31日
- (19) 真鍋晶宏「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年』四国編 菅原康夫・梅木謙一編 木耳社 2000年3月25日
- (20) 丸山潔「郡家遺跡城の前地区第24次調査」『昭和62年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1990年3月31日
- (21) (12)に同じ。
- (22) 同上。
- (23) 山田清朝「第1節第8次・第10次調査」『神戸市御蔵遺跡—第8・9・10次調査』山田清朝編 神戸市教育委員会 2000年12月28日
- (24) 井尻格「日暮遺跡第7次調査」『平成5年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1996年3月
- (25) (17)に同じ。
- (26) 山本雅和「戎町遺跡第19次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998年3月
- (27) 口野博史「若松町遺跡第2次調査」『平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001年3月
- (28) 山本雅和「第2章第4節 第12次調査」『御蔵遺跡 御菅西地区震災復興土地区画整理事業地内における民間事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』富山直人・川上厚志編 神戸市教育委員会 2003年3月31日
- (29) 斎木巖・三輪晃三「上沢遺跡第8次調査」『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000年3月
- (30) 山本雅和「住古宮町遺跡 第2次調査」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988年3月31日
- (31) 西岡誠司「第2章第3節 第5・7次調査」『御蔵遺跡 御菅西地区震災復興土地区画整理事業地内における民間事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』富山直人・川上厚志編 神戸市教育委員会 2003年3月31日
- (32) 中居さやか「本庄町遺跡第9次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2003年12月31日
- (33) (27)に同じ。

- (34) 関野豊「千歳遺跡 第3次調査」『平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001年3月
- (35) 石島三和「第4章第4節 第2調査区」『御蔵遺跡 御菅西地区震災復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』安田滋・富山直人・石島三和編 神戸市教育委員会 2001年3月31日
- (36) 宮本郁雄・池野素子「郡家遺跡城の前地区第15次調査」『昭和60年 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988年3月31日
- (37) 丸山潔「住古宮町遺跡第11次調査」神戸市教育委員会 1990年3月31日
- (38) 山本雅和「戎町遺跡第3次調査」『昭和62年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1990年3月31日
- (39) 川上厚志「第3章第3節 第21次調査」『御蔵遺跡 御菅西地区震災復興土地区画整理事業地内における民間事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』前掲
- (40) (35)に同じ。
- (41) 谷正俊編『上沢遺跡Ⅲ 第38・46・50次調査—都市計画道路松本線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2004年3月31日
- (42) 黒田恭正「上沢遺跡第51次調査」『平成15年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2005年3月刊行予定。
- (43) 松林宏典「兵庫松本遺跡第1次調査」『平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001年3月
- (44) 山本雅和「日暮遺跡第4次調査」『平成3年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1994年3月
- (45) 山本雅和「住古宮町遺跡—第2次調査—」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988年3月31日
- (46) 森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 寺沢薫・森岡秀人編 木耳社 1990年11月26日
- (47) 深井明比古・岡崎正雄編『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告書第30冊 兵庫県教育委員会 1985年3月30日
- (48) 甲斐昭光編「赤穂市周世入相遺跡」兵庫県文化財調査報告書第70冊 兵庫県教育委員会 1990年3月31日
- (49) (19)に同じ。
- (50) 古田昇・岡田章一・深井明比古『桑原遺跡—国鉄福知山線複線電化工事に伴う発掘調査—』兵庫県文化財調査報告書第37冊 兵庫県教育委員会 1986年12月

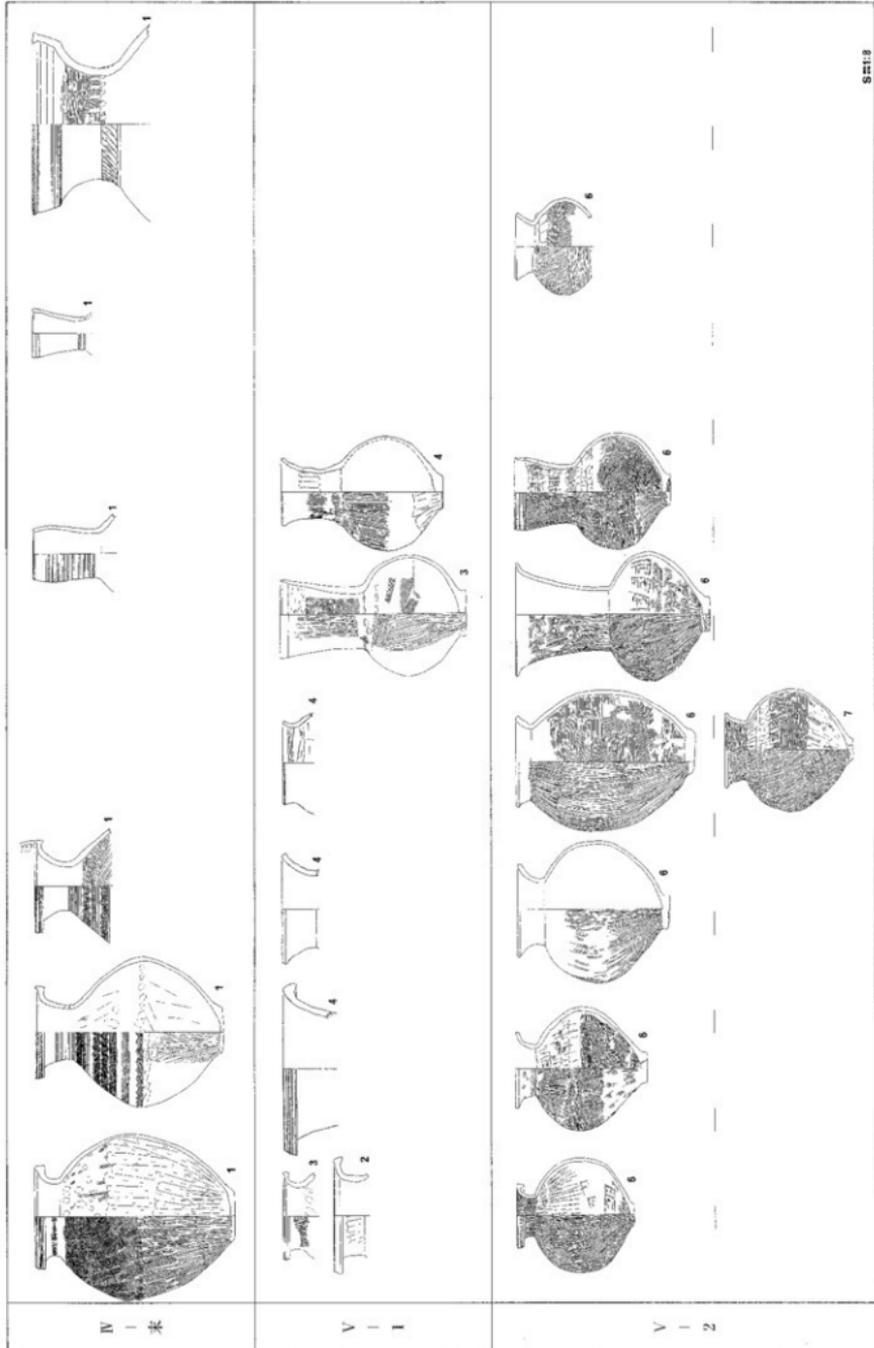
※今回の土器編年図作成に際し、実測図については基本的に各「報告書」及び『神戸市埋蔵文化財年報』掲載図を転載することにしたが、一部加筆ないし全て改めて筆者が実測を行ったものがある。よってその責は筆者にあることを明記すると共に、多くの未発表資料を公表することを快諾された調査担当者の各氏に深謝します。

A 1		杯口縁端部に面を持つものをA類とする。杯口縁部は直立気味に立ち上がる。杯体部は直線的に広がる。脚・杯部は連続成形し円盤充填する。	B 4		杯口縁部高>杯体部高で、口縁部が直線的に上方に伸びるもの。
A 2		杯口縁部は斜め上方にのびる。杯体部は内湾気味に広がる。脚・杯は連続成形で円盤充填する。	B 5		杯口縁部高>杯体部高で、更に口縁部が大きく外反するもの。杯体部内底面は窪むもの。
A 3		脚・杯部は挿入付加法となる。脚柱部径が小さくなり脛部がやや広がるが脚柱部と脛部の境界は明確ではない。	B 6		杯口縁部高>杯体部高で、口縁部が直線的に広がるもの。杯体部径が杯口縁部径の1/2に近づく。
A 4		脚・杯部は挿入付加法となる。脚柱部径が小さくなり脛部がやや広がるが脚柱部と脛部の境界は明確ではない。	B 7		B6の内、杯体部内底面が平坦となるもの。杯体部径が杯口縁部径の1/2以下のものがある。
A 5		杯口縁部の外反度が強くなる。脚柱部が大きく広がり脛柱部との境界が明確となる。	C		斜め上方に開く浅い碗状の杯部を持つもの。
A 6		杯口縁部の外反度がさらに強くなる。杯体部が浅くなる傾向がある。杯体部高<杯口縁部高となるものもある。	D		有段高杯。脚脛部が有段のもの之段が消失したものがある。脚柱部は中卓と中実の2種がある。
A 7		杯口縁部の外反度がさらに強くなる。杯体部が浅くなる傾向がある。杯体部高<杯口縁部高となるものもある。	E 1		浅い碗状の杯部と大きく広がる脚部を持つ。脚・杯部は連続成形による。
A 8		杯口縁部が伸展し、杯口縁部径に対し杯体部径が縮小する傾向が見られるもの	E 2		脚・杯部は挿入付加法となる。脚柱部と脛部の境界は前者に比し明確となる。
B 1		杯口縁端部に明確な面を作らないものをB類とする。杯口縁部がやや外反気味に立ち上がる。脚・杯部は連続成形し円盤充填する。脚は円錐状で裾端部が短く開く。	E 3		脚・杯部は接手法による。脚部は更に広がる。
B 2		杯口縁部の外反度はA3類と変わらない。脚・杯部は挿入付加法である。脚柱部と脛部の境界は明確ではない。	F 1		深めの碗状の杯部を持つもの。脚脛部は外反して広がる。
B 3		杯口縁部高>杯体部高となるもの。内湾ヘラミガキが放射状に変化する。	F 2		深めの碗状の杯部を持つもので脚脛部はやや内湾気味に広がる。
B 4		杯口縁部高>杯体部高となるもの。内湾ヘラミガキが放射状に変化する。	F 3		碗状の杯部に大きく広がる脚脛部に続く短い脚柱部がつくもの。

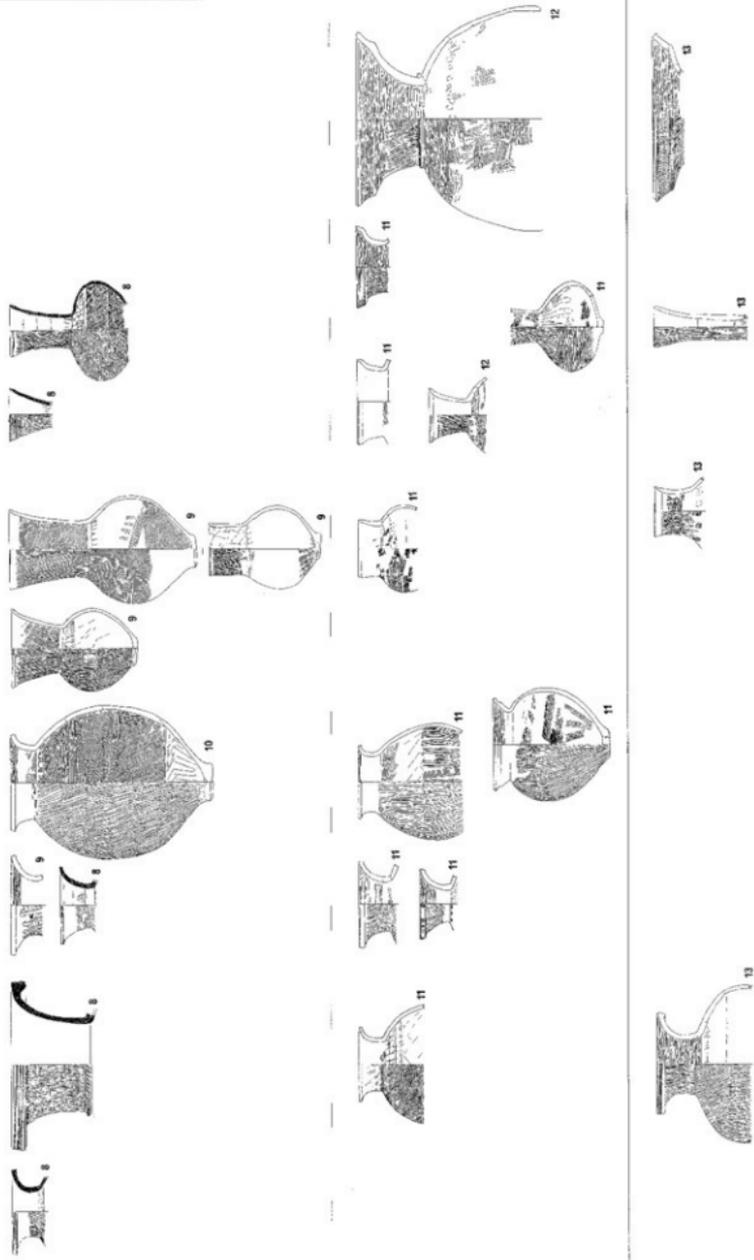
第94図 高杯型式分類図

※土器編年図(第95～105図)中、各土器に付した番号は下記の遺構を表している。

- 1 : 滝ノ奥遺跡・円形竪穴住居址(SB01)、C→b区土器群
- 2 : 祇園遺跡第5次調査・14区土石流
- 3 : 篠原A遺跡・溝状遺構
- 4 : 伯母山遺跡・C22区
- 5 : 長田神社境内遺跡第1次調査・SA区
- 6 : 熊内遺跡第3次調査・SD01
- 7 : 長田神社境内遺跡第1次調査・線上
- 8 : 上沢遺跡第1次調査・SK01
- 9 : 郡家遺跡城の前地区第14次調査・SB15
- 10 : 同地蔵元地区第3次調査・土器群
- 11 : 長田神社境内遺跡第1次調査・シルト内
- 12 : 森北町第8次調査・SB04
- 13 : 熊内遺跡第3次調査・SD05、SB04・SB08・SB09
- 14 : 郡家遺跡城の前地区第24次調査・SX01
- 15 : 森南町遺跡・SD02
- 16 : 長田神社境内遺跡第1次調査・SD01
- 17 : 長田神社境内遺跡第1次調査・SB03
- 18 : 御蔵遺跡第10次調査・土器溜り
- 19 : 日暮遺跡第7次調査・SX206
- 20 : 森北町遺跡第8次調査・SB03
- 21 : 戎町遺跡第19次調査・SR501
- 22 : 若松町遺跡第2次調査・SB203
- 23 : 御蔵第12次調査・SX12302
- 24 : 上沢遺跡第8次調査・SK216
- 25 : 住吉宮町遺跡第2次・SK02
- 26 : 御蔵遺跡第7次調査・土器溜り
- 27 : 本庄町遺跡第9次調査・SD01
- 28 : 兵庫松本遺跡第1次調査・SX01下層
- 29 : 千歳遺跡第3次調査・SH02
- 30 : 御蔵遺跡5丁目南地区・第2調査区土器溜り
- 31 : 郡家遺跡城の前地区第15次調査・SB02
- 32 : 住吉宮町遺跡第11次調査・SB10
- 33 : 住吉宮町遺跡第11次調査・SB11
- 34 : 戎町遺跡第3次調査・SX01
- 35 : 御蔵遺跡第21次調査・土器溜り
- 36 : 御蔵遺跡5丁目南地区第2調査区・SX301
- 37 : 上沢遺跡第50-1次調査・SK101
- 38 : 上沢遺跡第51次調査・土器集中部
- 39 : 兵庫松本遺跡第1次調査・SX01
- 40 : 日暮遺跡第4次調査・SB01
- 41 : 住吉宮町遺跡第2次調査・SX01
- 42 : 千歳遺跡第3次調査・SH01
- 43 : 上沢遺跡第51次調査・SD01



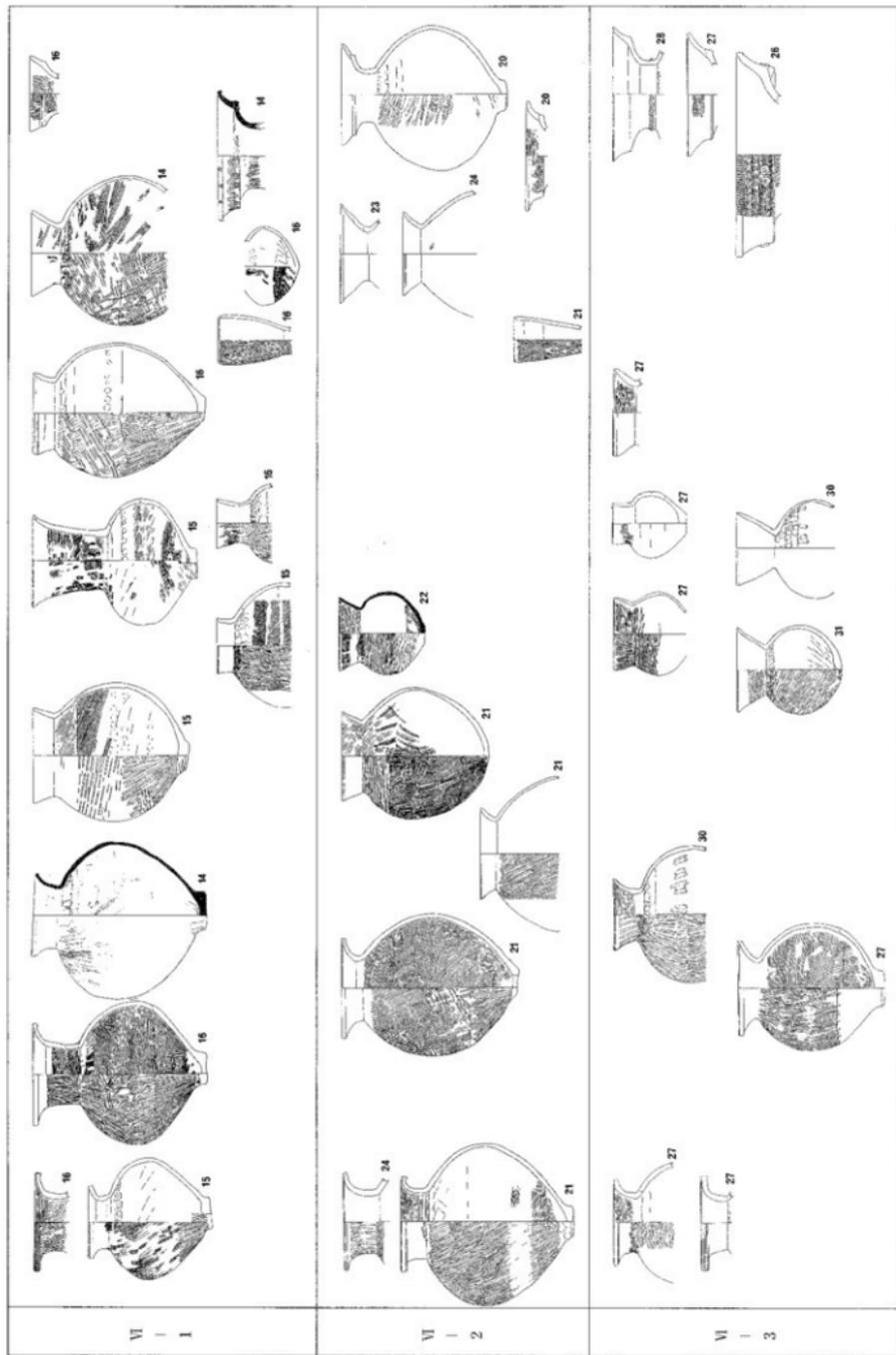
第95图 新石器时代中期末~古铜时代初期出土器编年图(1)



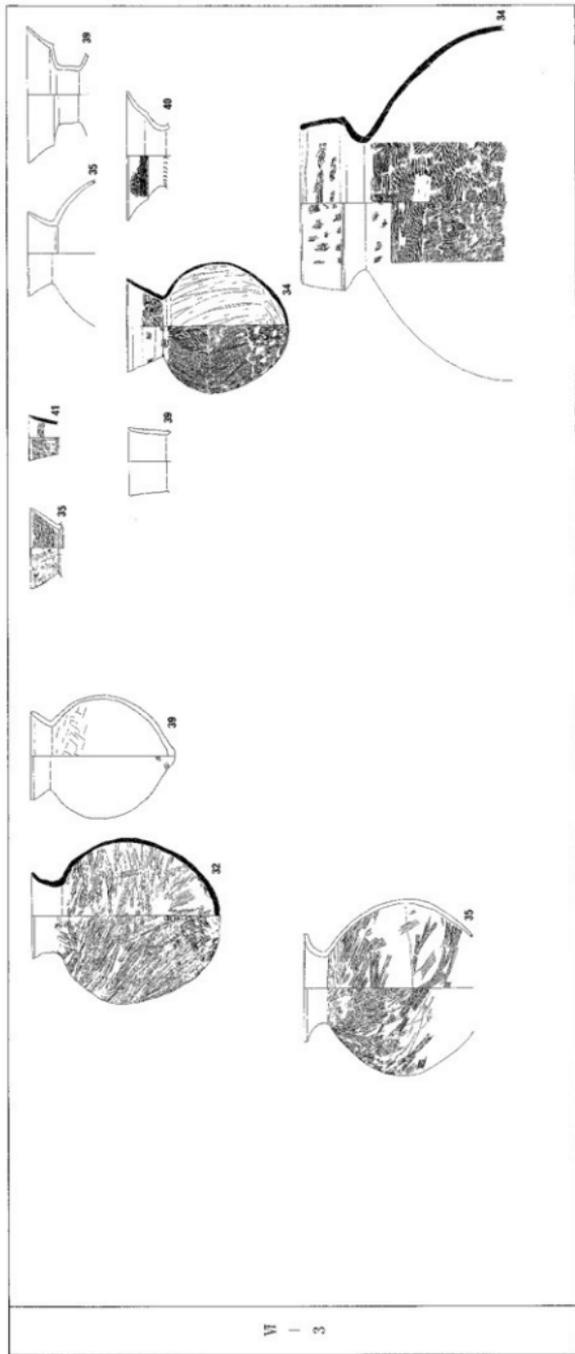
V
I
3

V
I
4

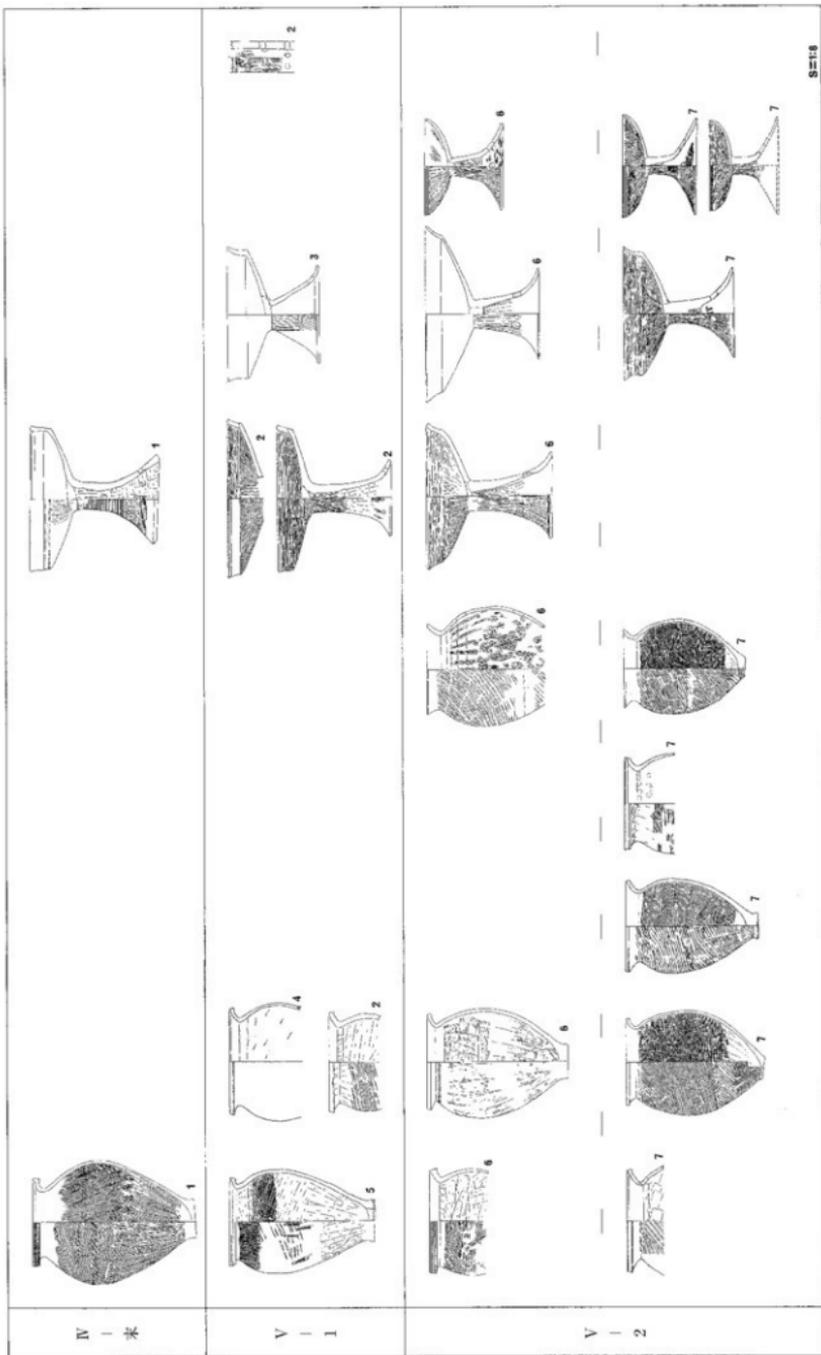
第96図 弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年図(2)



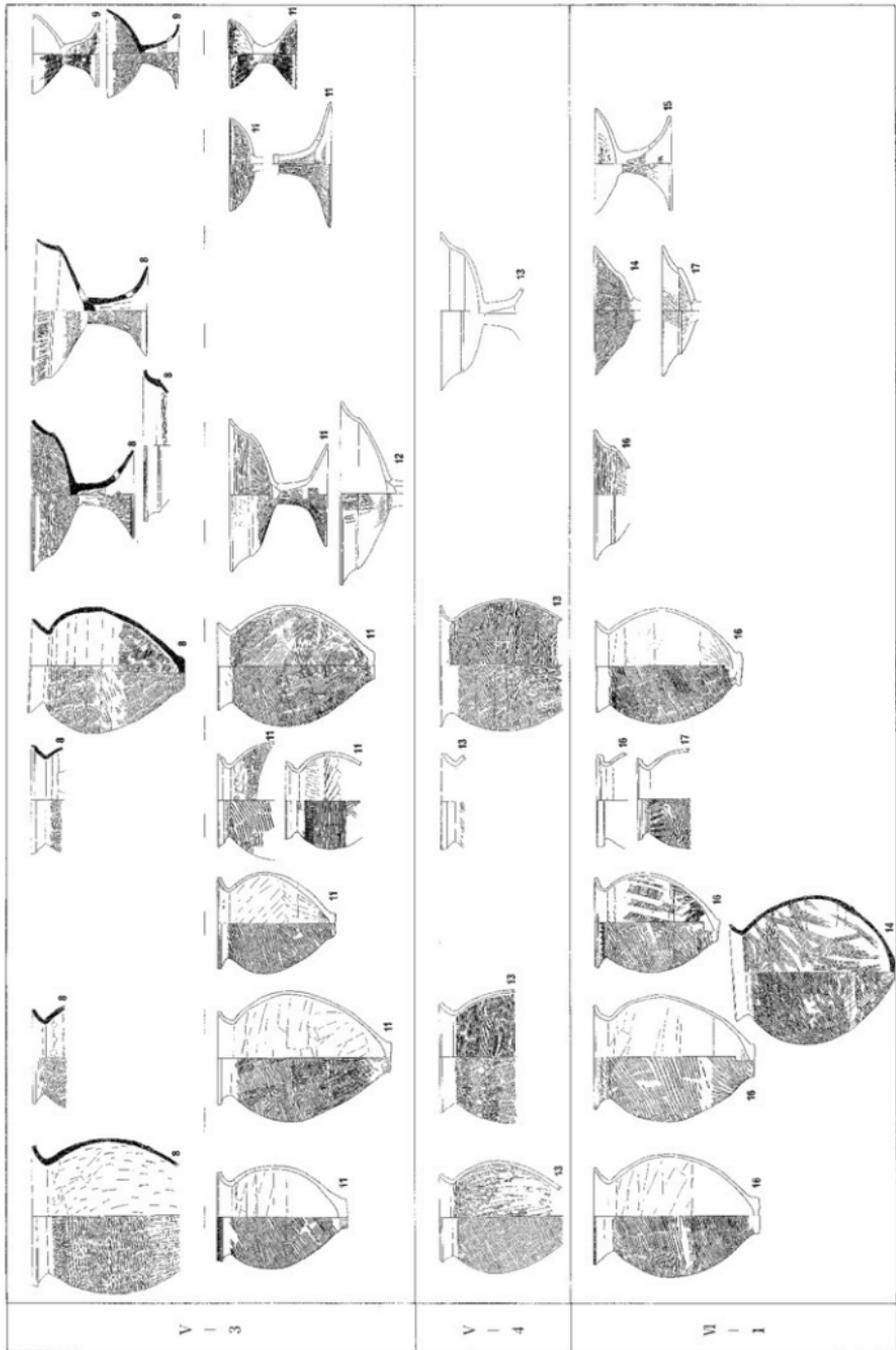
第97圖 弥生時代中期末～古墳時代初頭土器羣年圖(3)



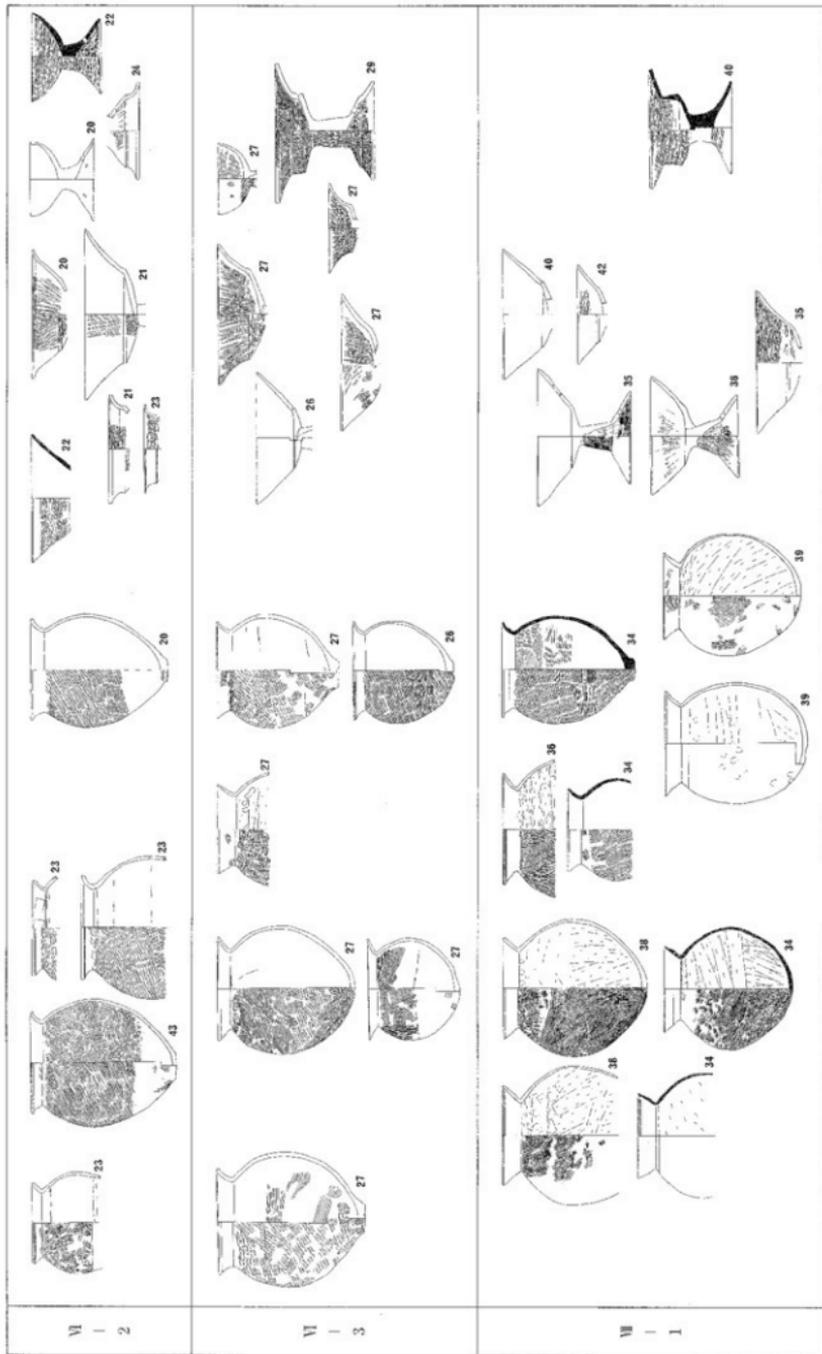
第98图 弥生时代中期末~古墳時代初期土器圖(4)



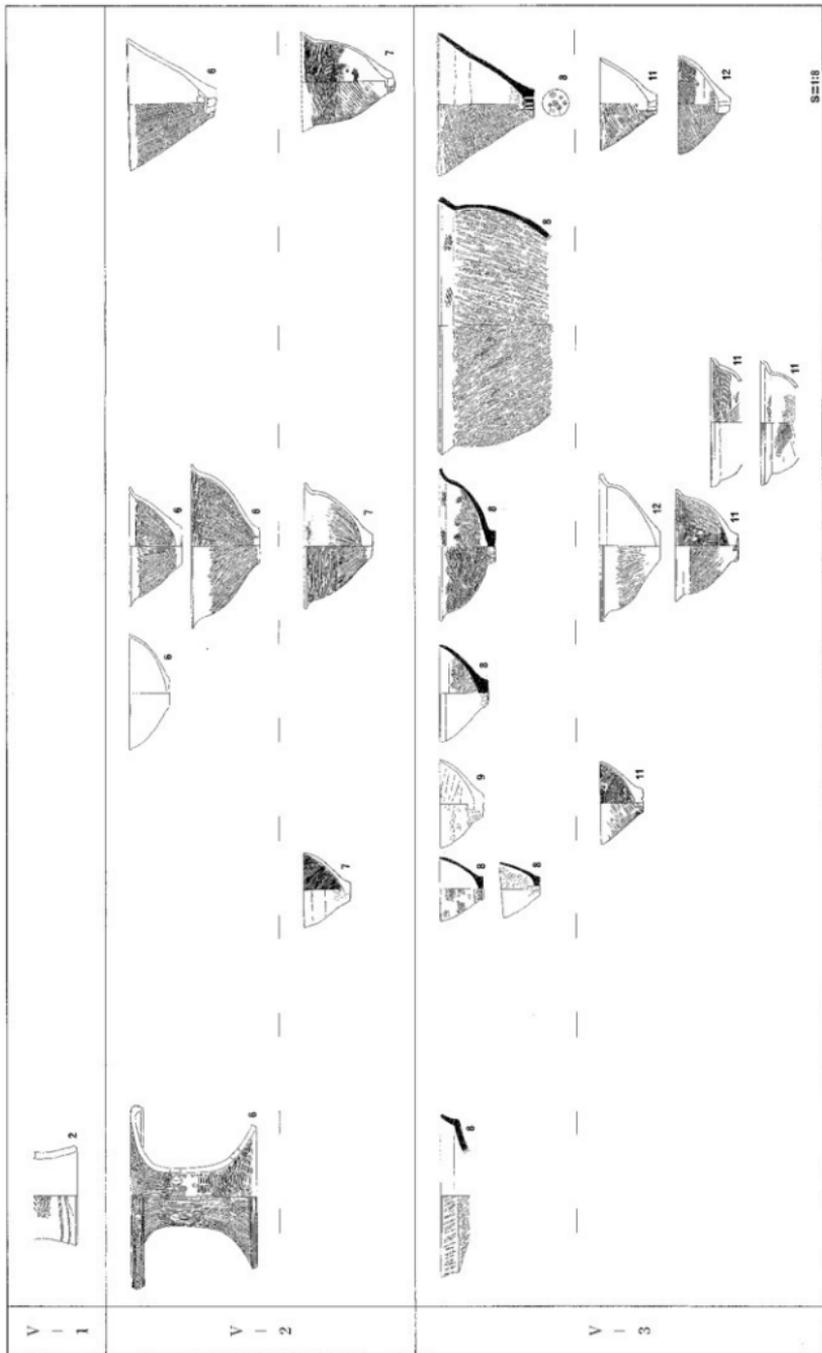
第99図 弥生時代中期末～古墳時代初頭土器壺年図(5)



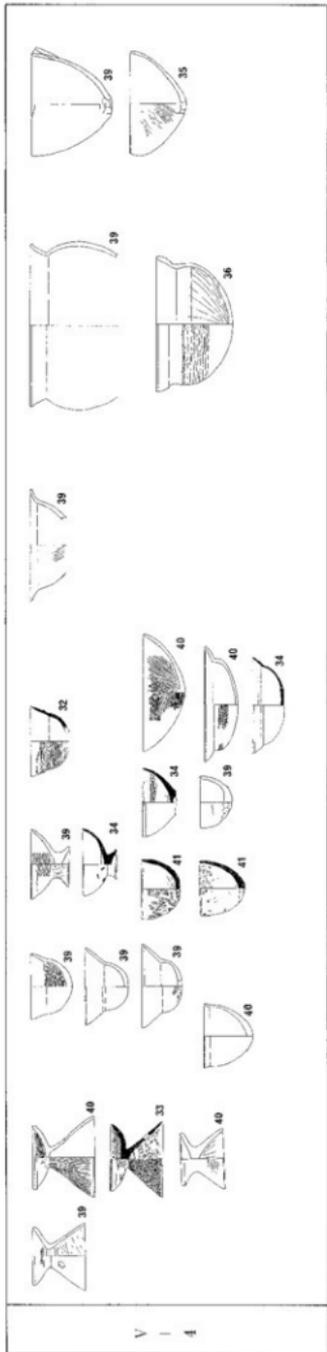
第100図 弥生時代中期末～古墳時代初期土器羣年図(6)



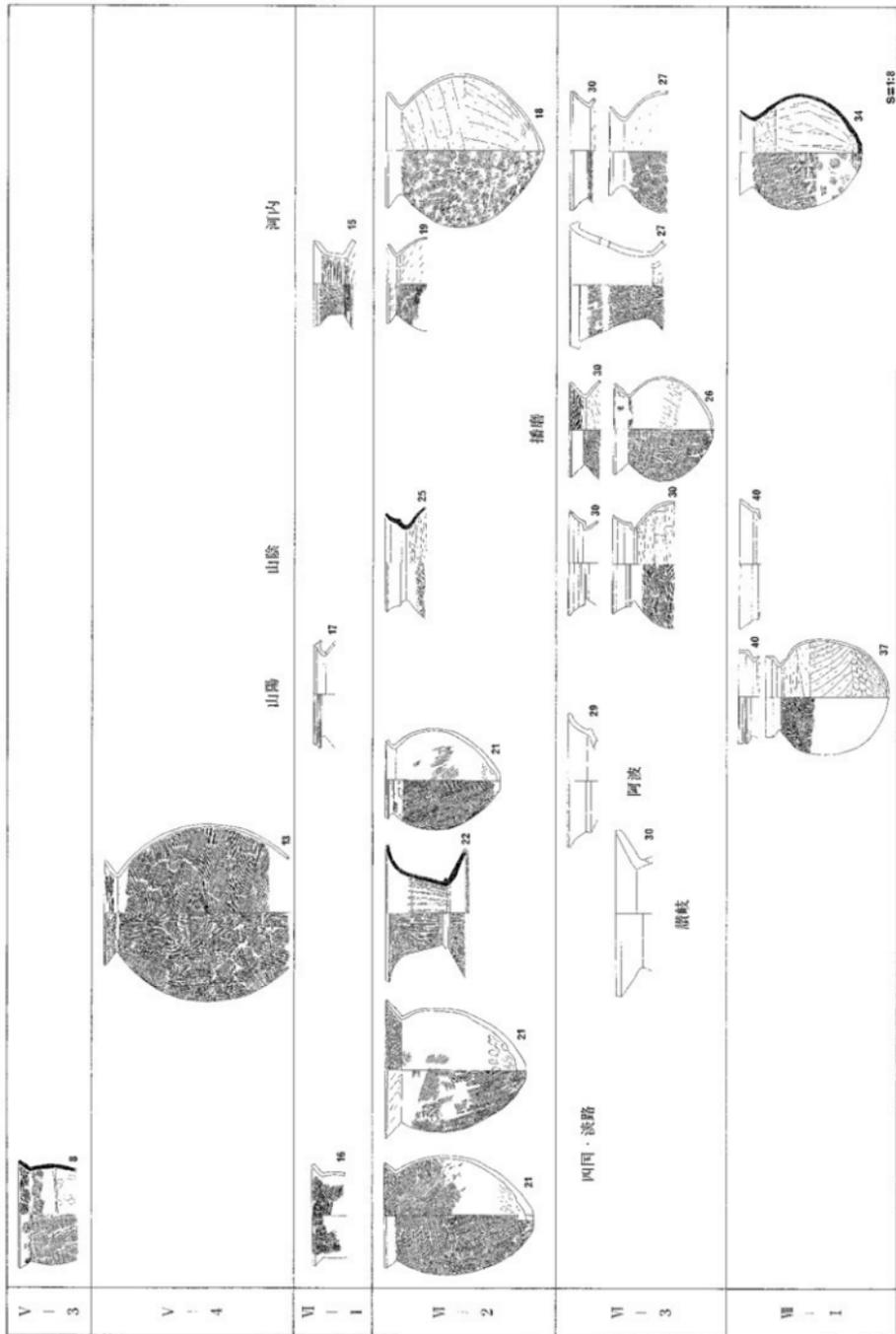
第101圖 弥生時代中期末～古墳時代初期土器類年図 (7)



第102図 弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年図(8)



第104图 弥生時代中期末～古墳時代初頭土器編年图(10)



第5章 まとめ

森南町遺跡は今回の発掘調査でその存在・内容が始めて明らかになった遺跡である。調査では縄紋時代から江戸時代に及ぶ遺構・遺物が検出された。

縄紋時代から弥生時代中期までの遺跡の状態については、あまり明確ではないが、この時期から人々の生活が開始されることが確認されたことは重要である。

庄内期

弥生時代後期末から古墳時代初頭（庄内期）が1つの中心となる時期で、耕作地に水を供給する施設としての東西方向の溝と、水流・水量を調節するための堰が検出された。地理的に考えて耕作地を営んだ集落はこの北に存在することは明らかで、とすればここから北側に近接する当時の拠点集落である森北町遺跡との関係も考慮されるところである。S D02上層出土やS K01出土の竈底部外面に、森北町遺跡第8次調査・S B03出土土器と共通する竹管文を付すものが存在することは、間接的ながら両者の繋がりを示唆するものと考えられる。

室町時代

中世期では井戸から検出された鉄鍋と鉄鋳先が注目される。鋳先は鉄鍋の中に割って重ねた状態で出土し、鉄鍋や鋳先が地鎮に使用されることもあって、祭祀的なものを感じるが、断定は避けておきたい。またこの時期の鋳先については管見に触れるものが少なく、地域的・时期的な形態変化の有無など現時点では明らかにできなかった。ただ福岡県、山口県、広島県や鳥根県で確認されている上面の「舟状の隆条」がなく、大坂城で復元された鋳先と共に森南町遺跡出土の鋳先にこの隆条が見られないことは、これが地域的差を示す可能性がより高まったことを示すもの言えよう。これについては一層の類例の増加を待ちたい。

江戸時代

近世のものでは、多数検出した埋桶遺構が注意される。埋桶遺構は近世の遺跡から検出されることが多く、用途としてよく便所などが想定されている。ただ今回の調査地では多数が集中して出土していることや、埋土の状態から、同様の用途のみを考えることには躊躇を覚える。この問題に関しても今回は時間的余裕がなく、周辺地域の調査の進展を待って考察を深めたい。

集落の動向

森南町遺跡の1つの中心として弥生時代後期末から古墳時代初頭を掲げたが、以下では弥生時代から古墳時代前期の六甲山南麓地域での集落の動向を記して、最後のまとめとしておきたい。この地域の遺跡の様相に関しては多くの人が既に発表しており⁽¹⁾、「弥生時代中期中葉から後期初頭にかけ高地性集落が出現し、その収束後、後期集落が拠点的中期集落の崩壊・青銅製祭器の埋納、廃棄=社会的変動を背景としてそれらとは地点を別にして出現する。これらは後期後半に中心的集落として発展すると共に、周辺に小規模集落を分立させつつ古墳時代前期に継続する。」という結論自体に基本的違いはない。しかし今回、当該地域の弥生時代後期から古墳時代前期土器の編年の粗案を提示した関係上、それに基づいた現時点での状況をまとめておく事も無意味ではないと思われる。

遺跡の群別と その成因

図106は弥生時代から古墳時代前期の主要遺跡分布図である。主要遺跡のほとんどは標高約5mから40mまでに位置しており、分布状況から1～17のA地域、18～22のB地域、23～25のC地域そして26～43のD地域に分けることができる。遺跡分布から幾つかの地域に分割できることも既に指摘されており、それは更に各水系別に細分されている。ただここでは河川が近接して流下している場合、いずれの小地域に帰属させるかが微妙な遺跡が存在することや、現在水系ごとの集落動向を詳細に語りうる能力に欠けるので、今回は図中に河川の位置は示していない。ここでは大まかにA～Dの4地域に群別が可能であることを確認しておきたい。

図107は中位・下位の段丘部、扇状地、沖積低地と主要遺跡の分布を重ね合わせたものである。これを見れば高地性集落以外の主な遺跡は中・下位段丘を避けるように扇状地上に立地する事が判明する。段丘上にも広がるNo.17の楠・荒田町遺跡は例外的に中期の拠点集落として発達するが、段丘上のその他の遺跡は弥生時代前・中期の1時期に機能する小規模なものようである。その後、後期から中世までの集落がこの段丘上に立地するが、その数は扇状地域に比較して極めて少ない。むしろ遺跡の分布状態は現時点での確認状態を反映するので、あるいは段丘部で遺跡が発見されていないだけである可能性は否定できない。

しかし、現状を重視すれば段丘部に居を構え周辺を可耕地として開発することは、かなり遅れたものと推測できよう。中・後期を中心とする段丘上の遺跡である祇園、熊内、都賀、西岡本の各遺跡のうち都賀遺跡は基本的に中期の墓域であり、他の3遺跡も近接して扇状地が広がっている位置にあることは上記の推測と抵触しない。上記のA～D遺跡群の成因は、当時の人々が段丘部ではなく、主として扇状地を耕作地として利用し、その近くに集落を営んだ結果と言い換えることもできる。

集落の盛衰

表12は各集落の存続時期を今回提示した土器編年に基づいて示したものである。A地区では前～中期の拠点集落として戎町遺跡と楠・荒田町遺跡が、B地区ではやや不明確ながら雲井遺跡がその可能性を持つ。C地区では篠原遺跡がその候補として挙げられ、D地区では本山遺跡がその地位にあり、各群に1ないし2の中核集落の存在を見ることができる。

ところが後期に入るとこの前・中期的拠点集落が廃絶し、A地区では長田神社境内遺跡と上沢遺跡が、B地区では熊内遺跡が出現し、D地区では郡家遺跡、住吉宮町遺跡、北青木遺跡と森北町遺跡の4集落が成立する。一方、C地区はややこれらと様相を異にし前代以来の集落である篠原遺跡がそのまま存続している。

また、市域の中期から後期に出現する高地性集落の実態については不明確な点が多いが、現時点ではそのあり方にA・B地区とC・D地区間に差異を認めることができる。前者では実態不明の天王谷遺跡、祇園神社裏山遺跡を除けば中期で収束し後期に継続していないのに対し、後者では確実に後期にも営まれている。またA・B地区とC・D地区とでは中期の集落数や、扇状地を当時の可耕地と想定するとその面積にさほどの差が見られないのにも関わらず、高地性集落の数が後者により多く確認されている。低地の

後期集落を合わせて考えるとC・D地区の主要な後期集落はA・B地区のそれを大きく凌駕している。

これからC・D地区の中期集落は後期初頭～前半まで営まれる高地性集落を介して、その占地は異にするがA・B地区に比較してよりスムーズに後期集落に移行したと見ることもできる。C地区の篠原遺跡が中期で断絶するのではなく、そのまま後期に継続していることはこの事を象徴的に表すものとも言えよう。

庄内期ではいずれの地域においても後期に成立した集落が、以後継続して営まれるが、A・B地区ではこの時期に新たに形成された集落が多く、当期になってC・D地区とほぼ同数の集落数となっている。これは庄内期にA・B地区が急速に後期の後進性を回復したことを示す可能性がある。現在所属時期を確定できないものがあるものの、長田神社境内遺跡⁽¹⁾、上沢遺跡⁽²⁾、篠原遺跡⁽⁴⁾、森北町遺跡⁽⁵⁾において、倭鏡または破鏡が後期後半～庄内期に検出されていることは、銅鐸・銅戈の青銅祭器に表現される中期的社会からの脱却がこの時期までに完成したことを示唆している。上記の4遺跡が全て後期から庄内期に存続する拠点的な集落であることは重要で、同じ性格を有する郡家遺跡や住吉宮町遺跡などで今後倭鏡、破鏡が出土する可能性もあろう。

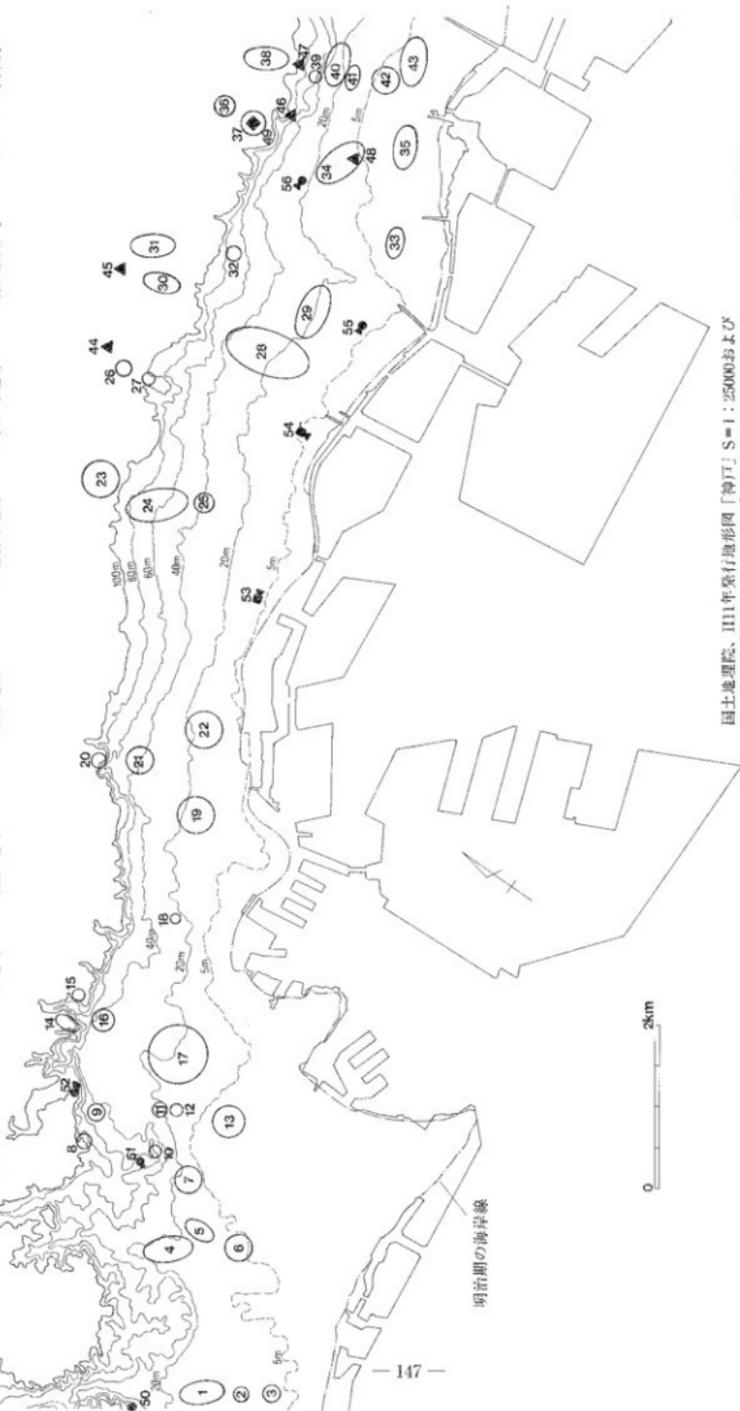
次の布留期の遺跡の動向を明らかにすることは、当地に前期古墳が集中して営まれることもあって重要である事は言うまでもない。当該地の集落出土土器に山陰系土器をさほど多く認めることができなにかかわらず、西求女塚古墳、処女塚古墳から山陰系土器が検出されていること⁽⁶⁾だけを見ても、古墳出現の背景の複雑性を示している。ただ今回当該期の土器に十分検討を加え編年を試みるができなかったことから、この問題も今後の課題としておきたい。

以上、今回提示した後期から古墳時代初頭までの土器編年に基づいた集落の動向を記した。ただ何度も繰り返すようだが、基準となる土器編年自体に検討課題が多く残されており、上記の記述も1つの案以上のものではないことを強調しておきたい。

注

- (1) 前田佳久「大阪湾北岸地域の弥生集落—神戸市域を中心にして—」『みずほ』第35号 大和弥生文化の会 2001年4月14日
丸山薫「集団の形成—六甲南麓地域の弥生集落—」『立命館大学考古学論集』Ⅲ-1 家根祥多さん追悼論集 立命館大学考古学論集刊行会 2003年5月24日
- (2) 藤井太郎・丸杉俊一郎「長田神社境内遺跡 第10次調査」『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000年3月
- (3) 斎木巖「上沢遺跡 第21次調査」『平成10年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2001年3月
- (4) 前田佳久「篠原遺跡 第12次調査」『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1998年3月
- (5) 黒田恭正「森北町遺跡」『昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1988年3月31日
- (6) 安田滋編「西求女塚古墳発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2004年3月31日

- 1 成町遺跡
- 2 下瀬町遺跡
- 3 若松町遺跡
- 4 長田神社境内遺跡
- 5 五番町遺跡
- 6 御蔵遺跡
- 7 上杉遺跡
- 8 熊野遺跡
- 9 河原遺跡
- 10 安下山遺跡
- 11 東山遺跡
- 12 兵衛松木遺跡
- 13 大瀬遺跡
- 14 大下谷遺跡
- 15 札園神社裏山遺跡
- 16 紙園遺跡
- 17 備・荒田町遺跡
- 18 花隠城遺跡
- 19 寒井遺跡
- 20 布引丸山遺跡
- 21 熊内遺跡
- 22 神遺跡
- 23 日野野山遺跡
- 24 藤原遺跡
- 25 藤宮遺跡
- 26 沼ノ原遺跡
- 27 塚ノ丘遺跡B地点
- 28 郡家遺跡
- 29 住吉宮町遺跡
- 30 赤塚山遺跡
- 31 東海山遺跡
- 32 西岡木遺跡
- 33 魚崎中町遺跡
- 34 木山遺跡
- 35 北青木遺跡
- 36 金島山遺跡
- 37 保久長神社遺跡
- 38 東山遺跡
- 39 坂下山遺跡
- 40 森北町遺跡
- 41 森南町遺跡
- 42 本町町遺跡
- 43 深江北町遺跡
- 44 塚ノ丘遺跡・銅戈
- 45 湯ノ森遺跡
- 46 牛飼遺跡
- 47 森瀨遺跡
- 48 本山跡遺跡
- 49 保久長銅戈
- 50 伊能山古墳
- 51 安下山二木松古墳
- 52 野丸山古墳
- 53 西永塚古墳
- 54 西永塚古墳
- 55 東永塚古墳
- 56 ホソノ塚古墳



国土地理院、H11年発行地形図「神戸」S=1:25000および神戸市教育委員会、H16年発行「神戸市埋蔵文化財分布図」S=1:30000を基に作成

第106図 主要遺跡分布図(1)



第107図 主要道路分布図(2)

国土地理院、H8年発行「都市計画図」S=1:25000および
 神戸市教育委員会、H16年発行「神戸市歴史文化財分布図」S=1:30000を基に作成

表12 六甲山南麓地域における集落の動向

番号	遺跡名	所在地	地域	前期		中期		後期				庄内	布留	備考	標高	立地
				I	II	III	IV	V-1	V-2	V-3	V-4					
1	戎町	須賀区戎町	A 地区	●	●	●	●					●		14	扇状地	
2	千歳	須賀区千歳町		●	●	●	●							9	扇状地	
3	若松町	長田区若松町		●	●	●	●					●		8	扇状地	
4	長田神社境内	長田区長田町		○		○		●	●	●	●		●	俵藏	15	扇状地
5	五帯町	長田区五帯町							○					8	扇状地	
6	御蔵	長田区御蔵通										●	●		5~7	扇状地
7	上沢	兵庫区上沢通								○	●	●	●	破綻	10~20	扇状地
8	熊野	兵庫区熊野町			●	●	●	●						70	丘	
9	河原	兵庫区熊野町			●	●	●	●						50	中位段丘	
10	会下山	兵庫区会下山町			▼									70	丘	
11	東山	兵庫区東山町		▼									30	丘		
12	兵庫松本	兵庫区松本通		●							●	●	10	扇状地		
13	大岡	兵庫区大岡通		●									4	扇状地		
14	天王谷	兵庫区天王町						▽					100	丘		
15	祇園神社裏山	兵庫区平野町						▽					130	丘		
16	祇園	兵庫区上祇園		●	●	●	●	●	○	○			30~40	下位段丘		
17	幡・荒田町	兵庫区荒田町		●	●	●	●	●		●		○	10~16	中段~扇状		
18	花隈城	中央区花隈町	B 地区										20	中位段丘		
19	雲井	中央区雲井通		●	●	●	●	●						14	扇状地	
20	春引丸山	中央区春引町布引山		▼	▼	▼	▼	▼						140	丘	
21	熊内	中央区熊内通							○	●	●	●	●	35~40	下位段丘	
22	日暮	中央区日暮通									○	●	15	扇状~下段		

23	伯母野山	瀬区篠原伯母野山	C					▽											150~190	丘
24	篠原	瀬区篠原北中町	地	●	●	●	●	●	○	○									50~80	扇状~下段
25	部賀	瀬区部賀町	区	●	●	●	●	●	○	○									40	下位段丘
26	滝ノ奥	瀬区高羽																	150	中位段丘
27	袴ヶ丘田地点	瀬区袴ヶ丘																	130	中位段丘
28	藤家	東瀬区藤影町		●	●	●	●	●	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	30	扇状地
29	住吉宮町	東瀬区住吉宮町		●	●	●	●	●	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	20	扇状地
30	赤塚山	東瀬区住吉山手																	180	丘
31	荒神山	東瀬区住吉台																	170~226	丘
32	西岡本	東瀬区西岡本	D																50~80	下位段丘
33	魚崎中町	東瀬区魚崎中町	地	●	●	●	●	●	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	3	扇状~沖積
34	本山	東瀬区本山中町	区	●	●	●	●	●	○	○									8	扇状地
35	北青木	東瀬区北青木		●	●	●	●	●	○	○									2	沖積地
36	金鳥山	東瀬区本山北畑																	200~250	丘
37	保久良神社	東瀬区本山北畑																	170~180	丘
38	森奥	東瀬区本山町																	150~230	丘
39	坂下山	東瀬区森北町																	70~90	丘
40	森北町	東瀬区森北町																	32	下段~扇状
41	森南町	東瀬区森南町		●	●	●	●	●	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	13	扇状地
42	本庄町	東瀬区本庄町		●	●	●	●	●											4	扇状地
43	深江北町	東瀬区深江北		●	●	●	●	●											2~5	扇状~沖積

この表は丸山深「集団」の形成一六甲南麓地域の形成「立命館大学考古学論集」Ⅲ-1所収の表を基礎としている。

●は高土器の存在を示す、○は高土器の存在が確認できないもの、▽は高土器の存在が確認できないもの、▲は高土器の存在が確認できないもの、●は高土器の存在を示す。

表13 遺物観察表

番号	出土場所	法層 (年代 時期)	胎土	色調 (外面 内面)	備考	旧番号
1	SD02 下層砂層	—	長石・石英・角閃石 中砂～粗砂	褐灰10YR4/1～黒黒10YR3/1 黒N2/0	外面3条の凹線、下半に穿孔1箇所、 外面ミガキ、内面上半ナデ、同下半ミガキ 内内産	2003 I区・SD01 実測270
2	SD02 下層砂層	—	長石・石英・角閃石 中砂～粗砂	灰青褐10YR5/2～5/3 褐灰10YR5/1～4/1	外面3条、内面1条の凹線、内外面調整不明 内内産	2003 I区・SD01 実測271
3	SD02 下層砂層	—	長石・石英 中砂～粗砂	灰青褐10YR6/2 青灰2.5Y5/1～4/1	外面条痕、内面ナデ	2003 I区・SD01 実測272
4	SD02 上層砂層	—	長石・石英・角閃石・雲母 中砂～粗砂	灰青褐10YR5/2～4/2 オリブ黒5Y3/1～黒5Y2/1	外面上半条痕、同下半ナデ、内面条痕 内内産	2003 I区・SD01 実測273
5	SD02 層不明	—	長石・石英 中砂～粗砂	黄灰2.5Y6/1 にぶい黄褐10YR7/2～灰青褐10YR6/2	内外面ナデ	2003 I区・SD01 実測268
6	SD02 黒色粘砂	—	長石・石英・雲母 中砂～粗砂	灰青褐10YR6/2～にぶい黄褐10YR6/3 灰青褐10YR6/2～にぶい黄褐10YR6/3	内外面調整不明	2003 I区・SD01 実測269
7	SD02 黒色粘砂	—	長石・石英・雲母・チャート 中砂～粗砂	にぶい黄褐10YR6/3～にぶい黄褐10YR6/3 にぶい黄褐10YR7/2～7/3	削り出し凸等十沈積1条、外面ミガキ、内面調整不明	2003 I区・SD01 実測267
8	SD02 黄灰色粘	—	長石・石英・雲母 中砂～粗砂	灰青褐10YR6/2～にぶい黄褐10YR6/3 にぶい黄褐10YR6/3	口縁部へラ削り、体部へラ削り3条、内面調整不明、内面ナデ	2003 II区・SD01 実測266
9	SD01 —	—	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～細砂	にぶい黄7.5YR7/3 にぶい黄7.5YR7/3	口縁部外面に11本の帯状波状文、内外面ナデ	2003 III区・SD03 実測252
10	SD01 —	10 34.5 12	長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～粗砂	にぶい黄褐10YR7/2～7/3 灰青褐10YR6/2～にぶい黄褐10YR6/3	非在地点、20%残存 外面上半調整不明、同中位板ナデ、同下半ミガキ、 内面ナデ、粗オサエ 40%残存	2003 III区・SD03 実測249
11	SD01 —	8.4	長石・石英・雲母 中砂～粗砂	褐5YR7/6～6/6 褐5YR7/6～6/6	体部外面に6本の帯状直線4条、外面下半ミガキ、 内面下半ナデ 上半20%、下半25%残存	2003 III区・SD03 実測251
12	SD01 —	17.6	長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～粗砂	にぶい黄7.5YR6/3 にぶい黄7.5YR6/3～5/3	口縁部内外面コナデ、外面上半板ナデ、同下半ミガキ、 内面ナデ 帯痕非在、70%残存	2003 III区・SD03 実測250
13	SD02 —	23.8	長石・石英・赤色酸化粒 細砂～細礫	黄灰2.5Y6/1～灰黄2.5Y6/2 にぶい黄褐10YR7/3～6/3	口縁部外面コナデ、内外面ナデ、 頸部外壁板ナデ、同内面ナデ、ナデ 15%残存	2002 北區・SD02 実測10
14	SD02 —	22.4	長石・石英 粗砂	灰青2.5Y7/2～6/2 にぶい黄褐10YR7/3	口縁部外面11本の帯状波状文、口縁部内面コナデ、 頸部外面0～10cmのハケ後13本の帯状直線文、 同内面ミガキ、20%残存	2002 北區・SD02 実測12
15	SD02 —	13.8	長石・石英 粗砂	にぶい黄褐10YR7/2～7/3 にぶい黄褐10YR7/2～7/3	口縁部外面4本の帯状波状文、同内面コナデ、 頸部外壁5～6cmのハケ、同内面ナデ 20%残存	2002 北區・SD02 実測11
16	SD02 —	18	長石・石英 粗砂	褐10YR4/4 褐10YR4/4	口縁部内外面コナデ、 体部外壁5～6cmのハケ、同内面ナデ 20%残存	2002 北區・SD02 実測13
17	SD02 下層砂層	8.2	長石・石英・雲母 粗砂～中砂	にぶい黄褐10YR7/3～6/3 にぶい黄褐10YR6/3	口縁部外面3条の凹線、同内面コナデ、 体部外壁板ナデ、同内面粗オサエ 15%残存	2003 I区・SD01 実測269
18	SD02 下層砂層	39.4	長石・石英・雲母・角閃石 中砂～中礫	にぶい黄褐10YR5/3～4/3 にぶい黄褐10YR5/3～4/3	口縁部外面径5mm、深さ1.5mmの円形刺突文、 内面調整不明、内面ナデ、口縁部上面へラミガキ 内内産、20%残存	2003 I区・SD01 実測268
19	SD02 —	—	長石・石英 粗砂～極粗砂	灰青2.5Y6/2～にぶい黄2.5Y6/3 灰青2.5Y7/2～6/2	外面6本の帯状直線文、内面ナデ	2002 北區・SD02 実測16
20	SD02 —	—	長石・石英・チャート 粗砂～極粗砂	灰青2.5Y7/2～6/2 灰青2.5Y6/2	外面6本の帯状直線文、内面ナデ	2002 北區・SD02 実測17
21	SD02 —	—	長石・石英・黒色粒子 粗砂～極粗砂	にぶい黄褐10YR7/3 にぶい黄褐10YR7/3	外面竹管文・7本の帯状直線文、内面ナデ	2002 北區・SD02 実測18
22	SD02 —	—	長石・石英 粗砂	灰青2.5Y7/2～浅黄2.5Y7/3 にぶい黄褐10YR4/3	外面6本の帯状直線文、波状文、内面ナデ	2002 北區・SD02 実測14
23	SD02 —	—	長石・石英 粗砂	灰白2.5Y8/2～灰黄2.5Y7/2 明黄褐10YR6/6	外面6本の帯状流水文、内面ナデ	2002 北區・SD02 実測15
24	IV区 包含層	—	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～粗砂	浅黄褐10YR6/3～にぶい黄褐10YR7/3 浅黄褐10YR6/3～にぶい黄褐10YR7/3	外面ナデ、内面ナデ	2003 II区・包含層 実測253
52	SD02 下層砂層	14.4	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～粗砂	にぶい黄7.5YR7/4～6/4 浅黄褐7.5YR6/4～にぶい黄7.5YR7/4	外面コナデ、内面上部コナデ、その他は方向ナデ 20%残存	2003 I区・SD01 実測120

番号	出土場所	法量 (口部) (底面)	胎土	色調 (外面) (内面)	備考	旧番号
53	SD02	13	—	—	口縁部内外面コナテ、頸部外面ナテ、胴内面ヘラミガキ	2003
	下層砂層	—	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～粗粒砂	浅黄褐色10YR8/3～ 灰黄褐色10YR7/3	体部外面ヘラミガキ、胴内面5～6cmのハケ・ナテ	1区-S001 実量119
54	SD02	154	—	—	口縁部内外面コナテ、頸部以下内外面調整不明	2003
	下層砂層	—	長石・石英 粗砂～細粒	灰白5.5Y8/2～ 灰白2.5Y8/2	25%残存・II区黒色砂と接合	1区-S001 実量83
55	SD02	104	—	—	口縁部内外面コナテ、体部外面ナテ、胴内面ヘラミガキ	2003
	下層砂層	—	長石・石英・赤色酸化粒 粗砂	灰黄褐色10YR7/2～ 灰黄褐色10YR7/2	上方のナテ	1区-S001 実量70
56	SD02	114	—	—	口縁部外面コナテ、頸部外面9～10cmのハケ後、ヘラミガキ、胴内面よこ方向のヘラミガキ	2003
	下層砂層	—	長石・石英 粗砂～細粒	灰黄褐色10YR7/2～ 灰黄褐色10YR7/2	25%残存	1区-S001 実量64
57	SD02	9.6	—	—	口縁部内外面コナテ、頸部外面9～10cmのハケ、胴内面よこ方向のナテ	2000
	下層砂層	—	長石・石英・赤色酸化粒 粗砂～細粒	灰黄褐色10YR7/2	非存在地、40%残存	1区-S001 実量88
58	SD02	27	—	—	内外面ヘラミガキ	2003
	下層砂層	—	長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～細粒	灰黄褐色10YR7/2	20%残存・黒色粘砂と接合	1区-S001 実量93
59	SD02	17.8	—	—	口縁部内外面コナテ、体部外面3cmのタタキ後、11～12cmのハケ、胴内面ヘラミガキ	2003
	下層砂層	—	長石・石英・赤色酸化粒 粗砂～中粒	灰白10YR8/2～ 灰白10YR7/2	非存在地、30%残存	1区-S001 実量45
60	SD02	14.6	—	—	口縁部内外面コナテ、体部外面ナテ・タタキ、胴内面ヘラミガキ	2003
	下層砂層	—	長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中粒	灰黄褐色10YR7/2～ 灰黄褐色10YR7/2	非存在地、25%残存	1区-S001 実量40
61	SD02	14.4	—	—	口縁部外面ナテ、口縁部内面11～12cmのハケ、コナテ、胴部外面3～4cmのタタキ後11～12cmのハケ、体部外面ヘラミガキ・指オサエ、非存在地、25%残存	2003
	下層砂層	—	長石・石英・赤色酸化粒 粗砂～中粒	灰黄褐色7.5YR7/4	灰黄褐色10YR7/3	1区-S001 実量48
62	SD02	—	—	—	坯部内外面ヘラミガキ、胴部外面ヘラミガキ、胴上縁に6条の波線、胴内面ヘラミガキ・ナテ	2003
	下層砂層	—	長石・石英・赤色酸化粒 粗砂	灰黄褐色7.5YR7/4～ 灰黄褐色7.5YR7/4	50%残存、黒色粘砂と接合	1区-S001 実量184
63	SD02	—	—	—	外面8～9cmのハケ後ヘラミガキ	2003
	下層砂層	—	長石・石英・雲母・赤色酸化粒 粗砂～細粒	灰黄褐色10YR7/3	内面ナテ一部すり目残る	1区-S001 実量93
64	SD02	—	—	—	外面コナテ後ヘラミガキ	2003
	下層砂層	—	長石・石英 粗砂	灰黄褐色7.5YR7/4～ 灰黄褐色7.5YR7/4	内面ナテヘラミガキ	1区-S001 実量47
65	SD02	16	—	—	口縁部外面に3条の波線、口縁部外面コナテ、胴内面ヘラミガキ(方向不明)	2003
	下層砂層	—	長石・石英・雲母 中粒	灰黄褐色5YR6/4～ 灰黄褐色7.5YR7/4	15%残存	1区-S001 実量121
66	SD02	21.2	—	—	口縁部外面に3条の波線、頸部内外面ヘラミガキ、体部外面ヘラミガキ、胴内面調整不明	2003
	黒色粘砂	—	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～粗砂	褐色5YR7/6 褐色2.5YR6/6	非存在地、40%残存 上層、下層砂層と接合	1区-S001 実量216
67	SD02	15.6	—	—	口縁部外面に竹管文、口縁部内外面ヘラミガキ	2003
	黒色粘砂	—	長石・石英・雲母 粗砂～細粒砂	浅黄褐色10YR8/3～ 灰黄褐色10YR7/3	体部外面調整不明、胴内面指オサエ	1区-S001 実量36
68	SD02	17.2	—	—	口縁部外面2条の波線、頸部外面コナテ、胴内面コナテ・板ナテ・ヘラミガキ	2003
	黒色粘砂	—	長石・石英 粗砂	灰黄褐色10YR7/3	20%残存、下層砂層と接合	1区-S001 実量87
69	SD02	15	—	—	口縁部内外面ヘラミガキ、頸部外面コナテ、胴内面9～10cmのハケ	2003
	黒色粘砂	—	長石・石英・雲母 粗砂	浅黄褐色10YR8/3～ 浅黄褐色10YR8/3	15%残存	1区-S001 実量110
70	SD02	13.2	—	—	口縁部外面コナテ、頸部外面調整不明、内面全面ミガキ	2003
	黒色粘砂	—	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～中粒	灰黄褐色10YR7/2～ 灰黄褐色10YR7/2	40%残存	1区-S001 実量36
71	SD02	13.6	—	—	口縁部内外面コナテ、頸部外面ヘラミガキ、胴内面ナテ、体部外面19～20cmのハケ後ヘラミガキ、胴内面ナテ・指オサエ、70%残存	2003
	黒色粘砂	—	長石・石英 中砂～中粒	灰黄褐色10YR7/2	非存在地、50%残存	1区-S001 実量156
72	SD02	15.4	—	—	口縁部内外面コナテ、頸部外面ヘラミガキ・内面、ナテ、体部外面ヘラミガキ・内面板ナテ	2003
	黒色粘砂	—	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～細粒	灰黄褐色10YR7/3	60%残存、下層砂層と接合	1区-S001 実量130
73	SD02	12.2	—	—	口縁部内外面コナテ、胴内面よこ方向の黒色あじ	2003
	黒色粘砂	—	長石・石英 粗砂～細粒砂	灰黄褐色10YR6/3	体部外面ナテ、胴内面指オサエ	1区-S001 実量108
74	SD02	15	—	—	口縁部内外面調整不明	2003
	黒色粘砂	—	長石・石英の赤色 中砂～中粒	灰黄褐色10YR7/3	体部外面調整不明、胴内面指オサエ	1区-S001 実量173
75	SD02	11.4	—	—	非存在地、50%残存	2003
	黒色粘砂	—	長石・石英・雲母 細砂～粗砂	灰黄褐色10YR7/2～ 褐色10YR6/1	口縁部外面に1条の波線、口縁部内外面コナテ、体部外面ヘラミガキ・内面ヘラミガキ、胴内面ナテ、底部外面にヘラミガキ、70%残存	1区-S001 実量87
76	SD02	5.1	—	—	口縁部内外面コナテ、体部外面板ナテ後ヘラミガキ、胴内面11～12cmのハケ・指オサエ	2003
	黒色粘砂	—	長石・石英・チャート 中砂～細粒	灰黄褐色7.5YR7/3	底部外面中央に木の葉文、50%残存	1区-S001 実量50
77	SD02	—	—	—	頸部内外面コナテ、体部外面4cmのタタキ後ヘラミガキ、胴内面10～12cmのハケ・指オサエ・ナテ	2003
	黒色粘砂	—	長石・石英 中砂～粗砂	灰黄褐色10YR7/3	底部外面にヘラミガキ、70%残存	1区-S001 実量22

番号	出土場所	法量 (中心 位置)	胎土	色調 (外面 内面)	備考	旧番号
78	SD02 黒色粘砂	15.8 23.2 4.7	長石・石英	にぶい黄褐色10YR7/2	口縁部内外面コナデ、内面へラミガキ、頸部外面20cmのハケ、体部外面へラミガキ、内面6～9cmのハケ・ナデ、指オサエ、土層砂量と接合、口縁部70%、体部50%残存	2003 1区・SD01 実測65
			中砂～細砂			
79	SD02 黒色粘砂	14 —	長石・石英	にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部外面に2条の凹線、内面内面コナデ	2003
			粗砂～細砂			
80	SD02 黒色粘砂	14 —	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい黄褐色10YR5/3～5/4	口縁部外面に1条の凹線、内面内面コナデか、頸部内面へラミガキ、体部外面に6cmの凹線溝縁文、内面内面、板ナデ、河内産、20%残存	1区・SD01 実測79
			中砂～中粗			
81	SD02 黒色粘砂	13.8 —	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色10YR7/2～7/3	内面内面コナデ	2003
			中砂～粗砂			
82	SD02 黒色粘砂	12.4 10.2 2.2	長石・石英・赤色酸化粒	にぶい黄褐色10YR7/2	口縁部外面コナデ、内面へラミガキ、頸部外面へラミガキ、体部外面へラミガキ、内面内面ナデ・指オサエ、口縁部25%、体部70%残存	2003 1区・SD01 実測49
			中砂～中粗			
83	SD02 黒色粘砂	10.4 8.0 2.4	長石・石英・チャート	にぶい黄褐色10YR6/3	口縁部内外面コナデ、頸部外面指オサエ、内面内面指ナデ、体部内外面板ナデ・ナデ	2003
			粗砂～中粗			
84	SD02 黒色粘砂	14.8 —	長石・石英・雲母・赤色酸化粒	にぶい黄褐色10YR7/2～灰黄褐色10YR6/2	口縁部内外面コナデ	2003
			粗砂～極粗砂			
85	SD02 黒色粘砂	17.8 3.4 14.2	長石・石英・赤色酸化粒	にぶい黄褐色10YR7/2～7/3	口縁部内外面コナデ、体部外面3cmのタタキ・6cmのハケ後ナデ・へラミガキ、内面内面6cmのハケ、60%残存	2003 1区・SD01 実測44
			中砂～中粗			
86	SD02 黒色粘砂	16.2 —	長石・石英・赤色酸化粒	にぶい黄褐色10YR7/2～7/3	口縁部内外面調整不明	2003
			粗砂～細砂			
87	SD02 黒色粘砂	12.4 —	長石・石英・赤色酸化粒	浅黄褐色10YR8/3～にぶい黄褐色10YR7/3	内外面調整不明	2003
			中砂～中粗			
88	SD02 黒色粘砂	13.2 —	長石・石英・雲母	浅黄褐色10YR8/3～にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部内外面コナデ、頸部外面ナデ、内面内面ナデ、板ナデ	2003
			中砂～粗砂			
89	SD02 黒色粘砂	14.2 —	長石・石英・赤色酸化粒・角閃石	にぶい黄褐色7.5YR5/3～橘7.5YR4/3	口縁部1条の凹線、頸部外面コナデか、内面調整不明	2003
			中砂～粗砂			
90	SD02 黒色粘砂	14.8 —	長石・石英・赤色酸化粒	にぶい黄褐色5YR7/4～橘5YR7/6	口縁部外面コナデ	2003
			粗砂			
91	SD02 黒色粘砂	12.4 —	長石・石英	浅黄褐色10YR8/3～にぶい黄褐色10YR7/3	頸部外面5cmのハケ	1区・SD01 実測66
			中砂～細砂			
92	SD02 黒色粘砂	15.4 —	長石・石英	浅黄褐色10YR8/3～にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部内外面調整不明	2003
			粗砂～細砂			
93	SD02 黒色粘砂	15.2 25.4 4.7	長石・石英・赤色酸化粒	にぶい黄褐色10YR7/2～灰黄褐色10YR6/2	体部内面指オサエ、内面調整不明	2003
			中砂～中粗			
94	SD02 黒色粘砂	14.8 18.7 3.9	長石・石英・赤色酸化粒	にぶい黄褐色5YR7/4～橘5YR7/6	口縁部外面8～9cmのハケ、体部外面板ナデ・8～9cmのハケ、内面内面6～7cm・9～10cmのハケ、底部外面下半3cmのタタキ、90%残存	2003 1区・SD01 実測19
			粗砂～極粗砂			
95	SD02 黒色粘砂	11.6 —	長石・石英・赤色酸化粒	浅黄褐色10YR8/3～にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部内外面コナデ、頸部外面7cmのハケ、内面内面3cmのハケ・指ナデ	2003
			粗砂			
96	SD02 黒色粘砂	9.6 —	長石・石英・赤色酸化粒	にぶい黄褐色5YR7/4～橘5YR7/6	頸部外面コナデ、内面内面コナデ	1区・SD01 実測82
			中砂～細砂			
97	SD02 黒色粘砂	7.4 —	長石・石英・赤色酸化粒	にぶい黄褐色10YR7/2～7/3	頸部外面コナデ、内面内面コナデ	2003
			中砂～細砂			
98	SD02 黒色粘砂	9 —	長石・石英	にぶい黄褐色10YR7/2～灰黄褐色10YR6/2	口縁部内外面調整不明、内面内面ナデ、体部外面2cmのタタキ後ナデ・へラミガキ、内面内面6cmのハケ・へラミガキ、内面6cm・11～12cmのハケ・指オサエ、30%残存	2003
			粗砂～中粗			
99	SD02 黒色粘砂	21.4 —	長石・石英・雲母・赤色酸化粒	浅黄褐色5YR7/4～橘5YR7/6	口縁部外面に2条の凹線、頸部外面10cmのハケ後、へラミガキ、口縁部内面へラミガキ、体部外面へラミガキ、非在地産、70%残存、上層、下層砂量と接合	2003 1区・SD01 実測11
			中砂～細砂			
100	SD02 黒色粘砂	5.5 6.5 1.0	長石・石英	にぶい黄褐色10YR7/2～7/3	内面内面コナデ	2003
			中砂～粗砂			
101	SD02 黒色粘砂	4.5 —	長石・石英・赤色酸化粒	にぶい黄褐色10YR7/2～7/3	外面3cmのタタキ後へラミガキ、内面6～10cmのハケ・指ナデ	2003
			中砂～粗砂			
102	SD02 黒色粘砂	4 —	長石・石英	灰褐色7.5YR6/2	外面上半へラミガキ、下半調整不明、内面板ナデ	2003
			中砂～細砂			
				明灰褐色7.5YR7/2～灰褐色7.5YR6/2	50%残存	1区・SD01 実測126

番号	出土場所	法層(土層) (深さ)	胎土	色調 (外底) (内底)	備考	旧番号
103	SD02 黒色粘砂	— 10.4	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～粗砂	浅黄緑10YR8/3～灰黄緑10YR7/3 浅黄緑10YR8/3～灰黄緑10YR7/3	内外面ナデ	2003 I区・SD01 実測186
			—	—	50%残存, 下層砂層と混合	—
104	SD02 黒色粘砂	— 4.9	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～粗砂	灰白10YR8/2 に灰黄緑10YR7/2	内外面取ナデ	2003 I区・SD01 実測105
			—	—	底部外面にヘラ記号, 50%残存	—
105	SD02 黒色粘砂	16.2 —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～粗砂	灰黄2.5Y7/2 黄灰2.5Y6/1	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面3本/cmのタタキ, 内面ふこ方向のナデ	2003 I区・SD01 実測167
			—	—	25%残存, 上層砂層と混合	—
106	SD02 黒色粘砂	15 —	長石・石英・雲母 中砂～細砂	灰白2.5Y7/1～灰黄2.5Y7/2 灰白2.5Y8/2～灰黄2.5Y7/2	口縁部内外面ヨコナデ, 内面取ナデ, 体部外面3本/cmのタタキ, 内面ナデ	2003 I区・SD01 実測53
			—	—	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ナデ・内面取ナデ	—
107	SD02 黒色粘砂	17.6 —	長石・石英 粗砂～極粗砂	に灰黄緑10YR7/2～7/3 に灰黄緑10YR7/2～7/3	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面ナデ・内面取ナデ	2003 I区・SD01 実測105
			—	—	20%残存	—
108	SD02 黒色粘砂	18.8 —	長石・石英・雲母 粗砂～中粒	灰黄2.5Y7/2 灰黄2.5Y7/2～浅黄2.5YR7/3	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面3本/cmのタタキ 後ナデ, 内面ふこ方向のナデ	2003 I区・SD01 実測92
			—	—	25%残存	—
109	SD02 黒色粘砂	14.4 —	長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～極粗砂	に灰黄緑7.5YR7/4～6/4 に灰黄緑7.5YR7/4～6/4	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面3本/cmのタタキ 後ナデ, 内面取ナデ	2003 I区・SD01 実測80
			—	—	20%残存	—
110	SD02 黒色粘砂	16 —	長石・石英 粗砂～中粒	に灰黄緑10YR7/2～7/3 に灰黄緑10YR7/3～6/3	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面4本/cmのタタキ, 内面ふこ～10本/cmのハケ・指オサエ	2003 I区・SD01 実測100
			—	—	25%残存	—
111	SD02 黒色粘砂	17.4 —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～中粒	に灰黄緑10YR7/2～7/3 に灰黄緑10YR7/2～7/3	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面3本/cmのタタキ後, 10本/cmのハケ, 内面10本/cmのハケ後ナデ	2003 I区・SD01 実測130
			—	—	40%残存	—
112	SD02 黒色粘砂	18 —	長石・石英 粗砂	に灰黄緑10YR7/3 に灰黄緑10YR7/2～浅黄2.5Y7/3	口縁部内外面ヨコナデ, 内面取ナデ 体部外面2本/cmのタタキ, 内面ナデ	2003 I区・SD01 実測71
			—	—	60%残存	—
113	SD02 黒色粘砂	13.8 —	長石・石英・雲母 中砂～粗砂	に灰黄緑10YR7/2～7/3 に灰黄緑10YR7/3～6/3	口縁部外面取ナデ, 口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面2.5本/cmのタタキ, 内面取ナデ	2003 I区・SD01 実測178
			—	—	25%残存	—
114	SD02 黒色粘砂	16.4 —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～細粒	橙5Y7/6 橙5Y7/6	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面3本/cmのタタキ, 内面取ナデ	2003 I区・SD01 実測32
			—	—	30%残存, 上層砂層と混合	—
115	SD02 黒色粘砂	15 —	長石・石英・赤色酸化粒 粗砂～中粒	に灰黄緑10YR7/2～灰黄緑10YR6/2 灰白10YR8/2～浅黄緑10YR8/3	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面4本/cmのタタキ後, ～8本/cmのハケ・指・指ナデ・ナデ	2003 I区・SD01 実測56
			—	—	25%残存	—
116	SD02 黒色粘砂	17.8 —	長石・石英 粗砂～細粒	に灰黄緑10YR7/3～6/3 に灰黄緑10YR7/3～6/3	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面3本/cmのタタキ, 内面取ナデ	2003 I区・SD01 実測101
			—	—	25%残存	—
117	SD02 黒色粘砂	13 —	長石・石英 中砂～粗砂	に灰黄緑10YR7/2～7/3 に灰黄緑10YR7/3	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面3～4本/cmのタタキ, 内面取ナデ後ナデ	2003 I区・SD01 実測196
			—	—	30%残存, 上層砂層と混合	—
118	SD02 黒色粘砂	15.6 16.9 4	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～細粒	に灰黄緑10YR7/2 灰白10YR7/1～に灰黄緑10YR7/2	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面3本/cmのタタキ, 内面取ナデ	2003 I区・SD01 実測29
			—	—	70%残存	—
119	SD02 黒色粘砂	13.8 16.5 4.8	長石・石英 中砂～粗砂	灰白2.5Y7/1～灰黄2.5Y7/2 灰黄2.5Y7/1～灰黄2.5Y7/3	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面3本/cmのタタキ 後ナデ, 内面取ナデ	2003 I区・SD01 実測20
			—	—	40%残存	—
120	SD02 黒色粘砂	19.8 27.1	長石・石英 中砂～中粒	に灰黄緑10YR7/2～7/3 に灰黄緑7.5YR7/4～5/4	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面2本/cmのタタキ, 内面取ナデ	2003 I区・SD01 実測43
			—	—	80%残存, 下層砂層と混合	—
121	SD02 黒色粘砂	15.4 —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～細粒	に灰黄緑7.5YR7/4 浅黄緑10YR8/3	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面取ナデ, 内面取 ナデ	2003 I区・SD01 実測77
			—	—	口縁部0%, 体部20%残存	—
122	SD02 黒色粘砂	18.4 —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～中粒	に灰黄緑7.5YR7/4～橙7.5YR7/6 浅黄緑10YR8/3	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面3本/cmのタタキ 後ナデ, 内面取ナデ	2003 I区・SD01 実測178
			—	—	30%残存	—
123	SD02 黒色粘砂	16.4 —	長石・石英・雲母・赤色酸化粒 粗砂～極粗砂	に灰黄緑10YR7/3 に灰黄緑10YR7/3	口縁部内外面ヨコナデ, 体部外面3本/cmのタタキ 後ナデ, 内面取ナデ	2003 I区・SD01 実測102
			—	—	25%残存	—
124	SD02 黒色粘砂	— 5	長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～粗砂	灰黄2.5Y7/2 に灰黄緑10YR7/2～7/3	外面2本/cmのタタキ後下平ナデ, 内面取ナデ, 7～8本/cmのハケ・指・指ナデ・ナデ	2003 I区・SD01 実測147
			—	—	50%残存, 下層砂層と混合	—
125	SD02 黒色粘砂	— 4.3	長石・石英・雲母 中砂～粗砂	に灰黄緑10YR7/2～7/3 に灰黄緑10YR7/2	外面3本/cmのタタキ, 内面取ナデ・7～8本/cmのハケ	2003 I区・SD01 実測146
			—	—	50%残存	—
126	SD02 黒色粘砂	— 4.7	長石・石英 中砂～極粗砂	に灰黄緑10YR7/2～7/3 浅黄緑10YR8/3	口縁部内外面ヨコナデ, 内面取ナデ・5本/cmのハケ	2003 I区・SD01 実測159
			—	—	底部外面にヘラ記号, 40%残存	—
127	SD02 黒色粘砂	— 5	長石・石英 中砂～細粒	に灰黄緑10YR7/3 灰N4/0～暗灰N3/0	外面取ナデ, 内面ナデ	2003 I区・SD01 実測51
			—	—	70%残存	—

番号	出土場所	法層 (土層)	胎土	色調 (外面 内面)	備考	旧番号
128	SD02 黒色粘砂	19.4 —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～細礫	褐色YR6/6 にぶい黄褐色5YR7/4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面板ナデ・ナデ、 胴内面指オサエ・ナデ	1区・SD01 実測285
129	SD02 黒色粘砂	15.2 —	長石・石英 中砂～細礫	にぶい黄褐色10YR7/2-7/3 にぶい黄褐色5YR7/4-褐色5YR7/6	口縁部外面ヨコナデ、胴内面板ナデ、体部外面ヘラケズリ、胴内面板ナデ・10本/cmのハケ・ナデ 着在土壌、50%残存、下層砂層と接合	3区・SD03 1区・SD01 実測131
130	SD02 黒色粘砂	17.2 部26.5	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～中礫	にぶい黄褐色10YR7/2-7/3	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面3本/cmのタタキ後、 6本/cmのハケ、胴内面15-16本/cmのハケ・ナデ・指 オサエ、上層砂層と接合、上半50%、下半50%残存	2区・SD02 1区・SD01
SD02	12.4	長石・石英・雲母・赤色酸化粒	中砂～中礫	浅黄褐色10YR8/3-にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面3本/cmのタタキ後、 7-8本/cmのハケ、胴内面ナデ・指オサエ	2003 1区・SD01 実測175
SD02	10	長石・石英・赤色酸化粒	粗砂～中礫	淡黄褐色5YR8/3 淡黄褐色5YR8/4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面3本/cmのタタキ後、 10本/cmのハケ、胴内面ナデ	2003 1区・SD01 実測204
SD02	15.2	長石・石英・雲母	中砂～中礫	褐色10YR6/1-灰黄褐色10YR6/2 褐色10YR5/1-灰黄褐色10YR5/2	口縁部胴部に2条の凹線、口縁部内外面ヨコナデ、体 部外面、4本/cmのタタキ後10本/cmのハケ、胴内面 板ナデ、非在土壌、25%残存	1区・SD01 実測174
SD02	16.6	長石・石英・雲母・赤色酸化粒	中砂～中礫	にぶい黄褐色7.5YR7/3-7/4 浅黄褐色7.5YR8/3-8/4	口縁部内外面ヨコナデ、胴外面一部3本/cmのタタ キ後、体部外面6-7本/cmのハケ、胴内面7-8本 /cmのハケ、非在土壌、50%残存	2区・SD01 1区・SD01 実測137
SD02	—	長石・石英・赤色酸化粒	中砂～細礫	褐色10YR6/1-灰黄褐色10YR6/2 褐色10YR7/1-にぶい黄褐色10YR7/2	外面3本/cmのタタキ後6本/cmのハケ、 内面よこ方向のナデ、底部外面タタキ後ナデ	2003 1区・SD01 実測189
SD02	14.6	長石・石英 中砂～粗砂	—	黄褐色2.5Y6/1-5/1 黄褐色2.5Y6/1-5/1	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面3本/cmのタタキ後、 10本/cmのハケ、胴内面板ナデ・指オサエ	2003 1区・SD01 実測181
SD02	15.8	長石・石英・赤色酸化粒	中砂～中礫	にぶい黄褐色10YR7/2 にぶい黄褐色10YR7/2-7/3	口縁部外面よこ方向ナデ、胴内面10-11本/cmの ハケ、体部外面3本/cmのタタキ、胴内面10-11本 /cmのハケ後、上方向のナデ、非在土壌、40%残存	2003 1区・SD01 実測118
SD02	16.2	長石・石英 粗砂～中礫	—	にぶい黄褐色10YR7/3 にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面4本/cmのタタキ後、 上半に15-16本/cmのハケ、胴内面中位にヘラケ ズリ、上層砂層と接合、上半20%、下半50%残存	2003 1区・SD01 実測75
SD02	14.8	長石・石英・赤色酸化粒	中砂～粗砂	にぶい黄褐色10YR7/2-7/3 にぶい黄褐色7.5YR7/3	口縁部外面ナデ、胴内面板ナデ、体部外面2.5本 /cmの、タタキ後一部10本/cmのハケ、胴内面ヘラケ ズリ、60%残存	2003 1区・SD01 実測157
SD02	13.2 部18 2.8	長石・石英 粗砂～中礫	—	灰黄褐色2.5Y7/2 灰黄褐色2.5Y7/2	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ後6-9本/cm のハケ、胴内面ヘラケズリ 上半60%、下半50%残存	2003 1区・SD01 実測196
SD02	—	長石・石英・赤色酸化粒	中砂～細礫	浅黄褐色10YR8/3-にぶい黄褐色10YR7/3 灰黄褐色2.5Y7/2	外部3本/cmのタタキ後板ナデ、内面ヘラケズリ、 底部外面ナデ	2003 1区・SD01 実測171
SD02	18.6 部31.5 6	長石・石英 粗砂～細礫	—	にぶい黄褐色10YR7/3 にぶい黄褐色10YR7/3-暗灰褐色10YR3/0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面2.5本/cmのタタキ後、 10本/cmのハケ、胴内面ヘラケズリ・指ナデ、底部外面2. 5本/cmのタタキ、非在土壌、上層砂層と接合、40%残存	2003 1区・SD01 実測132
SD02	—	長石・石英・チャート 細礫～中礫	—	にぶい黄褐色10YR7/2-7/3 灰黄褐色2.5Y7.2-浅黄褐色2.5Y7/3	口縁部外面板ナデ、胴内面ヨコナデ、体部外面3 本/cmのタタキ後10本/cmのハケ、胴内面ヘラケズ リ・指オサエ、非在土壌、60%残存	2003 1区・SD01 実測31
SD02	16.8 —	長石・石英 粗砂～中礫	—	にぶい黄褐色10YR7/3 灰黄褐色2.5Y7/2	口縁部外面ヨコナデ、胴内面縦線不明 体部外面6-9本/cmのハケ、胴内面板ナデ・ヘラケ ズリ、非在土壌、15%残存	2003 1区・SD01 実測106
SD02	15.4 部21 5.2	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～細礫	—	浅黄褐色10YR8/3 浅黄褐色10YR8/3-にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面3-4本/cmのタタ キ後、11-12本/cmのハケ、胴内面ヘラケズリ 非在土壌、上半40%、下半25%残存	2003 1区・SD01 実測94
SD02	16.2 —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～粗砂	—	浅黄褐色10YR8/3-にぶい黄褐色10YR7/3 浅黄褐色10YR8/3-にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部外面ナデ、胴内面10本/cmのハケ、 体部外面10本/cmのハケ、胴内面ヘラケズリ・指ナデ、 非在土壌、40%残存	2003 1区・SD01 実測263
SD02	19.8 —	長石・石英・赤色酸化粒・雲母 中砂～細礫	—	にぶい黄褐色10YR7/3 にぶい黄褐色10YR7/3-6/3	口縁部外面ヨコナデ、胴内面12-13本/cmのハケ、 体部外面12-13本/cmのハケ、胴内面ヘラケズリ 非在土壌、15%残存	2003 1区・SD01 実測112
SD02	—	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～中礫	—	褐色5YR7/6-6/6 にぶい黄褐色10YR7/3	外面11-12本/cmのハケ後2本/cm、 内面ヘラケズリ、底部外面11-12本/cmのハケ 非在土壌、40%残存、下層砂層と接合	2003 1区・SD01 実測279
SD02	16.8 —	長石・石英・赤色酸化粒・チャ ート	—	にぶい黄褐色10YR7/3 にぶい黄褐色10YR7/2	外面3本/cmのタタキ後9-10本/cmのハケ、内面ヘ ラケズリ 非在土壌、30%残存	2003 1区・SD01 実測278
SD02	—	長石・石英 中砂～中礫	—	灰黄褐色2.5Y7/2-6/2 灰黄褐色2.5Y7/2-6/2	外面11-12本/cmのハケ、内面ヘラケズリ 非在土壌、20%残存	2003 1区・SD01 実測262
SD02	—	長石・石英・雲母 中砂～細礫	—	灰黄褐色10YR6/2 にぶい黄褐色10YR7/3	外面10-11本/cmのハケ、 内面ヘラケズリ、底部外面2.5本/cmのタタキ 非在土壌、80%残存	2003 1区・SD01 実測281
SD02	—	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～細礫	—	にぶい黄褐色10YR7/3 灰褐色10YR8/2-浅黄褐色10YR8/3	外面3本/cmのタタキ後10-11本/cmのハケ、 内面ヘラケズリ、底部外面3本/cmのタタキ 非在土壌、40%残存	2003 1区・SD01 実測260

番号	出土場所	法量 (口徑) (高さ) (厚)	胎土	色調 (外面) (内面)	備考	旧番号
153	SD02 黒色粘砂	— 5	— 長石・石英・赤色酸化粒 中砂～中礫	— 浅黄2.5Y8/3～浅黄2.5Y7/3 灰黄2.5Y7/2～浅黄2.5Y7/3	— 外面3本/cmのタタキ後10本/cmのハケ、内面ヘラガ スリ、底部外面3本/cmのタタキ 存在地盤、60%残存	— 2003 I区-S001 実測170 実測170
	SD02 黒色粘砂	— 4.9	— 長石・石英・赤色酸化粒・チャート 中砂～中礫	— にぶい黄橙10YR7/3～6/3 灰黄2.5Y7/2～6/2	— 外面3本/cmのタタキ後10本/cmの内面ヘラガ スリ、底部外面3本/cmのタタキ 存在地盤、60%残存	— 2003 I区-S001 実測169
155	SD02 黒色粘砂	21.4 9.9 5.5	— 長石・石英 中砂～中礫	— にぶい黄橙10YR7/2～7/3 灰黄橙10YR6/2	— 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面10～11本/cmの ハケ後、ヘラミガキ、両内面ヘラミガキナデ 20%残存	— 2003 I区-S001 実測165
	SD02 黒色粘砂	26 —	— 長石・石英・赤色酸化粒 粗砂～粗礫	— 浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR7/3 灰白10YR8/2～浅黄橙10YR8/3	— 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ、両内 面調整不明	— 2003 I区-S001 実測162
157	SD02 黒色粘砂	18.9 10.8 4.5	— 長石・石英 中砂～粗粒砂	— にぶい黄橙10YR7/2 にぶい黄橙10YR7/2	— 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ・板ナデ、 両内面8本/cmのハケ後ナデ一部ヘラミガキ残存 底部外面木の葉型痕、口縁部20%、体部40%残存	— 2003 I区-S001 実測136
	SD02 黒色粘砂	— —	— 長石・石英 中砂～粗粒砂	— にぶい黄橙10YR7/2～7/3 にぶい黄橙10YR7/3～6/3	— 口縁部外面ヨコナデ、両内面板ナデ後ナデ、 体部外面11～12本/cmのハケ、両内面ナデ 50%残存、上層、下層調整と接合	— 2003 I区-S001 実測115
159	SD02 黒色粘砂	18.8 —	— 長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～粗砂	— にぶい黄橙10YR7/2～7/3 にぶい黄橙10YR7/2～7/3	— 外面調整不明、内面ヘラミガキ(よこ方向)	— 2003 I区-S001 実測109
	SD02 黒色粘砂	25 —	— 長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～粗粒砂	— にぶい黄橙10YR7/3～7/4 にぶい黄橙10YR7/2～7/3	— 口縁部外面ヨコナデ、両内面調整不明、体部外面 ヘラミガキ、両内面ヘラミガキ 10%残存	— 2003 I区-S001 実測118
161	SD02 黒色粘砂	18.4 —	— 長石・石英・雲母 中砂～粗礫	— にぶい黄橙10YR7/3 にぶい黄橙10YR7/3	— 外面ナデ、内面板ナデ	— 2003 I区-S001 実測103
	SD02 黒色粘砂	18.8 9.7 4.7	— 長石・石英・赤色酸化粒 中砂～中礫	— にぶい黄橙10YR7/2～7/3 にぶい黄橙10YR7/2～7/3	— 口縁部外面に1本の沈積、口縁部内外面ヨコナデ、 体部内面14～15本/cmのハケ、底部外面ケスリ 後ナデ、存在地盤、50%残存	— 2003 I区-S001 実測102
163	SD02 黒色粘砂	16.8 8.1 3.6	— 長石・石英・赤色酸化粒 中砂～中礫	— 浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR7/3 浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR7/3	— 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ 50%残存	— 2003 I区-S001 実測124
	SD02 黒色粘砂	11.8 6.8 3.5	— 長石・石英・赤色酸化粒 中砂～中礫	— にぶい黄橙10YR7/2～灰黄橙10YR8/2 灰黄橙10YR6/2	— 外面10本/cmのハケナデ、内面板ナデ、 底部外面3本/cmのタタキ 80%残存	— 2003 I区-S001 実測125
165	SD02 黒色粘砂	18.5.8 10.5 7.5	— 長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～中礫	— 浅黄橙10YR8/3 浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR7/3	— 体部外面ナデ、両内面板ナデ、底部外面ヨコナデ、 両内面ナデ 50%残存	— 2003 I区-S001 実測122
	SD02 黒色粘砂	18.11.6 10.8 6	— 長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～中礫	— 浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR7/3 浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR7/3	— 体部外面ナデ、両内面板ナデ、底部外面ヨコナデ、 両内面ナデ 50%残存	— 2003 I区-S001 実測123
167	SD02 黒色粘砂	— —	— 長石・石英 粗砂～粗礫	— にぶい黄橙10YR7/2～灰黄橙10YR6/2 にぶい黄橙10YR7/2	— 口縁部外面に2本の凹線、口縁部外面ヨコナデ、 両内面ヘラミガキ、体部外面9～10本/cmのハケ後 ナデ、両内面ヘラミガキ、10%残存	— 2003 I区-S001 実測78
	SD02 黒色粘砂	29 —	— 長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～粗砂	— にぶい黄橙10YR7/3 にぶい黄橙10YR7/2～7/3	— 口縁部外面ヨコナデ、口縁部外面ヘラミガキ、 両内面指オサエ後板ナデ、体部外面ヘラミガキ、両 内面板ナデ、40%残存	— 2003 I区-S001 実測183
169	SD02 黒色粘砂	32 —	— 長石・石英 粗砂～中礫	— にぶい黄橙10YR7/3 浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR7/3	— 口縁部外面に2本の凹線、口縁部外面ヨコナデ、 両内面ヘラミガキ、体部外面ヘラミガキ、両内面ヘラ ミガキ、存在地盤、15%残存、上層調整と接合	— 2003 I区-S001 実測100
	SD02 黒色粘砂	27 18.15	— 長石・石英・赤色酸化粒 粗砂～粗礫	— にぶい黄橙10YR7/3 にぶい黄橙7.5YR7/4～6/4	— 杯口縁部外面ヨコナデ、その他内面ヘラミガキ、 脚柱部外面ヘラミガキ、両内面ヨコナデ、両内面穿孔 推定4、50%残存、下層調整と接合	— 2003 I区-S001 実測73
171	SD02 黒色粘砂	28 —	— 長石・石英・赤色酸化粒 粗砂～粗礫	— にぶい黄橙7.5YR7/4 にぶい黄橙7.5YR7/4	— 口縁部外面4本/cmのタタキ後ナデヘラミガキ、 両内面ヘラミガキ、体部外面ヘラミガキ、両内面調整 不明、15%残存	— 2003 I区-S001 実測81
	SD02 黒色粘砂	24 —	— 長石・石英・チャート 粗砂～粗礫	— にぶい黄橙10YR7/3 にぶい黄橙7.5YR7/4～橙7.5YR7/6	— 口縁部外面ヨコナデナデ板ナデ、両内面調整不明 体部外面板ナデ後ヘラミガキ、両内面調整不明	— 2003 I区-S001 実測104
173	SD02 黒色粘砂	21.8 —	— 長石・石英・雲母 粗砂～粗礫	— 灰黄2.5Y7/2～6/2 灰黄2.5Y7/2～6/2	— 口縁部外面ヨコナデ、両内面調整不明、 体部外面7～8本/cmのハケ後板ナデ、両内面調整 不明、10%残存	— 2003 I区-S001 実測84
	SD02 黒色粘砂	22.2 —	— 長石・石英・赤色酸化粒 中砂～中礫	— にぶい黄橙5YR7/4～橙5YR7/6 にぶい黄橙7.5YR7/4	— 内外調整不明	— 2003 I区-S001 実測39
175	SD02 黒色粘砂	20.8 —	— 長石・石英・赤色酸化粒 中砂～粗礫	— 浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR7/3	— 口縁部外面ヨコナデ、その他調整不明	— 2003 I区-S001 実測35
	SD02 黒色粘砂	19.2 —	— 長石・石英 中砂～粗粒砂	— 浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR7/3	— 口縁部外面ヨコナデ、両内面ヘラミガキ、 体部外面よこ方向ナデ、両内面よこヘラミガキ 20%残存	— 2003 I区-S001 実測53
177	SD02 黒色粘砂	24 —	— 長石・石英・赤色酸化粒 粗砂～粗粒砂	— にぶい黄橙10YR7/2～7/3 にぶい黄橙7.5YR7/3～7/4	— 内外調整不明	— 2003 I区-S001 実測111

番号	出土場所	法量 (土器/土)	胎土	色調 (外面/内面)	備考	旧番号
178	SD02 黒色粘結	15.8 —	— —	— —	— —	— —
SD02	13	—	—	—	—	—
179	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	15.2	—	—	—	—	—
180	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	17.4	—	—	—	—	—
181	黒色粘結	12.7 15.4	— —	— —	— —	— —
SD02	13.6	—	—	—	—	—
182	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
183	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
184	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
185	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
186	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
187	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
188	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
189	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
190	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
191	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
192	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
193	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
194	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
195	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
196	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
197	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
198	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
199	黒色粘結	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
200	上層砂層	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
201	上層砂層	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—
202	上層砂層	—	—	—	—	—
SD02	—	—	—	—	—	—

番号	出土場所	法量 (kg)	胎土	色調 (外面・内面)	備考	旧番号
203	SD02 上層砂層	16 —	長石・石英・赤色酸化鉄 粗砂～細砂	にぶい黄褐色10YR7/2 灰白10YR8/2～洗青緑10YR8/3	口縁部外側の調整不明、顔部外面へラミガキ、 内面コナデ	2003 1区-SD01 実測16
204	SD02 上層砂層	13 —	長石・石英・雲母 中砂～極粗砂	灰黄2.5Y7/2～洗青2.5Y7/3 灰黄2.5Y7/2～洗青2.5Y7/3	口縁部外面板ナデ、内面8～9本/cmのハケ、 顔部外側ナデ、内面コナデ、顔部内面にシボリ 目、体部外面調整不明、内面粗砂ナデ、20%残存	2003 1区-SD01 実測150
205	SD02 上層砂層	13-2 —	長石・石英 粗砂	にぶい黄2.5YR7/4 にぶい黄褐色10YR7/4	口縁部内外面コナデ、体部外面調整不明、 内面9～10本/cmのハケ	2003 1区-SD01 実測7
206	SD02 上層砂層	13.4 —	長石・石英 粗砂～中層	洗青緑10YR8/3～にぶい黄褐色10YR7/3 洗青緑10YR8/3	外面調整不明、内面上半コナデ、下半調整不明	2003 1区-SD01 実測57
207	SD02 上層砂層	20 —	長石・石英 粗砂～細砂	橙5YR7/6 洗青5YR8/4	口縁部外側の上半はコナデ、その他は調整不明	2003 1区-SD01 実測68
208	SD02 上層砂層	11.6 —	長石・石英 粗砂～中層	にぶい黄2.5YR7/3～7/4 にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部外面板ナデ、内面粗砂ナデ・指オサエ、 体部外面板ナデ、内面粗砂ナデ・指オサエ	2003 1区-SD01 実測20
209	SD02 上層砂層	14 —	長石・石英・チャート 中砂～細砂	灰黄緑10YR6/2～にぶい黄褐色10YR6/3 灰黄緑10YR6/2～にぶい黄褐色10YR6/3	口縁部内外面粗砂ナデ、体部内面指オサエ	2003 1区-SD01 実測198
210	SD02 上層砂層	— 5	長石・石英 中砂～粗砂	にぶい黄褐色10YR7/2～7/3 にぶい黄褐色10YR7/2	外面板ナデ、内面11～12本/cmのハケ、 底部外面に3本のヘラ記号	2003 1区-SD01 実測153
211	SD02 上層砂層	— 4.7	長石・石英・赤色酸化鉄 中砂～極粗砂	灰白10YR8/2～洗青緑10YR8/3 灰白10YR8/2～洗青緑10YR8/3	内外面調整不明、底部外面に2本のヘラ記号	2003 1区-SD01 実測162
212	SD02 上層砂層	— 4.2	長石・石英・雲母・赤色酸化鉄 中砂～極粗砂	にぶい黄褐色10YR7/2～7/3 にぶい黄褐色10YR7/2～7/3	外面へラミガキ、内面ナデ、底部外側に径7mmの竹 管文と盛附	2003 1区-SD01 実測161
213	SD02 上層砂層	— 4.7	長石・石英 中砂～粗砂	灰黄2.5Y7/2 にぶい黄褐色10YR7/3	外面板ナデ径へラミガキ、内面板ナデ後ナデ、 底部外側に径1.1cmの竹管文と盛附	2003 1区-SD01 実測160
214	SD02 上層砂層	18.4 —	長石・石英・雲母・チャート 中砂～極粗砂	橙緑10YR6/1～5/1 黄緑9.5/0	口縁部外面板ナデ、口縁部内外面コナデ、 体部外面3本/cmのタタキ、内面粗砂ナデ 15%残存	2003 1区-SD01 実測192
215	SD02 上層砂層	14.6 —	長石・石英・雲母 中砂～粗砂	にぶい黄褐色10YR7/2～灰黄緑10YR6/2 橙5Y7/6～5/6	口縁部外側コナデ、体部外面2本/cmのタタキ、 内面12本/cmのハケ	2003 1区-SD01 実測185
216	SD02 上層砂層	17 —	長石・石英・赤色酸化鉄 中砂～細砂	灰黄緑10YR6/2 にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部内面コナデ、内面調整不明、 体部外面15～16本/cmのハケ、内面粗砂ナデ 15%残存	2003 1区-SD01 実測196
217	SD02 上層砂層	16 —	長石・石英 中砂～粗砂	にぶい黄褐色10YR7/2～灰黄緑10YR6/2 灰黄緑10YR6/2	口縁部内外面コナデ、体部外面3本/cmのタタキ、 内面粗砂ナデ	2003 1区-SD01 実測197
218	SD02 上層砂層	17 —	長石・石英・雲母 中砂～粗砂	にぶい黄褐色10YR7/2 洗青緑10YR6/2～5/2	口縁部内外面コナデ、体部外面3本/cmのタタキ後 ～径10本/cmのハケ、内面粗砂ナデ	2003 1区-SD01 実測203
219	SD02 上層砂層	19.4 —	長石・石英 粗砂～細砂	にぶい黄褐色10YR7/3 灰黄2.5Y7/2～洗青2.5Y7/3	口縁部内外面コナデ、体部外面2.5本/cmのタタキ後 9～10本/cmのハケ、内面5～6本/cm・9～10本/cm のハケ、底部同様に塗布、40%残存	2003 1区-SD01 実測66
220	SD02 上層砂層	19.4 30.7 2.8	長石・石英・赤色酸化鉄 中砂～中層	橙5Y7/8 にぶい黄褐色10YR7/2～7/3	口縁部内外面コナデ、体部外面3本/cmのタタキ、 内面調整不明、内面コナデ、体部外側調整 不明、内面コナデ	2003 1区-SD01 実測22
221	SD02 上層砂層	15.6 —	長石・石英 粗砂～細砂	にぶい黄褐色10YR7/2～7/3 灰白10YR8/2～洗青緑10YR8/3	口縁部内外面コナデ、体部外面3本/cmのタタキ、 内面粗砂ナデ	2003 1区-SD01 実測60
222	SD02 上層砂層	17.6 —	長石・石英・赤色酸化鉄 中砂～細砂	にぶい黄褐色10YR7/2～7/3 にぶい黄褐色10YR7/2～7/3	口縁部内外面コナデ、体部内面粗砂ナデ	2003 1区-SD01 実測193
223	SD02 上層砂層	17.4 —	長石・石英・赤色酸化鉄 中砂～中層	橙5YR7/6～6/6 洗青緑10YR6/3～にぶい黄褐色10YR7/3	口縁部外側に2本の粗砂筒、内面コナデ、体部 外面ナデ	2003 1区-SD01 実測194
224	SD02 上層砂層	16.2 —	長石・石英・赤色酸化鉄 中砂～中層	橙5Y7/8 灰白10YR7/1～にぶい黄褐色10YR7/2	非注陸産、黄色粘砂と混合、20%残存 口縁部内外面コナデ、体部外面4本/cmのタタキ、 内面粗砂ナデナデ、30%残存	2003 1区-SD01 実測28
225	SD02 上層砂層	15.8 —	長石・石英 粗砂～極粗砂	にぶい黄褐色10YR7/2～灰黄緑10YR6/2 灰黄緑10YR6/2	口縁部外側に粗砂筒、内面コナデ、体部外側調整 不明、内面コナデ	2003 1区-SD01 実測72
226	SD02 上層砂層	8.6 —	長石・石英 粗砂～中層	にぶい黄褐色10YR7/2 にぶい黄褐色10YR7/2～7/3	口縁部外側コナデ、内面へラミガキ、体部内外 面へラミガキ、底部外面へラミガキ	2003 1区-SD01 実測22
227	SD02 上層砂層	20.2 —	長石・石英 粗砂	灰白10YR8/2～にぶい黄褐色10YR7/2 灰白10YR8/2～にぶい黄褐色10YR7/2	口縁部内外面コナデ、体部外面ナデ、内面調整 不明	2003 1区-SD01 実測200

番号	出土場所	法層(相対位置)	胎土	色 調 (外面 内面)	備 考	旧番号
228	SD02 上層砂層	17.8 —	長石・石英 粗砂～極粗砂	にぶい黄橙10YR7/2～灰黄橙10YR8/2 にぶい黄橙10YR7/2～7/3	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面板ナデ、 同内面たる方向のナデ 20%残存	2003 1区-S001 実測206
229	SD02 上層砂層	18.4 —	長石・石英・雲母 中砂～粗砂	にぶい黄橙10YR7/2～灰黄橙10YR8/2 にぶい黄橙10YR7/2	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、 同内面ヘラミガキ 15%残存	2003 1区-S001 実測207
230	SD02 上層砂層	20.2 —	長石・石英・雲母 中砂～粗砂	橙2.5YR6/6 にぶい黄橙10YR7/2～7/3	外面および口縁部内面調整不明、 体部内面よこ方向のナデorヘラミガキ 20%残存	2003 1区-S001 実測201
231	SD02 上層砂層	38.2 —	長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～粗砂	灰白10YR8/2～にぶい黄橙10YR7/2 にぶい黄橙10YR7/2	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、 同内面板ナデ 15%残存	2003 1区-S001 実測202
232	SD02 上層砂層	21.2 —	長石・石英・赤色酸化粒 粗砂	灰白10YR8/2 灰白10YR8/2	口縁部外面に4本の縦筋、 その他内外面よこ方向のヘラミガキ 存在地差、15%残存	2003 1区-S001 実測2
233	SD02 上層砂層	27 —	長石・石英 中砂～粗砂	にぶい黄橙10YR7/3～6/3 にぶい黄橙10YR7/3～6/3	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ、胴柱部内面 シボリ目、筒外面調整不明、肩部穿孔数推定4 黒色粘砂と接合、口縁部20%、胴部50%残存	2003 1区-S001 実測125
234	SD02 上層砂層	30 —	長石・石英・赤色酸化粒 粗砂～細砂	灰白2.5Y8/2～灰黄2.5Y7/2 浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR7/3	外面調整不明、内面上半よこ方向ミガキ、 同下半方向不明ヘラミガキ 存在地差、15%残存	2003 1区-S001 実測2
235	SD02 上層砂層	29.6 —	長石・石英・チャート・赤色酸化粒 粗砂～極粗砂	浅黄橙7.5YR8/3～8/4 にぶい黄橙7.5YR7/3～7/4	内外面調整不明 20%残存	2003 1区-S001 実測17
236	SD02 上層砂層	28.2 —	長石・石英・チャート・赤色酸化粒 粗粗砂～中粒	にぶい黄橙7.5YR7/4～橙7.5YR7/6 にぶい黄橙7.5YR6/3	口縁部外面に横溝と漆状文十竹管文付内形浮文 播磨7筋、内面ヘラミガキ 30%残存	2003 1区-S001 実測61
237	SD02 上層砂層	14.2 —	長石・石英 中砂～細砂	にぶい黄橙10YR7/3～6/3 にぶい黄橙10YR7/3～6/3	口縁部外面ヨコナデ、その他内外面ヘラミガキ 20%残存、Ⅲ区下層砂層と接合	2003 1区-S001 実測42
238	SD02 上層砂層	4 5 2.5	長石・石英・チャート 粗砂～細砂	浅黄2.5Y8/3～7/3 浅黄2.5Y8/3～7/3	内外面ナデ・粗オサエ ミニチュア土器 60%残存	2003 1区-S001 実測98
239	SK01 —	16.8 —	長石・石英 中砂～粗砂	灰黄2.5Y7/2～浅黄2.5Y7/3 灰黄2.5Y7/2～浅黄2.5Y7/3	内外面の調整不明 25%残存	2003 1区-SK06 実測153
240	SK01 —	16.2 —	長石・石英・チャート・赤色酸化粒 中砂～細砂	浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR7/3 浅黄橙10YR8/3～にぶい黄橙10YR7/3	口縁部外面ヨコナデ、同内面調整不明、 体部外面よこ方向のナデ、筒内面ナデ SD02と厚砂層と接合、20%残存	2003 1区-SK06 実測99
241	SK01 —	13.6 —	長石・石英 中砂～極粗砂	にぶい黄橙10YR7/3～7/4 にぶい黄橙10YR7/3～7/4	内外面の調整不明 25%残存	2003 1区-SK06 実測154
242	SK01 —	4.3 —	長石・石英 中砂～粗砂	灰黄2.5Y7/2～浅黄2.5Y7/3 灰黄2.5Y7/2～浅黄2.5Y7/3	外面ヘラミガキ、内面ユビオサエ、底部外面に径6mm 竹管文5箇所、径5mmの刺突文2箇所 90%残存	2003 1区-SK06 実測155
243	SK01 —	17.2 —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～細砂	にぶい黄橙7.5YR7/3～7/4 灰白10YR8/2	内外面の調整不明 20%残存	2003 1区-SK06 実測156
244	SK01 —	16.6 —	長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～粗砂	浅黄2.5Y7/3 浅黄2.5Y7/3	体部外面3本/cmのタキ目、7～8本/cmのハケ、内 面板ナデ 25%残存	2003 1区-SK06 実測152
245	SK01 —	19.6 —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～細砂	にぶい黄橙10YR7/3 にぶい黄橙7.5YR7/3～7/4	内外面の調整不明 15%残存	2003 1区-SK06 実測151
246	SK01 —	24.4 —	長石・石英 粗砂	灰白2.5Y8/2～浅黄2.5Y8/3 灰白2.5Y8/2～浅黄2.5Y8/3	口縁部内外面の調整不明、体部内外面ヘラミ ガキ 20%残存	2003 1区-SK06 実測145
247	SK01 —	15.8 —	長石・石英 中砂～粗砂	にぶい黄橙10YR7/3～7/4 にぶい黄橙10YR7/3～7/4	口縁部外面上半ヨコナデ、下半その他は調整不明 15%残存	2003 1区-SK06 実測149
248	SE02 掘形内	29.8 —	長石 中砂～粗砂	橙灰5YR6/1～5/1 灰橙5YR5/2	内面に12本の横スリ目、内外面口ロナデ 備前焼、15%残存	2003 1区-S001 実測215
249	SE02 掘形内	29 —	長石 粗砂～細砂	にぶい黄橙2.5YR6/4～にぶい赤橙2.5YR5/4 橙2.5YR6/8	内面に6本の横スリ目、内外面口ロナデ 備前焼、15%残存	2003 1区-S001 実測213
250	SE02 —	26.4 —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～粗砂	にぶい黄橙7.5YR7/4 橙2.5YR7/6～7/8	内外面ヨコナデ 土器磨損、10%残存	2003 1区-S001 実測219
251	SE02 —	21.2 —	長石・石英 中砂	にぶい赤橙5YR5/4 橙2.5YR7/6～7/6	内外面ヨコナデ 土器磨損、10%残存	2003 1区-S001 実測222
252	SE02 —	21.2 —	長石・石英・雲母 中砂	にぶい黄橙7.5YR5/4 浅黄橙7.5YR8/4～にぶい黄橙7.5YR7/4	内面ヨコナデ種6本xαの横スリ目、 口縁部外面ヨコナデ、その他内外面ナデ 土器磨損スリ、15%残存	2003 1区-S001 実測219

番号	出土場所	法量 (口縁 底径) (高さ)	胎土	色調 (外面) (内面)	備考	旧番号
253	SE02	7.6 1.5 —	長石・石英 粗砂～極粗砂	灰白10YR8/2～浅黄橙10YR8/3 灰白10YR8/2～浅黄橙10YR8/3	内外型ナデ 100%残存	2003 Ⅰ区-SE01 実測223
254	SE02	27 — —	長石・石英・雲母 中砂～粗砂	灰N6/0～5/0 灰N6/0～5/0	口縁部外面に自然釉、内外面口コロナデ 東洋系須恵器、10%残存	2003 Ⅰ区-SE01 実測221
255	SE02	— — —	長石・石英・雲母 中砂～粗砂	栗褐10YR3/1～黒10YR2/1 褐色10YR4/1～黒褐10YR3/1	口縁部外面に2条の凸線、内外面口コロナデ 備前焼	2003 Ⅰ区-SE01 実測220
256	SE02	12 — —	長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～粗砂	(胎土)灰白5Y8/1 (釉)灰白10Y7/2～オリーフ灰10Y6/2	外面細線描き蓮弁文、全面施釉、釉に貫入あり 青緑、10%残存	2003 Ⅰ区-SE01 実測226
257	SE02	12.2 — —	長石・石英・赤色酸化粒 粗砂	(胎土)白9/0 (釉)灰味～乳濁	外面緑線描き蓮弁文、全面施釉、釉に貫入あり 青花、20%残存	2003 Ⅰ区-SE01 実測225
263	SE03	— — 8.6	長石・石英 中砂～細砂	灰N6/0 灰N6/0～5/0	内外面口コロナデ 備前焼、上半20%、下半50%残存	2003 Ⅰ区-SE02 実測230
264	SE03	— — 4.1	長石・石英・赤色酸化粒 粗砂～細砂	(胎土)灰白2.5Y8/1～8/2 (釉)浅黄2.5Y7/4	外面細線描き蓮弁文、内面「吉・金満玉堂」の印文 青緑、50%残存	2003 Ⅰ区-SE02 実測228
265	SE03	12.8 — —	長石・石英・チャート・赤色酸化粒 粗砂～極粗砂	(胎土)灰白N8/0 (釉)透明	全面施釉 白組、15%残存	2003 Ⅰ区-SE02 実測229
266	SE03	12.8 — —	長石・石英・チャート・赤色酸化粒 極粗砂～中粒	(胎土)灰白N8/0～7/0 (釉)灰白2.5Y8/1～黒オリーフ2.5Y7/1	外面淡黄文・芭蕉文、内面下端に1条の直線文 青花、25%残存	2003 Ⅰ区-SE02 実測227
288	SK01	26.4 — —	長石・石英 中砂～細砂	黄灰2.5Y6/1 黄灰2.5Y6/1～5/1	口縁部外面に3条の凹線、両内面口コロナデ、外面ハ ラケスリ、両内面5～6本/cmのハケ、後よこ方向のナデ、 土師黄羽釜、25%残存	2002 Ⅱ区-SK01 実測8
289	SK01	24 10.8 10.3	長石・石英・チャート 粗砂～細砂	灰黄2.5Y6/2～暗灰黄2.5Y5/2 灰黄褐10YR5/2	口縁部内外面口コロナデ、体部外面橙オサエ・ナデ、 内面高7本の櫛入り目 備前焼、20%残存	2002 Ⅱ区-SK01 実測11
292	SK02	20.6 — —	長石・石英 中砂～粗砂	褐7.5YR4/4 にぶい黄橙10YR7/3～6/3	口縁部内外面口コロナデ、体部外面4本/cmのタタキ、 両内面板ナデ 土師赤線、15%残存	2002 Ⅱ区-SK05 実測9
293	SK02	19.8 — —	長石・石英・チャート・赤色酸化粒 中砂～細砂	灰N4/0～暗灰N3/0 灰N4/0～暗灰N3/0	口縁部外面に3条の凹線、両内面口コロナデ、体部内面6 本/cmのハケ 互貫羽釜、15%残存	2002 Ⅱ区-SK05 実測2
294	SK02	8.6 1.5 —	長石・石英 中砂～極粗砂	にぶい黄橙10YR7/2～7/3 にぶい黄橙10YR7/2～7/3	口縁部外面口コロナデ、その他ナデ、内面口コロナデ 土師赤線、20%残存	2002 Ⅱ区-SK05 実測4
296	SK04	20.2 12.8 —	長石・石英 中砂～粗砂	灰黄褐10YR6/2 灰黄褐10YR6/2～5/2	口縁部内外面口コロナデ、体部外面3本/cmのタタキ、 両内面板ナデ 土師赤線、70%残存	2002 Ⅱ区-SK02 実測5
297	SK04	17.2 — —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～細砂	にぶい黄橙10YR6/3～6/4 にぶい橙7.5YR7/3～7/4	口縁部内外面口コロナデ、体部外面3本/cmのタタキ、 両内面板ナデ 土師赤線、15%残存	2002 Ⅱ区-SK02 実測2
298	SK04	7 1.7 —	長石・石英・雲母・赤色酸化粒 中砂～粗砂	にぶい黄2.5Y6/3 黄灰2.5Y6/1～5/1	外装指オサエ・ナデ、内面不整方向のナデ 土師赤線、50%残存	2002 Ⅱ区-SK02 実測8
299	SK04	29.6 — —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～細砂	にぶい橙2.5YR6/4～にぶい赤褐2.5YR5/4 灰黄10YR5/2	内外面口コロナデ 備前焼、10%残存	2002 Ⅱ区-SK02 実測7
300	SK07	22.4 — —	長石・石英 粗砂	にぶい赤褐2.5YR5/4 にぶい赤褐2.5YR5/3	内面に6本の櫛入り目、内外面口コロナデ 備前焼、25%残存	2003 Ⅱ区-SK09 実測21
301	Ⅱ区 遺構外	31.8 — —	長石・石英 中砂～粗砂	灰黄2.5Y7/2 灰5Y5/1	口縁部内外面口コロナデ、体部外面ハラケスリ、 体部内面10本/cm・8本/cmのハケ 土師赤線、15%残存	2003 Ⅰ区 実測48
302	Ⅱ区 遺構外	16.4 — —	長石 中砂～粗砂	灰N6/0～5/0 灰N5/0	口縁部外面淡紫、体部外面ハラケスリ、体部内面10 本/cmのハケ 互貫羽釜、50%残存	2003 Ⅰ区 実測10
303	Ⅱ区 遺構外	27 — —	長石 粗砂～細砂	灰黄褐10YR5/2～にぶい黄橙10YR5/3 灰黄7.5YR5/2～4/2	内面に9本の櫛入り目、内外面口コロナデ 備前焼、10%残存	2003 Ⅱ区 実測246
304	Ⅱ区 遺構外	23 — —	長石・石英・赤色酸化粒 中砂～粗砂	赤褐10R5/4 灰赤2.5YH4/2	内面に10本の櫛入り目、内外面口コロナデ 備前焼、10%残存	2003 Ⅱ区 実測44
305	Ⅱ区 遺構外	32 — —	長石・石英 中砂	灰褐7.5YR5/2～4/2 灰褐7.5YR5/2	内面に5本×αの櫛入り目、内外面口コロナデ 備前焼、10%残存	2003 Ⅱ区 実測245
306	Ⅱ区 遺構外	26.6 — —	長石・石英・雲母 中砂	灰N5/0 灰N6/0～5/0	口縁部外面に3条の凹線、内面に10本の櫛入り目、 内外面口コロナデ 備前焼、15%残存	2003 Ⅰ区 実測209

番号	出土場所	法量 (口径・高さ・底径)	胎土	色調 (外面・内面)	備考	旧番号
307	Ⅱ区 遺構外	28 —	長石 — 中砂	にぶい黄褐色10YR5/4 にぶい褐色7.5YR5/3	口縁部外面に2条の凹線、内外面口ロナデ 僅前縁、15%残存 内面にヘラス目、外面口ロナデ、内面に墨石焼痕	2003 Ⅱ区 実測212
	Ⅳ区 遺構外	27 11.2 15	長石・石英 中砂→粗砂	褐色2.5YR7/6 褐色2.5YR7/6~6/6	丹波焼、20%残存	2003 Ⅲ区 実測242
309	Ⅱ区 遺構外	29.8 —	長石・石英 粗砂	褐色2.5YR6/6 褐色2.5YR6/6	内面にヘラス目、外面磨状工具痕、内外面口ロナデ 丹波焼、10%残存	2003 Ⅱ区 実測247
	Ⅳ区 遺構外	34.8 15	長石・石英・チャート・黒色粒子 粗砂→中砂	褐色2.5YR6/8 褐色2.5YR6/6~6/8	内面に7本の縞目、外面中位にユビオサエ痕顯著 丹波焼、60%残存	2003 Ⅲ区 実測262
311	Ⅱ区 遺構外	11.6 6.8 5.4	砂粒ほとんど含まない	(胎土) 灰白9/0 (輪) 灰白7.5Y7/2~灰白7.5Y8/2	外面にヘラス線並文、1条面縁、底部外面露胎、その他全面露胎	2003 Ⅰ区 実測208
	Ⅲ区 遺構外	11.8 —	砂粒ほとんど含まない	(胎土) 灰白10YR8/1 (輪) 黒10YR2/1	内外面露胎、外面下縁に薄い鉄胎 瀬戸・美濃、15%残存	2003 Ⅰ区 実測214
313	Ⅲ区 遺構外	— 40	— 長石・雲母 中砂→極粗砂	赤灰2.5YR4/1 灰赤2.5YR5/2	僅前縁、15%残存	2003 Ⅰ区 実測243
	SK09	30 16.7	— 長石・石英 中砂→細砂	赤灰2.5YR4/1 灰赤2.5YR5/2	口縁部外面ミカキ、その他ナデ、底部外面格子タタキ、舞臺1のみ残存、軟面部分空、底部と脚部は頭上接合、作区、互質火食、底部30%、底・脚部40%残存	2003 Ⅱ区・Pt-8 実測232
314	SK14	21.2 10.3 11.1	砂粒ほとんど含まない	灰N4/0→暗灰N3/0 灰N4/0→暗灰N3/0	全面褐色胎、外面上半白濁胎	2003 Ⅱ区・SK08 実測241
	SK14	11 6.5 5	— 長石・石英 粗砂	(胎土) 黄灰2.5Y6/1~5/1 (輪) 灰褐色7.5YR4/2~褐色7.5YR4/3	肥前陶器、40%残存 内外面露胎、高台部露胎	2003 Ⅱ区・SK06 実測240
317	SK19	10.8 1.95 —	— 長石・石英・雲母 細砂→粗砂	にぶい褐色5YR7/4→褐色5YR7/6 褐色7.5YR7/8	瀬戸・美濃、80%残存 口縁に煤付着、外面下平口ロナデ、その他ナデ	2003 Ⅱ区・SK17 実測254
	SK19	9.8 1.8	— 長石・石英・雲母・チャート 細砂→中砂	にぶい黄褐色10YR7/2 灰白10YR8/2	90%残存	2003 Ⅱ区・SK17 実測255
320	SK19	10.3 1.8 —	— 長石・石英・雲母・チャート 細砂→中砂	灰白2.5Y8/2~灰黄2.5Y7/2 灰白2.5Y8/2~灰黄2.5Y7/2	口縁に煤付着、口縁部外面ヨロナデ、その他ナデ	2003 Ⅱ区・SK17 実測257
	SK19	9.6 1.7 —	— 長石・石英 中砂→粗砂	黄灰2.5Y6/1~5/1 黄灰2.5Y5/1~4/1	口縁部外面ヨロナデ、その他ナデ	2003 Ⅱ区・SK17 実測257
322	SK19	8.4 1.4 —	— 長石・石英・雲母 細砂→中砂	淡黄褐色10YR8/3~にぶい黄褐色10YR/3 淡黄褐色10YR8/3~にぶい黄褐色10YR/3	口縁に煤付着、内外面ナデ・指オサエ	2003 Ⅱ区・SK17 実測259
	SK19	7 1.1 —	— 長石・雲母 粗砂	灰白2.5Y8/2 灰白2.5Y8/1~8/2	60%残存	2003 Ⅱ区・SK17 実測258
323	SK19	11.2 —	— 砂粒ほとんど含まない	(胎土) にぶい褐色5YR6/4 (輪) 灰白2.5Y8/1, 褐色5YR7/6	内面下縁に鉄胎、その他白濁胎	2003 Ⅱ区・SK17 実測260
	SK19	13.4 —	— 砂粒ほとんど含まない	(胎土) 灰白2.5Y8/2 (輪) 灰白5Y8/1	内外面白濁胎 15%残存	2003 Ⅱ区・SK17 実測261

写真図版

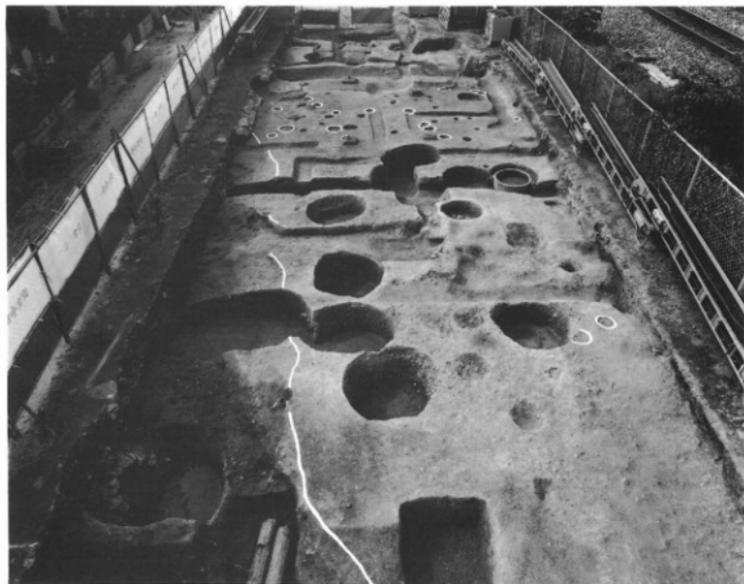


縄紋時代自然流路（東から）



遺構ベース土出土縄紋土器片（東から）

図版2



SD02、Pit群 (東から)



SD01内弥生土器 (東から)



I区SD02 (東から)



II区SD02 (東から)